
魔法少女リリカルなのはStrikerS ～ 炎殺の邪眼師

コエンマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～ 炎殺の邪眼師

【Nコード】

N0197M

【作者名】

コエンマ

【あらすじ】

数々の名勝負、激闘を繰り広げた第一回魔界統一戦から八年が過ぎた。魔界で日々を過ごしていた邪眼師、飛影は、暇つぶしに人間界へと赴こうとするが、歪んだ次元によって別の世界へと飛ばされてしまう。そして、自分の知る人間界とは違う世界で、飛影は二人の少女と出会うのだった……。

『魔法少女リリカルなのはStrikers ～ 炎殺の邪眼師』はじまります。

序章（前書き）

初めまして、コエンマです。この作品『魔法少女リリカルなのは Strik es』は私の処女作です。ていうか、サイト投稿するのも初めてであります。

なので原作崩壊、低文章力、矛盾、原作設定改変、ご都合主義、誤字脱字、キャラ違うっていうか別人だろ、などあるとおもいますが、それらを深い心で許容できる方のみご覧下さい。

それでは駄文ではありますが、『魔法少女リリカルなのは』炎殺邪眼師』をよろしくお願い致します。

序章

「ほー、お前が自分からここに来るとは珍しいな」

オフィス机が並んだ部屋の一角、奥まった場所に存在する執務室から子供のような高い声が響いた。その周りでは喧騒がとどまることなく、やれ書類がないだの、やれ管理担当がどうだのという怒号に近いものが満ちている。

怒鳴り散らす上司と小さくなる部下、飛び交う書類、頭を下げ続ける担当者、髪を掻き毟る平社員、引つ切り無しになる電話。声だけ聞くなりそれはありふれた日常の一端、会社や企業などの組織における忙しくも平和な一風景であろう

働いている者達が赤やら青やら常人離れた肌の色に縞々の虎模様のパンツを履き、頭から角を生やしていることを除いては「ほざけ。貴様らが人間界に渡る際の決まりなどと勝手に決めたことだろうが。そうでなければこんな面倒な場所に誰が好き好んで来るものか。次の戦いで俺が勝ったら、こんな規定など白紙撤回させてやる」

部屋に響く声は二人分。一つは子供のような声で、もう一つは底冷えするような低い男の声だ。

男のほうはひどく不機嫌な様子でそれを隠そうともしない。それに答えるように、青を基調とした服に身を包んだ低い背丈の少年が

諫めるように溜息を吐いた。

頭に被った大きく縦に伸びた帽子にはでかかと「王」という字が綴られている。そして何の冗談か、おしゃぶりを口に咥えていた。

「お前も変わらん！。ま、一応人間界における安全面に気を使つての配慮だからな。面倒でもそこは承知しといてもらわんと困る。とりあえず体裁だけでも整えんといかんから、これを持っていけ。失くすなよ」

そう言った少年が男に投げてよこしたのは紫色のコンパクトだった。男は心底いらないうような表情をしたが、少年に睨まれて舌打ちをしながらそれをポケットに仕舞う。

「領土争いをしていた当事者の台詞とは思えんが……まあいい。ともかくオレは行く。これ以上ここにいるのも気分が悪いからな」

白い布を鉢巻のようい巻いた額から続く眉間に皺が寄せられた。黒尽くめの服と白い眺めのマフラーを首元に巻いた男はうんざりとしたようにそう言つと、少年から踵を返した。

「オ、オイ、まだ手続きが……それに今は少し間が悪」そんなものの勝手にやっておけ。貴様らの間など知ったことか」ぬ……うとうう、ええい、勝手にしろ！」

青い少年の言葉に反応することなく男は既に背を向けていた。そのまま未練の欠片すら感じさせずに部屋を出て行く。少年はしばらく立ちすくんでいたが、今までで一番大きく溜息を吐いて社長椅子のような豪華な背もたれに身を沈めた。

そこへ入れ替わるようにして二人の女性が入ってきた。一人は黒髪に和服を着飾った落ち着いた雰囲気的女性、もう一人は長い青髪をポニーテールでまとめた快活な雰囲気をした明るい表情の女の子だ。

執務椅子に身を沈める少年に黒髪的女性がふうと息を吐いて顔を向けた。そして彼の去っていったほうを眺めながら怪訝そうに眉を寄せる。

「大丈夫なですか？彼を知らないわけではありませんが、これは・・・」

「いや、それは心配ないだろう。あ奴もあれで昔より大分丸くなっておるしな。自分から人間に危害を加えることはまずない」

俯きつつも断言する彼の様子に女性はほうと安堵の息を吐いた。しかし、その横にいた青髪の女性が首を傾げて言った。

「でもコエンマ様、今人間界への次元扉は確か不安定だったはずですよ・・・」

「ああ、そのせいでワシらは人間界にいかずには様子見をしとったんだが、無視して出て行きおった。まあ、聞いたところで自重するような性格でもなし、どちらにしても結果は同じだっただろう。一応、保険はかけておいたが」

保険？　と不思議そうな反応をする女性を一瞥して少年は目を閉じる。そして男が去っていったほうをもう一度見やった。

（何も起こらなければいいんだが・・・面倒ごとはワシの心労が増

えるばかりだからな。ホント頼むぞ、『飛影』・・・)

物言わぬ扉に向かって、少年はただただ平和だけを願っていた。

序章（後書き）

やー、初めての小説投稿が終わって、最初に思ったことがあります。

字数少なっ！

これに尽きます。っていうか、話わかんねえんだけどって人が出てこないか心配です。幽白ファンなら大体の予想と、出ている人は分かったかと思います。というか、かなりメジャーな方々なので。ジオルジュが出てこなかったことは謝罪です。自分でも好きなキャラなんです、如何せん扱いが難しくて・・・面白い文章が思いつかない自分の不甲斐なさに心がキリキリ痛みます。

二作品とも自分が好きな作品なので上手く書ければな〜と思ってますが果たしてどうなることやら。

さて、次回はついに魔法少女との邂逅。話に出てきた青年は一体どんな形の出会いをするのでしょうか。というか、前半は名前伏せてるのにモロバレですね・・・。

かなり心配ですが、なんとか書き上げます。頑張れ自分！

リアルでは現在やるが多すぎて（免許とか学校とか家業とかいろいろ）更新は遅いかもかもしれませんが、頑張っていきたいのでよろしくお願い致します！

第一話 出会い（前書き）

さて、ストックとして一つだけ残っていた第一話の掲載です。

鬼のようなリアルの都合上、自分のペースは崩せないなので遅れ気味になるのは否めませんが、本編の一話も投稿せずに数日放置というのは流石にどうかと思います。

相も変わらずの駄文ですが、張り切っていきましょう！

それでは念願の第一話、テイクオフであります。

第一話 出会い

- Side two girls -

青い空が雲を引きつれて飛んでいく。太陽がだんだんと山の峰に近づいていき、大地をオレンジ色に照らす準備を始めていた。風は冬がまだ厳しいせいか、肌寒い。だが嫌いではなかった。こうして日課のように外に出ると、少ない期間でも日々の経過を感じる。

当初は毎日のように降っていた雪も、二週間たった今ではほとんど降らない。そういえば、ニュースで今年の寒さは峠を越えたと言っていたような気がする。

「なのは、大丈夫？　まだリハビリ始めてあんまり経ってないんだから無理しないほうがいいよ？」

とある病院の屋上。

風に煽られる髪を押さえながら、金髪の少女が隣に座る少女に向けて声をかけた。傾きかけ始めた太陽に照らされたその髪は、まるで金で縫った糸のようだった。

「大丈夫だよフェイトちゃん。それよりごめんね？　今日だって仕事忙しいはずなのに私に会いに来てくれて・・・」

なのはと呼ばれた少女は軽くはにかみながら笑いかける。もう一人の少女、フェイトはそれに対して目を細めながら「うっん」と首を振って自らも笑顔を見せた。

だが、その表情に影が差しているように見えるのは光の加減のせいなのだろうか？

「当たり前だよ。私たち、友達なんだから」

彼女の目を見つめながら、フェイトは彼女の手を握る。影の気配は一瞬にして霧散し、あったかどうかさえないように笑顔の中へと消えた。

「えっと・・・リハビリはどう？　少しは進んだ？」

「・・・うっん、全然」

フェイトの質問になのはが顔を俯かせながら乾いた声で答えた。視線は下げられ、長い前髪で隠れた顔からは何もつかないことはできない。ただ、健全とは程遠い表情をしているだろうことは誰が見ても伺い知れただろう。

「なんかね、手すりを掴んでもちつとも足が動かないの。どんなに力を込めても、ふにやってなっちゃって前に進んでくれないんだ。アシスト使ってるのにダメダメだね、私。今日なんか、手まで痺れてきちゃって床に倒れちゃった。看護婦さんが来るまでそのまま、痛くて助けを呼ぶことも出来なかったよ。一步先ってすごく遠いんだね」

「なのは……」

空ろな目をしてただ零されていく彼女の言葉にフェイトは眉間に力を入れてぐつと息を飲み込む。歯を食いしばり、拳は強く膝の上で渦を巻いていた。そうしないとこらえているものが溢れてしまいそうだったから。

「先生も看護婦さん達もね、みんなみんな良い人なんだ。だから、だから辛い。とっても優しい人ばかりだから、もし私がもう二度と……」

「なのはっ!」

フェイトが叫ぶようにしてなのはの言葉を遮る。そして顔を上げた彼女の目を見て首を振った。

『その先は言わないで。言っちゃだめ』

涙が滲むのを堪え、悲しみが噴き出そうとするのを必死で抑えながら、フェイトは親友の中に映った自分から目を逸らさなかった。なのははそんな親友の心に感謝する。

だがそれを見通してなお、空虚な笑みが消えることはなかった。

「ありがとうフェイトちゃん。でもごめんね。私、自分でも嫌になるけど、この間からそんなことばかり考えているんだ。はやてちゃ

んがどんなに辛い思いをしてたか・・・シグナムさん達がどんな思いで助けようとしてたのか。いろんなことが今になってわかちゃったから。だから自分がどれだけ身勝手だったのかって、自分がこんなに弱かったんだって、次から次に浮かんできてどうしようもなくなるんだよ」

その瞳に涙はないが、それは涙として流せる感情がなくなったわけではなく、その感情にすら反応しなくなるほどの絶望を受け続け、心が麻痺するまで陥っているという、ある種の到達点だ。

その先に待つものは想像するに難くない。フェイトには、数年前までの自分の姿と今の彼女が酷く似ていることを嫌でも認識させられる。

だが今のフェイトには、暗黒に沈んでいく親友に掛けるべき言葉を見つけることはできなかった。

かつて自分が悲しみの淵にいたときも迷っていたときも、彼女はあきらめずに懸命に言葉をかけ、そして救い出してくれたというのに。あんなに一生懸命に、頑なだった自分の心を開こうとしてくれたというのに。

だから彼女はとにかくそれは違うと言いたかった。大丈夫だと言っただけだった。

でもその後は？

今の自分は何を言えいい？ 同情など誰も望みはしないし、どんな励ましの言葉も今の自分には届かないだろう。一番の友達であるというのに何も出来ない自分が悔しくて、情けなかった。

「・・・っ、なの・・・」

だが、それでもそんな彼女を見ていられず、フェイトが声を掛けようとした。その時だった。

フェイトの背筋が薄ら寒いなにかの感覚を覚える。同時に全身に鳥肌が立ち、嫌な汗がつうつと頬を伝った。出かけていた言葉を中断し、フェイトは瞬時に辺りを見渡して、

「キカカカツ！これはこれは、なんとも旨そうな娘があるではないか・・・」

コンクリートを力任せに打ちつけた音を引き連れた『そいつ』が屋上に姿を現していた。のっそりと起き上がりながら、その目はしっかりとフェイト、そしてなのはを捉えている。

「な・・・！？」

それはこの世界ではありえない光景であった。黄昏時を背にして立つそいつは人ではない。

ずんぐりとした毛玉のような体には黄色と黒の斑が走っていて、前面には十字のような大きな割れ目。体からは同じ模様をした足が左右に等間隔で四本ずつ伸びており、体上部の中心には真っ白な肌に複雑怪奇な文様が紫色で散りばめられた人間の上半身があった。だが、その目は血のように赤い。

「キカカ・・・こいつは幸運じゃのう。やられたときはどうしようかと思うたが、逃げ込んだホールの先で上質な上に食べごろのエサ

が二つも転がっておるとは・・・」

「っ！あなた何者！？どこから出て来た！？」

「フェ、フェイトちゃん・・・！」

なのはを庇うように前に出たフェイトは未だ見ぬ相手を睨みつけながら叫ぶ。なのはは車椅子から手を伸ばし、親友の背中を掴んでいた。化け物はその反応に気を良くしたのか、嫌らしい笑みを浮かべながら言った。

「我は土蜘蛛。古来より生き続ける大妖怪にして人間の支配者たる存在じゃ・・・娘らよ、我に食されることを光栄に思うがいい」

気味悪く笑う土蜘蛛に二人の全身が総毛立つ。二人は目の前にいる存在が危険だという認識すら甘いものであることを体全体で感じた。そのあからさまな敵意を受けて、フェイトは右手の甲、金色に輝く三角形に瞬時に手を伸ばした。

「バルデツシュ、セツトアツ・・・あっ！？」

「させると思うたか！」

フェイトの展開より早く、土蜘蛛の背中から現れた二本の鞭がフェイトの手の甲からバルデツシュのエンブレムを弾き飛ばした。バルデツシュは音を立てて金網にぶつかり、階下へと消える。そして同時に弾き飛ばした鞭は返す刀でフェイトの肢体に巻きついた。そのまま唸りを上げて、体を締め上げる。

「く、ううああっ！？」

「フエ、フェイトちゃ・・・あうっ!？」

親友の身を案じる間もなく、なのはもまた伸びてきたもう一本に触手に全身を絡め取られる。衝撃で車椅子が倒された音を下に聞きながら、なのはの体は親友が捕らえられている高さまで持ち上げられた。体を蹂躪する触手に二人はゾツとして言葉を失う。

「アレが不思議な力を放っていることは気づいていたからの、警戒しておいて正解じゃった。それにしても・・・」

「は、離して!」

「く・・・腕が・・・!」

数メートルの高さで二人を拘束しながら、土蜘蛛は捕らえられた獲物をしばらく興味深そうな仕草で観察する。しばらく二人を見ていた奴は、その口をニタアと半月状に曲げた。

「ふうむ。霊気とも妖気とも違う感じたことがない波長じゃが、凄まじい力を宿しておるのお。なんとも僥倖。この力を取り込んで子らに食わせれば、我はさらなる高みへのし上がれる。どおれ・・・」

「

土蜘蛛が無造作に鞭を振るうと、なのはとフェイトの服が切り裂かれた。健康的な乙女の柔肌や、最近成長を始めた部位が外気に晒され、二人は顔を赤らめる。その反応に土蜘蛛はさらに笑みを濃くしてニタリと笑う。

「うぐっ・・・こ、んなもの・・・っ・・・サンダ・・・あぐうっ!うああ

っ！」

フェイトは魔法を使おうとするが、そのたびに体を強く締め上げられ精神集中が満足にできない。それもデバイスがあれば可能だっただろうが、今は手元を離れ遙か下であろう。

「フェイトちゃん！くっ・・・魔法が、デバイスが使えれば・・・」

「無駄じゃ無駄じゃ、私の糸はそんな細い腕ではビクともせんわ。分かったなら抵抗するでない。そうじゃな、一人は我自らが喰ろうてやろう。もう一人は我が子らを膾に産みつける母体としてエサにしてやる。仲良くあの世へ逝けることに感謝せい、キカカッ！」

その言葉と同時に土蜘蛛の前面がぐばあっと割り開かれた。そこには鋭い歯が無数に並び、一際大きな四本の牙が獲物を歓迎するように蠢動を繰り返している。中心には真っ赤な内側にぽっかり開いた黒い穴が覗いていた。狭くなったり広がったりしているそれは、二人が生理的な嫌悪感を催すには十分すぎるほどの光景だった。

「貴様はどうやら身が不自由のようじゃな。どうせなら生きのいいほうを頂くとするか」

視線がなのはからフェイトに向くのと同時、前面の口から緑の液体が滴り屋上のコンクリートに落ちていく。落ちるたびに響くジュウという音と、吐き気のするような臭いに二人は震え上がった。そしてフェイトの体が引き寄せられ、その上へと持ってこられる。

「ひ・・・っ・・・!？」

「フェイトちゃんっ！ダメ・・・お願い、やめて!!」

「キカカカ・・・そうじゃ、その表情じゃよ。恐怖と絶望で染まった女子の顔が我は何より好みでな。ああ、たまらんのお・・・」

恍惚とした表情で体を振るわせる土蜘蛛に二人の顔から血の気が引いた。そしてほどなく、真つ青になったフェイトがついに口の前にまで引き寄せられてしまう。ガアツと人間の体より遥かに大きな口と不気味に並んだ歯がキチキチと音を鳴らした。

「さらばじゃ。精々いい声で啼くがよい！」

「い、いやあああつ！」

「やめてよ・・・やめてえええつ！！」

フェイトの悲鳴となのはの絶叫が屋上に木霊する。そして、その口がフェイトの身体を無残に食いちぎる。まさにその瞬間、

「ギツ！？ガアアアアツ！？」

不意に響いた風を切る音が、二人を捕らえていた触手をバラバラに切り裂いていた。ワイヤーを束ねたような強靱な触手が、さながら麵きり包丁を振るわれた蕎麦のごとく千切れ飛んで宙を舞う。突然縛りを解かれた彼女達に為す術などあるうはずもなく、重力の法則に従って地面に落下した。

「痛っ！？あ、ててて・・・」

「・・・っ、一体何が・・・」

痛みに顔を顰めながら体を起こす。不用意な体勢から受身もとれないまま落下したため背中を強く打ち付けてしまったが、とりあえず死んではいないらしい。そして二人が落ちた衝撃に眩気を零すのと同時、彼女らの前で何かが床に降り立つ音が響いた。

「フン、何かと思えば土蜘蛛か。いつ見てもその醜態には吐き気がするぜ」

同時に響く低い声にフェイトとなのはは視線を上げる。そして、夕暮れの光を浴びながら佇むその後姿に二人は目を奪われた。

冷たくなってきた風を受け、はためいているコートは黒一色。マントを着込んだようなその風体の上部、その首元には白いシルクのスカーフのようなものが巻かれている。そして二人が視線を上げたのと、『彼』が此方に振り向いたのは同時だった。

その瞬間を、なのはとフェイトは決して忘れないだろう。

厳しさを感じさせる端正な顔立ちをした彼の額はマフラーと同じ色の巻布で覆われ、炎のように尖った黒髪は天を突くように逆立っている。そしてなにより鋭さの中に不思議な何かを感じさせるような、フェイトと同じ澄んだ深紅の光を称える目に二人は吸い込まれそうな感覚を覚えていた。

それは一瞬、だが彼女らには無限とも呼べる感覚が終わりを告げ、時間が戻っていく。彼はポケットに手をつ込んだまま此方を見据えたかと思うと、視線を土蜘蛛に戻して言った。

「下がっている。邪魔だ」

静かに、しかし強い自信に裏づけされた声色で彼は告げる。その言葉と助かったという事実^{じじつ}に泣きそうになるのを必死で堪えつつ、頷いた二人は離れるために互いに手を取る。

これが後に伝説として語られる最強の邪眼師と二人の魔法少女との出会いであった。

第一話 出会い（後書き）

二次創作とはいえ自分の作品を完成させることがこれほど難解だったことに改めて思い知らされています。そして存外に時間が削られていく・・・嗚呼、明日の忙しさと数日後に控えた仮免許試験、卒論課題に加え果ては休日返上の労働を目の前にして、何故今年はこんなに忙しいんだ、去年は暇すぎて死にそうだったじゃないかと世の不条理さに嘆く作者です。

・・・最近はおrzとでも表すんでしょうかね？

ともあれ、記念すべき第一話。上手くまとめられたか心配です。つていうかこれ出会った内に入らへんやろという方にはとりあえず謝罪、嘆いてもこれが精一杯でした・・・。

さて次回は少し話が進んで、Strikersにいる為の下地としての回になります。まだ何も書いていないので遅れるかもしれませんが、一週間のうちには更新できると・・・思います、たぶん。

それでは次回、魔法少女リリカルなのは　炎殺の邪眼師第二話、『差異と別れ』をよろしくお願い致します。

第二話 差異と別れ 〵 魔法少女（前書き）

四日ぶりの更新であります、コエンマです。

初見の方は初めまして。待たせてしまった方はどうもすみません。

本当は昨日更新できるはずだったのですが、最近切り替えたルーターと電話線との折り合いが最悪で、昨日は全くインターネットが使えませんでした。

言い訳ではありませんが、どうしてもこんなに間が悪いのか。普段から功德を積むように心がける所存です。

それでは第二話、いってみましょう。

第二話 差異と別れ 〰 魔法少女

ゲートを抜けた先で飛影はやれやれと肩を落としていた。いつもなら皿屋敷中学の近くにある幽助の家の前に開くゲートが何故か上空で開いてしまったのである。

それ故、重力に向けて落下していると馴染み深い気配と、未知の力を建物の屋上らしき場所から感じた。下方に至るその場所へと目を向ける。そして妖気で力と速度を調整しつつ見ると、そこには雑魚妖怪である土蜘蛛とそれに捕らえられた二人の少女がいた。

そこで落下の勢いを殺しながら剣を振るって、あわや食われそうになっていた二人を助け出して今に至っている。偶然とはいえ、人間界で妖怪が暴力をふるうのは珍しかった。霊界と締結した紳士協定により、悪事が発覚すれば間違いなくただでは済まないからである。

「お、お主、な、何奴じゃ！？一体どこから現れた！？」

「フン。雑魚に答える義理などないが、聞きたいなら特別に教えてやる。拝聞料は貴様の命だがな」

飛影は口の端を吊り上げながら告げる。当初は土蜘蛛のほうも突然の事態に動揺を隠せないようだったが、徐々に落ち着きを取り戻し、飛影から溢れる気配を感じ取ってその顔を愉悦に歪めた。

「ほう、これは奇遇じゃ！まさかこんなところで餌と同時に仲間に出くわすとは思わなんだわ」

心底愉快そうに土蜘蛛は声高らかにキカカカと笑い声を上げていた。それとは逆に飛影に募っていく威圧感に土蜘蛛は気づいていないようで、触手で威嚇するようにしながら飛影を見やる。

「じゃが、せっかく手に入れた食事を横取りせんでくれんかのう？こいつらは我の獲物じゃ。我は寛大であるからな、お主にはこの建物内にいる人間をくれてやる。疾く失せよ」

「そうだな。オレもこんな場所に貴様というのは御免だ。さっさと済ませてしまおうでしょう」

仲間という言葉でなのは達に戦慄が走るなか、飛影は腰元に手を差し入れる。対する土蜘蛛は笑みを濃くして、

「・・・ギツ!?」

自分の腕が半ばから飛んでいることに遅すぎる悲鳴を上げた。ドサツという音と共に、無残に切断された左腕がコンクリートの上に落ちピクピクと痙攣を繰り返して、やがて止まる。いつの間にか、その手に凄惨な光を覗かせる刃を携えた飛影がニヤリと笑った。

「わ、私の腕が、ああッ！き、貴様何をするッ!?このチビ猿があゝ！」

激昂した土蜘蛛の背中から幾つもの触手が飛び出して、飛影に襲い掛かった。叩きつけられた触手はコンクリートを粉碎し、手すりを飴細工のようにひん曲げる。だが、十数本に渡るその鞭の雨も飛

影には掠りもしなかった。

それどころか、逆にその触手を左手で掴み取ったのだ。そしてサ
ディステイックな笑みを浮かべた次の瞬間、触手は一瞬にして炎に
包まれ、灰塵になった。

それは抵抗すらも感じさせない一方的な消却。土蜘蛛が振るうの
とは桁違いの暴力であった。

その圧倒的な力に後ろで見ていた二人は声も出なかった。一瞬し
が見えなかったが、あの炎はシグナムの全力と同等、いやあるいは
上回っているかもしれない。そして悲鳴を上げる土蜘蛛を見やると、
飛影は地を蹴ってその上部に向かって跳んだ。

「こ、この炎・・・それに、隠した額に右手の呪帯・・・お、お主
はまさか・・・『炎殺の邪眼師』かっ！！？」

土蜘蛛の顔が驚愕と絶望の色に染まる。なのはやフェイトにはそ
の意味が分からなかったが、目の前の化け物の怯えようを見れば彼
に逆らうことがどれだけ危ういことであるのかは分かった。デバイ
スなしとはいえ、自分たちを苦しめた敵がこれほどまでに恐れる相
手。それがどれほどのものなのか、二人には皆目見当もつきはしな
い。

彼女たちを置き去りにして状況は変わっていく。もはやそれは戦
いではない。背中をフェンスにぶつけた土蜘蛛は全身を震わせて必
死に言い募っていた。

「ま、待っておくれ！こ、この二人はお主に渡す！我は他の場所で
狩りをするから、だから命だけは助けておくれ・・・我らは、同族

じやろう?」

「ッ!」

土蜘蛛の命乞いを聞こうとも苛立ちを隠そうともせず、飛影は空中で腰溜めに構えた刀を抜き放ち、頭から垂直に振り抜く。それは何の障害もなく土蜘蛛を左右に分断し、絶命させた。

「ふざけるな。貴様らなど一括りになった覚えはない」

おぞましい断末魔を上げながら、怪物がどうつと倒れた。飛影はその光景に眉を寄せ、左手から炎を飛ばし跡形もなく焼き尽くす。それは一瞬で粉のようになり、風に紛れて飛んでいった。

それを見届けた飛影は剣を鞘に収める。そして呆然とする二人に一瞥して何事もなかったかのように歩き出

「ま、待って!」

そうとした時、後ろから声がかかった。振り向くと、ボロボロの姿のフェイトとなのはが飛影を見つめていた。

「何だ」

「え、えと、あ、その・・・た、助けてくれてありがとう・・・」

そう言っ頭を下げる。フェイトに掴まったままなのはも慌てて頭を下げているのを見て、飛影は視線を向けずに鼻を鳴らした。

「勘違いするんじゃない。オレが剣を振るったのは、単に奴の言い

草が気に喰わなかったただけだ。貴様らが生きているのはただのオマケにすぎん」

「それでも、私達が助けられたことに変わりはないから・・・」

ありがとう、ともう一度感謝を述べてきた。この反応は彼にしてみればどうにもやりにくい。助けたつもりもないし、もとより素直な相手は苦手なのだ。

だが何気なく視線を向けて、あることに今更のごとく気づいた飛影は慌てて目を逸らした。自分を怖がっていることは分かっているから、様子見のつもりだったのだが如何せん間が悪い。その反応にフェイトとなのはは首をかしげた。

「どうしたの？」

「いや、その・・・ええい、くそっ！」

飛影は不機嫌そうに声を出し、来ていたコートとスカーフを半ばやけくそ気味に脱ぎ捨てて二人へと放り投げた。ノースリーブの黒服とズボンに腰から下げられた刀、それに身長とは対照的に鍛え抜かれた飛影の肉体を垣間見た二人は顔を赤らめる。

投げられて飛んできた服をフェイトが受け取り、服と飛影を不思議そうな顔で交互に見やった。その表情はきよんとしていて、手に持った服にも意図が読み取れないのか「これは？」とでも言いたげだ。飛影はその反応にさらに苛立ちを募らせて声を荒げた。

「いいからさつさとそれを纏え！そんな格好でいつまでうるついでいる気だ！貴様らはモラルという言葉を知らんのか！」

「？ そんな格好・・・はうっ!？」

「にゃあっ!？」

若干赤くなつた顔を背けた飛影の言葉に視線をおろしたフェイトとなのはは自分達の姿を見て、体を丸めてしゃがみ込んだ。土蜘蛛の恐怖と助けられた安堵、そして飛影の戦いに見入っていた二人は自分達が半裸、いやほとんど全裸だということをすっかり忘れていたのである。

二人は飛影のコートを光速で掴み取ると、二人で包まって赤くなつた顔をその縁から出していた。だが、いくら隠しても彼には見えってしまったのだらう。激変した反応がいい証拠である。

(あ、あう・・・恥ずかしい・・・／／／／／)

(ううっ・・・お、男の子に見られちゃったよ・・・／／／／)

顔中を赤くしながら念話で会話する二人。唐突にいたたまれなさが襲来してきた。これ以上痴態をさらすのは流石に恥ずかしすぎる。そう思つてとにかく病室に戻ろうとしたとき、二人は重大なことに気づいてしまった。

「あ、あのお願ひがあるんだけど・・・」

「何だ!？」

不機嫌オーラをガンガン出しながら飛影は睨むように答える。その気迫に少々気圧されつつも、顔を見合わせて力なく笑つた。

「あ、あのね？安心したせいで、腰が抜けちゃったみたい・・・」

「わ、私も・・・／／／／」

「・・・」

にやははと笑うのはと真っ赤な顔でモジモジしているフェイトを見て、飛影はこのところで一番の頭痛を感じたのだった。

- change side in the medical
room -

「ご、ごめんね。なにからなにまで・・・私達の仕事なのにみんな手伝わせちゃって・・・」

「全くだ。貴様らの不甲斐なさもそうだが、こんなことをしている自分自身に腹が立つ」

「あ、あははは・・・」

あの後他の人たちに見つからないように二人を病室にまで運んだ飛影は、全く足腰がたたない二人の代わりに着替えを取り出したり、屋上の後始末をしたりと動きっぱなしだったのである。

着替える時も全身黒尽くめ（しかも帯刀のおまけつき）という胡

散臭さ爆発の彼を廊下で待たせるわけにもいかず、部屋の中で背中合わせになっていたときなんかは気まずいなんてものではなかった。

なのはが落としてしまった下着を取ってくれと言ったときには流石に我慢できず、自分でやれと一喝したが。

ともあれ、紆余曲折はあったものの作業は無事終了し、今は個室の中で三人でいる。とりあえずの自己紹介と、なのは達は魔法についての説明を終わらせている。夕焼けも中盤から終盤にさしかかり、その色を強く主張していた。ちなみにレイジングハートは管理局のメンテナンスルームであり、バルディッシュは一応破損がないかどうか調べてもらっているため手元にはない。

「まったく、貴様らがあの程度の妖怪に手こずりさえしなければこんなことをする必要などなかったんだ。とんだ目に遭ったぜ」

「妖怪・・・さっきの大きい蜘蛛のおばけのことだよね・・・確か土蜘蛛とか言ってたけど」

「飛影は知ってるみたいだけど、その・・・妖怪に詳しいの？」

フェイトが飛影に水を向ける。窓枠の上に横向きで腰掛けていた飛影は自嘲気味に口の端を吊り上げた。

「詳しい、か・・・それはそうだろう、何せオレもそう呼ばれる者だからな。あんな雑魚と一緒にたにされるのは甚だ心外だが」

飛影の言葉に二人は目を見開いて硬直した。だがそれも詮無いことだろう。あれだけの恐怖を与えられた後で、それと同じだと言われれば誰でも身がすくんでしまう。

「安心しろ、オレにはヤツのように人を喰らう趣味はない。もつともつい先刻のことだ、そう言ったところで大して変わらんだろうがな」

「そ、そんなことない！ 飛影くんは私達を助けてくれたもん！」

「そうだよ！ そんな悲しいこと・・・」

飛影はそれ対して薄く笑うのみ。二人にはそれが自嘲のように見えて思わず声を上げたが、飛影は頷こうとはしなかった。

「強がりはやせ。オレは貴様らよりも多くの時を生きている。普通の人間が俺達をどんな目で見ているかなど、それこそ腐るほど経験してきた。安っぽい同情は端から不要だ。それに、これを見てもまだそんなことが言えるか？」

そう言いながら飛影は頭へと手を伸ばし、その額を覆っている布を取り去った。しゅるりという音と共に彼の額が露になる。

「「！？」」

現れた彼の額を見た二人は息を飲んだ。その場所には一文字状に切れ込みこみがあり、それがゆっくりと開いていくではないか。そしてそこに見えたものは人間にも存在し、しかし額には決していないものだった。

「目・・・！？」

なのはの怯えた声に飛影はニヤリと笑った。予想通りだと言わん

ばかりのその目に何かを感じ取った二人ははつとする。だが、飛影は視線が固定されて動かせない彼女らを見据えたまま言った。

「邪眼といってな、普通の目よりもはるかに良く見える『眼』だ。オレのは後天的な手術によって作られたものだが、機能としての差異はまったくない。オレが邪眼師と呼ばれる所以だ」

邪眼を求めたのは自分だ。その理由がどうであれ、そして生まれつきのものではないとはいえ、ただの人間が見るにはショックであろう。生気がなく、加えて無機質な瞳からは妖気も溢れているから、力の波動は違うとはいえそれを感じ取れないほど無能ではあるまい。

飛影は再び額を布で覆い隠した。だが、二人はあまりのことに言葉も発せず固まっている。飛影はそれに一瞥すると窓から飛び降り、ベランダへと続く大きな掃きだし窓の前へと歩いていった。

「高町、それにテストロッサといったか。貴様らのいう魔法は、どうやらオレと似たような常識はずれの力のようだ。そしてかなりの器を有してもいるらしい。……まあ、高町のほうはそれどころではないようだ」

その言葉になのはがびくつと肩を震わせる。その反応とフェイトの表情を見る限り、飛影の言葉が肯定されていることを示していた。

（おそらくあの時のオレと同じように、なんらかの事故で体の自由が利かなくなってしまったんだろう。体に流れる力が不安定な上に、体組織の修復で精一杯な肉体にも力を感じないからな。だが）

そこで飛影は再び忍び笑いを零した。

らしくないと思う。自分としても自分の立場としても。

だが心のどこからか、自分をそうさせようとする何かがあることを感じていた。これもあのバカどもと釣るんでいた影響なのだろうか。いやきつとそうなのだろう。

「相当な苦痛を乗り越えねばならんが、治らないわけではないようだな。フツ、運がいいのか悪いのか・・・」

「「えっ・・・？」」

飛影の言葉になのはとフェイトが同じタイミングで呆けたような声を出した。だが、目は先ほどまでのなかで一番大きく見開いたまま硬直している。そして、はっと気を取り戻すと大きく声を上げた。

「治る・・・？ 私、また歩けるの・・・？ また・・・また飛ぶことが出来るの・・・！？」

ベッドの上で身を起こしたのは、信じられないと言わんばかりの表情をしていた。驚きと困惑が入り混じった表情で飛影に詰め寄ろうとして、ベッドの上で転がった彼女をフェイトが慌てて抱きとめている。うまく動くことができないもどかしさを表しながら見つめてくるのは、飛影はクツと短く息を噛み殺した。

「確かに肉体は大きく損傷している。その体を巡る力の流れも不安定、今はまともに動くこともできんだろう。だがそれだけだな。そのどこにも致命的な断絶は見られんし、弱々しいとはいえその流れはいたって正常だ。貴様が腐らん限りはいずれ元に戻る。もつとも、そのために耐えなければならんものは並み大抵ではないだろうがな」

「戻る・・・やっぱり治るんだよなのは！ また一緒に飛べるんだ、また一緒にいられるんだよ！ よかった・・・本当によかった・・・！」

フェイトは呆然としているなのはに抱きついて笑いながら涙を零した。なのはは自分の両手をまじまじと眺めて、そして飛影に視線を向ける。

「で、でも、リハビリとかぜんぜん進まなかったのに・・・」

「たわけ、その程度で音を上げているなら問題外だ。確かに際立った後遺症はないが、その体に刻まれた痕も決して浅くはない。貴様次第だと言っただろう。貴様の体の行く先も、出会ったばかりのオレの言葉を信じるかどうかもな」

彼女の弱音を一喝し、飛影はベランダに出た。フェイトがなのはに車椅子へ移るように言っただけを押しながら慌てて追いかける。夕日はもうあとわずかだ。東の空には漆黒がその版図を大きく広げてきている。飛影はそのまま縁へと飛び乗り、コートを揺らす風をその身で受けながら佇んでいた。

「飛影（くん）っ！」「」

そこでようやく二人が追いついてきた。フェイトがなのはの乗った車椅子を後ろから押している。なのはは痛みに顔を顰めながらも近づくことをやめず歯を食いしばっている。

二人は大きな寂寥感を感じながら飛影を見つめた。

「・・・行っちゃうの？ 飛影・・・」

「当たり前なことを何を今更のように聞いている。それと分かっているのか？貴様らが引き止めているのは、ついさっき殺されそうになった妖怪なんだぜ？」

「うん・・・そうだね。でも、飛影くんは飛影くんだよ。闘った時はちよつと怖かったけど、私とフェイトちゃんを助けてくれた。挫けそうになったところを元気づけてくれた。こんな私に生きる希望を与えてくれた。人じゃないなんて関係ないよ。私からすればちよつと変わった目を持つてただけだし、ちゃんと言葉も通じるし。だけど言葉じゃなきゃ分からないこともあるから、私の正直な気持ちを言っね。飛影くんは、私の大事な・・・友達だよ」

「例え妖怪でも、飛影は優しくったよ。だつて、そうじゃなきゃわざわざ私たちを助けたりしないもの。それに私ではできなかったこと・・・なのはを救ってくれたから。だから、私は信じる。飛影がいくら突き放したつて、誰がなんて言つたつて、胸を張つて言える。私は、ううん、私達はずっと飛影の味方だから」

満面の笑みを見せてなのはとフェイトが言つた。影もなにもない、久しく出来なかった彼女たち本来の輝き。誰もがもう取り戻せないかもしれないと思つていたその表情。その笑顔が妹と重なり、そして真つ直ぐに伝えられた感謝の気持ちに胸が疼いた。

（味方・・・仲間か・・・）

飛影は少し視線を落として目を閉じた。

思つのは今自分の胸に輝く一組の輝き。かつて失い、そして自分の人生一部と力を売り渡してもなお取り戻せず、そしてある時ひょ

つこりと自分の元へ戻ってきた一つ。そして、血を分けた最愛の存在から受け渡され、そのまま持つていてと言われて結局返すことができなかった一つ。

どちらも彼にとって人生の半分、いや全てとも呼べるものだ。いや、呼べるものだった。大切であることには変わらない。それだけの思いがこれらに込められている。

だが、だからこそ賭けてみてもいいのかもしれない。あいつ等や同じ妖怪以外でこんなオレを友だと、味方だと言ってくれた奴らに。

「また・・・会えるかな・・・？」

「さあな。貴様らがどうなるかなどオレの知ったことじゃないが、ついさつき会ったばかりの、それも人間でない相手すら信じるほどお人好しな奴らだ。あっさりくたばってしまったては流石にオレも寝覚めが悪い　　そら！」

飛影が振り向きざまに二人に何かを放った。二人は慌てたが、それは見事なコントロールで各々の手のひらへと収まる。おそろおそろ開いてみると手の中には紐で繋がられ、不思議な光を放つ丸い珠が淡く輝いていた。

「飛影くん、これ・・・」

「そいつは氷泪石と呼ばれる宝玉だ。雪女の涙から生まれる宝石で、強い浄化作用がある」

「これを私達に・・・？」

フェイトが手のひらに乗った輝きを見つめた。

ビー玉より一回り小さく、一点の曇りも傷もない宝石。青色に光り輝き、幻想的な雰囲気醸し出す氷泪石から二人は目が離せなかった。

どうしてこれを、という疑問もある。それこそ彼が言った通り、自分たちは会ったばかりなのだ、わざわざこんなものを渡す理由など彼にはないはず。

だが、彼の纏う雰囲気二人はその疑問を押し留めた。

何も寄せ付けないような厳しさではなくどこか迷うような、それでいて強い思い。こんな気性の彼が理由もなくこんなものを渡すことはない、それだけは二人の中で既に確信となっている。そして何より彼が言った以上のものがそれに込められていることを二人は感じた。

それが何なのかは分からない。けれど、温かさを感じるこの思いに応えたい。それが二人の結論だった。

思考の海から舞い戻り、これは彼が信頼してくれたことだと勝手だが納得をいく理由付ける。信頼してくれるなら、それを以上の物で返す。それが今までに学んだ二人の在り方。それが違えることはない彼女たちの真だった。

そして時は動き始める。二人がなんとか視線を戻すと、飛影は再び背を向けていた。

「勘違いするんじゃない。しばらくの間貸してやるだけだ。レンタ

ル料はいずれたつぷりと熨斗をつけて返してもらうからな、それを持っている限り死ぬことは許さん。それと、もし万が一失くしてもすればただではすまんと思え」

飛影はそう言うのと今度こそ空に跳んだ。ビルや大きな木の上を飛んでいくその姿はどんどん小さくなっていき、やがて見えなくなつた。夕闇が満ち、夜の帳がおり始める。

消えていく彼の後姿を見ながら、二人は誓いを立てた。どんなことになるうとも、どんな悲しみを背負おうとも、絶対に彼との約束を守って見せると。

決意を新たに少女達は空を見上げる。

その手には闇の中でもくすむことはない、氷泪石の輝きが光っていた。

- Side change -

なのは達と別れた飛影は木々の上を跳びながら手に持った霊界通信コンパクトを開いていた。言わずもがな、文句と嫌みを言うためである。開いた時にはわずかにノイズが走っていたが、流石は異次元を統括し、その壁すら越える霊界のアイテム、しばらくすると問題なく繋がった。

そこに映っているのは悪の元凶にして霊界の長、コエンマの姿。

その気など粒ほどにもない飛影だったが、場所が全く分からないという事態について連絡を余儀なくされたのである。

説明を求めた飛影だったが、返ってきたコエンマの話は彼の予想を遥かに超えるものだった。

人間界へ続く次元扉の状態がおかしかったこと、飛影がそこに発生した歪みに偶然吞まれてしまったこと、そして自分がいる人間界だと思っていた所が、今は元の世界や霊界と干渉となっている多重次元世界の一つであることを聞かされた。

もちろん飛影はすぐに呼び戻せと言ったが、次元が不安定であり無事に戻ってこれる保証がないと言われたため、こうして無言の圧力を掛けているのである。此方に来るぶんには問題ないそうだが、戻るための安全度は心もとないらしい。それも時を置けば可能であるらしいが、今の時点では何とも言えないとのことだ。

しかも、突発的な次元エネルギーの解放で今いる時代は正常な時の流れより八年ほど昔に遡っているというのだ。今からそれを正常な時空間へと戻してくれるそうだが、時空が完全安定するまでの間、その正常時空間で調査などをしてもらいたいとコエンマが進言したのである。原因は飛影が戦った土蜘蛛がこの世界、つまり本来は干渉となっている世界に現れたことに原因があった。

『そんなことは頻繁には起こらんとするが、お前がそちらに行ってしまったせいで何らかの歪みが生じる恐れがある。そちらでの影響や世界の推移を調査してくれ。この通りだ！』

「チツ・・・気は進まんが思い当たる節はあるしな。ただ、何か分かったらすぐに言え。隠し事は懸命ではないと言っておく」

凄みを利かせながらさういうとコエンマは顔を青くしながら頷いた。しばらく待っていると飛影の目の前に空間の裂け目らしきものが現れた。どうやらこれに飛び込めばいいようだ。

『最善は尽くす。チャンスがあればこちらも手は打つからな。それでは頼んだぞ』

「フン、貴様に端から期待などせん。余計なことを起こせば承知せんからな」

目一杯の殺気をコエンマにぶつけ、飛影はコンパクトを閉じた。そして躊躇なくスタスタと裂け目の中へと歩いていった。

第二話 差異と別れ 〵 魔法少女（後書き）

さて、一応重要フラグ立ては完了したところです。かなりご都合主義が入っているところは作者の力量不足ゆえ、どうかお目こぼしをお願い致します。

そして原作ファンなら彼の行動に違和感を覚えた方が多数かと思うので、ここらで補足を。

氷泪石を渡したのは、書いたとおり二人に死んでほしくなかったからというのと、預けるという形を取ることで歩み寄ってくれた彼女たちを信じてみようとした彼なりの考えに基づいてのものという設定にしております。

強引すぎだろう、という方にはすみませんとしか言えません。どうもすみません。

と、あとがきっぽく書いてみましたが第二話はいかがでしたでしょうか？

まだまだ未熟で、更新頻度も安定していませんが、暇だったら気にしてあげて下さい。

それではまた次回！

第三話 早すぎる再会 ～ 待ちわびた存在（前書き）

第三話がやっと完成いたしました。

今回は結構早くできたせいか、若干短めであります。しかし他の方々を見ると私より文章量が多いのに、二日とか下手すると毎日更新している人も多く見かけるので、時間かかりすぎだよなあと反省する今日この頃であります。

四日もかけてこの程度・・・お気に入りが増えないはずですよ・・・

とまあ、とりあえず愚痴ったところでどうしようもありませんので、張り切っていきます。

それでは第三話、どうぞ！

第三話 早すぎる再会 ー 待ちわびた存在

「・・・やはり仕置が必要だな」

強い風を頬に受けながら、飛影は呟いた。

眼前に見える空は快晴。気温もおそらく穏やかなものであろう。それだけみれば穏やかな日々的一片でしかないのであるが、それなのに何故こんなにも暗鬱でイラついた心持ちになるのか。

その原因は凄まじい速度で『上』へと流れていく景色にあった。変わりにものすごい速度で眼下に迫ってくるのは深緑の大地。遙か下にいた鳥がやっと大きくなってきた。

回りくどい説明で大変恐縮であるが、要するに、飛影はただいま絶賛大落下中なのであった。それも先ほどよりも数段回バージョンアップし、雲が余裕で隣にあるような凄まじい高度、という尋常ならざる状態からである。人間ならば人生を十回ぐらい振り返ることになるのではなからうか。

「何度も何度も、ふざけた真似をしゃがって・・・」

飛影のこめかみに青筋が浮き上がった。その怒りの矛先には間抜けな面をしたガキの姿ある。帰った際の彼の末路は推して知るべしだろう。

だがのんびり悪態をついてもいられないのも事実だ。大地がもう

目前にまで迫ってきている。到達までもう何秒もないのは明白だった。このままではそう遠からずにしてクシャツと逝ってしまうだろう。

「チイツ・・・流石にこのままはまずいな。ハアツ！」

とりあえず煮えたぎる感情には蓋をして飛影は目を閉じた。体の内でかなりの妖気を練り上げ、体に纏ってその密度を高めていく。そうして体と大地が激突する瞬間に一気に開放した。

「ドオオオオオオオン

ッ！！！！！！」

まるで流星が落下したかのような凄まじい衝撃に音速が壁を越えて爆発を起こした。その爆風は周りの木々をマツチ棒を折るがごとく容易くなぎ倒していく。そして風が収まった後には大地が割れ、大きさにして半径二十メートルほどの穴がぼつかりと空いていた。

木々のほうはもつと酷く、その倍以上が薙ぎ払われている。その中心、岩がまだ散乱する中からのつそりと飛影が起き上がった。通常ならば即死どころか確実に五体満足でいられないほどの衝撃だったにも関わらず、彼の体には傷どころか煤汚れのひとつさえ見受けられない。

「チツ。妖気は抑えたが、限界があつたか・・・」

不機嫌そうに辺りを見渡すと、そこに映つたのはまるで爆撃を受

けたようになっていた森の姿であった。大地は粉碎し、軽く火の手が上がっている場所もある。

普通ならここまでの被害はないのだろうか、おそらく鎧として纏った妖気で衝突時の衝撃を相殺させたせいだろう。妖気を放出すれば空を飛べないということはなかっただろうが、最初の高度が高すぎたことと、落下スピードを殺すほうが骨が折れたため、やむなく此方の方法をとったのだ。

が、ここまでの被害が出るとは思わなかったので、飛影がほんの少しばかり悔やんだのは蛇足だ。

そして、飛影はもう一つ大切なことについて再認識していた。悪いことはどうやら続いて起こるものらしい。

「やれやれ、落ちたとたんにまたこれか・・・」

周りの違和感を的確に感じ取った飛影は溜息を吐いた。妖気は感じないが、穏やかな雰囲気は霧散し、周りを囲まれていることを理解する。

見えはしないがその数はかなりのものだ。三十はゆうに超えているだろう。

ただ、その雰囲気は異質そのものだった。そこには人間や妖怪など、有機物特有の生の鼓動が感じ取れなかったのだ。ほとんど全てが等しく単調で、そこからは無機質な気配しか伝わってこない。そしてその姿を捉えたとき、飛影は前に跳んだ。

刹那、先ほどまでいた場所に光が走り岩を貫通しているのが見え

た。同時にその姿が太陽光に照らされ、全容が浮かび上がる。

そこには人間の上半身ほどの大きさの延べ棒が宙に浮いていた。その中央部分にはレンズが搭載されており、無骨な作りをした奇怪さが寸分の違いなく飛影を捉えている。どうやらあそこから先ほどのレーザーを放ったようだ。

そしてそれを筆頭に使っていたのか、そろそろと暗闇から姿を現してきた。四方を囲んだ機械のレンズが陽気にそぐわぬ不気味な光を宿している。

「数ばかりわらわらと・・・鬱陶しい限りだな」

推測を少し誤ったようだ。その数はざっと見ただけで五十以上ある。隠れているのも加えれば、その数はさらに増すだろう。飛影はやれやれと息を吐きながら、腰の刀に手を掛けて引き抜き、口元にサディスティックな笑みを浮かべた。

「まあいい。少々気が立っていたのでな、憂さ晴らしを兼ねて軽く運動させてもらうぞ」

- Side Nanoha Takamachi -

「郊外で中規模の次元震を観測！第六課局員は直ちに現場へと向かってください」

シャーリーの緊急連絡を告げる声を聞きながら、私はヘリの中で休憩時間の撤回に嘆くスバルやそれを叱りつけるティアナを見て笑みを零していた。次元震が起こったのは機動六課本局の北東、市街から十キロの位置にある森だ。

「でも、次元震なんて珍しいですよ。見る限りでは何もなかったと思うんですけど・・・」

赤髪の少年、エリオがデバイスを握りながら呟いた。その視線は送られてきた地形図に注がれている。そこには山々が延々と連なるばかりで、研究所や建物といったものは見受けられなかったからだ。

「そうだね、何があったんだろう・・・？」

彼の隣に座る十歳の少女、キャロが少し不安そうに呟いた。次元震といえかなりの大事なので、そのことが気にかかっているのだろう。

「安心して。今捜査官を先行させてるし、もし戦闘になっても今回は私と現場に向かっているフェイト隊長が出るから。みんなはヘリの中で待機だよ」

そう言うつと、キャロはほっと安堵の息を吐いた。それに私は苦笑を零す。ずっとそれじゃ困るけど、心構えの時間くらい欲しいのは事実だからね。

と、そこにフェイトちゃんから通信が入った。

『なのは、こつちも現場に向かっている。あと十分くらいで着けそうだけど、状況はどう？』

その問いに私は今ある情報を告げた。私の言葉にそう、と短く返し、必要な情報のやり取りをする。だが、分かっていることはほとんど同じような有様であった。原因は分からないが、何かが起こっていることは間違いない。

そんな感じで二人で唸っていると、操縦席にいるヴァイスくんが声を掛けてきた。表情には僅かな焦りが混じっている。

「なのはさん！先行してたヤツから今通信が入ったんですが、ちよいとヤバイことになってるようですね。結構な数のガジェットが集まってるらしいって話だ」

その言葉にフォワード陣の顔が一斉に強張った。気持ちを切り替えてモニターを見やると、フェイトちゃんにも通信が入ったのか顔つきが仕事というか戦闘モードに切り替わっている。

と、そこでまたしてもヴァイスくんが、今度は先ほどより声を大きく荒げた。マイクに向かって、確かなのかと何度も確認している。

「どうしたの、ヴァイスくん」

「あ、えっと、先行してた局員の到着報告と現場情報の追加でさ。拙いことに、民間人がガジェットと交戦中だそうです。それも五十を超える数に対してたった一人ってことらしい・・・」

「……！？」

ティアナたちの顔がさらに強張り、エリオとキャロの顔が目に見えて青くなつた。その反応も当然だといえる。ガジェットはまだ駆

け出しとはいえ魔導師である自分達四人がかり、それも訓練で手こずった相手だ。それを五十という大群相手にたった一人など、生身の人間がどうこう以前の問題である。

この報告に私は少し焦りを抱いたが、それを表情には出さず努めて冷静を装いながら問いかけた。

「それでその人は？無事なの？」

「いや、それなんですが・・・なんと言いましようか・・・」

いつもぎつくばらんな彼が珍しく言いよどんだ。最悪の事態が一瞬頭をよぎったが、彼の反応はそれを否定している。なんだか現実を認めたくない子供のようだ。

『ヴァイス？』

いつもと違う彼の様子に通信を繋げてきたフェイトも首を傾げている。が、観念したように息を吐くと、車をはじめて見た御者のような顔をして口を開き、

「それが・・・その民間人、ガジェットを次々に落としてるって報告が来てるんでさ・・・もう残りが半分にまで減ってるって・・・」

「・・・ええええええええっ!?」「・・・」

今度こそフォワード陣が驚愕の叫びを上げた。私も一瞬その報告に危うくフリーズしかける。フェイトちゃんも同じく、画面の向こうで固まっていた。というか、さっきの報告からまだ三分も経っていないのに半分って・・・軽く副隊長クラスだ。

「す、すごい人がいるんですね・・・」

「規格外ってこと考慮すりや同意見だなあ。なにせ聞いた限りじゃ
すげえ素早い上に、刀一本でガジェットを圧倒してるらしいぜ・・・
磁場が安定してなくて映像が見れないのが悔やまれるってもんだ」

「ど、どんな人間よ、それ・・・」

スバルの賞賛に同意したヴァイス君の言葉にティアナが口元を引きつらせながら言った。他の二人もそれに抱く感情は違えど、みな同じ感想のようである。

だが私は違った。その得物と戦闘状況を聞いて、心に仕舞っていたあの時の記憶が蘇り、体を衝撃が駆け抜ける。そして、気づけばヴァイス君に詰め寄っていた。

「そ、それってどんな人！？背格好とか、性別とか・・・！！」

「うおっ！？お、落ち着いて下さいなのはさん、それも今言いますから・・・えっと、性別はおそらく男性。背丈は低めで、着てるのは黒いコートに首元の白いスカーフ。髪は黒の立ち気味、額には白い巻布をつけていて・・・って、なのはさん？」

いきなり呆けた私をヴァイス君が心配そうに見つめて声を掛けてくるが、私には届いていなかった。そしてモニターごしのフェイトちゃんも、今のヴァイス君の話を聞いて呆然としている。いつかの思い出の断片が蘇り、ヴァイス君の言葉がそれを確信に変えていく。

私は怪訝な顔をするヴァイス君から離れると、レイジングハート

を起動させてバリアジャケットを纏い、ヘリの扉を開けた。気が久々に高揚している。心は既に抑えきれていない。

「　　ヴァイス君、ごめんね。私、先行して現場に急行するからみんなをお願い。進行ルートとヘリの安全は確保しておくから心配しないでね」

「え！？ちょ、なのはさ」

言い終わらない内に私は空に向かって身を躍らせる。彼とフオワードのみんなの戸惑いが感じられどよめきが聞こえたが、一度火がついた気持ちはもう止まらなかった。飛行魔法を使用するために魔力を体に注ぎ込み、加速する。加減が上手く利いていないのか、体に付与された魔力量はいつもより多かった。

『どうしたのですかマスター。今の行動は貴女らしくありませんが』

「あ、あはは、ごめんねレイジングハート。けど心配しないで。ちよつと気が逸っちゃっただけだから。でも、やっと会えるかもしれないの。私が小さい頃から探してて、ずっとずっと会いたかった・・・大切な人に・・・」

言葉が時を刻んで零れ落ちる砂のようにすとん心へと落ちてくる。レイジングハートは賢い子だ。その言葉だけで、私の行動を理解したようであった。言葉が途切れて少しの後、返答がくる。

『　　なるほど、先ほどの話に出ていた彼はマスターの想い人なのですか。納得しました、それでは仕方ありませんね』

「え、えええっ！？な、なに言っているのレイジングハート！ひ、

飛影くんはそんなんじゃ・・・それにいくら似てるって言っても、本当に本人かどうかは分からないし・・・って。いけない、急がなくちゃ！」

長い付き合いである相棒の言葉に動揺しながらも、なのはは現場に向けて急いぐためにさらに加速した。レイジングハートに口があったのならさぞ盛大な溜息を吐いていただろう。

（その反応で丸分かりですよ、マスター。はあ、ユーノはどうやら振られてしまったようですね・・・）

その横顔は共に長く時を過ごした彼女（？）すら見たことにならないほどの嬉しさで滲んでいる。久しく感情を強く出す主を眺めながら、レイジングハートは一人思うのだった。

- Side out -

「ハッ！」

目の前にいた機械、ガジェットを飛影は一刀の元に切り伏せた。切り裂いた断面がバチバチという音を立ててショートし、次の瞬間には火を噴いて吹き飛ぶ。僚機がやられたことによる閃光から一瞬遅れて他のガジェットが止まった飛影をロックする。だが、レーザーが照射されたときには飛影は既にそこから消えており、代わりに二体のガジェットが爆散していた。

「遅い」

すれ違い様の一閃は的確に、またしてもガジェットを一撃で葬り去る。彼の動きに対して思い出したようにカメラアイが此方に向くが、レーザーの行く先に既に標的はない。見当違いの方向に撃たれたレーザーは他の機体にぶち当たり同士討ちが発生していた。それを横目で捉えながら軽く無視して飛影は地を駆け、空を踊り、また数体の敵機を両断して鉄屑へと変えていく。

ガジェットに搭載されているAMFは魔法を打ち消す効果がある。魔導師には厄介すぎる相手であるし、ガジェット自体の強度もかなりあるため、一般人などの手に負える代物ではない。

だがデバイスすら用いず、彼が振るうのはただの鉄剣だというのに、数で勝っているガジェットは造作もなく撃破されていく。

斬撃を生み出すのは何の変哲もない鉄の刃。しかしその様子は竜巻に巻き込まれた蟻の大群だ。それほどまでに圧倒的な光景、いやそんな言葉すら陳腐に思えるほどの力の差が両者にはあった。

上からの五射を掻い潜り一閃。返す刀で真横の二体を叩き斬り、前後の両面から照射されたレーザーを避けるとお互いの装甲を打ち抜いて残りの二体が爆散した。その隙を見逃さんばかりにまた数機が追いつがつてくるが、所詮はプログラムされた反応だ、そんなものなど敵ですらない。刀を振って二体を斬り捨て、遅すぎるその動きに舌打ちした時にはもう二体が四片へと姿を変えていた。

「ふ、下らん・・・」

そして最後の一体を真一文字に切り裂いて沈黙させると、ようや

く森に静寂と平穩が戻ってくる。飛影は刀を振ると、腰の鞘に収めた。

接敵してから即戦闘。そして50を超えるガジェット相手にたった一人で立ち回り、完全殲滅完了までその間わずか五分足らず。管理局上位クラスの実力者でも至難の業だ。しかも特別な技も何も使わないただの剣技で、それも手を抜きに抜きまくってこれなのだから、常識外れもいいところである。

というか、魔導師が泣く。

「（オレの相手とするには力不足も甚だしいが、気は紛れた。さて、これからどうす・・・）ぬ、今度は何だ・・・」

ガジェットの残骸の山に立っていた飛影は、新たな気配に眉を顰める。まあ幸いなのは先ほどの鉄塊とは明らかに違う、人間の気配だということだった。これ以上あんな物の相手をしていても仕方がないと思っていた飛影は、まっすぐ此方に飛んでくる二つの気配の方を向いた。

差異はあるが、さほど変わらない方角から来たその影は瞬く間に大きくなり、轟音を響かせながら飛来してきた。それは突風も引き連れて、飛影の正面にほぼ同時に足を着ける。

やはり今度はちゃんとした人間であった。一人は茶色、もう一人は金色の、どちらも長髪を髪留めでツインテールに結んだ女性だ。手には各々の杖のような物を持っており、その体からは魔力をまだほとんど知らない飛影も感じ取れるほどの力が溢れている。だが、この状況下で飛影は違和感を覚えていた。

(この感じ、どこかで・・・)

そして違和感の元凶たる二人が一步を踏み出す。その表情が何かを堪えるようなものであることが、飛影の中の揺らぎをいっそう濃くし、漣なみのように掻き立てた。

「飛影、くん・・・」

「嘘・・・じゃないよね？ホントに、飛影だよね・・・？」

二人が口々に自分の名を呼んだ。その事に僅かばかり動揺した飛影だったが、いつものポーカーフェイスで表情を覆い、二人を睨みつける。

「む　貴様ら、何故オレの名を知っている？　一体どこで・・・いや待て・・・この気配、それにその髪の色は、まさか・・・」

飛影の瞳が驚きを表すように徐々に見開かれていく。目の前にいる二人が一度目の扉を潜ったとき会った少女達と瓜二つ、いや間違はなく本人だと悟ったからであった。

普段の鋭い彼ならばこんな失態はおかさない。だが、飛影にとってみればつい先ほど別れたばかりの少女と目の前の二人が重ならず、認識に齟齬が生じたのである。コエンマが言ったことを忘れていたわけではなかったが、時を超えることでもたらされる差異をこんな形で体験するとは思わなかった。

ともあれ、意識を切り替えた飛影は、先ほどの少女らの姿を新たに上書きした。そして現在の二人に目をやるとフツと口の端を吊り上げる。ついでに口をついたのは半分呆れを交えた声色だった。

「やれやれ。抜けた先で最初に会ったのがまた貴様らだったとは分らんものだ。ここまで来るともはや呪いの域だが、まあ覚えていたことは褒めておいてやる。それにしても、しぶとく生き残っていたようだな。高町、それにテストロッサ」

飛影が皮肉たつぷりに言うと、二人の顔がぱあっと色づく。そしてそのまま飛影に向かって走り、

「飛影くん　　っ！！！！」

「飛影　　っ！！！！」

両側から思い切り飛びつかれ、抱きしめられていた。遠慮のない、真っ直ぐな感情表現だ。柔らかい感触が両二の腕、そして首元にまとわりつき、動きが封じられる。

「なっ！？高町、貴様何を抱きついている！さっさと離れ・・・おい、テストロッサ、貴様まで何をしているんだ！腕を掴むな、服に顔を押し付けるな！ええい、二人そろってわけのわからんことを・・・いい加減にしろ貴様らあ！」

突然の抱擁に、珍しく動揺した飛影が怒りの声を上げる。しかし、どんなに怒鳴りつけても二人は石になったようにがっしりと服を掴み、一向に離れようとしなない。飛影のこめかみに青筋が走った。

「ぐ、このっ・・・」

業を煮やした飛影が無理にでもと力を込めようとする。だが、そのとき彼は服に顔を押し付けた二人の肩が小刻みに震えていること

に気づいた。

表情を見せぬまま、彼女たちは飛影に縋り付いている。それはまるで小さな子供が親から離れまいとするような、しかしそれとは全く違うが近いものを感じさせた。

（チツ、やりにくいったらないぜ・・・）

一人心中で悪態をつく。相変わらず顔を上げない二人だが、その震えは徐々に治まっていくような気がした。

穏やかな風が頬を撫でていく。飛影は少しの後呆れたように息を吐いて、行き場を失った両手をポケットに突っ込むと仏頂面のまま空を見上げた。

出会いは突然、再会は片や一瞬、片や八年という別れの時間を経てここに実を結んだ。

だがどちらにも言えるのは、それが途方もなく壮大な、そして小さな救いであつたこと。

それは運命の歯車が噛み合うその瞬間に起こった、この物語を始まりを告げる最初の奇跡だった。

第三話 早すぎる再会 ～ 待ちわびた存在（後書き）

第三話でした。

とりあえずは眠い・・・サッカーで世紀の一戦を見て年甲斐もなく高揚していましたが、日常は絶えず続いていくものですね。

流石に徹夜続きは堪えました。おかげで太陽がまぶしいです、雨ですけど。

さて、念願のStrikers編に突入しました。タイトル的にはここからが本番といったところですが、もうこれを書いている時点で砂になりかけている作者です。ご都合主義も冴えまくっているし、大丈夫なのかなホント・・・

ともあれ、マイペースではありますが頑張っていくつもりなので感想やら色々よろしくです。

それではまた次回！

第四話 六課 初見と疑念（前書き）

驚きです。いつも通りの更新に間に合わせる事ができました。

そろそろ卒論の型入れ程度には入らないと鬼気迫る作者ですが、
どうにも気が乗りません。まあそれに関しては七月の頭から八月に
かけて頑張りますので、この小説と並行して頑張っていきたいと思
います。

それでは第四話をどうぞー！

第四話 六課 〱 初見と疑念

「で、連れてきてしもつたと。そう言うわけかいな」

「……はい……」

機動六課本局。執務机が二つ並び、見晴らしの良さでは屋上を除けば一番であろう高さにある課長室で、高町なのはとフェイト・Ｔ・ハラオウンの二人は視線を落としたまま短く答えた。

二人に正面から相對しているのは、茶色がかった髪をショートにまとめ、二人に匹敵するほど端正な顔立ちをした同年代の少女だった。名を八神はやてという。普段は人懐っこい笑みで飾られている彼女なのだが、今この場においては違っていた。

眉尻は吊り上がり、両手もその胸の前で組まれていて、目に至ってはじとーっという擬音がいまにもテロップをつけて背後に表示されそうなほどに細められている。まあ要するにだ、どこからどうみても、私今最高に不機嫌なんやわ、という感じをひしひしと感じさせる表情であつた。

「一等空尉に執務官ともあろう人間が立場を忘れて軽率やな。新設してそんなにたつとらんのに、機動六課の切り札が、任務そっちのけで、二人して、部隊長の私に、連絡すら、せずに」

「……はい」

二人は節を区切るたび、息をつくたびに徐々にトーンが下がっていくはやての声にさらに身を縮込ませていく。その後姿はスバル達が見たらぶったまげるほど小さくなっていった。

まずい。あれはかなり怒っている。八年という長きに渡り、二人が密かに捜し続けていた飛影に、それも不意打ち気味に出会えたことによる喜びですっかり吹き飛んでいたが、自分達は今このはやてが設立した機動六課において重要かつ責任ある立場にいるのである。

彼女の言うとおり、先に自分たちが取ったものはかなりの無茶を通した行動であることは確かであった。もともと作戦になかった行動を独断で取ったのだから、状況が良からうがちゃんと安全確保をしていこうが、違反は違反だ。確実に始末書ものである。

「軽率でした。以後、気をつけます」

「申し訳ありませんでした。八神部隊長」

畏まった言葉遣いでなのはとフェイトはもう一度深く頭を下げた。彼女とは親友であるが、組織の一員として非を詫びるということでは違う話だ。筋を通すのは当然だし、親しき仲にも礼儀ありというヤツである。

「・・・わかったんならもうええ。だからこれからは」

深く息を吸い込むと、はやては今までで一番真剣な声色で二人に告げた。罰として与えられるものを感じ取り、二人に緊張が走る。

「これからは、ちゃんと飛影くんと二人の進展具合、報告してな」

「はい、わかりま

・・・え？」

素直に受諾しようとしたのは達が、聞き捨てならない文章を耳に通して頭を上げる。そこにはいたのは、上司としての八神はやてではなく、いつもの彼女・・・でもなかった。

「で、彼と二人の関係は一体どんなん？もしかして、将来に結婚を約束し合った幼馴染とかそういうパターンなんか？」

にやり、と心底楽しそうな笑顔に向けたはやてがいた。

二人には分かる。口は三日月のようになり、好奇心を抑えきれない彼女の性質の一端が顔を出していた。

それも近年稀に見る興奮具合だ。タヌキタヌキとナカジマ三佐は言っているが、この表情を見れば、六課のほぼ全員が納得できよう。

だが、なのはとフェイトはいきなりの展開についていけず、固まったまま後方に取り残されていた。そしてしばらくの後はやての言葉をゆっくりと咀嚼し、そして普段の倍以上の遅さでもって意図を整理し、その意味を理解する。

コンマ数秒、二人は前もって示し合わせていたかのように、ほぼ同時にボンツと音が鳴りそうな勢いで顔を沸騰させた。

「けっ、けけけ、結婚っ！？ち、違うよ、はやてちゃん！ひ、飛影くんとは昔ちよつと縁があっただけで！ま、まだそんな特別な関係じゃ・・・」

「そ、そくだよはやて！い、いきなりけ、結婚だなんて・・・こ、心の準備が・・・あうう・・・」

「ん？なのはちゃんは『まだ』、フェイトちゃんも『心の準備』かいな。なるほろなるほろ・・・それで二人とも、あないな告白の嵐をばっさばっさ切捨てとったんやな。まあ、二人で腕組んで（っというか連行されてきたっばいけど）飛影くんと歩いて来たから予想通りではあるんやけど、とりあえず納得や。

せやけど・・・こないなビッグな話題に、私はなんでもっと早くに気づかへんかったんや！くうう、今までの自分が憎い！」

バシバシと机を叩きながら本気で悔し涙を流すはやて。そこに部隊長としての威厳などなく、ただ自分だけ知らなかったという疎外感に駄々をこねる子供のようなのである。

さっきの不機嫌もこれが原因のほとんどを占めていたのではなからーか、と親友を邪推してしまう二人であった。だが、それが強い間違っていないことは、後にはやての右腕であるリインフォース？が証言することとなる。

「と、とりあえず、このままじゃダメだよな。ちゃんと皆を交えて説明しないと！」

「そ、そくだねなのは！話し合いは大事だもんね！？」

何となくマズイ展開が待っているように見えたので、二人は必要以上の声量を張った。ある種の必死さすら伝わってくる勢いだ。そして、それでいながら着実に後ずさっていた。

ここ数年で身につけた危機回避スキルが、二人の中でぎゅんぎゅ

ん唸りを上げている。悪い予感を得てして当たるもの。それは共に駆け上がったきた二人の共通認識だった。

「じゃ、じゃあ・・・」

「そういうことで・・・」

安全圏に退避すべく、二人がそろりと部屋の扉へと足を伸ばす。撤退完了まで後二歩足らずだ。逃げに関しては最善の一手と言えるう。

だが、そうは問屋が卸さないところが世の常である。瞬間、ブツと机に向かって会話をしていたはやての目が理解したくない何かを宿し、ギューイイイインツとあやしいひかりを放った。

混乱はしないが、いやな予感が背中を撫でつけ、鼓動が跳ねて加速した。

「まさか二人とも、このままランナウェーできるなんて思っとなるやあらへんやろな・・・？」

ゆらーり、とはやてが立ち上がった。そして素早い手捌きでリモコンを操作し、二人が向かっていたドアをロックしてしまう。訓練用のAMFを展開し、魔法すら封じる念の入れようであった。しまったと思った時にはもう遅く、なのは達のこめかみからつつつと冷や汗が流れていく。

「ぬっふっふっふ・・・」

振り向いた先にいたはやては無感情と激情の中間という、非常に形容しがたい雰囲気を出している。だがそれでいて鼻息は荒く、無表情なのに視線だけはギラギラとしていた。ぶっちゃけると目かか
なりのレベルで据わっている。

ここに記そう。親友は今、確実にヤバイ。

かつてないはやての気迫に、なのはとフェイトは若干表情を引き
つらせながら、風雨の中に佇む案山子のような彼女から一步距離を
とった。体が未曾有の危機を感知したためだ。俗に言う防衛反応と
いうヤツである。

「は、はやてちゃん・・・め、目が怖いよ・・・？」

「お、落ち着いてはやて。飛影のことはまた今度にも・・・」

なのはとフェイトが刺激しないよう恐る恐る言うが、その対応は
一般的にもNG、逆効果の常套句である。再び机がドオオンと叩か
れた音に身を竦めた二人の前には・・・修羅がいた。

「じゃあかしい！この期に及んで隠し事は許さへんで！今の今まで
親友に黙っとったバツや、ここで洗いざらい吐きいッ！」

「ふええええええ　　っ!？」

「あうううううう　　っ!？」

新設された六課の部屋に二人分の悲鳴が響き渡った。

「と、言うわけで紹介するで！なのはちゃんとフェイトちゃんの運命の人にして流離いの剣士、飛影くんや！ハイ、みんな拍手！」

機動六課のブリーフィングルーム、フォワード陣と隊長陣を集めたはやてはさっそく飛影の紹介を行っていた。その顔はほくほくした笑顔で一杯、頼もエステ帰りのごとくつやつやしていらっしやる。いまだかつてないほど、彼女は御機嫌であった。

対して横にいるなのはとフェイトは、その隣でずーんと沈んでいた。なのはは「ふふふ・・・」と感情を感じさせない虚ろな瞳で笑みを浮かべており、フェイトに至っては俯きながらぶつぶつと言葉を連ね続けている。

もはや末期症状だ。その様相は徹夜でスケジュールをこなしたあと地獄の出勤を余儀なくされた中年サラリーマンのようにやつれ、二人揃ってしぼんでいた。

隊長陣三人から溢れるテンションの高低差に、スバル達だけでなくシグナムやヴィータもぎょつとする。しかしそんな状況も何のその、はやては横にいる飛影に近づきながら全員を見渡した。

「聞くところによると彼は次元漂流者らしいんや。これから管理局の民間協力者として働くことになったさかい、みんな仲良くしたってな」

次元漂流者、それが今の飛影の大まかな位置づけだった。言葉にすると簡単だが、その立場は決して軽いものではなく、本部が何かといってくる前にはやては陣営に引き込むことにしたのである。

民間協力者となつたのは、そつちで勝手にやるのはいいが、誰であるうとも命令に従うのは御免だという飛影からの条件があつたためだった。

初めはこの立場すら嫌がつていた飛影だが、驚くことになのはとフェイトの説得で降つていた。というか、彼女らの説得（『泣きそ una 声 + 潤んだ目 + 上目遣い』 × 2 × 美少女補正の最強コンボ）という名の泣き落しを延々と聞かされては、流石の彼とて渋々ながらも折れるしかなかったのだ。

もちろん全てにおいて飛影が納得していないのは明白であった。その証拠に、自己紹介が始まる前から子供とかお年寄りならショック死するほどの剣呑極まりない雰囲気を出させ、初っ端から場の空気をチリチリと焦がしている。

「オイ貴様、何が言うわけで、だ。一人で話を進めるな。それと、身に覚えのなさすぎる肩書きを勝手に追加するんじゃない」

「まあまあ、ええやないの。協力することはOKしたやないか。それになのはちゃん達にあれだけ真摯にお願いされたんやし、男としてはむしろ役得やろ？」

「成程、今すぐ土に還りたいと見えるな。墓石には『化狸ここに死す』とでも刻んでやろうか？」

飛影の視線が細まり、威圧感が一気に増す。新人FW陣はその気迫にひいええと震え上がった。

しかしそれを真っ向から受けている彼女はどこ吹く風のごとく、笑い顔を崩さない。だが、そんな彼の前にはやての守護騎士の一人、スターズ隊副隊長のヴィータが勢いよく飛び出した。

そのまま真っ向から飛影を睨みつける。その表情からは猜疑心と敵意、そして今にもデバイスを起動せんばかりの威圧感が迸っていた。

「デメエ！もしはやてに何かしてみろ、あたしがぶっ殺してやる！」

「何だ貴様は。死にたいのか？望むなら一瞬で消してやるぞ？」

「上等だコラ！」

売り言葉に買い言葉、引くことを知らない二人によって自己紹介な空気が一瞬にして殺伐としたものに変わっていく。瞬間湯沸かし器のようにヒートアップした空間に危機感を覚えたのか、いつの間にか復活していたのはとフェイトが慌てて仲裁に入った。

「ちょ、ヴィータちゃん、落ち着いて！ねっ！？あれは飛影くんなのりのジョークだから、あ、あは、あはははは！」

「もうっ、飛影もだよ！あまりヴィータを煽らないで。喧嘩はよくないんだから……」

「そうやでヴィータ。これから一緒にやってくんやから、そないなことではどうするんや。飛影さんもあまりヴィータをからかわんとい

てな」

はやてが子供を叱るようにメツとする。主からの言葉にヴィータは居心地悪そうに肩を竦める。フェイトに諭された飛影も、そっぽを向きながら雰囲気収めた。

「・・・わかったよ」

「チツ・・・」

しゅんとするヴィータと面白くなさそうに舌打ちしつつも退いてくれた飛影に、一同は安堵の溜息を零す。と、そこで今まで黙っていたシグナムが声を上げた。

「主はやて、僭越ながら私に提案があるのですが」

「うん？なんやシグナム」

声に反応してはやてが首を傾げる。なのはとフェイトはこれまでの経験から嫌な予感が過ぎったが、それに口出しをする前にシグナムがスツと居住まいを正して言った。

「主やテストロッサ達を疑うわけではありませんが、ヴィーダの気持ちも最もと言えます。ですからここは彼の力と性質を計る意味合いも込めて、模擬戦をしてみてはいかがでしょうか？」

「あつ、あたしもそれに賛成！（キツ！）」

（（やっぱり！））

烈火の将の提案に隊長の二人は頭を抱えた。ヴィータは大賛成という感じで諸手を挙げながら飛影を睨んでいるし、シグナムもバトルマニアの血が騒ぐのか少し気が高ぶっているようだった。だが普段の彼女と違うのは、その表情がいつになく硬いことだ。

「そうやなあ、ガジェットを倒したゆうても私らはその場面を見ておらんかったのやし、模擬戦なら危険も低いしな・・・飛影くん、いいやるか？」

はやてが手を顎に当てて唸ったあと、飛影へと視線を移した。彼女を一睨みし、飛影が全員に目をやった。

「フン。オレを計るというのは気に喰わんが、ここの戦力がどの程度のものか少し興味もある。それに、オレもあんな屑鉄相手ばかりで退屈していたところだ。」

提案には乗ってやろう。ただし、一つ条件があるが」

「条件だと？ 一体何だ？」

シグナムが怪訝そうに尋ねる。同時に条件と言われた一同に軽い緊張が走った。

実はこういう例がないわけではない。以前にもフェイトやなのは、そしてはやて相手に『勝ったら付き合ってもらう』『勝ったら貰っていく』系の条件をつけて挑んでくる男は少なからずいたからだ。その数は層々たるもので、山を築けば結構な規模になるだろう。

言わずもがな、そんな男たちを彼女らは残らず完全撃破してきたのだが、つまりは飛影も模擬戦に何らかの報酬を求めていることを感じて全員が身構える。無論その類の提案なら、なのはとフェイト

が拒むことはない、というか諸手で万々歳だが、彼の提案は彼女達の予想の遙か斜め上に行くものだった。

「フツ、簡単だ。一対一ではすぐに終わってしまつてつまらんかな。今の二人とその女、そしてその犬か、貴様らまとめてなら相手をしてやろう。何、死なない程度に加減はしてやる」

「『『『『『ええええっ!?』』』』』」

飛影の提案にFW陣だけでなくのはにフェイト、それにはやてまでが驚きの声を上げた。指名されたのはシグナムとヴィータの二人とシャマル、そしてザフィーラの四人という守護騎士フルメンバ―、六課どころか管理局内でも指折りの実力者だったからだ。

指名された四人はしばし呆氣に取られていたが、数秒の後自分たちの扱いを理解したのか、空気を一気に凍りつかせた。四人がかりに加え、手加減という完全な上から目線。相手にされていないどころの話ではない。

「デメエ・・・舐めてんのか・・・!」

「流石にその言葉は聞き捨てならんな。我らも、随分と見くびられたものだ・・・」

「自信があるのはいいが、仮にも六課の副隊長陣相手に少し言い過ぎだ。報いは受けてもらうぞ」

「・・・」

怒りを露にするヴィータ、体から覇気を滲ませるシグナムとザフ

イーラ、そして飛影をじつと見つめたまま考え込むシャルに視線が集中した。だが彼はその表情を崩すことなく、むしろ挑発するように口の端を吊り上げた。

「貴様らは『同じ』ようだからな、実力も纏まっついていてちょうどいい。それにこの場にいる全員と言わないだけ譲歩してやっているんだ。まさか、今更取りやめるなどとは言わんだろうな？」

「良いだろう。だが覚えておけ。ベルカの騎士を侮ったこと、戦いのなかで後悔させてやろう。飛影、お前にこの六課はふさわしくない」

「シ、シグナム……そこまで言わなくても……」

シグナムは感情を排した顔でそう告げると、弁護しようとしたフエイトを置いて踵を返して部屋から出て行く。一見さんには分からないが、あれは飛影の煽りで怒りを通り越してしまっている状態だ。誰が言わずとも、手加減などしないだろう。

いくらリミッターをかけているとはいえ、SランクオーバーとニアSランクの本気だ。下手をすれば大怪我どころでは済まない。

だが、どうにか空気をよくしようとしたわたわたするメンバーに対して、状況は止まらなかった。出て行こうとした四人の先頭、部屋の出口で立ち止まったシグナムが一度振り返る。そして、その目に殺意すら滾らせながら口をついた言葉は、幼い少年と少女たちにとって衝撃的なものだった。

「貴様は気に入らん。その態度もそうだが……貴様からは血の匂いがする……それも幾重にも渡って浴び続けられた、濃密で危険

な返り血の香りがな」

『!?!』

「ほう、少しは鼻が利くようだな。ただの木偶の棒じゃなかったか」

シグナムの言葉に、はやて達は飛影を見つめながら言葉を失う。
対する飛影は少し感心したように息を吐いた。そこには罪悪感など
微塵も無い。シグナムから溢れるものが露骨な敵意に変わった。

「認めるのだな？やはり貴様は害悪だ」

「フツ・・偉そうに説教した上、勝手に害虫よばわりとは随分とい
い身分らしい。だが、貴様らも他人^{ひと}のことを言えた立場か？」

その『人の型をした』身体に染み付いた、人間を呪い殺せるほどの
憎悪と怨嗟を含んだ血の痕は、いくら正義面しようがもはや消せ
まい。それとも血が染み込み過ぎて今更に嫌悪でもしたか？なら筋
違いもいいところだ。オレをわざわざ引き合いに出すより、鏡を見
たほうがよほど手っ取り早い」

「貴様ツ・・くつ、時間は今から二十分後、場所は演習場の中で
行つ。そこで完膚なきまでに貴様を叩きのめしてくれる・・!」

シグナムは飛影の言葉に動揺と怒りを内包させながら、足音荒く
部屋を出て行つた。沈黙があたりを支配するなか、はやてが飛影に
向かつてため息をつく。その表情には若干の怒りが浮かんでいた。

「勝手に決めてしもつて・・・どないするんや飛影くん、シグナム
達たぶん本気やで？」

自分の守護騎士全員相手というのには、流石の彼女も予想外だったのか、声には飛影を慮る色が混じっている。警戒も滲ませているが、その言葉は本物なのだろう。

彼女の言葉の意味は理解できているであろうに、わざわざ御苦労なことだ。新人四人は青くなっており、フェイトやなのはの二人も「大丈夫？」というように見ていた。

だが飛影はそれを「余計な世話だ」というように鼻で笑い、一蹴する。そして口の端を心底楽しそうに吊り上げた。

「フン、当然だ。それぐらいしなければオレがわざわざ戦う意味がない。そもそも死に物狂いでこなければ勝負にすらならんだろうかな。それに頭に血が上って冷静に戦えない奴らなら、端から試そうなどとは思わん。そこまでのバカなら死んだほうがいい」

暴言一色の言葉にはやては啞然となる。そして硬直している全員を捨て置いて、飛影は訓練場へと向かった。

第四話 六課 〱 初見と疑念（後書き）

何故でしょう、書いていくうちにどんどん当初の原稿とかけ離れていき、最後のは少し重たいオチになってしまいました。

ほのぼので終わらせるつもりが、飛影の性格ならこうだろうな、という感じで書いていたらいつの間にかこんな形に・・・

ですが、気を落としても仕方ありません！ご都合主義と割り切っているので問題なし！（オイ）

というわけでの第四話でしたけれど、いかがでしたでしょうか？

次回はついに飛影と魔法との初戦です。さてさて、どうなるやらいまだ白紙状態の作者には見当もつきません。けれど、何とかなる、かな？

と、ともかく頑張っていくしますのでどうかご贔屓に。

それではまた次回！

第五話 模擬戦 〃 剣と炎と呪われし眼（前書き）

第五話完成です。

初めての対人戦、しかも複数なので書くのは結構大変でした。

これでいいのかなと思いますが、これ以上は書けません・・・おもに作者の力量的な問題で（涙）。

・・・まあ形にはなっている、かな・・・？

というわけで（脈絡ないですが）、第五話です！

作者的には苦心の末書いたので、どうぞご覧あれー！（ヤケクソ）

あ、あと終わりにちょっとした報告がありますので、そちらもどうぞ。

第五話 模擬戦 〃 剣と炎と呪われし眼

飛影と別れて十数分後の演習場。シグナム達四人の騎士は、街中に設定されたシミュレーターが投影するビル群の一角、崩れそうな廃ビルの上で作戦を練っていた。

「くっああああっ！あんのヤロー、あたし達をとことんバカにしやがって！絶対ぶちのめして、気が済むまで謝らせてやる！」

槌型のデバイスを高らかに掲げながら、ゴスロリ服のヴィータが吼えた。喧嘩っ早く血の気が多い彼女だが、今日はいっつにない気の高ぶりようだ。年齢不相応な威圧感がにじみ出ている。

どうやら先ほど紹介された六課の新しい民間協力者、飛影にコケにされたことが相当頭に来ているらしい。先ほどから大声で怒鳴ってばかりだ。だが、声を上げこそしないものの、それはシグナムやザフィーラも同様だった。

「少し落ち着け、と言いたい所だが気持ちは私も同じだ。非殺傷設定ではあるが、今回は全力でいく。二人もいいな？」

「もちろんだ。主はやての守護騎士と守護獣の力、とくと見せてくれよっ」

シグナムの言葉に深く頷きながら、闘気を漲らせたザフィーラは鋭く低いうなり声を上げた。シグナムも自身のアームデバイス、

レヴァンティンを一振りし、気持ちを切り替えているようだ。だがそんななか、シャルだけが一言も発さず黙り込んでいた。

「? どうしたシャル、どこか悪いのか?」

「・・・えっ? あ、うつん。なんでもないわ」

「なんでもないということはないだろう。先ほどこらずっとその調子だぞ。これから戦闘に入るにあたって、何か思うところがあるのか?」

シグナムとザフィーラがいつもと違うシャルの様子に眉を寄せた。なんだか自分でもよくわかっていないことを話すような煮え切らない態度の仲間に、シグナムたちは怪訝な表情になる。シャルは首を振って「私は大丈夫だけど」と前置きをしたあとに、少し真剣な顔になりながら口を開いた。

「あのね、これからの模擬戦についてなんだけど、十分に気をつけてほしいの。飛影さんがどんな力を持つてるかまだわからないし、本格的に仕掛けるのはそれを見極めてからでも遅くないわ」

「確かにそうだけど・・・どうしたんだよ? やけに弱気じゃなか。そりゃあ、ただの魔導師って感じじゃないし自信はあるみたいだけど、一人じゃフォーメーションも組めないぜ? それにアイツには魔力がないんだろ? シグナムが言ったこともそうだし、あたし達のことを見抜いた辺り、相当場慣れしてる感はあるけどさ」

シャルに対してヴィータが声を上げる。試合前のスキャンで分かったことだが、それは彼女たちの想定を超えていた。なんと、飛影は魔法を扱う為には絶対に必要となるリンカーコアを持っておら

ず、デバイスすら所持していなかったのだ。

ミッドチルダの常識からいえば、今の彼の立場は魔法を扱えない一般人、つまりは魔導師ランクすらつけようがないということになる。

これには、流石のシグナムやヴィータも呆れてしまった。あれだけの自信だ、それがハツタリでないかどうか一応警戒し、どれほどのものかと調査してみればこの有様。拍子抜けもいいところである。

確かにスピードと剣技では優れており、それが複数のガジェットを倒すほどのものという報告は受けている。だが、高々そんなものでは魔法を扱う自分たちには何の脅威にもなりえない、というのがヴィータ達の見解だった。魔力に関しては新人四人にも遥かに劣るどころか、魔法では戦いようがないのだから。

だが、結界あるいは察知など、補助魔法に長けているシャマルは彼から何かを感じていたのだ。それが何なのかは分からないが、漠然とした不安だけが強く掻き立てられるような、そんな得体の知れないものが彼から溢れている気がする。

だが、それは他の三人は気付かなかったようだ。ザフィーラは首をかしているし、ヴィータも考えすぎじゃねーの？というふうな表情をしている。

「私は何も感じなかったが……だが、シャマルが言うなら留めておこう。それに元より油断などしないさ。そして必ず勝って見せる。ベルカの騎士、烈火の将シグナムの名にかけてな」

シグナムが不敵にそう言った時、ブザーが鳴り響いた。同時に向

かいのビルにスタッという音を立てて飛影が姿を現す。黒いコートに手を突っ込んだまま悠然と此方を見下ろし、その口元には笑みさえ浮かんでいた。そこで空中に大きなスクリーンに映ったはやてが登場し、確認するように言う。

『じゃあ始めるで。試合は守護騎士の四人対飛影くん一人。勝敗は相手が気絶あるいは降参したら負け、それ以外にも戦闘続行不可能と判定次第、試合終了とする。武器は非殺傷に限るなら制限なしや。それでは　　はじめっ！』

はやての号令が訓練場に響き渡る。先に動いたのは守護騎士達だった。シグナムが一度目配せをした後、仲間達に念話を飛ばす。

（前衛は私とヴィータ、後衛にシャル、アシストと遊撃はザフィーラに任せる。それでは行くぞ！）

（おうっ！）

（承知した！）

（皆、気をつけてね）

一瞬の念話を打ち切り、全員が役割を全うするために動き出す。最初に飛影に飛び掛っていったのはやはりヴィータだった。

「おらあああっ！」

「フ、遊んでやるとするか」

真正面から迫るヴィータのハンマーを飛影は後ろに跳んでかわし

た。同時にその間を縫うようにして、シグナムの剣が斬り込んでくる。

「ハッ！」

すれ違うようにシグナムが接近してくる。至近から繰り出された横の一閃を飛んで避けると、その先にはヴィータが槌を振りかぶっていた。

「おりゃあっ！」

捻った体の真横を、轟音を立ててハンマーが通り過ぎる。次いで追いつがるようにしてシグナムの剣が斜め上から迫るが、反動の勢いを足を蹴り上げることで加速させ、紙一重で避けた。

「今のを避けるか、なかなかやる！」

「くそ、ちょこちょこ逃げんな！」

だが暴風と疾風が途切れることはない。嵐のような連続攻撃が飛影を捕らえんと襲い掛かる。それらは飛影に届くまであと少しといったところで空を切っていたが、飛影が避けた先には建物から突き出た壁が存在していた。どうやら最初からここに追い込むつもりだったらしい。

「はああっ！」

シグナムとヴィータが違う角度から得物を振り上げて迫った。飛影の背後は壁だ。つまり逃げ場がない。前はヴィータとシグナムが固め、背後の壁が動きを制限している今、どちらの攻撃を先に避け

ようと防ごうともう片方が飛影の体を貫くだろう。

「もらったあ！」

ヴィータが必殺の間合いに勝利を宣言する。だが、飛影の体まであと少しというところで彼の口元がニヤリと吊り上がり、

「なあっ！？」

「何っ！？」

その姿が一瞬にして掻き消えていた。二人の得物は虚しく空を切る。勢いを殺しきれず、ヴィータの槌は床を打ち砕き、シグナムの剣は壁を切り裂いていた。

そして二人の目標たる飛影の姿は、

「残像だ」

「なっ！？」

「うわっ！？」

彼女達二人の真後ろで、ポケットに手をつ込んだまま立っていた。二人はおるか、遠くで隙を窺っていたザフィーラや状況を分析していたシャルも目を見開く。ありえないものを見たかのようにその表情は強張っていた。

片方を避ければ片方に貫かれる。その状況下で飛影が取った行動、それは二つの攻撃を同時に避けるというものだった。その尋常なら

ざるスピードを以て。

言うだけなら簡単だが、普通の神経ならまず実行には移さない。それは失敗したときのリスクが大きすぎるからだ。体はどちらに対しても防御がとれず、取り得る間は極小、そしてタイミングはコンマ数秒などという生易しいものではない。最悪、両方の攻撃が直撃する恐れもある。

だが、そんな神業じみた動きを飛影は躊躇すらせずに行い、そして造作もなく成功させたのだ。それは途方もない時を戦い続けてきた、歴戦の戦士である彼女らを上回るほどの修羅場を飛影が掻い潜ってきたこと、そしてリミッターを施しているとはいえ、ヴォルケンリッターのほぼ全力で振りぬかれた一撃を彼が完全に見切っていたことを意味する。

しかし、飛影にとってはこの程度息をするほどに容易い。相手の驚き様に溜息を吐くと、背中側の腰元に右手をやり、一振りの剣を鞘から引き抜いた。

それはデバイスでもなんでもない、何の装飾も機能も施されていない片刃の鉄剣。無骨な刃が陽光を受けて、その刀身に凄惨な煌めきを宿す。そして剣をシグナム達に向けると、飛影は皮肉げな笑みを見せ、真正面から突っ込んでいった。

「うつわあ・・・めっちゃ速いなあ、飛影くん・・・」

はやてちゃんが画面に釘付けになりながら言った。新人のスバル達も、呆気にとられたように模擬戦の様子を見ている。私はその様子に少しだけ優越感を抱いた。そして同じことを考えていただろうフェイトちゃんと目が合つて、ふふつと笑う。

飛影くんは確かにすごかった。飛影くんの戦いを見たのは一度だけだったけど、あの時より動きにさらに鋭さが増している。剣筋のキレもシグナムさんを上回っているみたいだ。それでも本気の彼には程遠いであろうことは私たちだけが知っている。

「す、すごいです！シグナムとヴィータちゃんを相手に魔法なしでここまでやるなんて、こんなすごい人と二人はお知り合いだったのですね！」

「まったく、単純な動きでカメラが捉えきれんってどういう速度や・・・フェイトちゃんともいい勝負できるんやあらへん？」

「あはは・・・そう言ってもらえるのは嬉しいけど、私じゃ飛影には勝てないよ。たぶん私となのはの二人でも、ね」

興奮したリインと若干呆れの混ざったはやてちゃんの言葉に苦笑しながら、フェイトちゃんが言葉を返す。その台詞に二人はさらに驚き、後ろで見ていたFW陣の四人が身を乗り出した。

「ええっ！？フェイトさんとなのはさんが二人がかりでも勝てないって・・・じよ、冗談、ですよね・・・？」

スバルが信じられないといったふうに恐る恐るたずねてくる。だ

が、私達の表情からそれが冗談でもなんでもないと理解したスバルとフォワード陣は、驚きのあまり硬直してしまったようだ。それを少し可笑しく思い、私はもう一度スクリーンに視線を移した。

- Side out -

「今度はこっちから行ってやる。相当に加減はするが、本気で受けんとすぐに終わってしまうぞ?」

言うが早いか、飛影の姿が再び消えた。それに対して背筋に冷たいものが走ったシグナムは、ヴィータを突き飛ばして剣を正面に掲げる。瞬間、金属がかちあう鈍い音が響いた。

「ぐうつ!?!」

「ほう、今を受けるとはな」

至近から目を合わせているのは言わずもがなの飛影である。それは正面からのただの袈裟がけの切り下ろしだったが、速さが尋常ではない。そして、続くように剣が踊りかかってきた。

「ぬ、うつつ!?!」

シグナムはほとんど本能的にレヴァンティンを動かして、刹那の連撃を防ぐ。強くしなやか、そして的確に、刃が死角から繰り出される。彼が振るう剣はヴォルケンリッター中最強、烈火の将と呼ば

れるシグナムですら、なんとか線が見える程度という凄まじい速度の剣筋だった。

後退と防戦を余儀なくされる。直撃だけはもらわないように捌こうとするシグナムだが、弾かれたその剣先さえ彼女には揺らいで見えた。そして速いだけでなく、一撃一撃が想像以上に重く、それでいて鋭い。それに対して長く持つはずもなく、強い一撃にシグナムは体ごと吹き飛ばされた。

「くあっ!？」

「シグナム!くそ、速えっ!」

ヴィーダが止まった飛影に打ちかかるが、目標が一定していなかったため簡単に受けきられてしまう。そして打ちかかられた剣との鏝迫り合いを押し切ってヴィーダが距離を空けると、対する飛影はニヤリと笑った。

「どうした、もう終わりか」

「ハッ、冗談言うんじゃないやねえ!アイゼン、カートリッジロード!」

『Explosion-Schwalbe fliegen!』

ヴィータが叫ぶと、グラーファイゼンがそれに答えて連動し、排出機構から薬莢が飛び出した。同時に三角形のオレンジ色をした魔法陣が出現する。

(力が上昇した・・・?成る程、外部から力を取り込んで瞬間強化を
プースト
かけているわけか)

興味深そうに目を開いた飛影にヴィータは鉄の弾を四つ構え、力任せにそれを撃ちだした。赤く発光した四つの弾が変則的な動きで迫るのを、飛影は横のビルに飛び移ってかわす。だが、鉄球はそのまま向きを変え、再び接近してきた。どうやら追跡能力もあるようだ。

それを四片に切り捨て爆炎に変える。だが爆発から身を引いた所で、飛影に影が迫った。

「気を取られているところ悪いが、私の存在も忘れるな！」

「同じくな！」

「・・・チィッ！」

上から振り下ろされた剣と横合いからの牙を、後ろに飛んで避ける。ザフィーラのほうはそのままこちらに攻撃を仕掛け、シグナムは空中で剣を掲げた。

「レヴァンティン、カートリッジロード」

『Explosion!』

ヴィータのときと同様に峰の機構が葉莢を吐き出すと、シグナムの剣が炎に包まれた。魔力が充填され、その刀身から熱風が迸る。

（ッ、アレも同型か！）

「はああああっ！」

ザフィーラと入れ替わるようにシグナムが間合いに斬り込む。飛影はシグナムのレヴァンティンを衝撃を殺しながら捌くが、存外に斬撃が重く押し掛かってきた。

アームドデバイスであるシグナムの剣は、魔法技術を結集させたものである。それ故、飛影のものとは比較にならないほどの性能と強度を持ち、彼女のアシストも担っている。魔法を扱う目的として彼女専用にかスタマイズされたものだ。

そして彼女自身の剣士としての強さも手伝ってか、その威力はまさに一撃必殺。こんな鉄剣でそんなものをまともに受け続けられれば、いくら妖気で強化しているとはいえ、遠からず木っ端微塵にされるであろうことは目に見えていた。

不利を悟り、飛影は一旦後ろへと大きく跳ぶ。だが、着地した瞬間足元から妙な力が放出された。間一髪で直撃は避けるが、両足が鎖のようなもので絡め取られてしまう。

「戒めの鎖です。かなりの魔力と時間をかけて練り上げましたから、ちよつとやそつとじゃ外れませんよ。完全に不意を突いたのに、下半身しか掛けられなかったのはちよつと悔しいですけど」

「くっ・・・」

横のビルの陰から、シャマルが敵かに姿を現した。シャマルは飛影の素早さを脅威に思い、足を止めるために気配を極力隠しながらずっと魔力を練っていたのだ。おかげで支援は最低限しか出来なかったが、動きを止めたことによる影響は大きい。

「ほんじゃ、止めだ！アイゼン！」

『Explosion-RaketenForm!』

ヴィータが叫ぶと、ハンマーの形状に変化が生じた。片側に岩盤を打ち抜くときに使うような杭が現れ、もう片方にはロケットブースターのような突起が装着される。そしてブースターから凄まじい力が吹き出してそれを推力としたヴィータが飛影に回転を繰り返して、速度を上げながら肉薄してきた。

飛影は足を捕らえられたままそれを見上げた。そして、近づくヴィータに向けたその目が、『初めて』攻撃的な光を帯びながら細まる。握った刀の柄がミシ、と音を立てた。

「オレを . . .」

ヴィータは手加減していない。非殺傷の設定が組まれているからといっても、アレをまともに受ければ無事ではすまないだろう。

だがそんなことはどうでもいい。少しは報いた奴らに、見せてやる。

自分の持つ、力の一端を。

「いっけえええ！」

「舐めるなあッ!!」

飛影の怒声と同時に、額を覆っていた巻き布が焼き切れ、紙屑のように吹き飛んだ。瞬間、凄まじい力の波動が暴風となって周囲に迸る。

そして、額にある彼本来の力が眼を覚ました。それは腰だめに構えた飛影の左拳に集まっていき、一瞬で黒と赤を交えた獄炎と化す。熱が空気を侵食し、空間を陽炎のように揺らめかせた。

第三の眼が迫りくるヴィータを捉える。刹那、威圧感と力を伴い、強烈な光が噴出した。

「邪王炎殺　　・・・」

「なっ!?!」

「額に、目だと・・・!?!」

「っ!ヴィータちゃん、離れて!」

シグナム達が飛影の額に驚き、そこからあふれ出す力の大きさに気づいたシャルが、ヴィータに向かって叫んだ。だが、最高速まで高まっていた速度を殺すのは不可能と考えたヴィータは、ありつたけの魔力をデバイスに注ぎ込んで特攻する。

「くっ、ぶちぬけええええッ！」

「煉獄焦ッ！！」

炎を纏った飛影の拳とヴィータ会心の一撃が真つ向からぶつかる。目もくらむような光が二人を中心にして走った。力のぶつかり合いで接点からは稲妻が迸り、屋上のフェンスがなぎ払われる。だが、まともに拮抗していたのは数秒足らずだった。

『・・・Sorry, Master・・・』

謝罪の言葉がグラーファイゼンから紡がれ、

バキン。

「な・・・」

ヴィータ自慢の相棒は、持ち手の中間から先が飛ばされていた。衝撃に耐え切れず、柄の部分が粉碎してしまったのだ。飛んでいったグラーファイゼンは隣にあったビルに激突して消える。

「うわああああっ！？」

そしてヴィータもまた、勢いをそのままに向かいのビルに突っ込んだ。どちらも心配はないだろうが、状況は変わった。飛影は今まで炎が灯る手を伸ばして無言で足に伸びる鎖を掴むと、それをなん

の造作もなく引きちぎってしまった。

「そんな!？」

シャルが叫ぶと同時に、飛影は彼女の背後に移動していた。そして手刀を模した形でシャルの首元を一閃し、その意識を刈り取る。飛影は崩れ落ちた彼女を受け止め、屋上に横たえた。

「シャル! 貴っ様あ!」

ザフィーラが飛影に接近し、怒りにまかせた一撃を叩きつけた。だが飛影の姿は再び掻き消え、彼の牙と拘束魔法は屋上の床を粉碎したのみで飛影を掠りもしない。ザフィーラの上方から失望したような声が響いた。

「ただ突っ込んでくるだけとは・・・無策にもほどがある」

「何ッ・・・がつ、あああつ!？」

ザフィーラが声に気づいたとき、飛影は彼の真上にいた。その僅かな硬直の隙にアイゼンを碎いた一撃が落とされ、体が一瞬にして流れて消える。そして気付いた時には、屋上から床をぶち抜いて一階まで叩きつけられていた。

「あ、ぐ・・・」

ザフィーラは、そこではじめて自分が殴られていたことを悟った。体を起こそうとするも、打ちつけられた身は言うことを聞かない。まるで心と分離してしまったかのようだ。そして彼の意識は瞬く間に遠くなり、そのまま闇に沈んでいった。

「ザファイラ！このっ・・・アイゼン、リカバリー！カートリッジロード、ギガントフォーム！」

『Explosion-GigantForm!』

リカバリーによつて修復されたアイゼンが新たな薬莢を二つ吐き出した。すると、またその形状が変化し、今度は巨大なハンマーの形を取る。

『Explosion-Komet fliegen!』

さらに薬莢が三つ排出され、ヴィータの手元に彼女の体躯と同じ、いやそれよりも巨大な鉄の弾が現れた。

古代ベルカ式中距離射撃魔法、コメットフリーゲン。シュワルベフリーゲンの発展強化型で、ヴィータの持つ攻撃魔法のなかでも指折りの破壊力を誇った魔法だ。本来なら巨大といえど規格はもう少し小さい玉なのだが、ヴィータはほぼ全力でそれに魔力を注ぎ込んだため、規模が増していた。

ヴィータは飛影をその目で見据える。そして、宙に浮いた鉄塊を巨大化したアイゼンで力任せに叩きつけた。

「ぶつと・・・べえ！」

ヴィータが弾を打ち据えると、赤く発光した鉄塊が飛影に向かって飛来していく。それに込められたパワーはかなりのものだ。それこそ、ビル一個など吹き飛ばして余りある威力を持つているだろう。加えて、それを避けたとしても迎撃したとしても、爆風と鉄片まで

は防げまい。

（当たれば瞬殺、避ければ上空で待機してるシグナムが一撃入れて仕舞いだ！）

必殺の一撃に勝機を見出し、力づくヴィータ。だが、飛影は迫り来る鉄球を一瞥すると避けようとせずに左手を掲げ、

「フン・・・」

受け止めたと同時に一瞬で消し飛ばした。ヴィータが渾身の力を込めて放った鉄弾は赤い光となって放射状に飛び散り、空のなかに消えていく。残ったのは焼け爛れた空気だけだった。

「なっ・・・！？」

「舐められたものだな。碌な力も通っていない鉄屑が、このオレに通用するとも思っていたのか？」

切り札として放った鉄球があっけなく消されてしまったことにヴィータは茫然自失してしまう。だが、それは大きすぎるどころではない隙だった。

「仕舞いか？　なら終わるまでそこで寝ている」

「あ・・・」

悲鳴を上げる暇なく、その小さな体が風を切った。衝撃をまともに受けた体は慣性に従ってあっけなく吹き飛ばされ、ヴィータは意識を手放す。飛影はその姿が先ほど突っ込んだビルの中へ消えてい

くの見届けると、空中で構えをとったまま固まっているシグナムを見やった。

- Side Fate Testarossa Harlaown -

「すごい・・・」

飛影がヴィータの大鉄球を消したのを見て私は感嘆の声を上げた。飛影の力は知っていたけど、シグナムたち四人をたった一人で圧倒するなんて私やなのは、さらには主であるSSランクのはやてでも厳しい状況だろう。

そしてそこまでのことをしている彼は決して本気ではない。本当、格が違うとは彼のためにあるような言葉だ。わかっていたつもりだったけど、その差のあまりの大きさに少し落ち込んだ。

「信じられません・・・」

そこでデータを取っていたシャーリーが呆然とした様子でキーボードから手を離すのが見えた。表情は理解することを拒んでいるかのように歪んでいる。

「なんや？今のどうやったかわかったんか？」

「ええ・・・今の場面での飛影さんの周囲に発生した推定熱量を割

り出してみたんですが・・・」

シャーリーはデータを読み込んで画面に表示させる。そこに記載されていた数値を見て、はやくと私は目を剥いた。スバルはそれを見ても首を傾げているが、遅れて覗き込んだティアナからは血の気が引いていく。

「推定瞬間出力、温度換算・・・約1万2000度・・・!？」

「は!？」

「ええつと・・・ティア、それってどれくらい？」

「このバカスバル、少しは自分で考えなさいよ! いい!? ヴィータ副隊長の鉄球は熱で・・・」

「ええ・・・おそらく熱で蒸発させられたんです・・・」

「「「ええええええつ!？」」「」」

ライトニング隊の二人とスバルが目を見開いて驚いた。それはそうだろうと思う。いくらなんでも、アレだけの質量の魔導鉄球を溶解という工程をすつ飛ばして一瞬で蒸発させるなんて反則すぎだ。もはや強いとかそういう次元を軽く超えている。

「あ、あの大つきい鉄球を、もんじゃ焼きみたいに溶かしちゃうなんて・・・」

「ス、スバル、その例えはどうかと思うけど(ちょっと際どいし、というかなんでもんじゃ焼き知ってるの・・・?)・・・でも、そ

の意見には概ね同意かな・・・」

彼の力を良く知るなのはも口元が引きつっていた。なのはや四人に苦笑しながら、私は視線をモニターに返す。

(・・・まだ、追いつけてないんだね・・・)

飛影がヴィータを吹き飛ばしたのを見ながら、あの時見た彼の背中がまだ遠いことに僅かな寂寥を感じる。憧れであっても、目標であつても、私の何もかもから遠すぎる存在である彼を、そもそも追いつけるかも分からない彼を追いつけるのは少し辛い。

だが八年経った今でも変わらないことがあつた。それは私が彼を信じ続けているということ。ヴィータを相手にした飛影が取つた行動を見て、私は自分が間違っていないかったことを改めて感じ、胸元に今も光る氷涙石をそつと握った。

- Side out -

「残るは貴様だけだ。どうする？降参するか？」

燃え盛る炎を左手に纏い、飛影は挑発するように誘つた。額の邪眼が鈍い光を放ちながら、真つ直ぐにシグナムを捉える。シグナムは一度目を閉じ、剣を正眼に構えて笑みを零した。

「・・・愚問だな。一度勝負を挑まれた以上、そしてそれを一度受

けた以上、ベルカの騎士が引くことはありえん！例え」

横に薙いだ剣からまた葉莢が飛び出した。落ちていった葉莢が飛影がいるビルの屋上に落ち、甲高い音を立てる。同時にその刀身から今までで最大級の炎が燃え上がった。

「例え、最後の一人となろうともな！」

「フン、いい心がけだ。ひとつ教えてやろう。オレは確かに殺しなから山ほどしたことがあるが、人間をこの手にかけたことはない」

飛影は淡々と言う。もつとも霊界から指名手配を受けていた時には悪事も働いたし、魔界の穴での戦いの際は一人切り捨てたのもいたが、急所は外していたから死んではいないだろう。かなりいい加減だが飛影は自分の中でそう結論づけた。

シグナムは飛影の言葉に一瞬呆気にとられた。が、剣の柄を握りなおして彼を正面で見据える。

「そう、か・・・私も非礼をわびよう。自分のことを棚上げすると騎士失格だな・・・」

数メートルの距離を空けたまま二人は剣を手に対峙する。だがお互いにわだかまりがなくなったせい、その表情は晴れやかだった。左手の炎を掻き消した飛影は、刀を腰溜めに構えながらシグナムを誘う。対するシグナムは顔から険を取り除き、剣を両手で構えて目を閉じた。

緊迫した空気があたりに満ちる。風が流れ、雲が揺らめき、海から来る匂いが二人を包み込んだ。

そして、決着の時がくる。

「ヴォルケンリッターが一の騎士。烈火の将シグナム、参る・・・はああああっ！！」

凄まじい速度でシグナムは間を詰めた。体の魔力は一点のみに注がれ、刀身の炎は猛りを上げて刃を巻き込む。

きつとそれは彼女にとって、今までで最高の一撃だった。それを迎え撃つ飛影はその姿に笑みを深くする。シグナムもその一瞬だけは心から笑っていたのかもしれない。

「紫電・・・/妖剣・・・」

心が肉薄する。極限にまで高められ、圧縮された剣気が爆発した。

「一閃ッ！！/十六夜！！」

鋼が打ち合う音のあと、訓練場に静寂が落ちる。二人は低く姿勢を取り、振り抜いた得物を携えて止まっていた。と、数秒の時を置いて飛影がすつと立ち上がり、剣の露を払うように真横に振る。すると、それに重なるようにして飛影の背後で鉄音が響きわたった。

コートを撫でつけるように、海風が薙いでいく。飛影が剣を収めて振り返ると、剣を握ったまま気を失って倒れているシグナムの姿があった。

『そ、そこまでや！勝者、飛影くん！』

慌てた声色で終了が宣言される。号令と同時に飛んでくるのは達を横目で捉えながら、飛影はいつもの自信に満ちた笑みを浮かべ、空を見上げた。

第五話 模擬戦 〵 剣と炎と呪われし眼（後書き）

第五話でした。

戦闘シーンが上手く書けたかどうかすこぶる不安な今日この頃でありんす。

さて、まえがきにもあった、本当にちよつとした報告を。

今日確認してみましたところ、なんとPVが五万（四捨五入で六万）に達していました！

し、信じられません。システムが二日遅れになっているそうですが、これほどたくさんの方々に目を通してもらえるとは！

読んで下さる皆様、本当にありがとうございます！

今後もより一層の努力と文章力向上を目指しますので、応援とご感想をよろしくです！

感想は質問でもなんでもいいので、気軽にどうぞ。

それでは次回にまたお会いしましょう！

第六話 存在定義 Ⅰ 過去の片鱗（前書き）

奇跡です・・・三日で小説を仕上げることができましたよ！

少し会話文が多いせいもあるんですが、とにかく形になったので投稿することに致しました。

少し短めですが、はりきっていきましよう！それでは第六話です！

第六話 存在定義 Ⅰ 過去の片鱗

六課のブリーフィングルームは重い空気で満ちていた。明るく滲刺とした雰囲気、六課の美点だが、今はそれを求めることはできない。その原因は先ほどの模擬戦を勝利で飾り、今はソファに体を沈みこませている一人の男にあった。

「説明は・・・してくれるんやよね？飛影くん」

「・・・」

いつものおちゃらけた雰囲気は成りを潜め、機動六課部隊長の顔になっているはやてが飛影に詰問する。部屋にはFWの新人四人と先ほど飛影にやられたヴォルケンリッターの四人、そして分析担当のシャーリーやヘリ操縦士のヴァイスもいた。そしてなのはとフェイトは彼を庇うように両側に控えている。

「聞きたいことは山ほどあるんやけど、まずはいっちゃん重要なもの聞くで。飛影くん、君は一体何者なんや？」

その質問に飛影の横にいた二人がびくつと震えた。はやては二人の反応を横目で見ながら言葉を続ける。

「なのはちゃんとフェイトちゃんからは危ない所、具体的なことは知らんのやけど、そこを助けてもらったって聞いている。二人が君のことを信頼に足る人物やって思ってるんもわかっとなるつもりや。せ

やかて、私もはいそうですか。納得はできへん。私らみたいなデバイスを使わないで出したあの炎、人間離れしとるそのスピード、それに何より……」

そこで言葉を切り、はやては一同を見据えた。顔を伏せるのはとフェイト以外、その心情は同じようだった。

「何より、あの『目』や。あれは流石にスルーできへん。話してくれへんか、飛影くん？」

飛影に視線が集中した。そこには猜疑心、あるいは敵意に近いものまである。それを感じとってフェイトが慌てて間に入った。

「は、はやて、飛影にだって事情があるんだから無理やりは「事情ってなんや？それは私らには話せないことなんか？」え、えつと……それは、その……」

はやてに遮られ、フェイトは尻すばみに言葉を小さくしていく。その横でなのはも俯いていた。はやての目が確信の光を帯びる。

「フェイトちゃんは知つとるみたいやな。あとなのはちゃんもそうやる。けど、六課を執りまとめる者として私は見過ごすわけにはいかん。そんなもんを抱えたまんまじゃ、こっからの活動に支障がでてまうかもしれんしな」

仕事の顔をしたはやてがぱつさりと切つて捨てる。取り付く島もなかった。嫌な沈黙が部屋の中に降りていく。だが、それはあっけなく破られた。

「フン。聞かせてやる義理はないが、いずれわかることだ。いいだ

ろっ、先ほどの条件を飲んだ礼だ、話してやる。別に秘密にしておくつもりもなかったからな」

「っ！飛影くん……」

「飛影……」

心配そうにするのはとフェイトにフツと笑い、飛影はソファに身を沈める。そしてその姿勢のまま、まるで酒の肴にするような軽い口調で語り始めた。

自分は人間とは根本的に違う妖怪と呼ばれた種族で、物心ついた時にはもう親はおらず、ある時まで盗賊を生業とし、一人で生きてきたということ。

スピードは自前だが先ほどの炎は妖気と呼ばれる力を使ったものであり、自分が特別な炎を扱う火炎術者だということ。

この額にある瞳は邪眼と呼ばれ、かつてある目的のために手術で手に入れたものだということ。今は自力で取り戻したが、その際全ての力と人生の一部を代金として差し出したこと。

そして、人間の仲間たちに会うために魔界から霊界を通じて人間界へと行こうとしていたとき、次元の狭間に巻き込まれてこの世界に来てしまい、そこで同じように次元を通して来た妖怪に襲われて

いたなのは達を助けて出会ったことなどを話した。

飛影の話が終わったとき、誰も言葉を発することは出来なかった。彼はなんでもないように話す、その隔たりが事情を知るなののはたちには辛く、知らないはやて達も自分たちを寄せ付けないようにしていることがありありと分かったからだ。

「こんなところか。さてどうする？こんな危険なヤツを人間たちの中へ置いておいていいのか？オレを放り出すのなら今のうちだぞ。機動六課部隊長、八神はやて」

声色を変えることもなく、不敵な笑みで飛影ははやてを見据えた。はやては先ほどの話が重すぎたためなのか、居心地が悪そうに目を伏せる。だが、なのはとフェイトはそれ強く否定した。

「危険じゃないよ！飛影くんは、確かに厳しいところとか口が悪いところとか意地悪なところとかあるけど、酷いことは絶対にしない！私は飛影くんに救われたし、飛影くんがいたからこそまで来れたんだよ？だから、そんなこと言わないで・・・」

「飛影はこんなだからみんな誤解しちゃうかもしれないけど、とっても優しい人だよ。私達が今生きていられるのも、こうしてみんなと会えたのも、なのはと笑ってられるのも、全部飛影がいたからできた。私はそんな飛影にずっと感謝してるし、それはこれから変わらない。妖怪とかそんなのは関係ないんだ。私はずっと飛影の味方にいるって、あの時そう決めたから。だから・・・」

優しく、しかし強い信念を感じさせる声と言葉で二人は自分の思

いを紡いでいく。六課のメンバーはそれを黙って聞いていた。敵意は今のでかなり薄れたが、代わりにかなりの戸惑いが部屋に満ちている。

誰もがこの状況に肩身を狭くする。だが、それを破ったのは意外な人物だった。

「いいんじゃないか？別にここに置いても」

声の主を全員が捉える。それは説得がもつとも難航するだろうと思っていたスターズ隊の副隊長、先ほどの模擬戦で飛影に敗れたヴィータだった。

なのはやフェイトもそこから賛同を得られるとは思っていなかったのか、きょんとした顔でヴィータを見つめている。飛影も少し驚いているようで、その鋭い目を丸くしていた。

全員から視線を向けられた当の本人は「な、なんだよ」と顔を若干赤くしながら視線を横に流す。

「なのは達の言ってることは嘘とか鼻真目じゃないって思う。だってそいつ、あたしを倒す時に寸止めしてたんだよ。アレだけ喧嘩売ったんだ、本気でぶつとばされてもおかしくなかったのにさ」

歯切れが悪そうにヴィータは呟いた。寸止めで吹っ飛ばされるのもすごいが、それが意味するのは飛影にはヴィータを潰すつもりが

なかったということだ。ヴィータに同意するようにシグナムも続く。

「確かに、な。斬り合っていた時も最後の一撃も、ヤツの剣は全て峰だった。お前達二人も撃墜されてはいるが、急所は外してあるようだからな。後に響いてはいないだろう？」

シグナムの言葉に思うところがあつたのか、シャマルとザフィーラも考え込むようにして視線を下げた。そして一度全員を見渡してから、飛影を見つめ「それに」とシグナムは続けた。

「こやつ剣には一滴の澱みもなかった。芯から精錬されたような邪気のないものだ。あれほど澄んだ太刀筋を持つ者が根っからの悪人だとは、私にはとても思えん」

以上だ、と言ってシグナムは着席する。最後のはバトルマニアの勘に近いが、少なくとも飛影が排除すべき者だという認識はないらしかつた。するとシグナムを皮切りに次々と声が上がった。

「あ、あたしは賛成ですよ。そんなに悪い人には見えないし・・・」

「このバカスバル！根拠のないことを簡単に言わないでっ・・・と言いたいところだけど、私にも彼が取り締まるべき犯罪者には見えませんね」

「えっと、僕も賛成です。そ、それにあんなに強いんですから！」

「わ、私も・・・なのはさん達の友達が悪い人のわけがないですし、なんだか、えっとその・・・んみたいだし・・・」

と、次々に賛同の声が上がっていた。そこに至って、決定権を持

つはやてに視線が戻ってくる。はやては苦笑しながら溜息を吐いた。

「まったく、ここでダメなんて言うたら私だけが悪者みたいやないか・・・なんて冗談や。私も飛影くんが悪人だなんて思ってたへんよ。ただ六課のリーダーとして、納得のいく理由が欲しかっただけやからな」

はやてがそういうと、なのはとフェイトを中心として六課に笑顔が戻ってくる。二人がよかったねと口々に零すなか、飛影は呆れたように溜息を吐いた。

「やれやれ。こいつら二人も救えないようなお人好しだと思ってたが、オレの勘違いだったようだな。どうやらどうしようもなく突き抜けたバカ集団の一員だったらしい」

「なんだとお！？テメエもういつぺん言ってみろ！今度こそぶちのめ「だが」あ？」

ヴィータがさっそく飛影の毒に噛み付く。だが飛影はそれをスル―して遮りながら、

「そんなバカは手が掛かるが・・・退屈はせんな」

力が抜けた笑みを見せた。その表情に全員があっけにとられる。そしてしばらくすると、我に帰った数人が顔を赤らめた。

（フェ、フェイトちゃん・・・飛影くん、い、今笑ったよね）

（う、うん・・・いつもの飛影もすごくカッコいいけど、今のは不意打ちだった・・・か、顔が熱いよ・・・）

（あちゃー、あかんなあ。こりゃ、なのはちゃんとフェイトちゃんがコロッとやられてまうわけや。ま、私はもっと優しいんが好みやけどな！）

（ふ．．．いけ好かんと思っていたが、認識を改める必要がありそうだな．．．）

（あ、う．．．い、今のドキッは気のせいだ！）

（な、何かしら．．．背中にゾクって来たのは．．．）

（貴奴にもあんな表情が出来るのか。これなら大丈夫だな）

（な、なんだろこれ。私、どうしたんだろ．．．）

（はあ、こりゃ大変ね。飛影さんも．．．）

（クールでカッコいいなあ．．．）

（飛影さんかあ．．．やっぱり、お　　んみたい．．．）

（みなさん大変ですね．．．）

（でも仲がいいのはいいことなのです！ユニゾンもしてみたいですねー！）

飛影は自分のギャップに少女たちが当てられていることなど露ほども知らず、ぽわーっとなるメンバーを不審そうに眺めていた。蛇足ではあるが、後に飛影が笑うことはほとんどなかった。が、これは飛影を意識し始めた少女達の脳内で永久保存されている。

そして数十分後。とりあえず六課への居住が許された飛影は、スバルやヴィータ、シグナムから模擬戦のことについて質問攻めに遭うこととなった。そのほとんどがヴィータやリイン、そしてスバルなどである。

「なあ飛影。さっきあたしらと打ち合ってた剣だけど、アレって本当にただの剣なのか？」

「次から次へと騒々しい奴らめ・・・貴様らのデバイスとやらの材質は知らんが、相当な強度と見たのでな。オレの妖気を通して構成を強化しただけだ」

「ああ、だから互角に打合えたんですねー、納得です！でもそんなことも出来るんですかー、妖気ってすごいです！」

途絶えることのない質問の嵐に飛影は渋りながらも答えていく。当初は無視していたのだが、どれほど蚊帳の外に置こうと破って入ってくるので答えたほうが楽なのであった。だが、リインとヴィータが納得する横でシグナムとシャーリーが唸っていた。何事かとみんなが集まってくる。

「どうしたんや？」

「あ、いえ。私がやられた時、飛影が一体何をしたのだろうかと調べていたんですが……」

「ああ、最後のシーンだね」

そこには画面の中で対峙するシグナムと飛影の姿があった。そこまではいいのだが、動いて交差した瞬間だけでは、とてもシグナムがやられるような一撃を受けているふうには見えなかったのである。横にいるシャーリーもいろいろな計測器やグラフを出して唸っていた。

「特殊な術か何かだと思ったんですけど、どうにも分からなくて・
・隠蔽性の高い攻撃でしょうか……？」

「私みたいな打撃攻撃じゃないだろうし、ティアみたいな幻影系かな？」

「うーん、分からないけどたぶん違うんじゃない？どこから攻撃したとか出てないから」

意見を交わしながらも、シャーリーは納得はできていないようだった。分析を得意とする彼女もお手上げのようである。そんな二人の周りに集まっていたなかから顔を出し、フェイトが飛影に尋ねた。

「ねえ飛影、あそこで一体どんな魔法……じゃなかった、技を使ったの？」

「あ、それ私も聞きたいな。確か、いざよいつて言ってたよね？」

ストレートに尋ねるフェイトになのはが援護射撃をかける。皆も興味津々であるようでそこかしこで聞き耳を立てていた。

「別に技でもなんでもない。ただ連続で斬っただけだ。名前も、知り合いが勝手につけたにすぎん」

口調はいつもどおりだが、飛影は少し優しい目をしながら特徴的な青緑の髪を思い出した。これにはもともと名前などなく飛影の剣の凄さを知った『彼女』がつけてきたのだが、まんざらでもなさそうではある。少なくとも彼の周りはそのように感じた。

「ほう？ちなみに何回斬ったのだ？」

シグナムが興味によるものか語尾を強めながらずっと飛影に顔を寄せる。バトルマニアとして、そして剣士としての血が騒ぐのだろうが、それを見たのはとフェイト、そしてヴィータやシャル、さらにはスバルまでがむっとしているのには二人ともまったく気づかなかった。

そして、彼は彼で大して興味もなさそうな口ぶりで、

「十六回だ」

『……………はい？』

全員が思わずハモッてしまうほど見事な爆弾を落とした。新人たちやはやてはもちろん、なのはやフェイト、そして実際に戦って彼の強さを知るヴォルケンリッターの四人ですら完全に固まっていた。

「う、嘘やろ？十六回って・・・シャーリー！」

「は、はい！映像をウルトラスローにしてみます！」

サーモグラフィや魔力視化プログラムやらを落として、シャーリーがさきほどの映像を持ってくる。そして出来うる限り最高の遅さで件のシーンを再生しなおす。するとシグナムがゆっくりと一閃するまでの間に、まるでそこだけ時間が違っているかのように太刀を振るう飛影が映った。

例えるなら、乳母車を押していた横をＦ１カーが最高速でぶっちぎって行ったぐらいの違いだ。パネルを操作していたシャーリーやはやては、ブリキのような動きで首を動かし、飛影に向かってありえないものを見るような視線をよこした。完全に呆気にとられている。

「なんつー出鱈目な・・・あたしの鉄球を蒸発させたって聞いた時
も思っただけだ・・・」

「もう、驚く気力も湧かん・・・」

「す、すすす、すつごーい！ねえねえティア、どんな訓練をすれば
私もあんなふうに動けるようになるのかな！？」

「はぁ・・・いつもながら、アンタのポジティブさは時々呆れを超

えていくわね……」

「す、すごい……（僕も、この人みたいになりたいな……）」

「ほわー……（尊敬の眼差し）」

ヴィータとシグナムは疲れたように肩を落とし、スバルは目を輝かせながら隣にいるティアナに呆れられていた。エリオとキャロも、飛影に向かって憧れの人を見るような視線を送っている。なのはやシヤマルは皆と飛影を交互に見比べながら、顔を付き合わせて苦笑いしていた。

そんな中、不意にフェイトが近寄ってきた。少し緊張した様子で飛影の隣に座る。

「ね、ねえ飛影。も、もし……もしかだよ？飛影がよかったらなんだけど……私もスピードタイプだし、剣を使ったりもするから……今後のために、あの、その……わ、私に稽古をつけてくれないかな？」

「……「！」「」「」」

両手の人差し指をつき合わせ、頬を若干赤くしながらフェイトは尋ねた。場が水を打ったように静まり返る。飛影は彼女の態度に怪訝そうに眉を寄せたが、少しの間を置いて小さな溜息を吐いた。

「……オレは早朝に訓練する。勘が鈍らんように剣もその時に使うからな、付いてくるなら勝手にしろ。だが試合相手としてならいいが、邪魔は許さん。それにお前から頼んできたことだ、オレに手加減など期待するなよ」

「あ、う、うん！ありがとう飛影！」

そっけなく言う彼の言葉を聞いて、フェイトの顔に赤い笑顔が咲く。飛影がそれにやりにくそうな表情をしていると、フェイトの後ろからなのはがひよいと顔を出した。

「そ、それなら私も！早朝訓練前なら時間とれるし、フェイトちゃんと飛影くんが一緒ならすぐくためになるしっ！（飛影くんを独り占めするのはずるいよ、フェイトちゃん？）」

「な、ならあたしも、時々ならいいぞ！？ま、負けっぱなしなのは気に喰わねえからな！（あ、あたしだって強くなりたいからな。それだけだぞ！？）」

「ふ、騎士は引かぬ。私も参加させてもらおう（抜け駆けは卑怯ではないか、テストロッサ？自分だけ強くなるうなどと）」

「け、怪我は任せてくださいっ（ま、まあ实际需要だものね・・・）」

「

「私もやりますっ！（なんかざわつくのはよくわからないけど、なのはさんもやるんだし、とりあえず参加しなきゃっ！）」

「キ、キャロ。僕たちは基本見学にして、しっかり学ばせてもらおうよ・・・（み、みんなすごい気迫だ・・・）」

「うんっ（飛影さんと特訓か・・・）」

なのはを筆頭に、次々と飛影との教練に参加を表明する機動六課

のメンバーたち。予想外だったのか、飛影は少し面喰らっている。そしてはやてとティアナ、そしてシャーリーにリインフォースは部屋の隅で溜息を吐いた。

「はぁー、はつきり自覚しとるんはなのはちゃんとフェイトちゃんだけかいな。でも飛影くんはわかってないみたいやし、これから面白くなりそうやなあ。クシシシシ・・・」

「はやてさん、笑みが邪悪ですよ・・・」

「わくわくするわー。いろんなデータが取れそうね、リイン」

「はいです！それに私も飛影さんがいてくれて楽しいです！」

離れた場所で和やかに談笑する四人を飛影は殺意を漂わせる目で睨んだが、四人が即座に目を逸らしたので舌打ちする。その間にも順番がどうたらこうたら、内容があーだこーだと、付き合いされる自分そっちのけで言い合いを続けているのは達に、飛影は頭痛をこらえるように頭に手を置いた。

結局一日目の日程は決まらず、翌日大勢で押しかけたなのは達から飛影は当然のように逃げ出した。その後に偶然出会ったエリオとキヤロに稽古をつけることになり、二人が本気で羨ましがられたのは余談である。

それからしばらくして、逃亡する相手を捕らえるという訓練ミッションが追加されたが、それが飛影の行動を契機としているかどうかは定かではない。

第六話 存在定義 Ⅰ 過去の片鱗（後書き）

二次創作小説を書いていて思うこと。それはキャラが魅力的であればあるほど扱いが難しいということでもあります。

飛影は普段の孤高なツンデレさがいんですが、対して人とわかりあおうとする描写は困難を極め、それでいて話の筋に沿わせなくてはならないので、ひどく頭を悩ませる結果となっていました。

しかも今回はデレの回です。極力飛影っぽくまとめたいつもりですが、なんだか別人のような気も・・・彼を表現する難しさを今一度認識した作者であります。

というか、笑っただけでフラグ立てまくりとか我ながらかなり強引すぎでした・・・勢いでやってしまったことですが、基本がご都合主義かつハーレムコンセプトなので後悔はしていません。倫理的にいいのかは別として・・・

さて、現在六話まで執筆しましたこの小説ですが、いろいろ悩んだ末につい先日感想のユーザー制限をとっていました。これで誰でも感想を書き込めるはずなので、少しでも作品に対する意見や質問がありましたら、作品評価の方と並んでどうぞ。

次回、というか今週は自動車の卒検の準備とかがあるので、もしか

したら更新時期が伸びてしまうかもしれませんが、
お待たせしないよう努力するつもりであります。

では、皆様とまたお会いできることを願って今回はこれにて
再見！！

第七話 日常と邂逅 予兆の先兵（前書き）

第七話の投下です。

昨日の夜が唐突に空いたので、なんとか間に合わせることができました。おかげで読者様を待たせることにならずに幸いであります。

さて、今回は日常編、そしてこれから始まる戦いの日々の前置き回となります。

この回は作者としても転機になる回なので、張り切って行きましよう！

それでは第七話です、どうぞ！

第七話 日常と邂逅 予兆の先兵

時空管理局機動六課に所属する隊員の朝は早い。まず六時台に起床のベルが各自の部屋で鳴り、身だしなみと服装を整える時間を終えたらすぐに朝の教練の開始である。

「ほらー！皆もつと頑張つて！」

機動六課の訓練スペース、陸戦用空間シュミレーターの中で声を上げるのは高町なのは教導官。この訓練は彼女の完全指導でもって成り立っている。本当はライトニング隊隊長のフェイトもこれに携わっているのだが、執務官という立場上そう簡単に両立するのは難しい。

なのはの教練は厳しいが、それを苦だとは思っても嫌だと思つものはない。魔導師として最低限実戦に耐えうる実力がなければ、自分だけでなく仲間も危険に晒すことになる。そのような任務を受けることも多々ある管理局において、有望な若手を順調に育てている彼女の教えには定評があった。

そうこうしているうちに早朝訓練の最後、四対一でのシュートイベーションが終了する。肩で息をしているスバル達を眺めながら、なのはが空中から降りてきた。

「じゃ、今朝はここまで。一旦集合しよう」

「『『』はいつ！』『』」

四人はへとへとなりながらも整列し、ようやく教練が終了する。なのはバリアジャケットを解くと、降り立った先で教練を眺めていた飛影に声をかけた。

「ねえ飛影くん。飛影くんから見てどうかな、スバル達は」

一同に軽い緊張が走った。彼が機動六課に来てから早いものでもう二週間が過ぎ、彼は民間協力者として訓練に立ち会っている。直接指導は今のところしていないが、なのはの補佐のような形に収まり的確に指導してくれる彼を四人は尊敬していた。

あの四対一の模擬戦の後、彼の力を計測した六課のメンバー達はかつてないほどに驚かされていた。魔力はないが、現時点で判明しているだけの戦闘力から換算したところ彼の實力はSSランク以上つまりリミッターをかけていないのはやフェイトより上であったのだ。あれで加減していたという事実は、はやてすらびっくり仰天させている。

それが判明したときにはリンやシャーリー、そしてスバル達も開いた口が塞がらないようであったが、なのは達はそれほどでもなかった。彼女らはかつて飛影の戦いを一度見ていたため、飛影が自分たちを軽く捻るほどの實力者だと確信していたからである。寧ろ、低評価なのではないかとの声も上がっていた。

そんな理由からか、もはや六課で飛影の名を知らぬものはいない。キヤロやエリオなども積極的に飛影と接しているし、時には彼から教授を受けたりもしている。

エリオに至っては既にフェイトと並んで大きな目標になっているようで、訓練にもより一層の力を入れていた。ヴァイスやシャーリィ、ルキノなども彼の持つ力に並々ならぬ関心を寄せている。

そして意外なことにヴォルケンリッターの騎士達やはやても彼の力を認め、信頼を置き始めていた。

特にヴィータやシャマルは何かと彼に関わろうとするし、シグナムに至ってはスピードを除けば自分と同じタイプである飛影に並々ならぬ対抗心を燃やしていた。そして、六課きつてのスピードタイプであるフェイトに何度も戦いを挑んでは、日々その腕を磨いているらしい。

なんでも彼女曰く、

「炎でも剣でも負けていたら、烈火の将の名が泣く」

とのこと。だが今のところの戦績は43戦中0勝43敗で、一太刀たりとも彼の体には届いていないという涙ぐましい有様であった。この間など、どこまでこの記録が伸びるのかと賭けをしていたヴァイスら青年将校をとっ捕まえて憂さ晴らしをしている。

たった二週間。されど彼の存在は六課で大きくなり始めていた。

だが、彼女たちは知らない。今でさえ凄まじい戦闘力を持つ飛影自身も、なのはやフェイトらと同じく忌呪帯法と呼ばれるもので独自に相当なりミッターを掛けていること、そしてその上からさらにかなりの力を抑えており、それが彼女たちとは根底から違うほどのものであることを。

その驚愕の事実を六課のメンバーが知るのもう少し後になる。

「フン。始めたころの千鳥足よりは少しマシになったようだが、連携に穴が多すぎだ。」

ナカジマは直線的すぎ、ランスターは保守的すぎる。どちらも機を読むことを忘れるな。モンデュアルはもう少し考えてから動くことだ。いくらスピードがあっても、バカ正直に真正面から突っ込むだけでは芸にもならんからな。攻撃と同時に回避を想定し、方向を広げて機動を柔軟にしろ。ルシエはまず間合いの確保と術の効率化を図ることだけを考えて、相手との距離をいつも頭に留めておけ。動けないアシストなど、ただの的だ」

飛影の厳しい言葉に全員が引きつった顔をした。彼の言葉に甘さは一切ない。ただ思ったことと気づいたこと、そして事実を淡々と述べているだけ。しかしだからこそ、その指摘は的確だと言えた。

厳しい言葉の裏に嘘はない。飾っても仕方がないことを彼は知っているのだ。そして、マシになったということは成長しているという揺るがない事実を指していた。

「お？みんなよかったね。相変わらずの辛口だけど、ちゃんと伸びてるっていう飛影くんのお墨付きを貰えたよ！そんなところで、早朝訓練は終了です。お疲れ様」

はあああ、と全員が脱力した。それを見てなのはは苦笑する。慣れ始めてきてはいるが、メニューは過酷だ。この反応も仕方のないことだろう。と、そこで焦げ臭い匂いが辺りに漂った。ティアナがはっとして指さすと、スバルのローラーブレードが火花と煙を上げていた。

「うわっ、やばっ！無茶させちゃったあゝ・・・」

しまったという表情で愛機のローラーを持ち上げるスバル。なのはが整備に回そうと言ったが、誰が見てもかなりガタがキているのは目に見えていた。聞くところによるとティアナの銃も同じような有様のようである。なのはが首をかしげながら考え込んだ。

「うゝん、皆も慣れてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに・・・あれ？何の音？」

意味深長な台詞を口にしていたなのは、突如響いた電子音に四人を見た。だが、四人とも心当たりがないようで首をかしげている。すると飛影が嫌そうな顔でポケットを探り、深紫のコンパクトを取り出した。

全員が不思議そうに見守るが、飛影はそれを開こうとしない。しばらくそのままだったが、いきなり音が鳴り止むと飛影がようやくそれを仕舞う。しかしそれも束の間、なのは達の疑問を吹き飛ばす勢いで、今度は上方から怒鳴り声が響いた。

『まったく、持っておるなら早く出んか！何のために通信機を持たせたと思っておるのだ！』

「『『『『え・・・えええっ！？』』』』」

全員が上を見た瞬間、驚きの声を上げる。そこにはいつもの空で

はなく、スクリーンに映したような透けた体の大きな人間がいたからだ。いや、大きく見える子供と・・・おしゃぶり？

「何の用だコエンマ。またくだらん茶々を入れにきたのか？」

なのは達が目をまん丸にして固まっているなか、飛影は愛想の欠片もなさそうに返答する。コエンマと呼ばれた少年は呆れたように、いや諦めたように溜息を吐いた。

『お前は本っ当に相変わらずだな。そっちでも上手くやっているのかどうか、こうして気を遣ったというのに。定期に連絡はしろといったはずだろ？それにぼたんから報告、というか苦情が上がってきている。あれでもお前たち浦飯グループの一員で紅一点だ。あまり無視してやるな、ベソをかいてたぞ？』

「フン、見当違いのことばかり聞いてくる方が悪い。昨日など今日はそっちで何を食べたか、どんな料理があるかなどと聞いてきやがった。その場にいれば、オレが奴を釜茹でにしているところだ」

『・・・済まなかったな。それについては後でみっちり説教しておく。地獄の一丁目辺りに括り付けとけば少しはマシになるだろ』

コエンマがバツが悪そうに眉を寄せた。スバル達は、本気で不機嫌になっている飛影と不穏な台詞に冷や汗を掻いている。そこになのはがおそろおそろ声を上げた。

「あ、あの・・・貴方は・・・？」

『ん？おお、そっちでの協力者か。いや、すまんすまん。ワシは霊界で長をやつとる閻魔大王の息子、コエンマだ。今は一応霊界の最

高責任者ってことになるとる。正式にはもうコエンマではないのだから」

「れ、霊界っ！？霊界って、飛影さんが言ってた人の死後を裁いて逝き先を決めるっていう、あの世の世界・・・そ、それに閻魔大王さまの息子って、あわわわ・・・！」

スバルがコエンマの自己紹介を聞いて青くなる。他のメンバーの反応も似たようなものであったが、飛影はフンと鼻を鳴らすのみ。あの世の支配者に対しても変わらない態度にタメ口、改めて飛影の凄さを垣間見たスバル達だった。

「それで、一体何をしに来た。まさか暇を潰すために来たんじゃないだろうな？」

「おお、そうじゃった。お前さんに渡すものがあってな。役に立つかどうかは分かんが、ないよりはマシだろうと思って見繕った。今そっちに転送する」

コエンマがそう言や否や、飛影の前に一つの頭陀袋が落ちてきた。そんなに大きくないそれを手にとって中を覗き込んだ飛影は、しばらくの後ため息を吐く。

「こんなガラクタを送ってきて、オレにどうしろと言っんだ」

「仕方なからう！あまり高位の霊具は送れんし、こっちだって手を借りたいほど忙しいのだ！それに霊界探偵の必須アイテムだから、持っておいて損はないはずだぞ？お前用にカスタマイズしといたから、妖気でも問題ないはずだ。後々使う機会もあるだろ」

そう言うと、心底いらないうふうな表情をしている飛影を無視してコエンマはなのは達に向き直った。彼に見られ、全員に緊張が走る。コエンマはそのまま全員を見渡し、

『そちらの世界の方々、惜しめない協力まことに感謝している。飛影は少し扱いづらいところがあるかもしれないが、これからも支えてやって欲しい』

大きすぎる帽子を引っさげて頭を下げた。これは流石に予想外だったようで、なのはたちは慌ててしまった。

「ええっ！？そ、そんな、頭を上げてください！コエンマさんにそんなことされたら、私たちどうしていいか・・・それに飛影くんを頼っているのは私たちも一緒なんですから！」

「そ、そうですよ！飛影さんには教えられることばかりで・・・とてもありがたく思っています！」

コエンマの行動にぎょつとしたなのはやスバルをはじめ、皆が口々に言葉を零す。その様子を見て、懐かしむようにコエンマはふつと笑った。

『そちらでもいい仲間を持ったようだな、飛影』

「・・・フン」

コエンマの言葉にそっぽを向いて飛影はつまらなそうにする。そこでコエンマはポンと手を叩いた。

『おお、そうだ。もう一つ言い忘れておった。実はな、ワシが

で、そ　　と　　っ人　　・・・」

何かを言おうとしたコエンマの声に突如ノイズが入り始めた。それは映像にも伝わり、次第に薄れていく。飛影はわずかに目を開いていたが、しばらくするとぷつつという音が響いて完全に消えてしまった。キャラが心配そうに飛影に尋ねてくる。

「コ、コエンマさん大丈夫なんでしょうか？いきなり切れてしまいましたけど・・・」

「心配など不要だ。前にもあったが、単に次元が不安定になってしまった影響で通信が途絶えただけだからな。しばらくは使えんだろうが何か影響があるわけじゃない」

飛影はそう言うんと落ちてきた頭陀袋を肩に担ぎ、面倒そうな様子で歩いていってしまう。なのは達は顔を見合わせると少し楽しそうにしていた彼の顔を思い出し、ふふつと笑った。

- Side Subaru Nakazima -

「はー、気持ちいい」

あたしはシャワー口から流れ出る雨を顔一杯に受け止めながら思わず言葉を零していた。訓練は辛いけれど、終わった後に浴びるこのシャワーの心地よさはちょっと言い表しがたい。

「スバル。気持ちは分かるけど、ほつたらかしにされてるキャラのことも考えなさい。頭に泡つけられたまま自分のことされてるんじゃない、いい気分しないわよ」

「あはは、ごめんティア。つい・・・」

もはや条件反射となったようにあたしは頭を下げた。謝るならキャラに対してしなさい、といういつもながら厳しいお言葉を受け、キャラに改めて謝罪する。キャラは気にしていませんから、と笑顔で見上げてきた。ふわあ、やっぱり癒されるなあ。

「訓練にもやっと慣れてきました。まだただけど、強くなってるって感じが出てきて嬉しいです。これもなのはさんや飛影さんのおかげですね」

キャラの台詞のなかに含まれていた言葉に、あたしは胸がどきつとなつてしまった。

飛影さん 。

なのはさんとフェイトさんの命の恩人にして、人間でなく、なんと妖怪だという青年。おどろおどろしかった妖怪のイメージは彼の出会いでかなり変わったが、彼の話によるとそういった妖怪の方が多いとのことだ。何事も聞いてみるものである。

そんな彼だが、年齢を聞いてみるとなのはさん達より年上の二十五、六歳ほどだということがわかった。あの背でその歳は少し驚いたというのが本音だ。怖いから言わないけど。

そして何より強い。あのシグナム副隊長達をたった一人で倒した

というのだから、もはや新人である自分ではお手上げだ。

その彼の教導は受けたことがないけど、試しに受けたらしいフェイトさんが大層お疲れの様子で帰ってきて、早々にぶっ倒れたことから、あたしを含めた全員が青い顔で拒否した。彼をあの強さへと押し上げる教練には大いに興味があるが、こちらら花も恥らう若き身空だ。まだ死にたくない。

「そうね、彼の言葉には気遣いとかは全くない。けどだからこそ言っていることは的確だし、ちゃんとその先の教示もしてくれるから助かるわ」

「はい。おかげで動きが分かってきました。なのはさんは魔法とフオーメーション、飛影さんは個人の動きや役割ををよく教えてくれますから」

ティアナとキャラが飛影さんの話題で盛り上がる。初めは警戒していたティアナや、なかなか話せなかったキャラも今では普通に彼と会話をしている。もともと彼自身無口だからか、話しかけても「そうか」とか「フン」とか短い返事しか返してくれないことも多いが。

（なのはさん達の想い人が・・・）

私は顔面にシャワーを浴びながらあの二人の顔を思い出す。ヴァイス陸曹に飛影さんの話を聞いた時のなのはさんは、あたしが見たことのない顔をしていた。

いつもの頼りがいのある顔じゃなくて、すごく強い感情を感じさせる顔。そしてそんな彼女の表情は見とれるほど綺麗だった。あの

ときは驚いたが、知ってみればなるほどこういうことかと思う。

少し前のことになるが、あたしはなのはさんが男性局員に告白されていた場面に出くわしたことがあった。相手の男性はあたしから見てもかなりのイケメンで、その上性格がいいと管理局でも評判になっていた人だ。

だが、彼女は躊躇なくそれを振ってしまった。相手の人は残念だなと苦笑して去っていったが、あたしはどうしても聞きたくなり、気づけばなのはさんに駆け寄って尋ねていた。

なんで断っちゃったんですか、と。

今考えればかなり不躑躅な質問だったと思う。が、彼女は一度苦笑して優しい笑みを見せながら、

『私ね、もう決めてるの。その人はとっても気難しくて、子供の頃一度会った以来ずっと会えてないんだけど、ずっとずっと考えちゃうの。だからどんないい人がいても私はダメ。無意識にその人と比べちゃってるから。あはは、我ながらサイテーだけどね』

あたしにそう言って笑うなのはさんは、でも言ったことを後悔しているように見えなかった。むしろそれを誇りに思うみたいに胸を張っている姿を見て、彼女ほどの人にそこまで想われてる男性って一体どんな人なんだろう、と考えたのも一度や二度ではない。

だから、会った時はなんでって思った。確かに顔は整っているけど目つきは悪いし、態度は刺々しい。姿も性格もまるで悪党だった。見るからに協調性の欠片もなさそうな彼を私はいぶかしんだが、なのはさんだけでなくフェイトさんまでもが彼を慕っていることを知

ったときは、常識が覆りそうなほど心の底から驚いたものだ。

でも、それがひどい勘違いだったことはもう分かっている。普段の彼はそっけなくて、その上他人への対応も粗雑かつ威圧的だけど、内面はあたしたち以上に人として成熟しているし、その力は本物だ。

過去の片鱗を聞いたただけであたしは涙が出そうになってしまったけれど、彼はそれを事実として受け止められる強さを持っていた。『人』とは違うにもかかわらず、それを『人』である者達に曝け出せる強さを。

その時初めて、二人がなぜ彼を慕っているのか、そのことが少しだけ分かったような気がした。ほんの、少しだけ。

そして同時に羨ましかった。『自分』のことを話せる『強さ』が。それからだろうか。憧れに似た感情に急かされ、自然と彼の姿を目で追うようになったのは。

いや、憧れとはどこかが違う、もっと強い……

「スバル！このバカ！いつまでシャワー浴びてるのよ！」

「ひゃわっ!？」

いきなり響いた怒声にあたしは我に返った。見ると、ティアが目の前に仁王立ちで腕を組んでいる。その目はいつになく厳しい。

「あんた、堂々と水の無駄遣いしてんじゃ……げっ!?!ちよっとスバル、それ！」

「え？それってな・・・って、うわわっ、キャロ！？」

「ふうええええ〜？」

ティアが指さした所、シャワーを流したまま考えに耽っていた私のすぐ側で、キャロが真っ赤な顔から湯気を上げて目を回していた。倒れなかったただけ立派なものだが、全開でお湯を浴び続けていたあたしの横にいたためにのぼせてしまったらしい。

「あわわっ、こういう時ってどうすればいいんだっけ！？とりあえず水をかければいいのかな！？」

「そんなわけないでしょこのバカスバル！早くキャロをそこから出して脱衣所に運んで！それとミネラルウォーターと水で冷やしたタオルを何枚か持ってきてなさい！」

ティアの言葉に分かったと言ってキャロを担ぎなおす。シャマルさんにも一応連絡しておかなきゃと零す親友の言葉を耳に流しながら、あたしは言われたとおりに動き始めた。それで、ついさっきまで考えていたことはさっぱり頭から飛んでしまったのだった。

- Side out -

- Side ?????? -

「まったく、この森はどこまで続いてんだよ・・・」

「聞いた話ではもうそろそろのはずなんだけど・・・」

二人の人間が森の中を掻き分けながら会話していた。一人は高い背丈にノースリーブの青みがかったＴシャツ、それに青いジーンズと同色のブルゾンという出で立ち、そしてもう一人は薄い赤色の半袖の上にベージュのジャケット、そして同じ色のデニムパンツをすらしりと着こなした青年の二人組だった。

ジーンズの青年が、飛んでくるカナブンやらなんやらを他所に放り投げながら先導して、後ろをもう一人の青年がついていく。と、しばらくして開けたところに出た。

どうやら自分たちは崖の上にいるようだ。下の方には人工的な舗装も見える。

「おお、やっと出たな。ん、こりや線路か？」

「そのようだ。ここを通る列車に乗って一時間ほどかけると街までいけるらしい」

ジャケットの青年は手に持った木の葉を親指で撫ぜながら、「どんだけ離れてんだよ」と愚痴るジーンズの青年に苦笑を零す。すると遠くの方から一つの影が見えてきた。フォルムと走っている場所からして、間違いなく列車だ。

「おっしや、タイミングバッチリだな」

ジーンズの青年が拳を振り上げるが、後ろにいたジャケットの青年は黙って列車を見ていた。その目が少し細められ、やれやれと肩が竦められる。「どうした」と眉を寄せながら呟く相方にふっと笑いかけた。

「どうやらゆつくりと景色を堪能、ってわけにはいかないみたいだ。少し手荒にいく必要があるかもね」

「さっそく、ってか？上等だぜ、いつちよ腕慣らしといくか！」

二人は目を合わせ、不敵な笑みを浮かべる。そして高速で接近する列車に近づくために、二人は断崖絶壁から身を躍らせた。

第七話 日常と邂逅 予兆の先兵（後書き）

第七話でした。

原作にはないオリジナルな展開を用意してみたわけですが、いかがでしたでしょうか？

強くなっていく六課のメンバー、近づく戦いの気配、そしてまだ知りえぬ第三者たちの介入、と意外と様々な要素が盛り込まれた今回でしたが、勘の良い、というか半分近くの方は予想がついたかと思います。

さて、ここで近況報告を少しばかり。

なんとこの小説のPVが10万を突破、ユニークは1万3000に達してありました！

し、信じられません！未熟な作者の立場からして、なんとも嬉しい限りであります。これからも頑張っていきますので、よろしければ完結までお付き合いいただければ幸いです。

もうすぐ夏休み、皆様も悔いのない夏を過ごされますよう。では、また次回です！

第八話 ファーストアライト 再会（前書き）

第八話あがりましたー。

今日は夕方まで外せない用事（卒論関係）がありますので、予約投稿にさせてもらいました。

暑さも小説の進行もだんだんと苦しくなってきたこの頃ですが、とにかく暇を見つけては書いています。卒論と並んで順調にいけば嬉しいんですが・・・。

ま、まあ私情と愚痴はさておき、第八話です。今回はついにあの二人の登場！

さてさて、どうなるやら心配ですが、とりあえずどうぞー！

第八話 ファーストアラート 再会

機動六課の主な任務は、ロストログアと呼ばれる古代遺失物の管理とその保護である。古代の遺産はその力の凄まじさと希少性から邪な盗掘者に狙われることも多い。事実過去にはそうして盗み出されたものも多く、またそれが原因で悲惨な事故などが起きたことも少なくないのだ。

だからそのような事態に遭遇すれば、彼らに出動要請が回ってくるのも当然である。そして今日、機動六課にスバル達新人フォワードが所属開始から二週間にして、記念すべき初仕事が舞い込んだ。た。

仕事内容は、レリックと呼ばれる高エネルギー貯蔵のロストログアを運搬していた貨物列車がガジェットに占拠されたことへの対応である。管理局でもその処遇が懸念されていたレリックが狙われたのは想定されていたものの、ここまで早く起こるとは思わなかったというのが後に部隊長が零した言葉だ。

ともあれ可及的速やかに現場に赴き、ガジェットの殲滅及びレリックの回収、その後の護送が下された機動六課は、移動用ヘリに乗って現場へと急いでいたのだが、

「何故わざわざオレが出なければならん」

待機命令中のフォワード四人が初陣に身体を緊張させるなか、剣

呑な雰囲気を隠そうともせず、怒りと不満を滲ませた声が響いた。

声の主は言わずもがなの飛影である。彼は民間協力者であるが、誰かに命令されて動くことには承諾していないため、この事態に苛立っていた。はやてなどは下手からお願ひしたのにもかかわらず、飛影の威圧をモロに受け、半泣きでシヤマルに縋りついていたぐら이다。

「ひ、飛影くん。気持ちは分かるけど、飛影くんは次元漂流者なんだし・・・それに一応は民間協力者って立場でもあるから、私としても波風立てないようにやって欲しいなあなんて「黙れ」ひゃうつ、ごめんなさい!？」

新人四人の教導官であり、機動六課所属の一等空尉である高町なのはが諭すように言うが、鋭い三白眼で睨まれ悲鳴を上げて後ずさった。

スバル達は涙目で「なんとかして」と訴えてくる彼女を見て、少し顔を引きつらせながら笑って一人残らず目を逸らす。彼女を敵に回すのは怖い、この場合ではそれ以外の選択肢は取れないのは暗黙の了解であった。好き好んで火中の栗となる趣味はない。四人の内心を見抜いてか、なのははうつと恨み声を上げた。

そんな彼女にいつもの鬼教官たる威厳はない。というか、飛影の放つ威圧感が凄まじすぎるため、彼女を以ってしても霞んでしまうと言ったほうが正しいだろう。一等空尉憐れである。

飛影はしばらく無言でなのはを睨んでいたが、涙まじりの彼女の視線に僅かに汗を掻き、ばつが悪そうに舌打ちした後に顔を背けた。

「・・・次はない。さつさと終わらせるぞ」

「！ ありがとう、飛影くん！」

「ぬあつ！？だから、すぐ人に抱きつくその癖をやめろと言っただろうが！何度言ったら分かるんだ貴様は！ガキか！」

言うが早いか、彼に飛びついてその腕をかき抱きながら満面の笑みを零すのはに対して、飛影はいつものように怒号を上げる。が、身体を振り払ったりはせず、扱いに困っているといった風に無理やり渋面で覆っていた。その表情はかつての彼を知るものが見たら驚くに違いない。

「よかったですね、なのはさん」

「うん、ありがとうエリオ」

「高町っ、貴様は笑っていないでさつさと離れろ！いい加減にせんと前言を撤回するぞ！」

眉の角度と目の吊り上り具合がすごいことになり始めた飛影に流石にマズイと思ったのか、謝罪を述べながらなのはは残念そうに体を離れた。

乱れた服装と髪を心底不機嫌そうな顔で整える飛影。彼の性格的には正しいのだが、何かがいまひとつと間違っている気がする。というか、抱きつかれているのがほぼ自分に限定されていることに気づいていない彼も彼であった。

「はぁ・・・ま、緊張は少し解れたかな。これなら今日の任務は大

丈……スバル、あんたどうしたの？」

「……えっ？なにが……？」

「いや、何がって……なんでそんな膨れっ面してんのよ」

いつものやり取りに少し緊張が解けたティアナが、横にいたスバルを見て怪訝そうに眉を寄せた。

尋ねられた当の本人はその瞬間に表情をリセットし、きょとんとした顔で首をかしげて考えている。どうやら本当に分かっていないようなので、ティアナはなんでもないわよと手を振ると、不機嫌そうに佇む飛影の方を向いた。

（まさかスバルまでとか……？まあ、コイツの事情からすれば飛影さんの在り方は相当に眩しく見えるんでしょうけど）

ティアナがふうと息を吐くと、ヴァイスさんが振り返りながら現場に到着したと報告してきた。ヘリの中に緊張が走り、メインハッチが轟音を立てて開く。なのはが全員を見渡しながら言った。

「じゃ、ちょっと出てくるけど、皆もがんばってズバツとやっつけちやおう！」

「……ハイッ！」「」

スバルとティアナ、そしてエリオが気合を入れるように返事をするなか、キャロだけが俯いたまま座っていた。その身体は縮こまり、肩は僅かに震えている。

だが、なのはがそんな彼女に気づいて近づこうとするより先に、キャロの身体に影が落ちた。キャロがハッとして顔を上げると、いつも難しい表情を崩さない民間協力者、飛影が立っていた。

「要らん心配をするな。空は高町とテストロッサが抑えるだろうし、近くにはこいつら三人がいる。それに不本意だがオレも出てやるんだ、あんな雑魚相手に臆する必要はない。ルシエ、お前はただ自分のできることをしろ」

そう言うと、飛影はコートを翻して視線を外す。ぞんざいな言い方ではあったが、声を介した彼の優しさはキャロの内側へとするりと入り込んできていた。しばらくぼけっとしていたキャロだったが、堅くなっていた体からいつの間にか緊張が抜けていたことを知る。

背を向けた飛影の内面は、その表情と共にうかがい知ることとはできない。だが自分に向けられた言葉は心の中で反響し、いまだ残っている気がした。胸がほんわかと温かくなる。堅くなっていた表情が崩れ、キャロはへりに乗って初めてとなる笑みを零した。

「は、はい、ありがとうございます。お兄ちゃん」

『・・・は？』

キャロが笑顔で放った言葉に場の空気が固まった。なのはやスバルなども驚きのあまり呆然とした顔を見せており、飛影に至っては目を見開いて硬直している。

キャロは少しの間何が起こったのかわからない顔をしていたが、しばらくして自分の失言に気づいたのか、あっと叫んでその顔を真っ赤に染めた。

「あ、あのキャラ・・・飛影さんがお兄さん、というのは一体・・・？」

空中に漂っていたリインがいち早く硬直から解け、恐る恐るといったふうにはキャラに尋ねてくる。本人は服の袖で口元を隠しながら、赤い顔でふるふると震えながら言った。

「え、えつと、あの・・・初めて会った時から思ってたことなんですけど、飛影さんってなんだか頼りがいのある兄って感じがして・・・いえ、私が勝手に思っていたことなので特に深い意味はないんです！さっきのはちよつと、うつかりそう呼んじやっただけで！だから、その・・・うう・・・迷惑でしたよね・・・」

そこまで言つて、キャラは深くフードを被ってしまった。自分のせいで飛影に不快な思いをさせてしまったと思っているのかもしれない。しゅんとしてしまったキャラにどうしたものかとスバル達が考えていると、問題の中心が口を開いた。

「迷惑かどうか以前にオレはお前の兄貴じゃない。お前に対して兄弟紛いなことなどできんし、するつもりもない。理想の兄とやらを押し付けられるのもごめんだ」

厳しさを含んだ言葉にキャラがビクツと震える。それに対して飛影は横目で彼女しばらく見据えたあと、何かを振り切るように続けて言った。

「だが・・・それでもかまわんというのなら呼び方など好きにしろ。オレは兄になどなるつもりはないが・・・お前のことだ、そうせんと勝手に負い目を持つだろう。それに、いつまでもグジグジと悩ま

れでもすれば、後々まで面倒なことになるからな」

予想外の言葉にキヤロは驚いて顔を上げた。飛影はそっぽを向いており、視線を此方に合わせようとはしない。だが、彼が自分に対して応えてくれたことにキヤロの胸はいっぱいになった。

「はい・・・ありがとうございます飛影さ、お兄ちゃん」

「・・・フンッ」

先ほどの雰囲気など露ほども感じさせない満面の笑みを見せたキヤロに、飛影は背を向けて不機嫌そうに息を吐いた。

「あ、お兄ちゃん、私のことはキヤロって呼んでください。いつまでもルシエじゃなんだか他人行儀だし、私も落ち着かないので・・・あつ、もちろんお兄ちゃんがよければ、ですけど・・・」

「気が向けばな」

キヤロと目を合わせぬまま、飛影はぶっきらぼうに告げた。だが、キヤロは顔に笑みをたたえたまま、はいと短く頷いた。

飛影がそれを拒絶するつもりであれば、はつきりと口にしていただろうと思ったからだ。しかし言及はしない。言えばダメと言われるかもしれないから。

二人を中心にして穏やかな、そして優しい時間が流れた。エリオも少し思つところがあったのか、キヤロと飛影を交互に見ている。しかし、鼻唄というのはどの世界でも得てして碌なことにならない。

「そ、それなら私もなのはって呼んで！ホラ、高町って言うより呼びやすいし！？」

「わ、私もお願いします！ナカジマって呼ばれるのはお父さんとかと同じだからややっこしいし、何よりムズムズしちゃうんで！」

焦りが混ざった声色で二人が詰め寄った。なのはとスバルの凄まじい食いつきに、飛影は若干引きながらキャラに答えたのと同じ返答を返す。

後にこのことがフェイトにも伝わり、同じように迫られることになるのだが、その時には既に興味もなく、飛影は呼び方程度に一切こだわりすぎだと呆れていたという。

ちなみにエリオはこの一件以来彼を兄さんと呼んでいる。理由はキャラと同じらしい。

「っ、列車捕捉！距離約250だ！」

和やかな雰囲気になりつつあった空気をヴァイスの報告が掻き消した。だが、四人から既に堅さはなくなっている。上がっているのではなく適度な緊張が包み込む中、突如ヴァイスの表情が驚愕に彩られた。

「な・・・列車に接近する人影を補足。ガジェットに向かっていつてる！？魔力値は・・・未検出！また一般人だあ！？」

「「「「ええっ！？」「」「」」」

ハッチから飛び出ようとしていたなのはが驚いてたたらを踏む。

さしもの飛影も予想外だったのか、腕を組みながら横目でヴァイスを見つめていた。フォワード四人は以前と同様だ。

「人影は二人、今モニターに出力する！」

ヴァイスの言葉と同時に、スクリーンに列車の走行風景が映った。その周りを飛行タイプのガジェットが飛び交い、なのはより先についていたフェイトが迎撃に飛んでいる。

そして列車の上の崖から駆け下りているのは確かに二人の人間だった。魔力を使っている様子はないが、二人は走行中の列車の上に難なく着地する。スバルが画面に身を乗り出した。

「誰、なんだろうね？」

「少なくとも魔導師じゃないわね。魔法陣はないし、バリアジャケットも展開してないから」

「でも魔法を使わないであそこまでできるなんて、お兄ちゃんみたい。お兄ちゃんもあんな風に・・・お兄ちゃん？」

キヤロが同意を求めた飛影の様子に首をかしげた。その目は画面に釘付けとなっており、その口元には笑みが零れていた。

しかし、次の瞬間にはその笑みをいつものように掻き消し、飛影はいきなりハッチに向けて歩き出す。全員が動揺したように彼を見るなか、再び彼は愉快そうに口元を吊り上げて言った。

「これはお前らの初陣なんだろう？早くせんと、『あいつら』が全部片付けてしまうぞ？」

画面を見ると、先ほどの二人がガジェットに対峙していた。なのはがハッとして四人を見回す。

「あつ、そ、そうだった。スターズ隊とライティング隊、出撃だよ！私はフェイトちゃんと空をやるから、みんなしっかりね！」

「……は、はいっ！」「……」

号令を受けた四人は作戦どおりティアナとスバル、エリオとキヤロの二チームに分かれて降下していく。それを見送ったあと、なのはは飛影に向かって尋ねた。

「ねえ、もしかしてあの人たちって飛影くんの知り合い？」

飛影はそれに対して少し間を置いた後、

「ああ。腐れ縁の、な」

短く、しかし確かな信頼を感じさせる返答をして空に飛び出した。

- Side Teiana Runstar -

風を切りながら落下した身体が重力のまま列車へと着地する。そうしてローラーブーツを履いた相棒を横目で捉えながら私は走り出した。

片手には銃型のインテリジェンスデバイスである『クロスミラー
ジュー』、そして隊長たちと同じ規格の新装バリアジャケットは驚く
ほど私の身体にフィットしている。本当に専用装備として作ってく
れたらしい。シャーリーさん達には感謝しなければ。

（つと、急がないとね）

感謝は改めて伝えることにして私は二車両前にいる男の人のこ
ろまで走った。銃を構えながら声をかける。

「大丈夫ですか!？」

銃を片手に構えて飛び交うガジェットを牽制しながら、私はその
男性に近づいた。撃ち抜いたガジェットと対峙していた男の人が振
り返る。

「お？お嬢ちゃんがコエンマから聞いた魔導師ってやつか？」

服装は青みがかった白系の無地Ｔシャツに青ジーンズ、そして同
色のブルゾンというラフな格好。身長は高く、１８０後半はゆうにあ
りそうだ。年は二十代中盤といったところだろうか。

だが注目すべきはそこではない。髪の色はオレンジがかっており、
いまだかつて見たこともないほど立派なリーゼントで決まっていた。
ここまでのものを見たことがなかったので、私は思わずまじまじと
見入ってしまう。

強面だが人懐っこそうなその表情に少し安心する。デバイスも何
も持たないので、一見すれば一般人だと思ったが、彼の口から出た

言葉に私は驚いた。

「え、コエンマさんのことを知ってるってことは、飛影さんの知り合いですか？」

「飛影を知ってるのか？来て早々いきなりヒットたあラッキーすぎな気もするが、探す手間が省けたし話が早くて助かるぜ。おい、蔵馬ア！」

リーゼントの青年がガジェットによって破られた穴から列車の中を覗き込む。すると、なかにいたもう一人が飛び出すようにして出てきた。

「桑原くんですか、こちらの制圧は終わったよ・・・って、おや？そちらの女性の方々は？」

長い癖のある赤毛をなびかせた人物が私たちの前に現れる。赤い無地のＴシャツにカジュアルなベージュのジャケットを着て、セツトであるうのデニムパンツを見事に着こなしていた。

その人物は桑原と呼ばれたジーンズの青年を見たあと、私と横にいるスバルをとらえて少し驚いたようだったが、彼が手短に事情を説明すると納得したように頷く。

一瞬女性に思えたが、会話を聞く限りではどうやら男性らしい。だが女の私が嫉妬を覚えるくらいの凄まじい美青年であった。現にスバルは見惚れ、「綺麗だなあ」と羨ましそうにしている。

「なるほど、飛影の協力者ですか。失礼、俺達は飛影を手伝うために霊界から遣わされた者、君たちの味方ってことで間違いないです

よ。まあ聞きたいこともいろいろあるかとは思いますが、それは後ほど。先にこの状況をなんとかしなければなりませんから」

「あ、はい。そうですね！」

赤毛の美青年の言葉に横にいたスバルが同意するようにうんうんと頷いた。ジーンズの青年もああと首肯の意を返してくる。

私は内心で頭を抱えた。そう言うのは管理局である私たちの仕事のはずなのに、もうなにやってんのよバカスバル！

と、そんなことをやっているとかジェットがこちらに向けて攻撃を加えるべく近づいてきた。私とスバルは二人に下がって欲しい意を伝えるが、彼らはそれを聞かずに前に出た。

「心配してくれんのは嬉しいが、こちら結構な修羅場潜って来てんだ。テメエの危機ぐらいテメエで切り抜ける。それに女の子に後任せてくつろいでたんじゃ、漢が廃るってもん……って、危ねえっ！」

言葉を遮るようにジーンズの青年が私の横を駆け抜けた。と同時にズバンという音が響く。慌てて振り返ると、そこにはいつの間にか出現していたガジェットがこちらにケーブルを延ばしていたのが見えた。が、そのケーブルはこちらに届く前に切断されており、廃線となった残骸がいくつも散らばっている。

そして私に背を向ける彼の右手には、

「ひ、光の、剣……？」

金色とオレンジ色の中間のような不思議な色をした剣が輝いていた。バチバチと音を立てるその剣はフェイトさんの魔力刃に似ている。

間髪入れずに彼はその剣でガジェットを真つ二つに両断した。魔力を制限するAMFが働いているのにも関わらず、である。そのまま彼はガジェットを破壊しながら列車の後方へと走っていった。

と、列車の中から大きな円形の形が顔を出した。私たちは足元をすくわれないように急いで後方に下がる。事前に渡された資料に見覚えのなかったそいつにスバルが叫んだ。

「新型!？」

通常のガジェットの三倍はゆうにありそうな体躯と倍以上はありそうな数のコードは気味悪くうねうねと蠢いている。赤い長髪の青年は悪趣味だな、と吐き捨てるように言葉を零した。それには全力で同意する。

と、そのうちの何本かが私たちを捕らえるべく迫ってきた。

「はあああつ!」

スバルが触手のように蠢くケーブルをかわしながらガジェットに肉薄し、渾身の一撃を叩き込んだ。だが、普通のガジェットより耐久性も上がっているようで、お返しにと鞭のようにになったケーブルに弾かれた。

「くっ、こいつ堅い・・・!!」

瞬時に体制を立て直したためダメージは受けていないようだが、それは相手も同じ。一撃必殺の彼女の拳も装甲を僅かに凹ませただけである。AMFやシールドも巨大化した分だけ強力になっているようで、この距離では対フィールド魔力弾も生成できない。

「えっ!？」

有効射撃を決めるため後ろに下がろうとしたとき、私は驚きに声を上げた。あのガジェットに向かい、あるうことが赤毛の青年が丸腰のまま前に出て行くではないか。

「あ、危ないですよっ!」

スバルが焦ったように彼に向かって叫ぶが、青年は大丈夫、と短い笑みで答えるとさらに歩みを進めていく。そうして敵の射程ギリギリのところで自分の髪へと手を伸ばし、何かを取り出した。

「はっ!？」

その取り出された物を見て、私とスバルは素っ頓狂な声を上げた。なぜかと問われれば答えは一つしかない。彼が取り出したものはおよそ闘いの場には相応しくない代物、一輪のバラだったからだ。

（（なんでバラ・・・!？））

それを優しく添えるように持ちながら、彼はガジェットと対峙する。敵と認識したのか、ガジェットが唸りをあげて彼に迫った。

そして目の前に来た彼へガジェットのケーブルが餌を絡め取るように伸ばした、その瞬間。

「ローズ・ウィップ
薔薇棘鞭刃！！」

彼を取り囲んでいたケーブルが全て宙に舞っていた。驚くほどの長さで強靱さを誇ったそれらがまるで紙切れのように細分に寸断され、ガジェットはただの丸い塊となる。

そしてそれを成した彼の手には先ほどまでのバラはなく、代わりに緑色の鞭が握られていた。あれでガジェットを切り裂いたのだろうが、私には全く見えなかった。なんという早業だろうか。

「終わりだよ」

そして彼が再びそれを振るった瞬間、丸いオブジェは少なくとも十数個の破片に分断され、爆発した。同時に周囲に集まっていたガジェットもまとめて。

スバルが渾身の力を込めても僅かな傷しか残せなかったガジェットが、何の造作もなく破壊されてしまったことに私も、その硬さを知る本人も声が出なかった。それを知ってか知らずか、彼は鞭を消すと私たちに向き直る。

「敵は掃討し終わりましたよ。桑原くんのほうもどうやら無事に終わったみたいです」

見るとこちらに手を振るジーンズの青年桑原と、龍の召喚に成功したらしいキャロがエリオと大きめのスーツケースを抱えて巨大化したフールドに跨っていた。その下には煙を上げたガジェットの残骸が一体あるが、他は全て原型を留めぬまでに破壊されている。

「やってきて早々ご苦労なことだ。仕事癖がついているんじゃないか蔵馬？」

そこで最近馴染み始めた声が聞こえた。振り向くと、飛影さんがポケットに手をつ突っ込んだまま口の端を吊り上げて笑っている。その表情はいつもの仏頂面ではなく、どこことなく嬉しそうな色を滲ませていた。赤毛の青年にも微笑みが灯る。

「君も変わらないな、飛影。次元の狭間に吸い込まれたって聞いたときは驚いたけど、無事で安心したよ。まあ、君がその程度でどうにかなるとは思えなかったけれどね」

「フン、コエンマが伝えようとしていたのはこのことだったか。余分なものもついてきたようだが、奴にしては粹な計らいだ」

蔵馬と呼ばれた赤毛の青年に飛影はいつもの皮肉で返した。そこに先ほどのジーンズリーゼントの青年が肩を怒らせてやってくる。

「コラ飛影テメエ！浦飯チームの大戦力を捕まえて余分たあなんだ！？それに、元はと言えばテメエがコエンマの忠告を無視して穴に落っこちたのが原因らしいじゃねえか！」

「ほう、そいつは初耳だ。戻ったら奴と改めて話し合う必要があると思うだな、ククク・・・」

その『話し合い』という響きに我らが教導官のと同じものを感じてスバルたちは冷や汗を掻く。そのとき、空で戦っていたなのはとフェイトから通信が入った。

『作戦は成功。あとはレリックを護送担当部隊に引き継いで任務は

完了だよ。みんな、もう一息頑張ろ！」

『ええと、そっちにいるお二人にはあとで事情聴取をさせてもらうのでそのつもりでいて下さい。あ、事情聴取といっても飛影の知り合いみたいですから、形式だけなので構える必要はないです』

二人の声が聞こえ、全員に笑みが宿る。こうして数奇な運命のめぐり合わせで、私たちは飛影さんの『戦友』に出会ったのでした。

- Side out -

- Side Jail Skality -

「刻印No.9護送体制に入りました。追撃戦力を送りますか？」

止まった列車から護送されていくキャリケースを見ながら、私の片腕ウーノが画面越しに問いかけてきた。その顔に悔しさはないただ命じられる内容を待っているといった様子の彼女に対して、私は苦笑しながら口を開いた。

「いや、止めておこう」

未練を感じさせない私の声に彼女は分かりました、とだけ告げる。私は目の前に広がる大画面横のパネルを操作し、列車の上を駆け回

る二人と龍にまたがった二人、そして空を縦横無尽に駆ける二人を順番に映し出した。中でも金髪の少女と赤髪の少年に注目しながら、此方を見つめるウーノに苦笑する。

「レリックは惜しいが、彼女たちのデータが取れただけで十分さ。プロジェクトFに関してもこの子達個人にしても私の研究にとって興味深い素材ばかり、これだけでも損はない。それに……」

パネルを操作し、リアルタイムで映し出されている映像から対象を切り替える。

「予期せぬ大収穫もあったことだしね……」

そこにはオレンジリーゼントと赤髪の青年、そして黒髪の少年の三人が映っていた。先の二人は機動六課の少女たちと言葉を交わしており、少し離れた場所で列車の縁に腰掛けるようにして黒服の少年が座っている。

ウーノの報告によれば、彼は最近六課に保護された次元漂流者で名を飛影と言うらしい。おそらくあの二人は彼の仲間だろう。私は燻っていた探究心が湧きあがってくるのを感じた。

「彼らは私のガジェットをいとも簡単に破壊してしまった。それも魔法とも戦闘機人とも違う、圧倒的かつ不可思議な、未知の力で……く、くくく、以前彼を初めて見たときにも思ったが、全く心躍らされるばかりだよ！ああ、早く彼らを研究したいねえ！」

「……ドクター、また悪い癖が……。彼らの力は得体が知れませんが、用心してかかるべきです」

「わかつているさ。けど君とその姉妹たちがいれば、計画は遂行できる。協力者もいることだし、いろいろ楽しめそうだ」

ウーノが顔を顰めた。私の言葉によるものではない。「彼」を個人的に好きになれないと言っていたからそのせいだろう。気持ちは分かるが、私としては仲良くして欲しいんだけどね。

「さて、調査はここいらでいいだろう。ウーノ、あとはこれを数値として算出したあとでデータとしてまとめてお・・・!?」

ウーノに指示を飛ばし、画面を消そうとした手が止まった。いや止めざるを得なかった。視線は画面に吸い寄せられ、目が離せない。

画面に映し出された少年、黒服を身に纏った飛影が『こちら』を見据えていた。単に空を見上げるといった感じではない。明らかにこつちを『観察』^みていた。そしてその瞳は少年のものではなく、画面越しにでも分かるほど鋭利な光を帯びている。

その口元が微かに動いた。眉は寄せられ、ひどく不愉快な様子で睨むような視線が私を射抜く。だが私がそう認識したときには、彼は既に背を向けて歩き出していた。口元の動きが音を伴って脳を揺さぶる。

消えろ、目障りだ。

「く、くくく・・・あーっはっはっは！」

「ド、ドクター・・・？」

ウーノが僅かに目を開きながら問いかけてくるが、私は目の前のことでいっぱいだった。その目は去っていく彼の背中とその先にいる二人の青年に向けられている。

（どうやってウーノと私のステルスを看破したのかは分からないが、我らの知りうる力でないことは確かだ。ふふふ、俄然興味が湧いてきたねえ。全く・・・本当に夢中になってしまいそうだよ、飛影くん・・・）

猶も怪訝そうに尋ねてくるウーノに適当に返しながら、私は戦闘記録をリスタートした。

もちろん、彼ら三人を中心に細かくデータをリークしながら。

- Side out -

第八話 ファーストアラート 再会（後書き）

第八話でした。ついに悪の組織の総大将ジェイル・スカリエッティ、そして念願の幽白キャラの登場です。それと終りのほうは少し、ほんの少しだけオリジナルにしてみました、いかがでしたか？

アニメで二人のキャラを結構研究してから書いたんですが、違和感はある……ありますよね、やっぱり……。ですが、そこはどうかお許しを。何度書き直してもこれが限界でした（涙）。

この物語もだんだんと原作に沿ってきました。ですが、やはり読者様方はオリジナルの展開のほうが好きなのでしょう？

確かに、ここところは原作や数多ある過去の二次創作などかなりかぶっているのですねとも言えませんが、自分としては『原作に沿うほうがいい』と思ったところは忠実に原作』を、『オリジナルのところはとことんオリジナル』を目指しています。

とはいえ、構成からすべてを一から作るというのは正直難しいです。時間的に余裕があれば是非ともやりたいのですが。

オリジナルの話はいくつかもう案自体はできていて、どれもほのぼのかギャグ満載にするつもりです。中には飛影のキャラが壊れているものも……そんなのも含め、出そうかどうか正直迷っています。

と、一応の説明と作者の状況を述べてみましたが、原則的には原作に沿う形で物語を進めるつもりです。オリジナル展開をご希望の方はまことに申し訳ありません！

原作ストーリーを逸脱した完全オリジナルにしてしまうと、かかる時間と労力が今の数倍ではきかなくなりそうですし、アニメ補正や補足がないため、文章力の低さからここでは何を言っているのかわからないとか、場面が思い浮かべにくいとかいうことになりかねないので……。ただ、オリジナル要素や話は随所に加えていきたいと思っています。

ですが原作にはない、というかかなり強引かつストーリー軸というか原作物語設定を傾ける案もいくつか考えているので、もしそれが考えた末に脳内選考を通じて、見事実現した暁には少しばかりでも喜んで下さると……。そう願っています。

それでは、また次回にて！

第九話 日常く ある日の訓練風景（前書き）

第九話の完成です。

今回は日常編。原作に沿った形ですが、幽白サイドに関わる会話なども盛り込みました。

蔵馬と桑原、この二人は一体どのような立場なのでしょう。

それでは第九話、はじまりはじまり。

第九話 日常 ー ある日の訓練風景

機動六課には優秀な戦闘技術教官がいる。

筆頭の一人は言わずと知れた高町なのは。そしてもう一人は執務官でもあるフェイト・Ｔ・ハラオウンである。他にもヴォルケンリッターの騎士ヴィータやシグナムなどによってその教導は厳しいことと有名であるが、彼女らの教導を受けた魔導師は実力も相応につけてくると評判は高い。

機動六課に所属する彼女たちは、今日もまた六課の新たな力となりし少年と少女たちを鍛えんと訓練に励んでいた。だがいつもと違うのは、

「オラオラ、スピードが落ちてんぞ！エリオ、男ならもつと根性入れて気張れイ！」

「は、はい！」

「何をやっているんだ、彼は・・・」

森の中に展開されたブロックツリーの周りで、回避訓練をしているエリオとキャロに怒号を飛ばしている男がいた。エリオに関してはスパルタ、そしてキャロに関しては、

「キャロちゃんはへばらない程度にしっかりな」

「は、はい〜！」

マイペースでやるように指導している。なんとも偏った指導内容であった。フェイトはオロオロしながら、シグナムは呆れたように腕を組んでその様子を見つめている。

「あ、あの和真・・・エリオだけに厳しくするのは・・・」

「何言つてんだフェイトちゃん！男なんてのは女を守れて何ぼなんだぜ？好きな女ぐらい守れる力があつたほうがいいからな。エリオ、お前もそう思うだろ？」

「ええっ！？す、好きな女って・・・キヤ、キヤロとはそんなんじゃない・・・た、確かに彼女はとても大切な仲間ですけど・・・」

顔を赤くしてしどろもどろになるエリオに、男のなんたるかを熱く語るこの男の名は桑原和真。

かつてからの飛影や蔵馬の戦友であり、また魔界でも人間中最強という異名を持つ霊能力者である。

現在は齡二十五にしてボディガードの会社を立ち上げ、表では要人から一般人までの護衛を幅広く手がける一方、近年人間界に観光などで入り込むことが多くなった妖怪たちのトラブル対処を霊界をバックアップとして置きながらこなしている。前大会である第三回魔界統一戦にも参加し、人間とは思えない戦績を残した実力者だ。

そして新たな人物が、もう一人。

「桑原くん、君の言うことも分かるけど、彼女もいざという時に動けないと困ると思うよ。もう少しペースを落として、二人地道にやったほうが効率がいいんじゃないかな」

「う・・・まあ、蔵馬のいうことももつともか。よしエリオ、少しペース落としてキャラちゃんに合わせる。二人とも、お互いのフォロ―忘れんじゃねえぞ！」

「「はいっ！」」

赤毛の青年、蔵馬の言葉に方針を変更して和真は再び指示を飛ばした。フェイトはそれに安堵の息を吐いて、訓練を続ける二人を見つめる。その様子に蔵馬は苦笑を零した。

蔵馬、またの名を南野秀一。かつて魔界で極悪盗賊として名を馳せた伝説の妖狐その人である。

二十五年ほど前に霊界特防隊によって手ひどい怪我を負わされた際、逃げ込んだ人間界で胎児だった人間と合体し、以来南野秀一として生きてきた。だが飛影や桑原、そして幽助と出会い、数々の戦いが終わった後もこうして行動を共にしている。現在は父の会社で働く傍ら、魔界と人間界を頻繁に出入りして双方の交流に尽力している最中だ。

さてどうしてこんなことになっているかというと、それは三日前、彼らと機動六課面々との出会いまで遡る・・・。

「おーっす！コエンマに頼まれてきた準霊界探偵にして人間界最強の男、桑原和真とは俺様のことだ！飛影を手伝うってことだが、おめえらもよろしくな！」

「同じく飛影の手伝いに派遣された蔵馬だ。仕事柄、いろいろ助けにはなれると思う。よろしく」

レリックの護送受け渡しを完了した機動六課は、ブリーフィングルームにて新たな協力者と相対していた。簡単な事情聴取はしていたが、飛影の知り合いだというのを皆に説明するためこうして集まってもらったのである。

部屋には六課の主要メンバーが勢ぞろいしていた。なのはとフェイトの二人に部隊長である八神はやて、ヴォルケンリッターの騎士たちと新人フォワード四人に加え、シャーリーやリインフォース？、さらにはヴァイスやグリフィスもいる。

ヴァイスが恐る恐る、といった感じで挙手した。

「んで、お二人さんが飛影の旦那の仲間なんだよな？やっぱ、その、妖怪ってやつなのか？」

ヴァイスの質問に部屋に少しの緊張感が満ちる。彼が妖怪だと知るの二つの隊とはやて達情報員を除けば六課内でも極少だが、ヴァイスとグリフィスはその数少ないうちの二人だった。

問われた二人は妖怪という単語に少し驚いた顔をしたが、飛影の

性格なら不思議じゃないなと苦笑した蔵馬がそれに答える。

「正確に言うと少し違うな。けど、オレのことは概ねそう思ってたのかまわない。使っているのも妖気と呼ばれる力だし、人間とは少し違うから。あ、けど桑原くんの方は真正正銘の人間だよ。霊界やら魔界やら、いろいろと関わりは多いけどね」

蔵馬の説明にま、そういうことだと肯定を口にする桑原に複雑な表情をする一同。そしてそのなかの一人、ティアナが何かに気づいたように手を挙げた。

「人間・・・あれ？でもさっきフェイトさんみたいな光の剣を出してましたけど、アレは一体なんですか？蔵馬さんも何か鞭みたいのを・・・でもデバイスも何も使ってなかったですし・・・」

一緒にいたスバルも、記録を拝見した者もそれに同意するようにうんうん頷いた。「デバイス？」と首を傾げる二人になのはとフェイトが簡単に説明すると、合点がいったように笑みを浮かべ、桑原が一步前に出る。

「そんじゃ、いっちょ見せてやりますかね。出でよ、霊剣！」

桑原が握手をするように出した右手へと力を込めると、手の中に光り輝く球形が出現する。それに一同が驚くより早く、玉は爆発するように巨大化し、剣の形を成した。部屋にいた全員が呆気に取られたように剣を見つめるなか、桑原はふふんと鼻を擦りながら笑う。

「こいつが俺の霊気で作った武器、『霊剣』だ。物質系能力ってやつでよ、オレ自慢の主武装だぜ」

桑原がバチバチと音を立てる霊剣を見せながら、得意げに胸を反らす。飛影がほう、と少し驚いたような声を発した。

「前に見たときより霊気の密度が数段アップしているな。切れ味や強度も以前より洗練されている。イメージの悪さだけは改善されていないようだ」

「褒めねーヤツだなテーマは――！」

飛影の痛烈な皮肉に桑原はさっそく食って掛かる。まあまあと二人を仲裁しながら、蔵馬が苦笑いしているフェイト達の前に出た。

「それじゃ次はオレの番か。」

ローズ・ウィップ
薔薇棘鞭刃――！」

どこからか取り出したバラの花を蔵馬が無造作に振るう。と、花びらが宙を舞い、部屋全体バラの香りで覆いつくした。美しい花びらの舞にシグナムが気障だな、と呟く。中にはシャーリーのようにはわーっとしている者もいた。その手に握られているのはあの鞭だ。

ローズ・ウィップ
「薔薇棘鞭刃、オレが得意とする武器の一つさ。見た目はそれほどでもないだろうけど、鋼鉄ぐらいなら問題なく切り裂ける」

「ふえー。飛影さんもすごかったですが、こんなこともできるんですね」

「これが妖気の使い方か。けど、桑原は普通の人間なんだろう？ さっき言ってた『霊気』ってのは何なんだよ」

ヴィータが眉を寄せながら疑問の声を上げた。少し離れて座っていた飛影が答える。

「貴様ら魔法と同じ、オレ達の世界で裏に関わる人間のほとんどが持っている力だ。霊気は人間の肉体に宿るオーラの総称、人間であれば誰でもその可能性を持ち、それを操る人間をオレ達は霊能力者と呼ぶ。戦闘に耐えうるほどの霊気を持つ人間は少ないが、使いこなせればお前らの魔法にも負けはせん。甚だ不本意だが、コイツが
いい例だ」

「おめえはいちいちうるせエんだよ！」

懲りずに言い争う飛影と桑原に、フェイトやなのは達は苦笑しつつも少し羨ましいなと思った。飛影がこんなふうに突っ掛かっていくのは、彼や蔵馬のことをそれほどまでに信頼しているからだ。少し寂しそうな彼女らの横顔を横目で捉えつつ、蔵馬がいつものように二人の仲裁に入った。

「まあまあ、二人とも。今は俺と桑原くんがこの機動六課に何を提供出来るか考えるほうが先ですよ。基本的に俺や桑原くんは会社勤めしていますからデスクワークも大抵はなんとかできますが、どちらかといえば
」

戦闘技術を教えるほうが得意ですね、と蔵馬は涼やかな笑みを見せて言った。桑原もそれに同調し、それをなのははやてが了承して
・・・

今に至るといっわけである。

「おう、お前らも結構しごかれたか」

「そちらも終わったようだな」

ヴィータが自らのデバイスを肩に掲げながら飛影とともに歩いてきた。その後ろからは、ふらふらと覚束ない足取りでスバルが歩いてきている。別訓練をしていたのはとティアナも、森の奥のほうから出てきた。どちらも相当絞られたようだ。

「ま、こんなトコだろ。とりあえず帰って昼飯にしようぜ」

桑原の言葉で解散の雰囲気になる。だが全員が歩き出そうとしたとき、不意に声を上げた人物がいた。戦技教官、高町なのはである。

「あの、和真くんに蔵馬くん。二人は、その、どんな風に飛影くんと知り合ったの？」

「「飛影と？」」

なのはの言葉に全員が注目して立ち止まる。飛影も彼女を横目で見ていた。しかし誰も止めないところを見ると興味はあるようだ。

「どんな風に、か。俺は妖怪がらみだよ。そのあとこの場にいないもう一人の仲間とも知り合って、桑原くんはさらにそのあとだったね。改めて考えると、この中じゃ俺が一番付き合いが長いってことになるのかな」

「オレは今蔵馬が言った奴とずっと喧嘩仲間だったんだ。あいつと一緒に靈光波動拳の継承者トーナメントってのを戦ったあと、四聖獣戦のときに助っ人として来た二人に会ったんだよな。もう十年ぐれえ前だから、懐かしいぜ……ん？でもなのはちゃんよ、なんで

いきなりそんなこと聞いてきたんだ？」

「えっ！？なんでって、それは、その・・・／＼／＼」

いきなり問い返されたのは頬を赤く染めて黙り込んでしまった。だがその視線はチラチラと飛影の方と行き来していて、当の彼は不可解そうに眉を寄せる。それを見たフェイトやヴィータなどがむうと不満そうに頬を膨らましていた。

蔵馬が珍しく呆気に取られた様子で固まる。だが少し考えるように顎に手を当てた後、まじまじといった視線で全員を見渡した。

「これは・・・正直驚いた。あの堅物さと気難しいことで有名な飛影に、こんな素敵なガールフレンドが出来てたなんて。幽助や魔界のファンクラブ会員が聞いたらなんて言うかな？」

「ふええっ！？」

「なっ！？」

蔵馬の爆弾発言に、なのはをジトつと睨んでいた少女たちが驚愕の声を上げた。そのなかには焦りらしきものも見受けられ、蔵馬はやはりかと内心溜息を零す。

どうやら、かつての戦友はここでは王子様という立場らしい。本人は気づいていないようだし、詳しい経緯は聞かないが。

「蔵馬、あまりふざけたことを抜かすと貴様でもただでは・・・待て、ファンクラブだと？そんなもののいつの間に出来ていたんだ！？」

「飛影・・・君は一応？陣営でのNo.2、男ではNo.1だろう？強い上に容姿端麗、加えてフリーとくれば人気が出るのは当然のことじゃないか。君は自分が思っている以上に注目されていることをもつと自覚した方がいい。ああ、潰すなんて考えないでくれよ。どうせすぐ元に戻るだろうし、いらない作業を増やされるのは御免だからね」

飛影の思考を先読みした蔵馬が釘を刺した。凶星だったのか、飛影は心底苛立たしそうな表情をする。組んでいた腕をさらにきつく締めつつ舌打ちしてそっぽを向いた。

ちなみに蔵馬もあるけどな、と零した桑原の後ろからはやてが駆けてきた。その肩にはリインの姿もある。

「みんなお疲れさまや。午後の教練のために今はしっかり身体を休めとくんやで？」

部隊長としての心配りを忘れないように新人たちに声をかける。それに気の抜けたような返事が返ってきたことに少し苦い笑みを零し、飛影たち三人に向かい合った。心なしかその頬は赤いような・・・

「く、蔵馬さん達もおおきに。民間協力者の立場でここまでしてもらってるゆうのに、ほとんど何にも返されへんでごめんな」

蔵馬は「気にすることはないですよ」と笑顔で返した。だが、はやては何だか納得いかないようで、モジモジと手を握ったり開いたりしている。と、そこで何か思いついたのかパチンと手を合わせた。

「ほ、ほんなら・・・お礼とは少しちゃうねんけど、わ、私のこと

名前で呼んでくれへんか？蔵馬さんは管理局員やないし、私より年上やのに、敬語使われるんは何か恥ずかしゅうて仕方ないんや」

「はい、それはかまわないですが　「敬語！」かまわないけど、いいのかい？君はこの課の部隊長なんだろう？確かにそのほうがやりやすくはあるけど・・・」

心配する蔵馬に、はやては大丈夫だし何も心配いらんの一点張りだった。挙動不審な上にその顔はほんのりと色づいている。なのはやフェイト、そして他の少女たちもぼか々とした表情をして、かつてない態度を振りまく親友、あるいは部隊長を見ていた。

（ねえ、フェイトちゃん。はやてちゃんってもしかして・・・）

（う、うん。たぶん考えてる通りだと思う・・・）

フェイトとなのはは、飛影に対する自分たちと同じような反応をするはやての心情に気づいたようだ。彼女を主とするヴォルケンリッターは複雑な表情をしており、フォワード四人やらシャーリーやらは顔を突き合わせていた。

（主がそう思った思いを抱く相手が出来たことは喜ばしいが、ううむ・・・心配だ）

（こればっかはしかたねーよ、・・・（気持ちはわかるし・・・）・・・って何考えてんだあたしは！？）

（はやてちゃん、可愛いわー。実を言えば彼に会った瞬間からあんな調子だったものねー）

（成る程、一目惚れというやつか。主の性格から考えれば意外だが、まあそれを省いても蔵馬殿はなかなか出来た人物のようだからな。だがシャマル、なぜそんな実感がこもっているんだ？）

（はやてさんが蔵馬さんを・・・確かに超のつくほどいい人だし、かつこいいしね）

（はあ、いいのかしらこんなんでも・・・）

（でも仲良しなのはいいことですよ！）

（キャロ、それはちょっと違うんじゃない・・・）

（はあー、はやてちゃんにもようやく春が来たですね。リインは嬉しいのです！）

（いいなあ、はやてさん。私もいつか・・・！）

聞こえないとはいえ、本人を前にして言いたい放題な六課メンバーであった。一部羨望も混じっているようだが、全員が念話でひそひそと意思伝達をするなか、壁に寄りかかっていた飛影がフツと笑う。その口元はかつて無いほど、心底愉快そうに吊り上っていた。

「クツ、クク・・・いいからそう呼んでやれ蔵馬。その方が面白いことになりそうだからな。フ、部隊長とやらは本当に大変だ」

「ひ、飛影くん！？い、要らんこと言わんといて！」

いつもとは逆のパターンに好機ととったか、援護というか追い討ちをかける飛影。Sっ気全開で忍び笑いを零す彼だが、なのはたちは引き攣った笑顔をしていた。理由は無論、明日はわが身という言葉が彼が認識してないためである。

「なあ、どうしたんだこの空気？シグナムちゃん分かるか？」

「分からないお前もどうかと・・・って、桑原！貴様、ちゃん付けは止めろとあれほど言っただろうが！」

恥ずかしさから顔を赤くするシグナムに、「そうか？」と首を傾げる桑原に笑いが巻き起こる。そんな光景を遠巻きにしながら、穏やかな時間は過ぎていくのだった。

第九話 日常 ー ある日の訓練風景（後書き）

日常編その2でした。

飛影の射程外にいる者は蔵馬が撃ち落す・・・まさに作者の強引さの真骨頂であります。なんというご都合主義・・・だが、まあよし！（いいのかよっ！？）

少し強引かもしれませんが、はやてと蔵馬はキャラ的に何だか馬が合うとは当初から思っていたのでこういう形にさせてもらいました。狸と狐って反りが合わない感じがしますが、この二人ならマッチするような気がするんです。策を巡らせて、裏で薄く笑う感じとか特に・・・。

さて九話まで来たこのお話、ここからしばらくはバトルではなく日常編が続くと思います。ここでも独自設定が冴え渡りますが、それはまあ後ほど。

では今回はこの辺で。また皆様がこのお話を読んでくださることを願っています。

それでは、ツアイツェン再見！

第十話 出張機動六課（導入編） 〵 始動（前書き）

第十話完成です！十話は文章が少なかったので早く上げることが出来ました。

この作品も二桁台、そして今回からは地球編に突入いたします。さてさて、一体どんな話になるやら・・・

それでは、第十話テイク・オフであります！

第十話 出張機動六課（導入編） 始動

「出張任務だと？」

「うん、ちょっと唐突だけどね」

朝方。いつものように自主訓練をしてフォワードたちの面倒を見たあと、立ち寄ったブリーフィングルームの中で聞かされた話に、飛影は少し声高に問い返した。その相手、飛影を正面に据えているのは時空管理局の執務官でもあり、ライトニング隊の隊長でもあるフェイトである。

聖王教会からこの意が通達されたのは今朝方であった。遺失物管理部の肩書きを持つ機動六課であるが、ロストログア関連ではレリック専門で調査を進めている。あまり手を広げすぎても一つに対して薄くなってしまうので、この采配は的確だといえよう。

本来ならこの件も他方に任せるのがセオリーなのだが、時空管理局は万年欠員と呼ばれるほど人員に欠いている。魔法を使えないものでも情報整理やデスクワークで活躍の場が与えられてはいるものの、最終的には魔導師が必要となる場合が多い。

そのバランスがきちんと出来ていない場合、指令が来てもどこも同じような返答をするのだ。六課に仕事が回ってきた理由は一つ。

すなわちここ以外は人手不足である、と。これだけであった。

「任務は正体不明のロストログアの回収。どれくらいかかるかわからないから、少し現地にとどまる必要があるの。それで、主要メンバーは全員が行くことになったんだ」

「フン、ならお前達だけで行ってくればいいだろう。ロストログアだのレリックだの、そんなものがどうなろうとオレには何の関わりもないからな。ここにいるとは言ったが、積極的に協力すると言った覚えはない。助力を求めるなら蔵馬か桑原にしろ。やるというのなら勝手に行って、解決なりなんなりしてくればいいことだ」

興味などない、という風に飛影はそっぽを向く。すると、あからさまに落ち込んだ様子のフェイトが顔をずいと寄せてきた。息を感じるほど近くへ来たことを感じ、飛影は一瞬ドキリとなる。だが彼の動揺には気づかない様子で、フェイトはそのまま詰め寄った。

「飛影は来てくれないの？」

「そう言っている」

「私は一緒に行きたいんだ。そのほうが心強いし」

「オレは行かん」

「ホントに、ダメ？ 私たちとじゃ・・・嫌・・・？」

「オイ・・・だから、オレの話をちゃんと・・・」

「・・・・・・・・ぐすっ」

「・・・・・・・・」

椅子に座ったまま彼女は見上げてくる。うるうるうると見つめてくる。その目は水気を帯びており、目尻に抑えきれなくなったものが零れ落ちる寸前であった。ここでもし断ったり突き放したりしようものなら、一気に決壊して飛影を飲み込むだろう。

被害を受けているのはむしろ自分の方だというのに、なんとも理不尽である。いつもながらここは頭痛の種には事欠かない場所であった。無論彼にとっては不都合極まりないが。

「くっ・・・・・・・・ええいわかった、付いて行ってやる。ただしオレは手を貸さんし、仕事とやらはそっちで勝手にやれ。何でもかんでもオレ達に頼るようなら、すぐに手を引く。いいな？」

「あ、ありがとう飛影っ！」

「ッ！？フェイト！だから高町共々抱きつくなど、あれほど言っただろうが！さっさと手を離せ！」

いきなり体を引き込まれ、頭ごとがっちり抱きしめられた飛影が怒りの声を上げた。フェイトの肩を押さえてその身体を引き剥がす。

その姿は子供にせがまれるのをいなす父親のようだ。フェイトは寂しそうにしながらもすすこと引き下がったが、懲りている様子はないことを感じ取った飛影はさらに不機嫌になった。

任務は今から二時間後に集合して行くのだという。それを聞くと飛影はフェイトから離れ、自分の部屋へと歩いていった。

（やれやれ、飛影があんなに慌てているのは久しぶりに見ましたよ）

その部屋の脇、壁の影に潜んでいたもの達が去っていく彼の後姿を見つめていた。メンバーは蔵馬と桑原を始めとして、なのはや新人四人がいた。ヴィータやシャマルにシグナム、それにはやての姿もある。

女性陣の大半が羨ましそうな視線を注ぐ中、桑原が声を潜めて蔵馬の独り言に答えた。

（そうだな。飛影のヤツ、フェイトちゃん相手にどうしていいか分かんねえみたいだったぜ。意外な弱点発見だな）

にしし、と笑みを零す戦友に蔵馬は同感ですね、と苦笑した。実際、あんな彼を見ることになったのはこっちに来てからだ。今までを思えば信じられないくらいであるが、二人にとってはいい傾向であつた。

シグナムが彼の去っていた方向を見やる。

（行ってしまったぞ）

（お兄ちゃん、怒ってましたね・・・）

キヤロが小声で話しながら周りを見渡す。念話をしないのは蔵馬たちがまだ使えないからだ。『飛影を交えて、そのうち使えるようにしておくよ』とは蔵馬の弁である。実際、盗聴とかに気をつければこれほど便利な魔法はない。

少し蛇足的な話になるのだが、キャロのお兄ちゃん発言、あるいはエリオの兄さんという呼び名を初めて聞いたのは数日前だ。そのとき蔵馬達は驚きのあまり硬直してしまった。

そして「犯罪はいけませんよ」と零した蔵馬に、飛影が怒鳴りつけていたのは記憶に新しい。実際には、蔵馬は飛影にとって兄妹関連の話題がどれほど重いのかを知っていたので、彼がそれを許容したことを驚いていたのだが。

話を戻そう。蔵馬はキャロの言葉ににこりと笑って口を開いた。

（本当に嫌なら、どんなに言われても飛影は首を縦には振らない。彼なりに思うところはあったみたいだし、何も心配ないよ）

（ホーント素直じゃねえからな、あのチビ助は。なんだかんだ言っても、皆がけっこう心配な癖によ）

呆れたような声をしながらも、そこには信頼感がはっきりと浮き出ている。彼の心情がちゃんと分かっていることに六課メンバーは少しの羨ましさを覚えた。

（前になのはさんに抱きつかれた時もあんな感じでしたしね。兄さんは女の人が苦手なんでしょうか？）

（とりあえず鈍感なことは確かだな。アレ見てれば普通にわかんだら・・・）

（・・・確かに、ねえ・・・）

飛影が去った方向を見つめているフェイトを指して、ヴィータとシヤマルが溜息を吐いた。全員がそれに首肯する。

フェイトははぁ、と息を零しながら、その目にまだ熱っぽい視線を宿していた。右手は胸の前で握られ、左手は彼が掴んだ右腕の辺りを擦っている。

どこからどう見ても、恋する女の子そのものであった。彼女自身明言はしていないが、これでは分らないというほうがおかしい。まあ、彼女の親友もまた然りであるが。

（飛影くん、モテてる言うつつたやん。それとも気づいとして無視しとるだけか？）

（いえ、飛影は本当に気づいていないんだと思いますよ。彼は敵意や殺気といったものには非常に敏感ですが、好意をあんなに真っ直ぐ向けられたことは片手で数えるほどありませんから。飛影に何か言いたいのなら、率直に述べることをお勧めします）

蔵馬の進言を受け、全員がおおと納得する。確かにそんな節はあったから合点がいったのだろう。少し不満そうに頬を膨らましていたのはやシヤマル、ジト目をしていたヴィータやスバルがぐつと拳を握り締めた。蔵馬はそれを見て再び苦笑いを浮かべる。

（飛影は好かれてるってことか？確かにフェイトちゃんはやけに飛影にかまってるなー、とは思ってたけどよ）

（ここにも結構鈍感な人が・・・でも敵意とかって・・・飛影さんは一体どんな人生を歩んできたんですか？いくら元盗賊だって言っても、ちよつと行き過ぎのような気がするんですけれど・・・）

ティアナの言葉に全員が蔵馬と桑原の方を向いた。飛影から少しばかり聞いたことはあったが、出生以降の詳しい経緯は、盗賊をやっていたという一点を除き、ほぼ全てがぼかされていたからである。

二人は苦笑するとそこから立ち上がった。蔵馬が全員を見据える。

「こればかりは俺から話していいことじゃない。彼が話すまで待つしかないよ。といっても、俺が知ってることもそれほど多くはないかな」

「ま、俺もあんま知らねえしな。コエンマからちつとばかり聞きかじってるだけだからよ」

軽い口調だったが、全員が理解した。これは興味本位で聞いていいことではない、と。それを汲み取ったのを確認したのか、二人は廊下へと踏み出していった。

飛影のことに關しては未知なことが多く、不確定なことが多い。だが、彼が信用に足る人物であることは理解していた。

知りたいと思う。だが、それが本当に正しいことなのだろうか、心が二の足を踏んでしまう。残された面々は、しばらくそのままホールに立ち尽くしていた。

任務は唐突だったが、出発に支障はなかった。へりに乗った一行は転送ポートに向けて、一路空の旅と洒落込んでいた。その道すがらへりの中では少女たちの会話に花が咲く。

「第97管理外世界、通称『地球』・・・ここがなのはさん達の故郷なんですね」

「そうだよ。私やはやてちゃんの生まれたところで、フェイトちゃんもしばらく暮らしてたんだ」

なのはが懐かしさを噛み締めるようにして笑う。数日前故郷のこととが話題になったところでこの任務が届いたことに、エリオを始めフォワード陣は感慨深いものを感じていた。スバルが隣に座った蔵馬の方を向く。

「そういえば、蔵馬さんたちの故郷も地球って名前なんですよね？ 同じ世界の出身だったんですか？」

「いや、俺たちの世界は確かに地球だけどことは違う、断層がずれた位相世界の地球なんだ。分かりやすく言えば平行世界といったところかな。魔法はないし、データで見る限りは共通点も多いしね」

蔵馬はデータを端末で呼び出しながら言った。彼はこちらの世界の順応が早く、もうはやてやリインの手伝いでその実力を発揮し始めている。意外なことに桑原も有能で重宝されている。

「そこに魔界、霊界、人間界という三つの世界が薄い次元の壁を隔てて点在し、一つの世界を形作っている。魔法はないが、此方の世界には人間界が最も近いな。魔界は比べるだけ無駄だ、レベルが違

すぎる」

飛影が蔵馬の台詞の続きを口にする。桑原がそれに同調するように肩を竦め、まったくだというふうに両手を挙げた。

「まーな。毎度毎度思うが、あそこは非常識が服着てスクワットしてるようなトコだ。前は浦飯がどーしてもって言うから、四年も地獄を見ながらしごかれてトーナメントに出てやったが、俺はもう御免だぜ。？とか黄泉とか、S級最上位のバケモンだらけだからなあんなん相手にしてたら、命がいくつあっても足りやしねえ」

「『『『S級？』』』」

「『『『トーナメント？』』』」

桑原の言葉に全員が首を傾げる。だがそれを追求するより早くヘリが着陸態勢に入り、お喋りはそこで打ち切りとなった。

シートベルトを止める。リンもはやての横に座っていた。その姿はいつもの妖精サイズではなく、普通の女の子サイズにまとまっている。容姿はエリオとキャロと同年代に見えた。というか、戦闘力はともかく性格は彼らより幼いではなかるうか。

蛇足だが、先ほどそれを指摘した飛影と桑原はというと。

『れでいに対して失礼なのですう』

『！』

と、先ほどまで涙目をしたリンに上目遣いで説教を受けるという不思議な体験をしている。そんなことをしているうちに振動は止み、六課のメンバーはヘリを降りた。

「私と副隊長は寄るところがあるから、先に行つていな」

そう言うとはやてはシグナムたちを連れ、別のドアに消えていく。それを見届けてから、なのはは全員を見渡して笑顔を作った。

「じゃ、私たちは先に現地入りしておこうね。いろいろと準備もあるし、その方が効率的だしね。飛影くん達もいい？」

なのはの言葉に飛影はフンと唸って視線を背けた。蔵馬と桑原がそれに苦笑と呆れを返し、彼女に問題ないことを告げる。フェイト達もそれ確認すると、転送ポートへと歩き出した。

第十話 出張機動六課（導入編） 〵 始動（後書き）

夏は勝負の季節って言いますが、ホントですねえ。受験生では夏を制するものは受験を制すとよく説教臭く言われました。

・・・作者は卒論を書かなければならないのでその件なんですけど。はあ、先は長いですよ。

っと、愚痴はこれぐらいにして小説関係に行きましょう。

って、地球編って言いながらまだ地球にすら到着していない・・・アリサやずかとの対面を楽しみにしてくださいださっていた皆様には申し訳ありません！

次回は必ず登場させますので、どうかそこまで今しばらくのご辛抱をお願いします。

さて、次回にまたお会いできることを願って今回はこのへんで。

では再見！^{ツァイツェン}（この締め、最近気に入ってます：笑）

第十一話 出張機動六課（邂逅編） 地球へ（前書き）

さて、やってまいりました地球編第二話。

今回は皆様がお待ちの二人と飛影たちの出会いが綴られます。

さてさて、一体どういったお話になるのやら。書いた作者としては非常に出来が不安ですが、どうか最後まで読み下さるとうれしいです。

それでは、行ってみましょう！

第十一話

出張機動六課（邂逅編）

ゝ

地球へ

光が森の一角を照らし出し、風が周囲を舞うように巻き起こった。ざわつとした空間を一瞬体験し、慣れ親しんだ引力による重みが戻ってくる。無事に足を大地に付けた六課のメンバーは、深い澄んだ空気が体で浴びせられるのを感じた。

ポートを降りた先は、大きく豊かな森が広がる湖の湖畔だった。湖面が波打つように揺れるたび、光が万華鏡のように反射する。その様子にエリオたちは言葉を忘れて見入っていた。

「綺麗・・・」

ティアナが視線を縫い止められたまま呟いた。誰も言葉を返さないが、それは否定ではない。言葉は必要ない、というように誰もが空の色を映し出す鏡面を見つめていた。すると、遠くから車の音が響いてきた。

近づいてきたのはリムジンだった。車としてはいささか大仰すぎるほどの立派な造り、洗練されたフォルム、そしてその車体の大きさ、どれをとっても庶民には手がでない代物だ。そして、そのシックな黒のドアがバアンと優雅さのかけらも無く開け放たれる。

「なのはーっ、フェイトーっ！」

開放と同時に何かがなのはの身体に飛びついた。反動が大きすぎ

たのか、彼女を軸にしてくるくる回っている。それがようやく止まると、それは金髪をショートで切りそろえた、なのはと同年代ぐらいの少女だった。

「あはは、久しぶりだねアリサちゃん」

「久しぶり、アリサ」

なのはの返答に随分とご無沙汰だったじゃんか、とアリサは愚痴を零した。飛影たちや新人四人はまるつきり蚊帳の外である。

だが、全員の表情は笑顔一色で染まっていた。手を取り合い、抱き合い、互いの背中を叩きあいながらフェイトやなのはが喜びを全身で表現していた。蔵馬たちはそれを微笑みながら見つめている。しばらくはそうやっていたが、なのはがじゃれていたアリサから身体を離す。

「紹介するね、私とフェイトちゃんが中学校まで一緒だった親友、アリサちゃんだよ。今は大学生なの」

「アリサ・バニングスよ、よろしく。すずかももうすぐ・・・」

「なのはちゃん、フェイトちゃん！」

「あ、すずかちゃん！」

遠くから紫がかった黒髪をなびかせながら、アリサと同年代の少女が息せき切って走ってくる。その足は意外と速かった。遠くに見えていた影が大きくなりなのはの隣に並ぶ。そしてアリサと同じように再会を喜び合った後で此方を向いた。

「初めまして、なのはちゃんたちの幼馴染の月村すずかです。よろしく願います」

おっとりした見た目を裏切ることのない、淑女然とした挨拶にフオワード四人は萎縮してしまった。スバル達は微笑むすずかに少しどもりながら、順番に自己紹介を済ませる。はやて達は別にやることがあるらしく、現在ここにはいない。

と、一通り挨拶を終えた二人が飛影たちを捉えた。

「あ、つと紹介が遅れてごめんね。この人たち三人は、私たちに協力してくれてる民間協力者の人達なんだ」

「民間協力者の蔵馬です」

「桑原和真だ、よろしくな」

なのはの説明で、アリサとすずかの目が友好的なものに変わった。それぞれ二人と握手を交わす。だが、桑原がすずかの手を握ったとき、怪訝そうに眉を顰めた。

「あれ、アンタ・・・」

「はい、なんですか？」

握った手とすずかの顔を見比べながら桑原は首を捻る。が、僅かに視線を逸らした後、「いや、なんでもねえ」とだけ言って彼は手を離れた。

その様子に飛影と蔵馬の視線が一瞬鋭く光る。だが、瞬きほどの間に現れたその気配は掻き消え、最後に飛影の番が回ってきた。

「・・・飛影だ。よろしくするつもりはない」

飾り気も何も無いどころか、初っ端から名前と共に友人的要素を切り捨てた。これ以上ない拒絶の意思である。親しみも何も置いてきたかのような感じの彼に、フェイト達は若干苦い表情をした。

だが、二人の目は今日一番の驚きに見開かれる。一瞬にして、表情がそれまでとは別の感情を秘めたものに変わっていた。

「飛影、ですって・・・!？」

「じゃあ、あなたが・・・？」

「?・・・なんだ」

相手が目の前まで来たことに飛影は怪訝な表情をする。二人は一樣に飛影を見据えていた。すずかは興味深そうなそして窺うような目で、アリサは強い光を放つ瞳であからさまにじろじろと。

これほどの美人の二人に見つめられれば、普通の男子ならドギマギするかもしれない。だが、飛影は「フン」と鼻を鳴らすのみだった。不機嫌そうなその様子に、アリサの眉がピクツと反応して天に近づき、視線が刺々しさを帯びる。

値踏みするような視線に、何故かなのはとフェイトが少し恥ずかしそうに俯いた。リンとすずかはおろおろと、新人四人は黙って成り行きを見つめている。

緊張した空気の中を通すように、アリサが腰に手を当てながら「ふーん？」と鼻を鳴らした。

「この人がなのはとフェイトを怪物から救ったっていう命の恩人？二人には悪いけど、正直信じられないわね。私でも勝てそうな気がするもの」

「錯覚だ、バカめ」

アリサの無遠慮な一言に、瞳を半眼にした飛影が即座にツツコミを入れた。飛影の性格からすれば当然帰結と言えたが、如何せん間が悪すぎる。スバル達は「うわぁ・・・」と顔を引き攣らせ、なのは達は「あちゃ〜」と頭を抱えていた。

そしてそこからは周囲が心配した通りであった。ここに集まった中で最も沸点が低いであろうアリサが、飛影のあからさまな皮肉に顔を真っ赤にしながら噴火する。

「なっ、ななな、なんですってえ！？も、もういっぺん言ってみなさいよ！」

「バカめ」

「こ、こんのおっ・・・ホントに二度も言ったわねえ！？」

飛影の冷めたような声色に、怒りゲージが二トロエンジン仕様であるアリサがさらにヒートアップした。片方が落ち着いているからといって物事は収まらないといういい例である。そしてくわっと目を見開きながら振り返った。

「なのは、フェイト！コイツはダメよ、絶対に止めときなさい！」

「ア、アリサ（ちゃん）・・・」

眉を吊り上げ、アリサは飛影を指をさしながら怒りに満ちた形相で言い放った。二人は額から汗を流しながら、荒れ狂う親友の様子をはらはらと見ている。飛影の方はそれすら一顧だにしないかの如く、あからさまに溜息を吐いていた。

「貴様らの事情なぞどうだっていい。オレはこいつ等に連れてこられただけだからな、貴様らに関わる気はこれっぽっちもない。喚きたければ一人で勝手にやっている」

「あつ、こら待ちなさい！まだ話は終わってないわよっ！」

付き合ってられんと背を向けてスタスタと歩き出す飛影。それにさらに怒りゲージを刺激されたのか、アリサが地ならしをするように闊歩しながら走っていった。全員がそれを呆気にとられた表情で見つめていると、遠くから駆動音が響いてきて車が止まった。

「なのはちゃん、フェイトちゃん遅れてすまん。今から作戦を・・・ってどないしたん？」

ようやく到着したはやとヴォルケンリッターの面々は、混沌と化したこの場に眉を顰めて首を傾げた。なのは達はそれに苦笑いすると、作業を始める。新人四人も慌ててそれに倣った。

「飛影さん、何気に女の子に構われることが多いですねー。将来はすごいツンデレな天然ジゴロさんになるかもです」

リンが、飛影が聞いていたら一瞬で血祭りに上げられそうなことを言う。失礼千万にも程があつたが、ちよつと見てみたい光景だと思つたのは、乙女たちの秘密であつた。

- Side change -

「で、今度はどこにいくつもりだ」

歩きながら、飛影は横を歩くなのはをジト目で睨んだ。ただいま飛影とヴィータを除いたスターズ隊の三人、そしてリンの五人はなのはの実家である喫茶店、『喫茶翠屋』に向かつている。現在は場所が場所だけに、飛影はいつもの黒コートではなく、黒いジーンズと白い無地のＴシャツを着ていた。

ちなみに蔵馬ははやての、桑原はフェイトの手伝いでここにはいない。別れ際、何故かフェイトが少し不満げではやてがニヤニヤ笑つていたが、飛影には理由がわからなかった。

「そ、そんなに膨れなくても・・・アリサちゃんも本当はいい子なんだよ？さっきはその、ホラっ、ちよつと気が高ぶつちやつただけで・・・」

「誰のことを言っているんだ。それにあんな小五月蠅い女など気にしていないと、さっきから何度も言っているだろう」

なのはが少し申し訳なさそうにしながら親友のフォローをする。

だが飛影の態度は取り付く島もないがごとくで、なのはから顔を背ける。すると、その横を歩いていたラインがニヤリと笑みを零した。

「にゅふふふ・・・そう言いながら気にしてる感バリバリなのです。前から思っていました、飛影さんってば意外と根に持つタイプですね？」

「人形焼にしてやろうか？」

「み、身の危険を感じるのです！なのはさん、スバル、ティアナっ、ヘルプミーですうっうっ！」

「「「あははは」「」」

他愛もない談笑をしながらだと十分という時間は非常に短かった。舗装され、整った街路樹が並ぶ通りを抜けると、小洒落た看板が目にと留まる。

喫茶翠屋。なのはの実家で、ケーキと紅茶が自慢の地域密着型店であった。

「お母さん、ただいまー！」

「おお、なのは！帰ってきたな！」

「お帰りなのは！」

店の中に入った途端、なのはは次々に迎えられた。いるのは父の高町士郎、母の高町桃子、そしてなのはの姉である高町美由希らし

かった。お母さん若い、とスバルとティアナが呆然とした様子で呟いている。ちなみに兄もいるらしいのだが、今はドイツにいるのだそうだ。

なのはがスターズ隊の二人を自分の生徒だと説明すると、スバルとティアナは前に出て少し緊張気味に自己紹介をした。それに対して士郎は喫茶店の主人らしい気のいい受け答えでサービスをしてくれた。ティアナたちはほっと安堵の息を零しその脇で桃子が笑っている。

すると、士郎と桃子がなのはの後ろでポケットを突っ込んで佇んでいる飛影に気づき、おやと首をかしげた。その視線が鋭く光る。

「なのは、彼は・・・？」

若干声のトーンが低いことは全力でスルーしながら、なのははえへへと笑った。その頬が少しばかり赤いことに、桃子は「まあ」と口に手を当て、美由希はニヤニヤしている。それに慌てたのか、飛影の横に立ったなのはがわたわたとしながら視線を向けた。

「えっとつ、しょ、紹介するね？この人が飛影くんです。少し前に偶然再会して、今は私たちの活動に協力してもらってるの」

「あなたが・・・そう」

近づいてきた桃子が飛影と視線を同じくしながら柔らかな微笑を浮かべる。飛影はアリサ達と同じ反応をされたことに少しむっとしたが、桃子の表情を見た瞬間それは掻き消えていた。

優しげな、しかしそれでいて今にも泣き出しそうな表情。自分に

はそんな表情をさせる心当たりが無かったので、飛影は動揺してしまった。

「・・・何を見ている？」

「ふふ・・・あなたのことは以前からなのはに聞いていたから、ちよつとした確認をね。私も一度お会いしたいと思っていたの、会えて嬉しいわ」

魅力的な微笑みが飛影を捉える。それが見たこともない母の幻影と重なり、飛影は掻き消すように首を振った。さらに笑みを濃くして桃子が続ける。

「ホント、言つた通りそのままだったわ。無口で、無愛想で、頑固で、融通が利かなくて、鈍感で、頭ツンツンで、意地悪で、嫌味ばかり言つて、容赦のない、とっても厳しい人だって」

「お、お母さんーっ!？」

「・・・ほう、それはなかなか面白いことを聞いたな。オレの知り得ないところで、まさかそんな認識が飛び交っていたとは。感謝するぜ、後で本人に聞かせてもらつとしよう。ククク・・・」

飛影が目には邪悪な光を宿らせながら低く笑った。スターズ隊の二人と美由希、それにラインがひいひいと悲鳴を上げる。なのははわたわたと慌てながらオロオロしていた。

他には何か言っていなかったかと飛影が聞くと、「もうやめてーっ!？」と涙目になるなのはを桃子が押しのける。そして「うーん」と唸ったあとで優しい笑みに戻つて言った。

「そうねえ、厳しいけどとっても優しくて、頼りになって、かつこよくて・・・ずっと憧れて、いつか追いつきたい人だと言ってたわ」

「・・・・・・・・」

今までで最高の笑顔を見せながら桃子ははっきりと告げた。なのは青くなっていた顔を瞬時に赤に沸騰させる。飛影は少しばかり面食らったあと、驚いた顔を隠すように鼻を鳴らした。

それが単なる照れ隠しであることは一目瞭然であつたが。

「・・・そうか、ならば精々研鑽を積むがいい。一生を賭けたところで追いつけんとは思うがな」

「ひ、ひどーい！いいもんいいもん、いつか絶対に追いついて見せるからね！」

飛影の辛口になのはが頬を膨らまして宣言をする。それを飛影は短く息を吐きながら笑みを浮かべた。

『すぐに追いついてやるぜ。ヤツにも、お前にもな』

かつて自分が放った言葉が脳裏をよぎる。人間最強の名をほしいままにした元霊界探偵に向かって、一度は死んだものの挑んでいった『アイツ』。それに追いつくと誓い、そして飛影は成し遂げた。

いつの間にかヤツは魔界の王にまでなってしまうているが、サシなら五分に持ち込める自信はある。

飛影はそこでふと思った。あの時宣言を聞いたアイツも、今の自分と同じような気持ちだったのだろうか、と。

「ふふ、その意気よなのは。どうせなら一緒に歩いてくれるような仲になるとお母さん嬉しいわねー」

「お、お母さんッ!？」

「クシシシ、いい感じじゃないの」

「む。桃子さん、それはなのはにはまだ早いと・・・」

悪乗りする桃子に顔を真っ赤にして焦るなのは、そして忍び笑いを零す美由希と娘とはなんたるかを語りだす士郎。絵に描いたような理想の家庭がここに存在した。

飛影は呆れつつも目を離すことはなく、スターズの二人は笑って見ている。リインはアーモンドココアを飲みながら、自分の主たちのことを重ねていた。

そこからは他愛もない談笑が続いた。六課の出来事から、飛影たちの指導まで、思いつく限りのことを話していく。最初は渋っていた飛影だったが、桃子の雰囲気につられケーキまでご馳走になっていた。彼自身、楽しいと思っていたのかもしれない。

だが楽しい時間というのは瞬く間に過ぎていくものだ。そうこうしているうちに集合の時間がくる。スバルとティアナはお礼を言っ

て店を出、なのはも持たされたお土産を持ちながら扉を潜った。それに飛影も続く。

「飛影くん、ちょっといいかい？」

扉に手をかけようとした際、飛影は士郎に呼び止められた。この男からは強い闘気を感じる。飛影が少し警戒を施して振り向くと、その両隣には桃子と美由希の姿もあった。

「オレに何の用だ？」

「そんなに身構えなくてもいい。ただ、僕は君に言いたいことがあるんだ」

士郎の言葉に桃子と美由希が頷いた。警戒から一転、飛影は疑問に満ちた表情になる。何がなんだか分からないという状況に士郎たちは息を深く吸い込み、

「ありがとう。かつてなのはを救いだしてくれたこと、本当に感謝している。あの子が今も元気にいるのは君のおかげだよ、飛影くん」

全員一斉に頭を深く下げた。士郎など机に届かんばかりに掘り下げている。予想外のことに飛影は目を見開いたが、彼の言いたいことは理解できた。

おそらく自分が過去に遡った時、彼女を土蜘蛛から救ったことだろう。そのときもう一度夢を目指すための希望を与えられたとなのは自身も語っている。だが、あれは事故によって起こった偶然だ。そして助けたのも自分の気まぐれにすぎない。

「礼を言われる理由がわからんな。あの時あそこで会ったのも、オレがあいつを助けたのも、今こうしているのも全てが偶然にすぎん。最後のはヤツ自身の努力だったろうし、生きているのも単なる気紛れによる結果だ。感謝される謂れはない」

「けど、その偶然と結果が重なって今があるわ。あの子が笑ってられる、あの子が生きていられる、あの子達が夢を掴むチャンスを持つことができる現在がある。それは本当に尊いことだと私は思うの。だから、あなたがなんと言おうと私たちは感謝してる。飛影さん、本当にありがとう」

今にも涙を滲ませそうなほど輝いた桃子の瞳に自分が映る。その目に宿った母としての慈愛に、飛影は懐かしさと共に強烈な寂寥感を覚えた。

『お前が抱いているのは、氷河の国に対する激しい憧れだ』

一昔前に？に言われた言葉がよぎる。かつては憎み、皆殺しにしようと思っていた氷女たち。自分を捨て、自ら死を選んだ母親の意志。母の愛情に触れることはできなかったが、自分の中に答えを見つけることが出来た。

自分が預けた形見の氷泪石を持つうちの一人、高町なのは。彼女もまた飛影に憧れているのだという。飛影からすればその心は全く読めないのだが、その対象が力であれなんであれ、求め続ける意志を持つ限り、道を違えない限りは見ておくのもいいかもしれない。

高町なのはが、その答えを見つけるときまでは。

「フン、ヤツが今後どのように生きるのかは知らんし憧れなんぞ関係ない。だが、本気でオレに追い付くつもりなら、それこそ死ぬ瀬戸際までやらねばならんだろうからな、ヤツが潰れそうになったときは引き上げてやるでしょう。が、そのときは一切の容赦もせん。それだけは覚えておけ」

「ええ。なのはが道を間違えた時は、張り倒しても分からせてあげて。あの子思った以上に頑固だし、思い込みも激しいから。手を焼くこともあるだろうけど、これからものはをお願いします」

桃子の言葉に飛影はふつと笑う。そして、それに答えることなく扉を潜って出て行った。名残惜しげにドアベルが鳴り響くなか、士郎たちは去っていった飛影の背中を思い出しながら笑みを零す。

「
強いな、彼は」

士郎が視線をそのままにぼつりと呟く。美由希がそれに同調するように頷いた。

「あ、お父さんもそう思う？ やっぱり只者じゃないよねえ、彼。ずっと見てても隙の「す」の字も見当たらないんだから。ありや恭ちゃんでも瞬殺かな」

「いや・・・彼は確かにとてつもなく強いだろうが、それだけじゃない。ただ強いだけ、ただ力を持つだけじゃなく、その力を根底で支える『強さ』がある。やれやれ、まさか生きているうちにあんな青年に会うことになるとはなあ・・・」

士郎の言葉に美由希が首を傾げる。桃子は娘の考えぶり見て、心から穏やかな表情で笑った。

「ふふ、美由希もそのうちわかるわ。でも飛影くんがとっても頑固なのは思ってた通りだったけど、鋭く見えて意外と人の感情には鈍感そうだったから、アレは一筋縄じゃ無理。

なのはも大変な人を相手にしたものね、どうやったら貰ってくれるかしら？」

「も、貰うつ！？ちょ、桃子さんつ！？」

「あちゃー、お母さんに口クオンされちゃったみたい・・・ご愁傷様です、飛影さん・・・」

美由希は去っていった扉に向かって十字を切る。同時刻、歩いていた飛影が珍しくくしゃみをしたことと、何か言いようなない感覚が背中に走ったと後に語っている。

第十一話 出張機動六課（邂逅編） 地球へ（後書き）

アリサとすずかとの出会い、そしてクロス作品で十八番ともいえる士郎たちとの邂逅でした。

いやー、キャラの原作らしさを出すのに苦労致しました。アリサにすずかなど、原作で人気の高いキャラなのにStrikerS編にはほとんど登場してないので、結構それらしく書けるように努力したんですが、いかがでしたでしょうか？

士郎たちとの出会いも、当初はけんか腰で飛影に戦いを挑むといった流れだったんですが、書いていくうちに方針が変わりました。変わってしまったともいいますが、それはそれとして。

ここで予告なのですが、地球編はあと2〜3話ぐらい続きます。バトルの方の展開を楽しみにされている方は今しばらくお待ちくださいませ。

では、今回はこの辺で。次回もよろしくご拝読いただけますよう。

それでは、ツァイツェン再見！

第十二話 出張機動六課（事件編） 〵 スーパー銭湯様々（前書き）

四日ぶりの定期更新、なんとか間に合わせる事ができました。

つ、疲れた・・・今回は少しだけ文章量も多いです。たった数行増えただけなのにかなりの労力を使われた気がします。

それでは、第十二話のはじまりはじまり〜！

第十二話

出張機動六課（事件編）

ゝ

スーパー銭湯様々

「封印処理完了。うん、ちゃんと安定領域に達してる。よく頑張ったねキャラ」

「あ、は、はい！ありがとうございますっ・・・えへへ」

ロストロギアの封印を確認し、なのはがキャラに向かって微笑みかけた。封印作業を買って出たキャラはそれが平穩無事、事なきを得て完了したという事実にはっと息を吐きながら封印したロストロギアを握り締めた。

「やったね！」

「頑張ったじゃない」

「すごいよキャラ！」

スバルとティアナ、エリオも笑顔でやってきた。ロストロギアがサーチャーに引っ掛かったのはつい先ほどのこと。

エリアサーチが指し示す場所へやってくると、そこは防御機能が働いたロストロギアが既に暴走しかけていたが、危険性がないことから新人たち四人に任されたというわけだ。そしてスバルの力とティアナの指揮、エリオとキャラの連携によりなんとか対象を封じ込めることに成功したというわけである。

「みんな頑張ったね、よくやったよ」

「ま、及第点つてとこだな」

「フ、鍛えがいがある」

フェイトと副隊長の二人が近づいてきた。フェイトは満面の笑顔で、あとの二人は苦笑いと薄ら笑いでとそれぞれ違うが、その声色にはどれも嬉しさが浮かんでいる。

「意外とはやく終わってもうたな。皆、ご苦労様や。あと、ご苦労ついでに伝達事項があるで」

『伝達事項？』

きよんとするスバル達に「そや」と言って、少し楽しそうにはやては全員を見渡す。なのは達も予想外だったのか、何だろうと彼女に注目していた。

「この前騎士カリムから伝達があつてな、ここんどこハードスケジュールだったこともあつて、一日ぐらい全員で休養せえ言われたんや。それで、いい機会やからこつちの世界の時間で明日の朝八時までは臨時休養にする。宿泊は現地協力者がしてくれるから心配せえへんでな。もう夕方に近いから時間的には少ししかあらへんけど、私からみんなへのちよつとしたご褒美や」

はやてが満面の笑みからウインクを飛ばす。スバル達は少し呆けていたが、それが特別休暇のお達しであることに気づくや否や、その表情が笑顔に変わった。スバルやキャロは両手を振り上げて喜び

を弾けさせ、エリオは心からの笑顔を讃え、ティアナはそれに毒づきながらもその顔を笑みに崩している。

そこに飛影たちがやってきた。三人ともどこことなく楽しそうな顔なのは気のせいではないだろう。

「それはいいな。最近は皆頑張ってたからね、少しくらい休みをとっても罰は当たらないさ」

「フン、あの程度頑張っている内になど入らん。オレからすれば耐えられて当然だが、気づかんうちに潰れられるよりはマシか。それに、こちらもお守りばかりでは堪らんからな」

「ま、飛影の言ってることは正論だな。相変わらず素直じゃねえが、まだまだこれからってもんよ」

「殺すぞ・・・」

桑原のセリフに殺気の混じった返答を返すが、なのは達はそれに苦笑を返すにとどめた。彼の優しさは非常に分かりにくいが、それはいつも自分達のためを思っていることだと分かる。

氷のような厳しさと炎のような苛烈極まりない気性のなかにある、雪解けを促す風のような慈愛の光。飛影と会ってまだ一月程度だが、彼が見た目や表に出す態度よりずっと優しい男性であることを彼女たちは気づき始めている。

シャーリーやルキノは今だその意見に首を傾げているし、本人に言ったら真っ向から否定されるだろう。耐え難いお仕置きつきで。

「でも、どうしよう。街に繰り出すにはちょっと遅いし、このまま時間潰すには少し長すぎるし……」

スバルが時計を見ながらむう、と考え込んだ。確かに、休暇というには中途半端な時間である。のんびりしている時間はないが、ただ過ごすには長いことも確かだ。桑原もスバルに同調して言う。

「だなあ。鳶^{とび}にミジンコ、スルメに辛子ってのはまさしくこういうことだぜ」

「帯に短し襷^{たすき}に長しですよ、桑原くん」

「どこまで奇天烈な脳内変換をしているんだ。頭が沸きすぎて味噌煮にでもなったのか？」

「というか、今の言葉からどんな状況が思い浮かぶのかしら……」

蔵馬のさりげない訂正ツツコミ、そして飛影とティアナの呆れたようなセリフに一同は笑いあった。と、そこで今まで黙っていたなのはが口を開いた。

「行くところがないのなら私達に提案があるんだけど」

「提案？なのはさん達、何所かいいところ知ってるんですか？」

スバルが質問すると、なのははにつこり笑って頷いた。横にいたフェイトも同じなのか、その表情には僅かな期待が浮かんでいる。

「うん。私達もものとは行ったことがある所なんだ。あそこならアリサ達も呼べるし、結構久しぶりでこの時間からなら調度いいと思

うんだけど、どうかな」

フェイトが確認の意を込めて尋ねると、スバル達が頷いた。蔵馬と桑原もOKサインを出しているし、飛影も好きにしろといったような態度である。はやてがうんうんと首を振った後、全員を見渡して手を高く振り上げた。

「決まりやな。ほんならなのはちゃん達の案採用しよか。いざレッツゴーや！」

『オー！』

女の子特有の黄色い声が弾ける。飛影たちは各々の反応を見せながら、それを遠巻きにしていた。

こうして、六課のメンバーははやてに同調して拳を振り上げつつ、意気揚々と目的地に向かうことになったのだった。

- Side change -

カポーン

石畳の床に子気味よい音が響き渡った。

部屋一体に立ち込める白い湯気。曇ったガラスに隅に均等に重ね

られた風呂桶。湧き出るジェットバブルに流れ落ちるお湯の音。そして後ろに描かれた古風な富士山。

心が洗われるような日本の文化と伝統の一滴、銭湯である。その一角に湯につかった四人分の姿があった。言わずもがなの飛影たちである。桑原が頭に乗ったタオルを落とさないように伸びをした。

「カーツ、やっぱりいいねエこういうデカイ風呂は。六課じゃ忙しいのと時間制とかでシャワーが多いが、ありやどうも入った気がしなくてなア。これぞ日本人の醍醐味つてもんだ」

「少しは静かにできんのか。どこまでも騒がしいヤツめ」

「あはは・・・」

「まあまあ、久しぶりなんですから大目に見てあげてください。それにこういった感じで羽を伸ばすのも、お風呂での作法の一つなんですよ」

飛影達はその身体を湯に沈めながら、他愛も無い会話に花を咲かせる。桑原と蔵馬は久々の、飛影とエリオは初めてとなる大風呂というものを楽しんでいた。

無論、六課にも風呂というものはある。だが、時間制によって女子と男子が分けられている上、このところ忙しい日々が続いたのでシャワーなどで手っ取り早く済ませるのが常だったのである。それも相まって、銭湯のような大浴場に来るのが久々となる桑原と蔵馬の二人も、少し気が乗っているようだった。

「フェイトさん達から聞いたことはありませんけど、こんなに気持

ちのいいものだったんですね。少し気持ちが分かった気がします」

彼ら三人の最も左側、飛影の隣にいたエリオが顔を拭いながら三人に話しかけた。ここに来ている機動六課メンバーで唯一の男である。

「兄さん、さっきはありがとうございました。それとすみません、嫌な役回りをさせてしまって・・・」

「フン、お前がいつまでもハッキリせんから少しイラついたただけだ。フェイトと入りたくないのならそう言えればいいだろうが」

「い、いえっ！決して入りたくないわけじゃないんですが・・・それよりも恥ずかしい気持ちが強いので・・・」

そう言いながら、エリオは顔を赤くして俯いてしまう。事の発端はつい先ほど、エリオが十歳以下なら大丈夫という理由でキャロとフェイトに女湯に誘われていた時のことだ。

彼女ら二人を始めとして女性陣はエリオの入ることに反対しなかった。統計的に見れば寧ろ賛成多数だったのだが、精神成長の早いエリオには、女性と一緒に風呂に入ることがどうにも恥ずかしかったらしい。そこでエリオは、気遣いに感謝しつつもお断りという形を取ることにした。

だが、いざフェイトとキャロに断りの念を伝えると、二人は一瞬で落ち込んでしまったのだ。キャロは雰囲気をしゅんとさせ、フェイトに至ってはその目尻に涙すら溜めて。「入ってくれないの？」という言葉が聞こえてくるような、そんな二人の無言の圧力には悪意こそなかったが、だからこそエリオは困ってしまった。

だが、そんな押すに押せず引くに引けない状況のなか、エリオがどう断ろうかと頭を巡らしていたとき飛影が現れた。そして話を聞くや否や、コイツと話したいことがあると言ってエリオの首根っこを引っ掴み、そのまま男湯へと連行したというわけである。エリオからすれば、飛影に助けられたような形となっていた。

「エリオも勿体ねえよな！。年齢的には合法で相手は別嬪ちゃんばつか、しかも向こうからの誘いとくりやあ奇跡の確率だ。こんなチャンス早々転がってるもんじゃねえぜ？見れるうちにしっかり見といたほうが後々いいと思うけどな」

「ぶっ！？ば、僕はそんなつもりじゃ・・・」

「桑原くん、純粹無垢な少年にあまり変な事を吹き込まないように。今のはちよつと不謹慎ですよ」

蔵馬が軽く睨む。エリオは標的から外れたためかほつとしていた。

「いらん心配をすんじゃねえよ蔵馬。オレが雪菜さん以外に興味ないの、知ってんだろが」

「雪菜？一体誰なんですか？」

初めての名前をエリオが鸚鵡返しする。飛影は不機嫌そうに目を閉じ、蔵馬はそれを横目で捉えながら柔和な笑みを零した。

「桑原くんの奥さんですよ。今は俺達の世界で育児の真っ最中ですよ。けどね」

「え……ええええっ！？和真さんもう結婚して……というか、お子さんがいたんですか！？」

「……オイ。何だエリオ、そのものすごく意外そうな顔は」

「確認せんでもそうに決まっているだろう。そろそろ自分の失敗面を自覚した頃だと思ったが」

「飛影テメエ！いい加減ひっくり返すぞコラ！」

桑原がキシヤーツと吼えるが、飛影は無視して立ち上がった。そして広い屋内を歩き、一面ガラスの一角にある扉へと向かう。

「飛影、どこに行くんですか？」

「ここは五月蠅くてかなわん。『露天風呂』とやらに行ってくる、あっちは人がいないようだからな」

「あつ、じゃあ僕も行きます」

飛影が扉を潜っていく。その後ろをタオルを腰に巻いたエリオがぺたぺたといっていた。いないというからにはそうなのだろう。もしかすると邪眼で先に確認したのかもしれない。邪眼の力をそんなことに使うのはどうかと思うが。

相変わらずの彼に蔵馬が苦笑していると、横にいた桑原が「あり？」と首を捻った。

「どうかしたんですか？」

「ああいや、そういやさっきの注意書きに露天風呂は混浴って書いてあった気がしたんだが……」

「混浴ですか……まあ大丈夫でしょう。女性はそういったことに抵抗があるはずですし、いたとしてもかなり年配の方だと思いますから」

蔵馬の考察に桑原はまあそうだな、と軽く答えて風呂から上がり、今度はサウナの方へ入っていった。蔵馬は一度曇りガラスで見えない露天の方に目をやり、『死海と同じ濃度!』という看板が掲げられた塩風呂のほうに向かう。自分が考えたうちで最も面白……もとい最悪パターンではお約束の事態、『鉢合わせ』が起ころうとしていることなど知る由もなく。

スーパー銭湯海鳴。廃れ始めている銭湯文化を切り盛りし、海鳴に娯楽と癒しを与えている本格的な風呂屋さんである。その風呂の種類は二十を超え、どんなニーズにもリーズナブルな価格で応えるという庶民の味方だ。

名物は様々あるが、中でも一番の注目度を誇るのが大きな露天風呂。白く濁った湯はお肌スベスベの効果があり景色の良さは抜群であるが、注目すべきはそこではない。この露天風呂、実は混浴仕様なのだ。雑誌やテレビなどでも取り上げられたため、海鳴に住む人々ならほとんどが知っている。

だが、離れた土地に住む者にそんな勝手は通用しないわけで。

「なっ、なのは、フェイトッ!？」

「飛影(くん)っ(と、エリオ)!？」

こういう事態が起こりうることもある。

現在風呂場には四名。先に入っていたのは時空管理局民間協力者の飛影に同じく新人隊員のエリオ。そしてそこに入ってきたのが、

「ど、どどど、どうして飛影くんがっ!？」

「エリオまで・・・いつの間にこっちに來たの？」

若手ナンバーワンの期待株、不屈のエース高町なのはと、同じく若手の執務官にしてクロノ・ハラオウン提督の義妹、フェイト・Ｔ・ハラオウンであった。二人とも予期せぬ先客に呆然としている。だから忘れていた、自分達の今の姿を。

「そ、それは此方の・・・ッ!」

飛影がかち合ったその目に背を向けることで、一瞬にして視線を外す。後ろから見える耳は本当に珍しく耳まで真っ赤だった。エリオも目をぎゅっと瞑り、顔から湯気を吹き出しながら二人に叫ぶ。

「ふ、二人とも、とりあえず前を隠してください!」

「え?前、って・・・にゃ、にゃあああっ!？」

「きゃあうっ・・・!？」

エリオの進言に、なのはとフェイトは悲鳴を上げて湯船に飛び込んだ。久しぶりの銭湯ですっかり気が抜けていた二人は、なんとタオルを脇に抱えたまま露天風呂に来ていたのだ。そして、風呂の中から誰が来たのかと見ていた二人とバツチリ真正面から遭遇。この後の展開は推して知るべしである。

(ま、また見られちゃった・・・)

(し、しかも今度は全部、だよ・・・?うう、恥ずかしい・・・)

デジャヴを感じながら二人念話で会話する。以前、飛影には一度裸に近い姿を見られたことがある。だが、あのときは少しはあるものの布で隠れていたし、何よりまだ幼い子供だった。だが、成長して人並みの羞恥心と体つきになった年頃の少女に対して、この手のハプニングは恥ずかしいなんてものではない。

「ど、どうなってるんでしょうか？」

「オレに聞かれても知らん!貴様ら、何故男湯こつちに来た!？」

「そ、それを言うなら飛影くんだって・・・」

「あ、なのはちょっと待って・・・何か注意書きが書いてある」

フェイトが風呂の脇にある白いプラスチックボードに目をやり、視線を上から下に順々に走らせていく。すると、ある一節を見てフェイトが「あっ」と声を上げた。そして非常に申し訳なさそうな顔

をしなから、指をつき合わせて言った。

「ええつとね、ここ混浴つて書いてある、よ・・・？」

「「こ、混浴っ！？」」

なのはとエリオが驚きの声を上げる。飛影は混浴と言う言葉を知らないので、エリオから教えてもらっていた。すると、すぐにその顔が次第に苦虫を潰したように変わっていく。

「き、貴様らには悪いが今は戻れ。見えなくなったら俺達が出て行く。それから入れば問題ないだろう・・・」

背を向け、少しどもりながら飛影は告げる。その声にはいつもの自信も重さもない。普段は冷静冷静な彼も動揺しているということだろう。自分が超スピードで出れば解決することを失念しているあたり相当だ。

だが、それだけのことが二人には嬉しかった。あんな姿を見られた時は死にそうなほど恥ずかしかったが、飛影が自分達を意識しているということを実感できたのだ。もしこの姿を見られても、『なんだ、貴様らか』といった感じの皮肉しか返ってこなかったら、二人一緒に泣き寝入りするところである。

だから、二人は踏み出すことが出来た。いまだ動かない飛影と、俯くエリオを視線で捉えて二人で笑い合つと、意を決したように同時に立ち上がって、

「「し、失礼します・・・」」

「なっ!？」

「ええっ!？」

飛影の隣に腰掛けた。その距離はもはやゼロ、肩が触れ合うほど近くというか触れ合っている。彼女たちの熱がそのまま伝わってくるようだ。人の半分ほどのスペースをおいてエリオも座っている。

飛影は驚いて二人を見ようとするが、二人の姿を思い出し寸前で目を閉じて前を向く。その柳眉は険しく反り立ったままだ。言葉を発するまでもなく何のつもりだと語っている。エリオも至近に座った二人の行動にオロオロするなか、なのはが遠慮がちに口を開いた。

「こ、ここは混浴だから・・・も、問題ないよ？」

「そ、それに飛影は変なことしないだろうし、お湯が真っ白だから簡単には見えないし、エリオとも入れるし・・・だから」

「こうしててもいい？」と二人が声に出さない言葉で問いかける。かつての飛影なら迷惑だと言で切り捨てただろう。だが、何故かそうする気にはなれなかった。

今の彼の中に彼女たちへの恋愛感情はない。仲間としての好意はあるだろうが、それだけだ。そしてここまでされてもその理由もわかっておらず、愛だの恋だのという感情を彼が持つことがこの先あるのかどうかすらも分からない。だが彼女たちの精一杯、飾りも何も無い二人の気持ちを振り払えるほど、現在の彼は冷徹ではいらなかった。

不思議かつ不愉快だが、自分は変わってしまったのだろう。あの

幽助^{バカ}たちを始めとする、様々な出会いによつて。だから彼は出来る限り不満げな顔つきと声色で、最近口癖になりつつある言葉を口にしました。

「勝手にしろ・・・」

- Side N a n o h a & F a t e -

「勝手にしろ・・・」

不機嫌そうな返答を最後に飛影は黙り込んだ。その声に私達はぎこちなく頷き返し、彼の傍に完全に腰を落とす。温泉の温度が少し上がったような気がした。

自分達のすぐ脇、今にも触れそうなほど近くに目を瞑った飛影の姿がある。その隣にはエリオが顔を真っ赤にして、彼と同じく身体を堅くしていた。

おそらく自分達はもつと真っ赤になっていることだろう。色々な意味でのぼせないだろうか。わりと本気で心配だ。

（フェ、フェイトちゃん・・・と、隣に、ひ、ひひ飛影くんが、いいいいるよ・・・）

（う、うん・・・ま、まさかOKしてくれるなんて思わなかったから・・・うう・・・恥ずかしすぎて、顔が上げられない・・・エリオもいるのに・・・）

念話で舌を噛むという稀有な体験を、私達は今一身に受けている。それだけ混乱しているということだろう。そもそも『あの』飛影と一緒に、それもお互い生まれたままの姿という壮絶すぎる状況下で、すぐ隣にすることが信じられない。

というか、勢いだけでここまで来てしまったので、自分たちがどれほど大それたことをしたのかということをして二人は今更のように自覚していた。彼と並んで湯に浸かったはいいが、身体は極寒の地に放り出されたかのごとくカチンコチンに硬直している。

飛影の身体はその背丈からは考えられないほど引き締まっていた。鍛え上げられた腕や背中を見るたびにドキリとしてしまうし、頭もぼうつとして顔が熱くなってしまう。戦いなどによる傷跡もそこかしこに見え、彼が戦いの日々を生きてきたことを感じさせた。

（ねえ、フェイトちゃん。飛影くんの背負っているものって、何なのか・・・？）

（それは・・・）

なのはが視線と共に向けた言葉に、フェイトが声を詰まらせた。答えに窮しているのではない、彼女も知らないが故に知りたいと思う本心と葛藤しているのだ。

思えば、二人は驚くほど飛影のことを知らない。和真や蔵馬などのように一緒にいた時間も長くはないから、彼が何を思いここに

るのかは分からない。けれど、確かなことが一つあった。

（私は飛影が何を経験してきたのか知らない。ここに来るまでに、私達なんかじゃ想像もできないことを経てきたのかもしれない・・・けど、それでも私は飛影と一緒にいたい。どんな過去があったって、何度突き放されたって、手を伸ばし続ければいつか届くかもしれないから）

彼は何も寄せ付けようとしない。それこそ、今も私達とはどこか距離を置いている感じがする。長く時を同じくする蔵馬たちでさえ彼の根底は知らないのだ、それも仕方がないことなのかもしれない。

だが、だからこそその背中を追いかけていきたくなるのだ。

遠く、たった一人で己が道を行く彼の後姿に、知らず心が惹きつけられる。語らない背中に思わず声を掛けたくなる。駆け寄って思い切り抱きしめたくなる。

こんなことを言ったら彼はきつと怒るだろう。けれど、この思いは偽りない私達の本心だった。

そして自分達にすら制御が利かなくなる恐れも内包する、幾度となく繰り返し返されてきた人の性さが。それがおよそ世間一般で言われる所のものだということは、彼を探していた八年の間にはつきりとした形になっていた。

（・・・私、飛影くんともっと分かり合えるようになっていたいと思う。飛影くんが嫌わない限り、ずっと一緒にいたい・・・だから頑張ろうね、フェイトちゃん。あ、でも抜け駆けは禁止だよ？）

（うん・・・私も・・・私も、飛影がくれたモノよりもっと多くのものをあげたい。だから、飛影の一番近くに行けるように私も頑張る。最近、ヴィータとかシャルも飛影のこと意識してるみたいだけど、負けるつもりはないから・・・）

確認と宣戦布告を行い、しかし二人の間に険悪な空気はない。望むことは同じだけど、お互いに幸せになって欲しいのは同じなのだから。

どちらともなく笑みが零れる。そして私達はもう一度視線を交わして笑い合つと、仏頂面のままお湯につかる彼に左右から身を寄せた。

- Side out -

「ふう、さっぱりした。久しぶりに来たけれど、こういうのもたまにはいいかな」

「おうよ。江戸っ子なら銭湯つて相場が決まってるからな」

蔵馬は長い髪にタオルを当てながら、桑原は自慢のリーゼントを整えながら満足そうに呟いた。その後ろからはエリオ、そして飛影がやってくる。

だが、どういうわけか二人とも様子がおかしい。エリオは風呂上りを考慮しても顔が赤すぎるし、飛影は入る前よりも不機嫌そうに

している。蔵馬たち二人が首を傾げてそのことを尋ねようとしたとき、騒がしいロビーでも貫き通るような大声が響き渡った。

「えええええっ！？なのは達、露天風呂へ入ってたの！？あそこ混浴なのよっ！？」

声の主はアリサだった。蔵馬たちがそちらへ向くと、おどおどしながらも首を縦に振るなのはとフェイトの姿が見える。

アリサの言葉を聞いてロビーにいた男性の大半が、首をぐりんと回した。そしてフェイト達を捉えると一様に涙を流し始める。流石にあからさまに悔しがる声は聞こえてこないが、その表情は口以上にものを言っていた。

なかにはハンカチを噛み締めているものまでいる。頑張れば涙も流せそうだ。

「男は！？というか変なことされなかったでしょうね！？」

「男・・・」

「変なこと・・・」

二人が同時に飛影の方を向く。そして無自覚に目が合い・・・ボンツという音と共に一瞬で沸騰した。

瞬間湯沸かし器もびっくりな大記録である。顔面沸騰世界選手権なんてものがあれば、上位入賞どころか優勝候補の筆頭になること間違いなしだ。熱への変換効率とかを調べれば、近年深刻になりつつある電力不足にも貢献できるのではないだろうか。

「ひ、飛影さんとお風呂……はうつ!？」

「うわあっ!？シャマル先生、鼻血、鼻血!」

「むう……何か納得いかねえ……」

「やれやれ……」

あつちはあつちで盛り上がっているようだ。倒れ伏してだくだくと血を流すシャマルをキャロが必死に看護しており、頬を膨らませるヴィータをシグナムが呆れ半分といった様子で見ている。

と、そこで飛影の両肩がポンと叩かれた。見ると、後ろにいた蔵馬と桑原が何とも微妙で居心地の悪そうな顔をしている。それでいて、何だかすこぶる不愉快かつ殴り倒したいほどに生暖かい感じがした。それを打ち払うが如く、意を決したように蔵馬が口を開く。

「飛影……君は俺達の大切な仲間だ。しかし、だからこそ簡単に言えないこともあるだろう。だけど、これだけは言わせて欲しい。君の趣味をとにかく言う気はないが……その……公共の風呂場で、しかも二人同時というのは流石にどうかと……」

「蔵馬ッ! 貴様、一体何の話をしている!？」

「いや、俺あ安心したぜ。付き合いは長えのに、浮いた話の一つもなくてちつと心配だったからな」

「馬鹿げた事を抜け抜けと……本当に消すぞ貴様……!」

「に、兄さん落ち着いて・・・」

ぶつとい青筋をいくつも浮かべ、周囲に殺気を撒き散らし始めた飛影に横にいたエリオが仲裁に入る。が、一緒にいたことは確かなので飛影も強く出れない。アリサがフェイトらに懸かりきりで彼らとの関係に気付いていないのが唯一の幸いであつた。

「あー、いいお湯だつたあゝ　なのはさくん、これから一緒にアイスでも・・・つてどうしたんですか？」

暖簾を潜つて出てきたスバルが空気が何か違うことに首を傾げる。それを機におかしな空気が流れていき、一呼吸が置かれたあと、誰ともなく溜息を吐いた。

「ま、飛影くんじゃ間違いは起きんわな。からかうんは命がけになりそうやし、それはまた今度にしようか。よっしゃ、まだまだ今日はこれからや、皆これからアリサンち行くでー！」

「・・・はい！」「・・・」

フォワード四人が声を揃える。なのは達は解放されたことにほつと息をついてはやとヴォルケンリッター、そして四人についていた。飛影らも少し遅れてそれに続く。なのはたちはまた一つ、飛影たちとフォワード四人にとっては新たに、この地球での思い出が増えたのだつた。

第十二話 出張機動六課（事件編） ～ スーパー銭湯様々（後書き）

一昨日まではカンカン照りの日が続いていたのに、昨日の凄まじい豪雨に驚いている作者であります。

しかし家から出れなかったおかげで小説を書く時間がとれ、こうして間に合わせることができたので結果的にはよかったのかな？

さて第十二話です。今回の目玉は決して外せないお風呂イベントでした！ドラマCD編でも結構人気が高いところじゃないんですかね。ちなみに考えた末、ロストログアの発見及び捕獲のタイミングを原作とは逆にさせて頂きました。このほうが後へ続く流れを決めたときに自然だったので。

お風呂イベントは最大の見せ場であると同時に、最大の山場でもありました。わかつてはいましたが・・・難しい。というか、飛影をうまく操縦できない！展開とかも強引なんてものじゃないだろうに！

このことに反省はしておりますが、どうしてもこういうお色気シーンを入れたかったんです！作者の願望・・・げふんげふん、深い考えあつてのことです。ああ、何か空き缶を投げられる予感！

なので、読者サービスということではひとつお願いします。サービスにはちょっと足りないかもしれませんが。

さて、地球編も残すところが少なくなってます。予定だと、あと一話で終了すると思います。そこからはまた少しバトルなどを交えつつ、書いていくつもりです。

作品評価も感想などと並んでどうぞよろしくです！

それでは次回もまた皆様にお会いできることを願って。
再見！^{ツアイツェン}

第十三話 出張機動六課（終結編） 〃 帰還（前書き）

お待たせいたしました、作者です。

今回は一日更新が延びてしまいました。本格的に忙しさはお盆あたりがたぶんピークなのでまだまだ先と言えますけど、卒論がなかなかまとまらずかなり焦っています。

小説を書くのは楽しいんですが、あれは書いてても拷問に近いですからねえ……

まあ、作者の愚痴はさておき、第十三話を投下致します。カオスなことになってますが、其処はどうか知らん振りで……ホント、お願いします……

では、どうぞ。

第十三話

出張機動六課（終結編）

ゝ

帰還

アリサ・バニングスの邸宅の一角。林に囲まれたテラスの周りには幾つものバーベキューコンロが並べられ、煙と共においしそうな匂いが上がっていた。

火と網の上の世話に追われる者、ひたすら食べ物をかきこむ者、それに対抗しようとする者、面白がってよそう者、肉ばかり食べて怒られる者、苦笑いで見つめている者などなど、e t c . . . にかく楽しみ方は人数の分だけ存在する。

「はいはい、おかわりはまだあるからがつつかないの」

「はぐはぐ . . . おー、焼肉はやっぱおいしいね」

小柄なオレンジ髪の少女が、紙皿の上に山と積まれた肉を次から次へとその口へと放り込んでいく。その頭には、人には似つかわしくない犬耳のようなものがピクピクと揺れていた。

彼女の名はアルフ。フェイトの使い魔であり、彼女の家族でもある狼だ。彼女も一昔前まではフェイトとともに戦っていたのだが、フェイトが力をつけてきたため、するべきことを彼女のサポートから彼女の帰る場所を守ることへと変え引退した。

本来は成人した女性体の姿なのだが、現在はフェイトへの負担を考えてエネルギー節約型のロリ体型になっている。

その隣にはアルフが守るべき家族の一人、エイミー・ハラオウンが高町家から付いてきた美由希と共にいた。彼女もアルフと同じく引退の身であり、現在はクロノ・ハラオウンの妻として二人の子供の育児に追われる身だ。

彼女は親としての自覚ゆえか、それとも元来からの世話焼き気質だからか率先して供給側にまわっている。

「はい、飛影君や桑原君たちもどうぞ」

「おお、あんがとなエイミーちゃん」

「オレはいら「有難く頂きます。ほら飛影、早くしないと冷めますよ？」チツ・・・」

桑原は遠慮なくといった感じで、片っ端から肉や野菜をパクついている。飛影は、蔵馬から受け取らされた肉を静かに食べはじめた。蔵馬と彼を見ていたなのは達はそれに苦笑を零す。

「まあいいじゃないですか。魔界では戦いと修行、それにパトロールばかりだったことを思えば、楽しむ時に思い切りよくするのはいい刺激になりますよ」

蔵馬が諭すように言うと、飛影はフンと顔を背ける。それに横にいたアリサ達が反応した。

「修行にパトロールって・・・蔵馬さん達は妖怪の警察みたいなものなんですか？」

少し意外そうな表情でフォークを口から離したさすが、少し離れた蔵馬に尋ねる。他の面子も興味があるのか聞き耳を立てていた。

ちなみに彼女たちは自己紹介で飛影たちの内情は大体把握しており、彼ら二人が妖怪であることも知っている。アリサは驚きながらも「妖怪のイメージが変わった」と感想を零し、すずかは終始微妙な顔つきをしていた。

すずかの言葉に、蔵馬は「まあ罰ゲームみたいなものですよ」と無難な答えで返す。全員が首を傾げるが、飛影は今だ剣呑極まりない目つきで睨んでいた。そこへフェイトが苦笑しながらやってくる。

「あはは・・・でも、飛影がそんなことしてたなんて初めて聞いたよ。飛影はあんまり自分のことを喋らないから・・・たまに聞いても『わざわざ聞かせる義理などない』って言うし」

「アタシも言われたけど、相変わらず予想通りすぎる反応ね。というか、コイツに親切心とか気遣いを求めるほうがまず間違ってるのよ」

アリサが紙皿の肉をもしやもしや咀嚼しながら、フェイトの言葉に同意する。見下されたような態度に、飛影は面白くなさそうな表情で鼻を鳴らした。

「フン、貴様らに理解してもらうつもりなどないといったはずだ。煮えたぎった残念な頭では、そんなことも記憶しきれなかったのか？」

「アンタ喧嘩売ってるのっ！？売ってるのね！？も、もう堪忍ならないわっ！勝負よ飛影！今度こそとっちめてやるから、今すぐ表に

でなさああいつ！」

「あ、あの、ここ外ですけど・・・」

トラのごとく咆哮するアリサに、キャロがおずおずとツツコミを入れた。このままだと、遠からずバトルが始まる。エリオが顔を引

きつらせながら、話題転換のために努めて大きな声を出した。

「ぼ、僕はお風呂でいろいろ聞きましたよ！蔵馬さんが会社で結構重役らしいこととか、皆さんのリーダーだった方が今魔界で王様になつてることとか、和真さんがもう結婚してて子供もいることとか

「へえ、そうなの、楽しそうで羨ましいわ。それにしても驚きね、和真さんに子供がいたなん」

にこやかに返そうとしたシャマルの笑顔がその途中でピキッと固まった。なのは達を始めとして、はやてやヴォルケンリッターの全員、フオワード四人やアリサ達地球陣営も一様にエリオの方を向いて眼をカッ開き、その場が一瞬にして彫刻展と化す。無事なのは、僅かに驚きながらも「あ、私とおんなじだね」と笑っているエイミィと、「そうなんですかあ」と目を輝かせているキャロだけであつた。

そんな言いようの無い空気と、乙女達から溢れる重圧にエリオは
気圧される。そして、とにかく安全を確保しようと一歩下がろうと
して、

一歩どころか、十メートルは吹き飛ばされそうな突風がエリオを襲った。物理作用すら感じさせる勢いを全員から受け、エリオはたじたりしながら後退する。今なら、近くでニトログリセリンを詰めた大樽が爆発したと聞いても、きっと驚かない。

次に渦中の人物である桑原に視線が集中した。そして真偽のほどを問い、それが間違いでないことを知ると、全員がさらに大きな反応と声を上げる。

なのはとフェイトが顔を見合わせた。

「お、驚きの事実発覚だね・・・確かにエリオ達の扱いが上手いとは思ってたけど、ホントに子供がいたんだ・・・」

「で、でもエイミィも結婚してるし、別に不思議じゃない、よ・・・？」

「テストロッサ、そこで疑問系になるのは何故だ？」

シグナムが半眼で彼女に突っ込む。だがそれは言った彼女を含め、一同の総意であるのは確定事項であった。そもそも桑原の性格や容姿を鑑みて一番に来るのが「何故!？」という疑問符以外にありえただろうか。いや、ありえない（反語）。

「この男性陣で唯一・・・意外や、意外すぎる」

「ど、どんな人なのかしら・・・」

「コイツと吊り合うようなヤツだからな。いろいろ落書きが多いデカイバイクとかに乗りながらサラシ巻いてて、特攻服と木刀をいつも持つてる感じじゃねえか？」

「もしくは制服にバツテンマスク、赤毛にそばかすにロングスカートというのもアリです！」

「す、すごく想像できるところが恐ろしいですね・・・」

「でもでも！すごい大穴で、アイスっぽいクールビューティーな人だったりして！？」

「アイスってクールビューティーなの？エリオくん？」

「さ、さあ・・・？」

「でも、ヴィータの言葉ももつともね。想像できる範囲がかなり限定されてきちゃうもの。すずかはどう思う？」

「あ、あはは・・・ノーコメントで・・・」

「あたしも。蔵馬とかなら分かるけどねえ・・・」

「う、羨ましいッ・・・」

「いいな・・・」

「でも、意外と可愛い子だったりするかも？」

ひどい言われようだった。普段、彼がどんな目で見られているの

かがありありと分かる。

因みに上からはやて、シヤマル、ヴィータ、リイン、ティアナ、スバル、キャラ、エリオ、アリサ、すずか、アルフ、シャーリー、美由希、エイミイである。

「テメエら、揃いも揃って同じ反応とはどういう事だア！それとチビ子ども！雪菜さんはそんなイカツイなりしてねえぞ！」

「誰がチビ子だツノですかっ！」

桑原が激昂する傍ら、無自覚に喧嘩を売られたヴィータとリインがヒートアップする。仕舞いには、

「雪菜さんは俺の天使だ！バカにするのは許さねえぞ！」

とまで言い出す始末だ。その脇では飛影が静かに不機嫌になっていた。

「て、天使かぁ・・・き、きつとすごい綺麗な人なんだろうね・・・あ、会ってみたいなあ・・・（やっぱり派手な人かなぁ・・・）」

「そ、そうやな、興味はあるで・・・（きつと、たで喰う虫も好き好きってヤツやな）」

なのは達は顔の端を引きつらせながら、必死に笑顔を見せる。その裏ではかなりひどいことを言っているが、実に現実的であった。というか、容姿もなにも分からない相手なのだ、抽象的かつ主観的な言葉で推測できるわけがない。

だが、実際の方向性は異なるが、スバルとエイミイの言ったことが最も近かった。そして、彼の言葉が彼女らの予想を根底からぶち壊すほど正しいものであることを知るのは、もう少し後になる。

そんな感じで夜は更けていった。夕食が終わるころには、大量に用意したはずの肉や野菜は全てからっぽになっている。

明らかにこの人数にしては多すぎるはずだったが、スバルやエリオ、それに和真など、かなりの食い扶持を持つものがいたので、バランス的にはちょうどよかったのだ。買いすぎたのも幸いと言える。

「おーい、機動六課全員集合やー！」

そこへはやてが皆へと号令をかけた。本日は無礼講とのことだが、仮にも部隊長なので何事かと思いながらぞろぞろとやってくる。そこで彼女は全員の寝床がアリサたちによって用意されたことを説明した。

「朝七時半にここに集合、そのあと出立する。帰ったらまた訓練と仕事を再開するから、今日一日はしっかり休んどき。各自あまり羽目を外し過ぎないようにな。じゃ、解散！」

彼女の言葉には、いと遠足ばりの返事が響き、スバル達は方々に散っていく。はやて達はそれを見届けながら苦笑し、テーブルに座りなおす。どうやら明日からの予定やらなんやらを決定するために、簡易的な会議をここでするらしい。

「ごめんな、二人は提供者なのに片付け任せてしもって・・・」

はやてやなのはが申し訳なさそうに言ったのに対し、アリサとす

ずかの二人は気にしないでと笑顔で答える。

すると、片付けを始めるのを見た蔵馬と桑原が手伝いを申し出た。驚くことに飛影も加わってくれるのだという。二人は一度断ったのだが、再三の進言を受けたのと提案自体が有難い限りであったことも手伝い、苦笑しながら受諾した。

別荘の持ち主であるアリサと勝手知ったるなんとやらのすずかは的確に指示をだし、見る見るうちにテーブルが片付けられていった。

そして片付けも佳境に入る。出たゴミをまとめると、アリサはそれを飛影に手渡した。どうやら捨てて来いということらしい。

非常に気に入らないが世話になったのは確かだ。鼻を鳴らした飛影がそれを受け取って歩き出そうとしたとき、すずかが駆けてきた。

「あ、私も行きます。飛影さんだけじゃ、場所が分からないと思いますから」

「・・・ああ」

と、意外にも一度で承諾し、ドでかいゴミ袋を肩に担いだ飛影の横にすずかが並んだ。そのまま二人して離れたごみ置き場まで歩いていく。会話はなかったが、すずかは時折飛影のほうへ視線をやりながら気にするような仕草を見せていた。

そしてすずかに案内されるまま、大きめの倉庫のような場所に辿り着く。その中にある金属製の大きな箱に、飛影は自分ほどもあるゴミ袋をばいとぶん投げた。

ドスンという音と共に、袋が積まれた山の中心に着陸する。すずかは驚きながらも、笑顔を向けた。

「わあ、すごいですね。あの大きさのゴミをあんなに簡単に、それも正確に投げちゃうなんて。ふふ、アリサちゃんが見たら悔しがるかもしれません」

「・・・フン、見え透いた世辞はよせ。あの程度貴様でも軽くできるだろう。錆びついているとはいえ、その『血』の力は完全には消えてはいないはずだからな」

「え・・・!？」

すずかの顔から笑顔が消えた。表情をなくして顔を青くするが、どこかでそれを予想していたようにも見える。それを見て飛影は口の端をニヤリと吊り上げた。

「気づかれていないとも思っていたのか？こちらに気づいておいて、自分はそうでないなどありえん。平和ボケしている高町達ならともかく、オレ達は全員が初見で気がついている。蔵馬は匂い、桑原は持ち前の靈感、オレは僅かにもれる妖気からな。貴様は、いや貴様の血筋には」

「はい。貴方達と同じ世界の住人・・・魔界に住む妖怪がいました。吸血鬼と呼ばれる種族です」

そこで黙っていた彼女が口を開いた。その顔には先ほどまでの親しみは消え、不安と焦燥が取って代わっている。だが、これは飛影達にとっても重要なファクターだ。

つまりはこの世界にかつて妖怪が来たということである。「情報としてはあまり残っていないんですけどね」というすずかに、すぐため息を吐くことになったが。当てが外れたことに、飛影は興味を失ったように肩を竦め、彼女に向けて口を開いた。

「その身体に流れる力から見ると、その吸血鬼はB級クラスの妖怪といったところか。だが、血はかなり薄れている。もはや元の妖怪としての強さは発揮できんだろう。もっとも、この世界で強さはそれほど必要なく、貴様は既に折り合いをつけているようだがな。興味もないが」

言いたいことはそれで全てだったらしく、飛影はゴミ倉庫に背を向けて歩き出す。もう用はない、とでも言いそうな感じだ。彼の反応にすずかは驚いたような顔をしたあと、たまらなくなつて声を上げた。

「あ、あの・・・」

「心配せんでも貴様のことは誰にも言わん。それは蔵馬や桑原もそれはわかつて「い、いえそうじゃなくて！」む？」

飛影の言葉をより強い口調ですずかが遮る。その目には既に不安はなかったが、強い戸惑いが浮かんでいた。

「なんで、秘密にしてくれるんですか？そんなことをしても、貴方にはメリットなんて何もないはずなのに・・・」

そこまで言つて彼女は黙ってしまった。確かにこれはかなり重要な話だ。その扱い方如何では月村家を自由にできるだろうし、その気になれば破滅させることもできる。

妖怪は基本的に無慈悲、そして自分の思うがままに行動するものだと言われてきたすずかにとって、飛影や蔵馬の反応は予想外だった。しかし、飛影はそんな彼女の心のうちを見抜いたのか、溜息を吐きながら目を向ける。

「言ったはずだ、オレはそんなものに興味はない。高々人間の小娘の弱みなど何の得にもならんからな。秘密にしたければそうして、虐げられたいのなら勝手に触れ回れ。どうなろうとオレは知らん」

冷静かつ冷たい口調で言いたいことを言うと、飛影は今度こそ背を向けた。すずかの秘密など完全に眼中にないのか、その背中には付き合ってもらえんと語っている。

（飛影さん・・・なのはちゃんの言ったとおりの人だったよ）

だが、すずかは言葉の中に確かな優しさを感じていた。

飛影は嘘を吐いているわけではないのだろう。興味がないということも真実で、それで彼女がどうなろうかが知ったことではないということも本当だと思う。

しかし興味がなくなるとも、人の弱みを握ったとき悪意がある者がどんな行動にでるかなど、それこそ子供でもわかる。容赦などない、果てない地獄がぼっかりと口を空けているのに堕ちていくだけだ。

知られたときはもう終わったと思った。この生活もこの平穏も友との関係も。飛影をここへ案内する役を買って出たのも、薄々気づいているだろうと思っていた彼にその確証を取り、可能なら交渉するつもりだったのだ。どれだけ犠牲を払っても、守りたかったから。

しかし、それは思いもよらぬ方向で打ち碎かれることとなった。さすがが知りうる中で最も不可解かつ、最も好ましい終わり方で。そしてそのことは彼女のなかに火を灯させた。

なのはやフェイトなどのことは元より、いつも一緒にいる親友も久々に張り合える相手を見つけたようで、とても活き活きとしていた。本人は気づいているか分からないが、それをふまえてもゆくりしている暇はないのかもしれない。

「ふふ・・・ごめんね、なのはちゃん、フェイトちゃん。応援はできない、かも」

去っていく飛影の後ろ姿を見ながら、すずかはその隣へと駆け出した。近しい存在というだけでなく、もっと近くなりたいという願いを込めて。

- Side change Next day -

「よっしゃ、全員忘れ物はないなー？」

「・・・・はいつ！」「」「」

翌日、よく晴れた朝の七時半。園児の遠足点呼のようなノリにもしっかりと答えるフォワード陣。飛影たちは呆れたように息を吐いていた。すずかやアルフも苦笑気味に眺めている。

「さ、帰ったら仕事と訓練が待ってるよ。前より少しハードにするからみんな頑張っていこうね！」

「な、なのは・・・容赦ないね・・・」

「流石、鬼教官って呼ばれてるだけあんな・・・あと魔王とか」

美由希と桑原が少し引いている。なのはは笑顔で「・・・和真くん、後で『お話』しようか」とか言っているが、桑原が青い顔をして首を横に振っていた。まだ出会って一週間程度でも、なのは（ダーク仕様）の怖さは身にしみている和真である。

「まあ、しっかりやんなさいよ。でも、仕事が片付いたらちゃんと報告に来なさいよね！」

「うん、わかったよアリサ」

フェイトが必ず来る、と深い笑顔を見せる。その表情を見たアリサがうんと頷いた。ヴォルケンリッターの騎士達、はやてやシャーリーもそろそろと近寄ってくる。

それと同時に別荘に続く森の端に魔法陣が現れた。出立のときが来たのだ。

五メートルほどの転送陣に全員が乗る。大きさからすれば人数は少し多かったが、何とかその中に納まった。

「ほんじゃ、協力してくれてホンマありがとうな」

はやてが陣のなかから礼を言うと、アリサが「水臭いわね」と恥ずかしそうに言いながらも一番の笑顔を見せた。頼られたことと、また旧来の友に会えたことが嬉しかったのだろう。それを見たとすずかは彼女に微笑ましい笑顔を向けた後、陣の外側に近寄った。

「飛影さん、これを」

「む？」

訝しげに眉を寄せる飛影の前に白い布が差し出された。それは飛影の首元に巻かれたものと同じような、シルクで出来たスカーフ。それが赤いリボンで纏められている。ただ、そのきめ細かい編目と滑らかな手触りは、それがかなりの高級品であることを強く誇示していた。

「何のつもりだ？」

目の前に綺麗に畳まれた布を受け取ることもせず、飛影はすずかに視線をやった。だが、探るような目つきにも彼女は笑顔を途切れさせず、差し出したものも下げない。訝し気に睨む飛影に、すずかは柔らかな笑みを浮かべた。

「ささやかな・・・相談に乗ってもらった私個人のお礼です。気に入らなければ捨ててもらっても構いません。けれど、今このときだけは受け取ってくれませんか？どうかお願いします」

「・・・チッ」

あの時の会話は相談ということになっているらしい。視線を逸らさず真っ直ぐに見つめてくるすずかに、飛影は舌打ちしつつも差し

出されたスカーフを乱暴に受け取る。横にいたアリサが呆れたように息を吐いた。

「もう少し嬉しそうにしなさいよ、まったく・・・それと意外だけど、私も結構楽しかったからお礼言っとくわ。また私に会いに来たくなったら、特別に來させてあげてもいいわよ」

「安心しろ。天地が引っくり返っても絶対にありえん」

「ア、アンタはまたああああ！」

冷めたように半眼になる飛影に、アリサが顔をさらに真っ赤にして吠え掛かる。事実、この二日間での言い争いの回数は軽く二桁に届くので、はやてや蔵馬は微笑ましい表情で二人を見つめていた。

なのはやフェイト達は二人の行動を彼女たちの優しさと気遣いとするべきか、それとも別の要因とするべきか考え、微妙な表情をしていた。

「ともかく終わったようやな、ほないくで！」

魔法陣が起動し、青と緑の中間のような光を放ち始める。しばらくは彼女たちともお別れだ。なのは達は親友との別れを、フォワード四人は、優しくしてくれた地球の人たちともっと親しくなりたかったな、と残念そうな色を見せている。

「・・・お世話になりました！」「・・・」

光が満ちていく。魔法の発動はもうすぐだ。始まれば一瞬で彼女らを魔法世界の住人へと戻すだろう。

だが、陣の光が極大に差しかろうとしたとき、その傍へと走りこんだ人影があった。紫がかった美しい長髪を棚引かせ、普段からは考えもつかない勢いで近寄ったのは、

「……すずか（ちゃん）？」

先ほどのプレゼント発起人であった。誰もがお淑やかな彼女からは想像だになかった行動に目を剥いて驚く。そして周囲を置き去りにしながら、彼女は輝く陣の光に照らされた飛影に腰を屈めて近寄り、

「一つ……忘れていました……んっ……」

彼の額に唇をそつと触れさせた。

「……」

「な、ななな、なあ」

「っ！？」

一瞬のことに飛影は目を見開いて言葉を失い、機動六課のほぼ全員が悲鳴を上げる。ただし各々でその性質は違うようだったが、す

ずかは整った顔を真つ赤に染めながら、飛影に向かって少しばかり悪戯っぽい笑顔で微笑んだ。

「秘密のお礼、です……」

言葉とともに彼女は離れていく。そして同時に魔法陣が完全発動した。一瞬にして全員の姿が消え、別荘の庭に静寂が戻る。

光がいまだ残滓の糸を紡ぐ中、ずかは空を見上げた。今までの自分から考えれば、今の行動は恥ずかしいなんてものではなかったが、後悔の念は湧いてこない。

（当分は会えないんだし……い、いいよね？）

自分にしてはやりすぎたかなと少し思いながら、いまだ赤い顔でずかはくすつと笑った。

もしこのまま別れてしまえば、自分取るに足らない他人としてでしか彼の中には残らないだろう。だからこそ、忘れられない印象を付けようと思っていたのだが、やりすぎだったかもしれない。

本当を言うと最後のは予定にはなかった。何故か消えていく彼を見たら、胸が切なく高鳴って、気が付いたら駆け寄ってキスしていたのだ。

「また……会えますよね」

鳥が高く飛ぶ空から名残惜しげに視線を水平に戻す。

さて、やることは一つだ。まずは、傍で固まっている親友を解凍

することから始めなくては。

風を切る音を放ちながら、空気が脈動する。そして一瞬強い光を放ったかと思うと転送ポートが設置された空間が揺らぎ、次の瞬間には機動六課の面々が連なっていた。転送空間の外側に待機していたヴァイスがようやくの帰還に待合ベンチから腰を上げる。

「隊長達、それに姐さんらもお疲れ様だ！ つつても俺達と同じでそっちも休暇っぽくなってたみたいですけど、手配されてた仕事はちゃんと仕上げておきましたぜ。それにしてもいいなあ、俺も地球で観光とかをのんびりまったりと楽しめたかつ・・・ってどうしたんすか？」

いつもより反応の薄いことにヴァイスは「むう？」と首を傾げる。その中でいち早く反応したのは苦笑した蔵馬だった。

「ちょっとしたサプライズがあっただよ。驚きすぎて皆状況が整理し切れていないみたいだけど、しばらくすれば元に戻ると思うから安心していい。かくいう俺もかなり驚いたけどね」

「ふーん？ まあ、蔵馬さんがそう言うなら・・・」

それだけ言うのと蔵馬は仕事がありますので、とその場を後にする。余人には分からないが、アレは彼の十八番だ。完全なる緊急回避である。

その数分後、予想通りなのは達が覚醒して鬼の形相で飛影を問い

詰めた。その得体の知れない気迫に、何故か気圧された飛影はそこから機動六課宿舎へと逃げ出し、宿舎につくまで転移や攻撃魔法まで使った追いかけっこが行われたのは完全な蛇足であろう。

第十三話 出張機動六課（終結編） 〵 帰還（後書き）

やってもうたあああああ

ッ！！！

・・・この話を書き終えたときにした作者のアクションです。今回は流石にやりすぎたかなあ。何せすずかの設定を改変させて、強引にあのシーンですもん。

しばらく自問自答してました。

っていうか、すずかつてそこまで積極的じゃないよね！？それが会って二日でアレはないよ！どうしてこうなった！？

答え。曰く『そうしたかったからです』・・・って、何を種をハジケさせるMS乗りっぽく纏めてるんだ私は！

こんな感じの繰り返しでした。よく、『勢いでやった。けど後悔はしていない』といった主張がありますけど、あれ絶対後悔してますよね？

そのことをこの身で経験した作者です。後悔したポイントは、主に自分の文才や構成力のなさですが・・・っていうか、飛影スゲー。リインの言うとおり、ホントに天然ジゴロになるやもしれん・・・。

そんなわけで十三話でした。

かなり強引な足運びとなってしまうましたが、どうでしたか？

次は再びミッドチルダに戻ります。はてさて、どうなるのか。構成自体に魅力を出すのは難しいので、皆様にとって少しでも面白いのある文章を書ければな、と思っています。

では、また今回はこの辺で。夏バテと夏風邪には、十分にお気をつけいただきますよう。

ツアイツエン
再見！

第十四話 ホテル・アグスタ 岐路の胎動（前書き）

第十四話の完成です。

今回はお休みということもあつて、午前中に更新することができませんでした。

いつもこれぐらい順調なら言うことはないんですが・・・

では、ホテル・アグスタ編、堂々のスタートです。

第十四話 ホテル・アグスタ 岐路の胎動

エネルギー貯蔵型ロストロギア『レリック』を専門に扱う機動六課だが、例外というものは存在する。もともと遺失物管理部なんて名称であるとおりに、表向きにはその主な仕事はロストロギアの発見及び保護となっているからだ。

とはいえ、機動六課の総責任者である八神はやてが設立したこの部署も、地上の治安維持が最優先事項である。コレクターじやあるまいし、集めて保管して終わりといかないところがロストロギアの辛さでもあり、そして存在意義でもあった。

決して便利屋ではなく、ロストロギア関連に関する者たちの安全確保も任務ということだ。

今日、ホテルアグスタと呼ばれる場所でロストロギアのオークションが行われる。そこでは許可の通ったロストロギアが数点出品される予定だ。そして、その反応をレリックだと誤認して嗅ぎつけたガジェットドローンから会場、出品対象、そして参加者を守り通すのが今回の仕事だった。

長々と申し訳ないが、要するに要所警備あるいは防衛戦及び、要人警護というわけである。現在、ヘリの中ではその説明と共に現在地上を脅かすガジェットの製作者にしてレリックの収集者、そして事件の数々を引き起こした黒幕が全員に伝えられていた。

その名をジェイル・スカリエツィ。違法研究で広域次元犯罪者として指名手配されている男である。その姿を見た桑原が腕を組んで眉を寄せた。

「あんな悪趣味なもん作ってる奴だ、垂金とかイチガキみてえなヤツじゃねえかと思ってたが・・・意外と普通だったな」

桑原はかつての成金とマッドサイエンティストを思い浮かべる。片方は人間で片方は妖怪だったが、二人とも彼から見ても見るに耐えない面だった。決して比べているわけではないのであしからず。

「見た目で判断しないほうがいいよ桑原くん。見たところは人間のようだけど、彼の罪状は違法取引から人身売買、果ては人体実験なんてものまである。中には人の尊厳すら危ぶませるほどの行いまであった。世界は違っても、やっていることは彼らと同じさ」

蔵馬が言うと、飛影は視線を鋭く尖らせた。彼の立場からすれば、かつてと同じようなことをする相手が許せないのかもしれない。

と、リインが指を一振りして空中のスクリーンを消した。大方の説明が終了したようだ。なのはが全員を見渡したあと、口を開く。

「伝達事項はこんなとこかな。蔵馬さんは会場内で警護。和真くんはシャマルさんと一緒に屋上で警備。飛影くんは最初は私たちと同じ任務について、あとは適宜行動・・・で、いいかな、飛影くん？」

「フン、そこから先は勝手にさせてもらうがな。一々オレを頼られても困るが、いざというとき使えん奴ほど手に負えんものはない。ここらで実戦を積んでおけ」

「・・・言い方は乱暴だけど、一理あるね。いつでも飛影達が出れるわけじゃないし、一度の実戦は百度の訓練に勝るから」

フェイトが自らのデバイスであるバルディッシュに触れながら、彼の言葉に同意する。しかし、その様子は何だか妙だ。飛影は訝しげな表情をして、自分の向かい側に座る彼女に尋ねた。

「・・・？何を睨んでいる」

「し、知らないっ！」

若干頬を赤くしたフェイトが飛影から顔を背けた。しかし、その態度は「不機嫌なんだからねっ」と全身で表している。まるで不貞腐れる子供のような反応だ。

飛影はなおも怪訝そうに眉を寄せて周りを見渡すが、ヴィータやスバル、シャマルに至っても同じような有様だった。にこにここと笑っているのは、自分の隣にいるのはただだ。蔵馬とはやての意味深な笑みも何だか癪に障る。

しばらく前、正確には地球から帰った日から、彼女らは時折こうして不機嫌になるようになった。会話の流れからそうなることもあるし、誰かが自分に接触してきたときに唐突に起こることもある。

しかし、この程度飛影にとっては別にどうということはない。元より人の機嫌を気にする性分でもないからだ。寧ろ関わってこないのなら好都合、と当初は無視していたのだが、それはおよそ逆効果であつたらしい。

しばらくスルーを決め込んでいた飛影の元に、彼女達がいきなり

突貫してきたのである。そこで、今は機嫌が良いのはやヴィータには怒りながら説教され、残りの三人には無視しないでと泣きつかれた。

ならその態度は何だと飛影が聞くと、全員があからさまに話を逸らしにかかるのだ。結果的に何も変わらないのだから、飛影としては何をしたいのか全く理解できない。単なる怒られ損だ。

理不尽もここまでくるといつそ清々しい。一体どうしろというのか。

その後、見かねたかのように来た蔵馬に言われたのは、

『女の子の気持ちをもっと考えてあげなきゃダメですよ』

という一言だった。本人曰く重要なアドバイスとのことだが、余計なお世話である。それ以前に、話の核をわざと喋らないで傍観しているのが見え見えだった。相変わらず悪趣味だ。

「はあ……」

ティアナがまたか、というようにこめかみに手をやる。このような光景も、最近の六課では日常茶飯事だった。

何も分かっていない様子の飛影には迷惑極まりないだろうが、こればかりは運命だと諦めてもらうしかない。諦観と憐れみを込めた視線で彼を見やり、にぎやかなへりの中を見渡した。

すると、少し珍しい光景が目に入る。ティアナは思わず彼女に問いかけた。

「?どうしたんですか、リイン曹長?」

いつもならはやてなどと共にクスクス笑っているリインが、神妙な顔で浮遊していた。「むうう・・・」と唸りながら一人百面相をしている。如何せん、普段は主共々茶々を入れることが多いので、その真面目顔が気になったのだ。

「ふえ!? い、いえ、何でもないのですよ! さあ皆、今回もしつかりバツチリ決めるです!」

「は、はあ・・・」

いきなり声を掛けられたからだろう。彼女は少し動揺した様子で、わたわたと手を振った。その様子からして何でもないというはずがないのだが、のんびり聞いている時間もない。

ティアナはすぐに引き下がって、なのはと作戦の確認を取り始める。そんななか、いまだフェイトやヴィータと言い合いを続ける飛影を見て、はやてが口角を吊り上げた。

「シシシ・・・皆もいい感じにドロドロしてきたやないか・・・この調子で堅物のシスターシャツ八とかも餌食に・・・って、あたあっ!? 何で殴るん!?」

「ひどく不愉快な気配がしたのでな」

素晴らしいまでの勘のよさであった。一瞬で近寄った飛影がそのまま頭に一撃をくれ、元の席に戻っていく。はやてが「おーぼーや!」と涙目で後ろから抗議して、蔵馬に慰められていた。幸せそう

なので放っておく。

しかし、何だかんだ言っても飛影と意見を同じくするあたり、フイトたちもちゃんと先が見えているらしい。若干スルーしかねる態度ではあるが、肯定の意を見せて頷いていた。

三人の役割をそれぞれ挙げると、蔵馬がホテルの守り、桑原が屋上で迎撃、飛影が遊撃だ。彼らからすれば配置は妥当といったところだろう。そこでスバルが声を上げた。

「あれ？和真さんの武器はあの剣なんですよ？なら、接近戦のほうがいいんじゃないですか？」

「ま、普通はそう考えるわな。けどオレはこの三人の中で一番靈感があるから、危険察知とかそういうのには適してんのさ」

桑原の言葉に首を傾げたのは機動六課メンバーである。理由は言わずもがな、靈感という聞きなれない言葉が出てきたからだ。

靈感。正式名称を『靈感能力』といい、霊気や妖気などの力の流動や気配を鋭敏に察知する能力のことをいう、人などが持つ霊的ポテンシャルの一つである。

詳細はここでは省くが、要するに高感度の気配察知を常時自然展開しているようなものだ。桑原はこれがズバ抜けて高く、しかも霊気などの力は全く喰わないのだからかなり使い勝手がいい。

「彼の感知能力はすごいわよ、私のお墨付き」とにこにこしながらシャマルが言い、それならばと全員が息を吐いた。

「シャル先生が言うなら安心ですね。それとさっきから気になってたんですけどその箱って・・・？」

キャロに指摘されたシャルが「これ？」と首をかしげ、そしてにゅふふと顔を崩した。少し、いやかなり含みのありそうな笑みになのは達は苦笑を零し、エリオなどはきよんとしている。箱をポンと叩きつつ、シャルは魅力的なウインクをした。

「隊長達と飛影さんたちのお仕事着」

- Side change in Hotel Augusta -

ホテルアグスタは一流企業の社長やその令嬢が宿泊することもある、かなり名の通った宿泊施設である。規模はそれほどではないにしろ内装は充実しており、その調度品の一つにも気を使うという力の入れようだ。

体面を取り繕うばかりが営業ではないが、それを蔑ろにしては一流は二流に成り下がるということを示したいのだろう。それが、企画者にここを選ばせた理由の一つでもあるのだから。

とまあ少しばかりホテルの概要を語ってみたわけだが、そんな一般人には少しばかり値が張るこのホテルの一角、広いロビーに二人の男性が佇んでいた。赤と黒という髪の色、加えて背の違いがはっきりしていて、にじみ出る雰囲気もほとんど真逆である。

背の高い方、スーツ姿に身を包んだ蔵馬が、隣で話しかけるなオ
ーラを撒き散らす相方に視線をよこす。そこには自分と『同じ』黒
のスーツをバッチリ着こなした飛影がいた。

「似合ってるじゃないですか、飛影」

「クツ、何故オレがこんなものを・・・」

ネクタイや襟の感覚がうつとおしいのか首元を少し緩めている。
本来こういう場でのそれはNGなのだが、言ったところで正す性格
でないのが彼の彼たる所以であった。というか、そちらのほうが彼
らしく、しかも似合っているので蔵馬は苦笑する。

そのとき、廊下のほうでざわめきが巻き起こった。そのほとんど
が男性のものだ。それとともにホールに響いたのは、よく通る済ん
だ声が三人分。

「いやー、化粧室が混んどったなー」

「にはは・・・」

「お、お待たせ・・・」

飛影たち二人が振り向く。そこにいたのは言わずもがな、機動六
課が誇る隊長陣の三人だ。

エントリーNo.1。

全てを吹き飛ばす直情型魔力、アグレッシブな根暗にして、最近はややヤンデレ属性にも足を踏み入れた『元』可憐な少女。砲撃させたら局内一、鬼に金棒、悪魔に魔導砲。もしも彼女を怒らせたらば、消し炭にされる前に土下座しろ！もしくは飛影のプロマイド（際どければ言うことなし）。

『白き大魔王』高町なのは。

エントリーN.O. 2。

ボケが突っ込みかと問われれば、間違いなくボケ。純粹無垢が一周回って大ボケになる六課のオアシス。思い込んだら一直線だが、どこかがいつもズレている、だけど、それがいちいち可愛いお年頃。そのデンジャラスバディは誰のためにあるのか、何も無いところでコケるのは仕様なのか！？

『金色のお花畑』フェイト・T・ハラオウン。

エントリーN.O. 3。

やや似非っぽい関西弁にしてミス・二枚舌、機動六課が誇る策略謀略ハリセンツツコミと三拍子揃った彼女は今日も不気味に笑っている。青春に色気は不要、ついでに男の影もなし。奴と戦うなら狐を連れろ。ついでに手土産持っていけ。

『化狸・似非関西仕様』八神はやて。

戦力的にも人間的にもなかなかない組み合わせであった。何がここまで彼女たちを変えてしまったか、それは神のみぞ知る。というかこのプロレス団体のようなノリは一体なんなのだろうか。

「何だか、ちよつと許し難いテロップが付いた気がするよ・・・！？」

「奇遇やなのはちゃん、私もや。今ならこのホテル丸ごと消し飛ばしても許されそうな気がするんやけど・・・とりあえず似非はな いんちゃうか!？」

「ふ、二人とも落ち着いて。なんだかキャラが壊れてきてるよ？そ りや、ちよつとは誇張な気がするけど・・・」

「「ちよつとつて何（や）!？フェイトちゃんはあるま言われて ないから、そんなことが言えるんだよ / や!」」

うがーつと吠えられたフェイトはびくつと肩を竦ませる。なのは とはやての髪がふわあああつと逆立ち、その後ろに天に向かつて 吠える魔人王女と狸が見えた・・・気がした。嗚呼、世界の条理に 逆らうとは、どこまで悲しいことなのだろう。

「頭の悪い会話だな」

「まあまあそう言わずに。三人ともすぐくお似合いですよ」

蔵馬が場の空気の入替えるため、率直な感想を三人に告げた。 機嫌直しの意味合いも半分ほどあったが、驚きなども大きい。何故

なら目の前にいる三人はいつもの制服ではなく、眩いばかりのドレスを身に纏っていたからだ。

なのははピンクと赤を基調とした色合いで、ワンピースのような上掛けと赤い下掛けを組み合わせた、二重構造のドレス。はやてとフェイトは肩が完全に出ており、それぞれ白と水色、黒と紫を主としたインパクトの強いドレスだった。

そして薄めに決められたメイクが、少女にいつもより大人っぽく艶やかな表情をさせている。

全てがシャマル先生プロデュースの、彼女たちの魅力がぐっと凝縮したような出で立ちだった。その証拠に男性陣の視線をこれでもかと釘付けにしているし、受付も仕事そっちのけで見入っている。一流ホテルマンの気概はどこかにおいてきたのだろうか。

「!!! ほ、ホンマに・・・？世辞やのうて？」

「ええ、はやてちゃんは十分に魅力的ですよ。もちろんなのはちゃんやフェイトちゃんもですけどね」

蔵馬の言葉にはやてが頬を真っ赤く染めた。なのは達も蔵馬の笑顔に若干顔を赤くしていたが、何かを決意するような眼差しで飛影の方を向く。

心なしか、先ほどより真剣さが混じっているような気がした。

「ね、ねえ飛影くん。これ、どうかな・・・？」

「へ、変じゃ、ない？」

不安と期待が織り交ざった声色で二人が尋ねてくる。その視線に居心地の悪さを感じた飛影は、渋々ながらも二人に目をやり、僅かに見開いた横目でしばらく眺めた後、鼻を鳴らした。

「・・・変なのは今の貴様らの態度だ。まあ、いつものあの服と戦闘服以外見たことがなかったからな、少し新鮮ではある。馬子にも衣装と言ったものだ、着飾れば貴様らでもそれなりに映えるとはな」

「えっ、あ、あああ、ありがとう・・・すごく、嬉しい・・・」

「似合ってるって・・・飛影が似合ってるって・・・」

フツと、僅かながら柔らかな視線を宿して飛影が二人を見た。なのはとフェイトの頬が一瞬にしてりんご色に染まり、呆然としたままぶつぶつと呟き始める。

普通なら褒められているかどうか判断に迷うところであるが、相手はあの飛影であるからして。興味ないの一言で切り捨てられると思っていた二人にとっては正に天恵、脳内ではスタンディングオベーションションフルオープン状態であった。

拡大解釈も甚だしいが、いつの時代も恋する乙女補正は理屈を超えるのだ。一旦ポジティブに解釈すればあとはもう走りぬくだけである。

飛影はというと、そんな二人から既に視線を外し、周りを眺めていた。おそらく邪眼で妖気などの異変を探っているのだろう。何だかんだ言っても、一度請け負うと言った以上は仕事としてしっかり

するつもりらしいが、そんな態度の戦友に蔵馬は苦笑した。

桃色の花びらがデフォで背景につきそうな二人に、はやてが口元を引きつらせる。

「すごいな、二人とも・・・さっきのセリフを褒めてると解釈してるのか・・・」

「ふふ・・・飛影も隅に置けないな（彼自身も、少し見惚れていたみたいだしね）」

優しい笑みをした蔵馬が、はやてをエスコートするように立ちながら笑う。視線の先にはロビー中の男から嫉妬と殺気をぶつけられ、訝し気にしている飛影がいた。彼が軽く一睨みすると、ロビーから何人かが飛び出して行く。自業自得だが、こちらとしてはもう少し加減をして欲しいものであった。

彼はまだ二人の気持ちを分かっているのだろう。態度がそれを物語っているし、あの二人もアピールはしているが、積極的かといえばそこまでもないから当然といえば当然だ。

しかし蔵馬は、今は気が付かないほうがいいのかもしれない思っていた。彼自身感情の整理がついていないなかでそれが露見すれば、自分の内に近づかれることを嫌う彼がここから去ってしまう可能性がある。

今でこそこうして仲間とともにいるが、飛影はもとと一匹狼のスタンスだ。それは不思議ではない。

だが、それでは彼にとってプラスにはならないと思った。ここで

の人との交わりのなかで得るものはきつとあるだろう。かつて幽助が俺たちにそうしてくれたように。

そしてこれは契機でもある。彼が他者との、こと男女関係において発生しうる事象を理解する契機だ。彼の上司である？も女だが、あれはお互い信頼に値する仲間、あるいは戦友と捉えているように見える。おそらくそれ以上進むことはないだろう。

だからこそ、ここでの経験や日常が価値と輝きを帯びるのである。

何気ない日々の中で得る安らぎと、彼女たちの想い。それが飛影をどう変えていくのか、昔なじみとしては非常に気になるところであった。彼が聞いたらまた悪趣味と言われそうだが。

蔵馬は友の幸せを願っている。無論、そう遠くない先で知ることになるであろう、彼女たちの心の動きを彼がどう受け止めるのかという不安はあった。もしかしたら彼女たちを悩ませ、さらには傷つけてしまうかもしれない。

だが、蔵馬は信じるほうに賭けた。『それ』を理解できたとき、彼は幽助のように今よりずっと強くなっているに違いないという期待を宿して。

こればかりは信じるしかできない。人の気持ちなど様々であるし、彼が辿ってきた過去の片鱗から考えてもいいことばかりではないだろう。それこそ彼が理屈なしで接する相手は、女性では片割れの『彼女』だけだ。

しかし、それでも蔵馬は可能性を広げたかった。彼は一人ではない、そのことから逃げないで欲しいと。

彼は何かから逃げることを嫌うが、逃げないわけではない。そして、こういったことに関して後ろ向きであったことも事実。

だから、彼に一度真正面からぶつかってもらいたい。揺さぶられても翻弄されても、それを受け入れる強さを彼には持つてほしい。彼が生来受けたことのないであろう、人が持つ心の動き、理屈も何も通用しない『愛情』という感情を前にしても。

（少し押し付けがましいけどね・・・）

そう言っただけは少し面白い様相を呈しているメンバーに苦笑を零す。結局夢見心地の二人が現実に戻ってきたのは数分後で、その頃には飛影の関心は他を向いていた。そして呆れたように溜息を吐いたはやての台詞で任務がスタートしたのである。

第十四話 ホテル・アグスタ 岐路の胎動（後書き）

ホテル・アグスタ編その一でした。

早いもので、もう連載開始から一カ月半が経過しました。物語最初の山場が近づいてくると同時に、リアルの方で卒論に追われている作者であります。

夏休み中にはほぼ完成させておくつもりではあるので、これからガンガンスピードを上げてきますが、小説は並行して書くのでご安心を。更新の方もたぶんつつがなく進むと思うので、いつものようにお待ちいただければと思います。

タイトルに明記してはいませんが、今回は二話構成です。次回は戦闘もほんの少し加わるので楽しみに。

それでは、短いですが今回はこの辺で。

ツアイツエン
再見！

第十五話 慟哭の空（前編） 〃 悲しき信念（前書き）

やってまいりました第十五話。

さて、今回はホテルアグスタ編第二弾となります。非常に申し訳ないのですが、大きなミスをいたしまして、アグスタ編はあと一話続くことになりました。

作者のすっかり属性（ホントにもってます。車の運転とかでかなり注意されました）で、こうなってしまったことはまことに申し訳ありません。

とはいえ、物語で先のほうでの展開をもつてくることで凌いだので、ストーリーや設定が変わるということはありません。そこはご安心ください。

それでは、第十五話、ドライブイグニッション！

・・・真面目に言つと恥ずかしいですね、この台詞。

第十五話 慟哭の空（前編） 悲しき信念

「ガジェット反応です！機影特定、陸戦？型三十五、空戦？型六十七、陸戦三型四機を確認しました！皆さん、お氣をつけて！」

任務開始から二時間弱。ロングアーチから、シャーリーの声が全員に到達された。ついに敵が出現したのだ。

しかし想定外のこともあった。ガジェットが襲ってくることは作戦のうちだったが、存外に数が多いのだ。しかも陸戦ではなく空戦型、これは少しよろしくない。

「うつひゃー、空に浮いてんの全部ガジェットかよ。堅氣もいるつてのに、テメエには全く関係ないってか？」

クリアルヴィントのセンサーより早く敵を感知していた桑原が唸る。横にいるシャマルは、空から迫り来る数多の黒点が序序に大きさを増すことに齒噛みしながら、桑原に答えた。

「考えたくはないですけど、おそらくそういうことでしょうね。こんなものを次から次へと投入してくるような相手ですから」

「やりたい放題ってわけかよ。氣に喰わねえな・・・」

桑原が怒氣を滲ませた顔で空を睨む。彼の中の靈氣は今にも外に流れ出そうなほどの高まりを見せていた。流石に飛影ほどの威圧感を感じないものの、曲がりなりにもはやての守護騎士であるシャマルを一步下がらせ、身を強張らせるほどのものだ。その力を向けら

れていないのにも関わらずである。

（これが靈気・・・人の持つ新しい可能性・・・）

シヤマルは自分達のもつ魔力とは違う力の放出に、不思議な感覚を覚えた。飛影や蔵馬の妖気もさることながら、彼の靈気も魔力と比べるとかなり異質なことが分かる。

確か靈剣と言っていただろうか。ガジェットを一撃の下に切り伏せた、フェイトのザンバーと似た色を放つ光の剣。AMF効果領域でも全く問題なく使えることから、魔力と靈気はエネルギーとして根本的な違いがあるのだろう。気を刃状にただけだと聞いたが、その威力は試してみずとも明らかだ。

彼ら曰く、靈気とは人間の肉体に宿る精神エネルギーが、オーラと呼ばれる形を伴い力となって現れたものらしい。もしかすると、この世界にも靈気を扱える人間がいる可能性がある。魔法が浸透し切っているからなんとも言えないが。

「シヤマルちゃん、聞いてっか？」

「え、あ。な、なんですか？」

いきなり声をかけられたことに少々慌てるが、それを押し隠して尋ね返す。ちゃんづけという『少女』扱いに密かな喜びを覚えたのは乙女の秘密だ。「あの人も呼んでくれないかしら」、という妄想は戦闘中ゆえ即座に打ち消す。いつの間にか近くに寄っていた桑原は、首をかしげながらも空に指をさした。

「？ ま、いいや。それよか頼みがあんだけどよ、ちよっくら掃除

すつから、シグナムちゃんとヴィータちゃんを下がらせてくれねえか。ちつと邪魔だし、スバル達の応援にや丁度いいだろ」

「掃除？それに下がらせろって・・・シグナム達を下げたら、空の防衛線に穴が空いてしまいますよ。何をするつもりなんですか、和真さんのスタイルは近接戦闘なんじゃ・・・？」

怪訝な表情をするシャルに桑原は「いいから任せとけ」と少し強めに言う。意図は掴めなかったが、何かしら考えがあるのだろう。シャルは空で縦横無尽に戦う二人に念話を飛ばした。

最初は何を考えているつもりだと返答が来たが、和真に何か考えがあることを伝えると、渋々ガジェットから離れた。ヴィータは尚も何か言い足らなそうだったが、シグナムに引かれ地上へと降りてくる。ガジェットがその後ろについてくるのを見て桑原は構えを取った。

「味方は引いたな。数は、ひい、ふう、みい・・・ヴィータちゃん達が減らしたからあと四十機つてとこか。っしや、久しぶりに試してみるぜえ
おうりやあああッ！」

桑原が右手に力を込めると、光り輝く黄金色の剣が現れる。だが、いつもと違うのはその剣が出現したと同時に巨大化を始めたことだ。

膨大な靈気をその身に宿し、どんどんその大きさを増していく。まるで大木の成長を早回ししたかのような光景にシャルは目を見開いた。

「うし、こんなもんか」

桑原の軽い口調が響く。数秒後、剣はゆづに百メートルはあろうかという大きさにまでなっていた。

ここまでくると剣というよりもはや聳え立つ壁だ。そして桑原がその剣を持ち上げる。靈気で作ったからか重さはさほどでもないらしい。

剣の所々からバチバチツと青白い火花が迸る。そこで漸くガジェットの射程距離に入ったのか、空から一斉に光が降り注いできた。

「極大靈光剣

・・・」

レーザーが対象を焼き切らんと迫ってくる。桑原はそれを睨み据えると、両手で垂直に伸びた剣をバツターの要領で構え、

「一気、倒千

ッ！」

力任せに振り抜いた。空に光が一筋走り、数多のレーザー光ごとガジェットを飲み込んでいく。次の瞬間、まるで花火が打ちあがったかのような火線が空を煌き、辺りは爆音で包まれた。そして光が収まった後にガジェット？型は影も形もない。文字通り桑原の『一薙ぎ』により一掃されたのである。

彼は靈気を曲げたり結んだりくつつけたり、はたまた飛ばしたりと、その扱いがいちいち非常識だ。本当のことを言えば伸縮などのほうが得意だが、今の彼の靈力は人間界で最強であるからして、この程度の靈力行使では息切れ一つ起こさない。

靈気の密度が靈剣より数段低いとはいえ、これほどの力技を可能とした理由はそこにあった。

「又の名をミスターフルスイング剣だ。フッ、どうだい」

呆氣にとられるヴィータやシグナム、そして硬直したシャマルを尻目に、桑原は胸を張ってピースサインを決めていた。

- Side Hotel -

オークション会場の中で、なのは達は戦闘状況下にある外の様子をトレースしていた。彼女らの前に展開された空間スクリーンには、得意げにピースサインを見せる桑原が映っている。その後ろでは、引きつった笑みを見せたシャマルが遠慮がちに彼と同じポーズを決めていた。

なのは達と同じ画面を見ていた飛影が溜息を吐く。呆れた、とでも言いたげな表情だった。

「相変わらず非常識なヤツめ。竹を割ったような力技に何を偉そうにしているんだ」

「しかし、あの数相手なら靈気の消費効率から言ってもメリットの方が大きい。それに以前靈気の密度次第で威力を抑えることもできると言っていたし、一対一を主とする彼にとっては貴重かもしれない。使い勝手もさほど悪くないですよ。本当、桑原くんらしい技だ」

蔵馬は苦笑いを零しつつも、冷静に技についての考察を述べた。
だが、その後ろにいるなのは達は完全に固まっていた。二人の会話に口を挟む余裕などなかったのだ。

それはあまりにも圧倒的な光景だった。あれだけのガジェットを
たった一撃で、それも無造作に倒してしまったのだ。

呆氣にとられたところの話ではない。魔法を以ってしてもアレだ
けの威力のものは数えるほどしかないし、普通の魔導師が魔力であ
の『剣』を作ろうとすれば、数十分の一に達せずして氣をやってし
まうだろう。Sランクオーバーの魔導師ですら、十分の一を作れる
か怪しいものだ。

（フェ、フェイトちゃん・・・）

（う、うん。飛影がすごいのは知ってたけど、和真もこんなに強か
ったなんて・・・蔵馬も同じなのかな・・・？）

（し、信じられへん・・・靈気とか妖氣はまだよく知らんけど、あ
んだけの力放出して全く堪えてないなんて、底が見えないどこの話
やないやないか・・・和真くんは人間っていうけど、飛影くん達と
同じで、私らの常識を軽く超えていきよるな・・・）

彼らの規格外さを三人は改めて認識する。そして彼らが敵でなか
ったことに心から安堵した。どれほどの力を秘めているかは分から
ないが、敵対するのは死んでも御免だ。

「・・・やれやれ」

すると、飛影が突然椅子から立ち上がり、扉のほうへ向かった。

「飛影、どちらへ？」

「屋上だ。そこから先は勝手にさせてもらうがな。こんな茶番に付き合ってられるか」

「え、ちょ、飛影く」

はやての言葉を聞き終わる前に、飛影は自動ドアを潜ってその向こうへと姿を消した。浮き上がりかけた腰を落とし、空中に彷徨ったままの手を膝の上へ落とす。そして同時に深い溜息を吐いた。

「ホンマに勝手されちゃ、たまらんのやけどなあ・・・」

「は、はやて、ファイト！」

「そ、そうだよ。それに飛影くんだって、何か思うところがあったのかもしれないし！」

無責任な励ましとポジティブシンキングを放ってくる親友二人。はやての目が半眼になってジトツとした色を帯びた。

「思うところお？二人とも勝手なこといいよってからに、ホンマにそう思ってるんか？あの捻くれもんか？責任とってもらうで」

「「そ、そんなあ！？」」

涙目で悲鳴を上げる二人。言葉はともかくとして、始末書を書くのが嫌なのは誰でも同じである。蔵馬は飛影が去っていった扉のほうを見つめた。

（なのはちゃんの考えは当たっているかもしれないな。彼が何の意味もなく出て行くとは考えづらい。何かが『視えた』のか？）

邪眼の力なのか、力の乱れを感じたのかは分からないが、飛影の後ろ姿を見ながら蔵馬は一人思う。しかしその予想そのものは的を射ていていたが、後に起こる新人と教導官の争いの原因にまでなってしまうことまでは、聡明な彼とて全く予想できはしなかった。

- Side change -

風を棚引かせ、飛影は森の中を駆ける。服装はいつものコート姿に戻っていた。

常人には目で追うことすら出来ないほどのスピードで彼は森のある地点を目指す。そしてその表情は先ほどより少し険が入っていた。原因はそこら中に現れている目障りな銀色の虫である。

「邪魔だ」

観察するように周りを飛び回っているのに舌打ちし、機械じみた甲殻を残らず切って捨てていく。刃の軌跡すら残さない洗練された太刀筋は、数十の虫を一瞬にしてバラバラに切り裂いた。

その残骸には目も留めず、飛影はひた走る。森の木々や茂みが覆い重なった奥底、通常では形すら捉えられない『少女』を飛影は捉

えていたのだ。

ホテルに飛んでいった黒い影も把握しているが、大したことではないと無視した。リストに興味の引くものはなかったため、何を盗まれようが自分の知ったことではない。

見たのは淡い紫の髪と額にある特徴的な紋様を持った、キャロと同じぐらいの少女。虫を召喚するのも邪眼で確認している。ほぼ術者であることに相違なかった。

敵を潰すには頭、非常に単純だが的確な行動である。しかし、飛影が行こうとしたその先で新人FW四人が防衛線を維持していた。全員が迫り来るガジェットに対して迎撃をかけている。別に大した興味も抱かずそのまま通り過ぎようとしたとき、不意に見上げた空に飛影は僅かに目を見開いた。

「チッ！」

舌打ちと同時に地を蹴って飛びながら剣を構え、飛んでいく光の弾に追いつくと、正面からそれに向けて振りぬいた。光弾は飛影の身体に当たる寸前で四つに弾け、後方へと乱れ飛ぶ。それらは流れた先にいた四機のガジェットを貫き、轟音と共に爆発した。

飛影は身体を捻りながら、展開されていたウインググロッドに着地する。そして、剣を二、三度ほど振って鞘に納めると、背後に向かって一瞥した。

そこにいたのは、目を見開いて硬直するスバルだ。だが、今見るべきは彼女ではない。飛影は苛立ちと呆れを滲ませた声色を隠そうともせず、そのまま眼下を見下ろした。

「何を遊んでいる？確実に仕留められんのなら出しゃばって余計なことをするな、ティアナ・ランスター」

- Side Teana Runstar -

「何を遊んでいる？確実に仕留められんのなら出しゃばって余計なことをするな、ティアナ・ランスター」

飛影さんの言葉で私は我に帰った。表情は蔑むような色が込められている。そして、その後ろには呆然とした顔の相棒の姿も見えた。戸惑いと不安が入り混じったその表情を見て私の胸は締め付けられるように痛む。

それを見たのは初めてではない。そんな顔をしたアイツを私は何度も叱ってきた。

下らないことでいちいちメソメソするんじゃないわよ。

落ち込むぐらいならしっかり鍛錬に励みなさい。

アンタのお守りは御免だけど置いていくのも気分が悪いわ。

幾度となく私が放ったセリフ、そして愚痴っていても怒鳴ってい

ても、いつもアイツはそれに微笑むのだ。

えへへ ありがとう、ティア。

だが、今回は違っていた。その表情を向けられているのは私という点だけが。

「貴様らは下がれ。これ以上やっても時間の無駄だ」

吐き捨てるように彼が言う。表情には何も浮かんではいない。ただ淡々とした口調で彼に戦力外通告を下されても、私は何も言い返せなかった。私を見たスバルが、慌てて飛影に詰め寄っていく。

「あ、あの飛影さん、今のもコンビネーションの一つで・・・それにティアも頑張ったし、ミスは誰にでも・・・」

「愚にも付かんフォローはやめろ。貴様は既に今日二度死んでいる。万が一今のを避けたとしても、横のガジェットにその身を撃ち抜かれていた。奴の誤射がそれほどに致命的だったのは、貴様が一番よく分かっているはずだ。それとも、貴様は後ろから撃たれても平気で笑っていられるような死にたがりか？」

うつ、とスバルが声を飲み込む。言葉は乱暴だが事実その通りだった。直撃したら怪我ではすまなかったことは明白、そしてかわしたあとの無防備な身体をガジェットが見逃してくれるとも思えない。

「偉そうな台詞は一度死に際に至るまで修行して、自分の力量を自覚してからにするんだな。覚悟もなく、力もなく、ただ勝手な理屈で動いたせいで起き得た可能性を棚上げした拳句、頑張っただと？自分の後始末もできないようなガキの戯言は他所でやれ」

それだけ言つて飛影さんは踵を返した。もはや私たちのことなど眼中にないのか、その足取りには何の未練もない。

だが、それに対して怒りが湧き上がる。

確かに無視できないミスだったけれど、私だって好きで誤射したわけじゃない。私なりに考え、チームの為を思つての行動だった。慰めて欲しかったなんてことはない。スバルを助けてもらったことには感謝しているし、あの場面でスバルを救うことなど彼になら造作もなかったのは確かだ。

だが、だからこそ悔しかった。力がなければ何もできない、それはわかつている。だから努力してきたのだ。人の何倍も、できなければかなりの無茶までして。しかし届かなかった、私はまだ届いてなどいなかったのだ。

「くっ・・・」

胸の奥から嫌な感じが湧き出てくる。黒く淀んだ、私がつとも嫌うもの。

それは痛みだった。自分の存在を、いや自分そのものを否定されたみたいで、大声で喚き散らしたくなる。この痛みは、六課にいる誰よりもよくわかつているつもりだ。力があれば、少なくとも大切なものが潰されることはない。

だって力があれば、『お兄ちゃん』は・・・

「・・・かる、も・ですか・・・」

「ティア？」

スバルが心配そうに近寄る。だがそれに気を払うこともできず私は拳を血が滲みそうなほど握り締めた。知らずに口を突くのは怨嗟の言葉。みすばらしい、情けないと思っても、一度あふれ出した言葉は留まらず、涙と共に流れていく。

唇を噛み締めてなんとか抑えようとする。だが、一度堰をきつた流れは止めることなどできなかつた。それがこれ以上ないほど醜い、ただの八つ当たりだと分かっている。

「あ、貴方に・・・力がある貴方になんかわかるもんですか・・・ただの凡人で無力ばかり感じさせられる私の・・・守りたいものすら守れなかつた私のこと、なんて・・・っ・・・」

「ティア・・・」

スバルが顔を俯かせて私から離れていった。私は木に頭を押し付けるようにして慟哭を零す。頬を伝った涙は少し苦味を帯びていた。

- Side out -

第十五話 慟哭の空（前編） ー 悲しき信念（後書き）

アグスタ編第二節、第十五話でした。

今回はテンプレみたいな流れとなってますが、そこはどうかご了承のほどをお願い致します。どうやっても、これ以外の展開でいい案が思い浮かばなかったんだよう・・・って、いじけてもダメですね。

それでは気を引き締めて。第十五話、どうでしたか？リアルとの兼ね合いがかなり厳しくなってきたており、本当に八月中に卒論の型は上がるのか、と本気で心配になってきた作者であります。

皆様お盆休みに入った頃でしょうか。作者は卒論と実家の手伝いでてんでこ舞いな日々を送っております。休みも何もあったもんじゃありません。

くそう、私だって遊びたいのに！！

次回はタイトルから分かれるとおり今度こそアグスタ編終結の話です。さてさて、どういうことになるやら。考えていた設定を思っていたより早く出すことになってしまった作者ですが、これも自分のミスが原因なので次はこんなことにならないように気をつけたいです。

それでは今回はこんなところで。夏休みも中盤ですから、皆さん色々頑張ってください。

それでは再見！
ツアイツエン

第十六話 慟哭の空（後編） 〃 託す想い（前書き）

十六話の完成であります。

今回のお話もしりアス成分が混じっており、飛影ではなく、他に主点を置いたお話になります。

本当は、もっと先に展開しようとしていたお話だったんですけどね。

そして唐突で申し訳ないのですが、次の更新はお休みいたします。お盆のときはまったく言っていないほど休めなかったこともそうなのですが、ここらで卒論にも本腰を入れて片付けてしまいたいので。

更新は22〜26日の予定ですが、若干前後するかもしれませんが、お暇でしたらその辺りでチェックのほどをよろしくお願い致します。

それでは若干不安要素もありますが、第十六話、堂々のリフト・オフです！

第十六話 慟哭の空（後編） 託す想い

「フン・・・」

少しばかりのイラつきを顔に浮かべながら、飛影は元来た道を歩いていた。コートを撫ぜる風がいつもよりうつとおしく感じる。飛影は足を止め、背後を振り返った。

現場近くでは大騒ぎ状態となっている。そのため、先ほどから違う課の魔導師の部隊や現場検証官などと幾度となくすれ違った。その誰もが、飛影を見て一瞬怪訝そうな顔をしたが、端末を操作して彼が民間協力者だと分かるとそそくさと去っていった。

新参ゆえか、それ以外の理由か、飛影の顔はほとんど知られていないようだ。しかし風体だけで一々確認を取るとは、今の自分は悪人ヅラも際立っているらしい。いや、それは普段からかもしれないが。

遠くに『見える』ティアナは、木を支えにしていまだ肩を震わせていた。気が強いとはいえ、ここは恵まれた世界。それにあれでもまだ打たれ弱い少女だ、仕方のないことなのかもしれない。

今は触れないほうがいいだろう。あれが目指すものは、おそらく自分達も通ってきた道だ。力を求め、力無くしては生きられない修羅の道。その理由がどうであろうと、背負っている物がなんであるうと、渴望や絶望から来る気持ちは通った者には十分に分かる。

だからこそ、飛影は彼女に手を貸すつもりも助言を与えるつもりもなかった。自分自身が経験して得たことを考えても、それが最善であつたからだ。

他人の指図で得た物に価値などない。それは彼や彼の仲間が一番よく知っている。

飛影は厳しさと懐かしさを含んだ表情をしながら、邪眼を通して嗚咽を零すティアナを視つめた。

「フ、オレもヤキが回ったか」

飛影はひとりごちながら思った。若き日のあの『バカ』と同じようながむしやらさを持つ彼女を、今はただ見ているだけにしておこう。

まだ『何も分かっていない』彼女が、かつてこの目で見たような道へと違えそうにならない限りは。

「飛影くん!!」

そこまで考えていると、遠くから自分の名を呼ぶ声が聞こえた。声のほうを見やると、なのはが小走りに駆けてくる。その後ろには蔵馬に桑原、それに六課の隊長や副隊長に加え、見慣れない男性二人の姿もあつた。

存外にそのペースも速い。飛影が全員を見渡し終えると、なのは達は既に傍まで寄ってきていた。

「もう、飛影くんたら探してもいないんだもん。どこ行っちゃった

のかと思つたよ」

「でも、スバル達を助けてくれてたんだよね。モニターで見てたよ」

「何のことだ。オレは単なる暇つぶしをしてただけだ」

なのはとフェイトの労いに、飛影は鼻を鳴らして顔を背ける。すると、その後ろから苦笑気味な声が聞こえてきた。

「ははは・・・どちらも苦労しているようだね」

「ええ。ですが、二人ともとても楽しそうですよ」

現れたのは、飛影にとっては初めて見る二人だった。一人は高い背に淡い緑色の長髪を棚引かせ、白いスーツを完璧に着こなした青年、そしてもう一人はこれまた長い茶髪を首の後ろで束ね、ダークグリーンのスーツを纏った優しい顔立ちの青年であった。

前者は飛影たちと同じぐらい、後者はなのは達と同年代ぐらいだろうと見る。眉を寄せた飛影に二人は苦笑気味な表情を浮かべ、一礼して緑髪の青年が前に出た。何だか、横にいる赤毛の狐とダブるのは気のせいだろうか。

「初めまして、といったところかな。僕はヴェロッサ・アコース、時空管理局本局の査察官さ。君の事はいつもはやてからよく聞いているよ、飛影くん」

「ほう？では八神、貴様には後でばきつと聞かせてもらおうとしよう。無論、拒否権はない。脱走すれば極刑に処す」

「ちょっ、何か話し合いには不釣合いな擬音が混じってへん！？つていうか、どっちにしても私の扱い酷ッ！」

飛影の猟奇的な台詞をいい方向にスルーしたのか、「それはいいな、僕も誘っておくれよ」と悪乗りするヴェロツサ。翌日、彼女が病院のベッドの上でうわ言を洩らしながら横たわるビジョンが、彼には想像できないのだろうか。いや、絶対に分かってるこの人、と全員が思った。

後に語った飛影によれば、この時既にヴェロツサに対してのイメージが固まりつつあったのだという。

曰く、狐二号だと。

涙目で抱きつくはやてを蔵馬が慰めていると、その横からもう一人の青年が進み出た。柔らかい表情を眼鏡が覆い、無害な雰囲気醸し出している。

「あはは、会ってみるまで少し不安だったけれど、なのはの言ったとおりの人だ。初めまして、僕は無限書庫と呼ばれる場所の司書長をしている、ユーノ・スクライアと言います」

穏やかな笑みを称えながら、彼は笑う。その笑顔が一瞬どこか無理をしているように感じた飛影だったが、その気配は始めからなかったかのように消え失せ、意味深な笑みをなのは達に向ける。

「貴方のことは昔からなのはやフェイトによく聞いてましたから、僕もずっとお会いしたいと思っていました。そういえば、貴方を探すためになのはには協力を求められたこともありましたよ。どうしても会いたい人がいるから探すのを手伝って欲しい、ってね」

「ユ、ユーノ（くん）っ！！」

いきなりのカミングアウトに、なのはとフェイトが顔を赤くして声を上げる。はやてやヴェロツサはあたふたする彼女たちを、早速捲くし立てていた。そんな中、ユーノは飛影に近づき、真剣味を帯びた表情を彼に向ける。

「飛影さん。いきなりで申し訳ないんですが、貴方をお願いしたいことがあります」

静かに飛影を見据えながらユーノは言った。その声色に何かを感じ取ったのか、なのは達が一様に動きを止めた。問われた本人も、ユーノへと視線をよこした。

その目には一筋の光。少しの悲しさと悔しさ、そしてとてつもなく強い想いを感じさせる不思議な瞳が飛影を見下ろしていた。いまだかつて見たことのない光をその目に宿らせたユーノに、飛影は見上げるようにして対峙する。

ユーノは一度軽く息を吸い込み、澄んだ目でまっすぐに飛影を見ながらその口を開いた。

「なのはを・・・この機動六課を守ってやって欲しいんです。こんなことが僕が頼めることじゃないし、今日会ったばかりの飛影さんにそんな義理なんてないってことも分かってます。けど、それでも言うっておきたかった。僕の力は、彼女たちを守るには足りないから。だから飛影さん、皆を守ってあげて下さい。お願いします・・・！」

「ユ、ユーノ（くん）・・・」

直立不動からキツチリと頭を下げ、ユーノは言葉を紡ぐ。なのは達はそれを僅かに潤んだ目で見つめていた。飛影はそんなユーノから目を逸らさずにいたが、柳眉を僅かに上げると鼻を鳴らす。

「フン、甘ったれるな。自分が出来ないからオレに守れだど？都合がいいにも程があるな。貴様が言うようにオレに助ける義理はないんだ、勝手な理屈を押し付けるのは止めろ」

「なっ！？飛影く

」

あまりにも冷徹な台詞に、はやて達が非難の声を上げようとする。だが、寸でのところで蔵馬とヴェロツサに押し留められた。ユーノは身動きするも、顔を上げようとはしない。

三人を抑えながらヴェロツサ達は黙って首を振った。そして、蔵馬が横目で見据える飛影に続きを促すように視線を送る。その顔に浮かんでいる笑みに若干目を鋭くさせながら、飛影はユーノを見据えつつ口を開いた。

「だが・・・こいつらとは偶々向いている方向が同じようだからな、敵対するものも自ずと絞られてくる。現に奴らとは何度か剣を交えてしまってもいるから、不本意だがオレも仲間の一人に映っているだろう」

顔全体で不機嫌を表した飛影が淡々と語った。なのは達がキョトンとするなか、付き合いが長い蔵馬や彼が口にする言葉の意図を理解したヴェロツサやはやては、含みのある顔でニヤニヤ笑っている。

だが、それに睨みを据えながらも飛影は言葉を止めようとはしな

かった。

「あんな鉄屑を出してチヨロチヨロとするだけの連中が、何を考えているかは知らん。だが、奴らの目的がどうか、何故敵対するのかとか、そんなものは端から関係ない。オレに刃を向けるなら、まとめて切り捨ててやるだけだ。分かったなら、その表情^{かお}を止める。いい加減うんざりだ」

泣きそうな顔で俯いていたユーノが、ハッとしてその顔を上げる。そのときには、飛影はユーノ達に背を向け、一人森のほうを向いていた。

風によつて黒く棚引くコートが随分と遠く感じる。ユーノは彼の言つた内容をもう一度頭の中で反芻し、その意味を数秒かけてようやく理解するに至つた。そしてその表情を笑顔に変えながら、その背中へ黙つて頭を下げた。

それと同時に一帯の緊張が薄れ、音が戻ってくるのが分かつた。その場にいた全員が、緩んだ空氣に息を吐き出しながら安堵する。少し呆れたようにはやてが飛影を見やつた。

「まったく、飛影くんたら相変わらずの天邪鬼なんやから・・・言い方からしてももつと色々あるはずなのに、回りくどくつてしゃあないわ。意味は同じやねんから、素直に『愛しのハニー達はオレが守つてやるから安心しろ』って言つたらええのにな」

「・・・八神、後で話がある。遺書を書いて俺の部屋に来い」

「そ、それは全力で遠慮させてもらつてええか!？」

はやてがドスの聞いた飛影の声に怯えながら、蔵馬の後ろに隠れる。それを見たのはと蔵馬は相変わらずの苦笑いだ。ユーノはそれに笑みを濃くしながら、ヴェロツサと話をし始める。

だが、フェイトには分かっていた。彼の笑顔には隠し切れない悲しみの色が滲んでいる。今の自分には、それがどれほどのものなのか痛いほどよくわかった。

（ユーノくん・・・自分が一番悲しいはずやなのにな・・・）

（っ！？・・・はやて、知ってたんだ）

いきなり頭に聞こえた声にフェイトが驚いて視線を向けると、何とも居心地の悪そうなはやてと目が合う。ユーノを横で捉えるその目は、少しばかりの寂しさを漂わせていた。

（当たり前や、何年一緒にいると思うとるんや。それに、ユーノくんの気持ちに気づかへんのは、なのはちゃんと朴念仁の飛影くんぐらいのもんやで？）

はやてが何を今さら、という風に零す。思えば、フェイトもはやても、彼がなのはに惹かれていることは早くから分かっていた。フェイトは自分と戦り合ったときには既にそう感じていたし、闇の書事件の時は、彼の気持ちはもう疑いようのないほどだっただろう。

しかし、ユーノが自らの気持ちを告げる前に、飛影となのはは出会った。それはたった一度きりの、夢とさえ思えるほどの一瞬の出会い。しかし、彼女にとっては運命的とさえ言える出会いだったのだ。

（フェイトちゃん。私な、『あん時』なのはちゃんを立ち直らせたんは、はじめユーノくんやと思ったんや。同じような時にユーノくんが見舞い行くゆうてたもんでな・・・まあ勘違いやったんやけど）

突如としてはやてが零した言葉に、フェイトは思わず彼女の方を向いた。そこにいる彼女は、いつもどこかが違う。いつもの明るさやお気楽さはなく、自嘲を多分に含んだような笑みが浮かんでいた。

（だから・・・なのはちゃんが治って、無限書庫でユーノくんと会ったときに一度茶化してしもうたことがあるんよ。なのはちゃんに上手いことやったやないかって。そしたら、ごつつう暗い顔で言われてん。『僕じゃないよ、それは』って）

（それ、は・・・）

独白するような口調のはやてに、フェイトは息が苦しくなるのを感じた。もはや、その先は皆まで言わずとも分かる。

はやてに悪意は全くなかった。彼女からすれば、きっといつもやっているじゃれあいのようなやり取りの延長線上だったのだろう。

しかし、それは傷ついた一人の少年に、さらなる追い討ちをかける結果となってしまったのだ。

（今思えば、残酷な勘違いやった。いや、勘違いじゃ済まされへん・・・だから、私はなのはちゃん達には聞かなかったんや。気にはなつたけど、罪悪感が疼いてそれどこじゃあらへんかったから。そないなことしてるうちに時間が経って、フェイトちゃん達が連れてくるまですっかり忘れてもうて。まさか、それが飛影くんみたいな人

やとは思わへんかったけどな)

クスツと、ようやく少し陰の取れた笑みを浮かべるはやて。その視線は頬をリスのように膨らませて飛影と言い合いをするのは、そしてそれを仲裁しているユーノへと向けられている。

事実、飛影と出会いを果たした後のなのはは、それこそ別人のように変貌を遂げた。消極的だったリハビリもすごい勢いでこなすようになり、立つことさえ出来ぬとされたその体を、医者すらも驚く速度で完治させてしまった。

理由は何かと聞かれれば、彼女は満面の笑みで応えるのだ。

ある人が自分を変えてくれた。その人と再会するために、会った時にがっかりされないように私は努力するんだと。

慕っていた女の子を何とか励まそうと思っていたところで、いきなり彼女が立ち直り、その理由が自分ではない男が原因と聞かされたこと。そして憧れといいつつも、彼女がその飛影とかいう男を想い忍んでいるのは誰から見ても一目瞭然だったこと。

それはユーノにとって寝耳に水のことだったに違いない。

自分の思いを告げることも出来ず、逆に彼女からは想いを寄せる相手を探すことを頼まれる。それは何よりも残酷なことだ。そのことを告げられたとき、彼は一体どんな気持ちだったのだろうか。

そのことでユーノが落ち込んでいたことも、フェイト達は知っている。聞けば、自分達が知らないだけで荒れていたときもあったのだそう。

しかし、今彼はそんな恋敵である飛影と席を同じくしている。自らの気持ちが消えたわけではないだろうに、その微笑は痛々しくも穏やかだった。抑え付けたのではなく、吹っ切れたという感じ。

この八年の間には、数え切れないほどの葛藤があったはず。それこそ、なのは達が笑っている時、きっと彼は泣いていた。一瞬でなのはの心を奪っていった飛影を恨んだことも一度や二度ではないだろう。

だが、それでも彼は今こうしてここにいた。友達のユーノ・スクライアとして。

なのはを悲しませない為に、自分の想いを打ち明けるより彼女の幸せを願ったのだ。彼の葛藤は八年にも渡る長く辛いもの。だが、その末に得た答えであつたからこそ、彼が心根から優しき青年だったからこそ出来ることだったに違いない。

（ホンマ、見直したで。好いた惚れたっていうんは正直どうにもならんけど、好きな相手の気持ちを察して引き下がるなんて、分かっつつてもなかなかできることやない。ユーノくん、アンタ男やで。それと、あん時はホントにごめんな・・・ごめんなさい、ユーノくん）

はやては一人、目に浮かんだ涙を拭う。それを言葉に出すことはしない。謝ってしまえば、きっと彼にとって最大の侮辱となるだろうから。

フェイトは優しいげな表情で彼女の肩へと手を添える。そして、ごめんなさいと心のなかで懺悔する親友と、ユーノを交互に見つめた。

（・・・強いね、ユーノは）

（ホンマにな・・・）

フェイトは痛む胸を抑えながら、傍らに立つユーノを見る。飛影と話す彼の表情は、旧来の友人と語り合うような清々しさを感じさせていた。

もし同じ立場になったら、自分はきつと耐えられないだろう。考えるだけで、身体が引き裂かれるような痛みが胸を襲う。フェイトにはそんな痛みを抱えて立つユーノが、とても眩しく見えた。

だから自分も誓う。可能性がある限り、絶対に諦めたりはしないと。

遠く響く泣き声も、静かに仕舞われる嗚咽も、空は等しく吸い込んでいく。今映る笑顔も大切な人達とのくだらないやり取りも、すべては青き輝きの中へ溶け落ちて、いずれ消えてゆくのだろう。

告げられぬまま突き進む思い。告げずに受け継がれる想い。

だがどちらも砕けはしない。その先にはきつと、新しい形が待っているから。

晴れやかな上空に雲が流れ、陽光が木々を照らし出す。

穏やかな風が、彼らを見守るようにその髪を攫った。

第十六話 慟哭の空（後編） 〃 託す想い（後書き）

ホテルアグスタ編最終となる十六話でした。

今回は、はやたとユーノをメインに据えたお話となりました。色々なところで淫獣などと散々な言われようのユーノくんですが、今回はかなり男らしいというか、カッコイイ感じでまとまっています。

こんな風にカッコイイユーノくんも偶にはいいんじゃないかなあと
思い、書いてみました。 実際彼の立場になれば、易々と出来ること
ではありませんからね。

無論、シリアスだけでは終わりません。ユーノくんには普段の淫獣
ぶりを発揮して頑張っていたくつもりでいるので（オイ）、また
の登場はギャグ要素を強くするつもりであります。

と、ここで前回のお話で活躍した桑原くんのオリジナル必殺技につ
いて、簡単ながら説明をさせてもらうことに致します。

<極大靈光剣・一気倒千（ミスターフルスイング剣）>

多量の靈気を靈剣につぎ込んで巨大化させ、バットの要領で力の
限りなぎ払う技。飛影には竹を割ったような力技だと呆れられてい
るが、単純な大多数戦では高い効果を発揮し、靈気の密度を調整す
ることで消費靈力を調整したり、相手を殺さないようにもできるこ
ろから、蔵馬には究極の掃討技とまで言わせている。

無論のこと規模の違いから靈剣より段違いに靈気を消費するが、相手がただの人間やガジェットである場合はその密度がそれほど必要ではないため、効率から言えば燃費は悪くない。シグナムとアギトの合体技、火龍一閃と非常によく似ているが、最大威力・範囲共に桁違いである。

ネーミングは一人で千人分の活躍をするという『一騎当千』に『一気に千の相手を倒す』という言葉をかけたもの。

感づかれた方もいらつしやるかもしれませんが、この二話に渡った『慟哭の空』は、二人（三人）の人間の『涙』と『信念・想い』をテーマにしたお話です。

それぞれ事情は違いますが、心に持つ悲しみに対する各々の捉え方を書いてみました。上手に纏まっているか心配なんですけど・・・まあなるようになるでしょう。

そして、次回はなんとこの作品に転機が訪れる・・・かもしれません。お話自体はそんなに変化しないと思うんですが・・・詳しくはまた本編をお待ちください。

それでは、今回も長々と付き合っていたいただきありがとうございます。夏ももう終わりに近づいてきたので、お互い悔いの残らない夏にしましょう！

ではでは、また皆様とお会いできることを願って。再見！

ツアイツエン

P S

ユーザー登録をしなくとも感想は書けますので、ドシドシどうぞ。
また、ログインされたユーザー様は、作品評価のほうも並んでどうぞ。自分の作品の出来がどの程度の出来なのか知りたいこともあるので、どうかお願い致します。

第十七話 夢での邂逅 〰 秘められし力（前書き）

大変長らくお待たせいたしました〰〰〰！戻ってきた作者であります。

自分のことを第一にしていた期間とはいえ、随分とお待たせしてしまい申し訳ありませんでした。お陰で、といいますが、卒論は八割とはいかないまでも、まとめた解説を書き写すだけというところに来て来ました！

わー、パチパチ。字数からすれば残り8000字ほど残っているのですが、あとはひたすら書き写すだけの作業。しかし、書き写すのって意外と大変なんですよねー・・・

ソロモンよ、私は帰ってきた！またどこかへ行くかも知れないけど・・・

ではでは、そんなわけで第十七話、久々のスタートです！

第十七話 夢での邂逅 〰 秘められし力

- Side Teana Runstar -

ホテル・アグスタでの事件から数日、私は塞ぎこんでいた。ベッドの上に身体を横たえる。別に引きこもりになっているわけではない。だが、人間関係でいえばその傾向も出始めていた。

もちろん仕事は誰よりもキッチリとするのを心がけているし、訓練だって全てこなしている。だが、澱みのような嫌な感情が次第に自分のなかに溜まっていく感じは日ごと増していた。

今日が終わる。厳しい訓練の後だというのに眠気は来ず、いつものようにベッドに寝転がり、いつものようにマイナス思考を始まる。

ここのところずっとそうだ。飛影にスバルを助けてもらったあの日から止まらないのだ。

（私だけ・・・なんで・・・くっ）

怒りとも悲しみともつかない黒い感情が自分を押し流そうとしてくる。いつもは耐えていたが、今日はその流れが強い。才あるものへの、そして自分への憎しみや妬みなのだろう。

こんなのは嫌だ。惨めになりたくないからこそ死に物狂いで努力して管理局に入ったというのに、これでは真逆ではないか。

(もう・・・嫌・・・)

頭から布団を被り、うつ伏せになって枕に顔を押し付けた。同じ問いや答えがぐるぐる回った末、思考が極大に達しそうになる。そしてそれが思うがまま、滅茶苦茶に爆発しそうになったとき急速に意識が遠のき、

『辛気臭えなあ。あー、やだやだ』

「う、わあっ!？」

それは唐突に終わりを告げた。頭のなかに誰かの『声』入り込んできたのだ。私は目を開いた『感覚』を覚えながら起き上がり、響いた声を追うようにして後ろを見た。

そこにいたのは青年だった。白い胴着を着込み、鍛え抜かれた両腕を惜しげもなく晒した年上の青年。瞳は飛影さんのような勝気な光を帯びていたが、彼とはまた違う印象を受けた。

そして黒色の前髪は見事なりーゼントを描いている。桑原ほど露骨ではないが、普通の髪型というジャンルとは少しばかり方向性が異なるだろう。

『まったく、真面目ちゃんはこれだからいけねえよな。考えばつか先行っちゃって頭でつかちにかなりやしねえ。強いだの弱いだの、いちいち難しく考えすぎだ』

口調は軽い。だがその身体から発する『何か』に私は身構えた。得体の知れない感覚、それは恐怖だ。威圧感を灯した飛影さんと並び立つほどの何かを、私は目の前の男から感じていた。

「あ、貴方誰よ！？人の部屋に勝手に入ってきて、私に何をするつもり！？」

『何言ってるんだよ、お前はそこで寝てんじゃねえか』

「えっ・・・な・・・」

相手の指した方向、自分の後ろを見やって私は声を上げた。そこで目を閉じ、等間隔に静かな息をしているのは紛れもなく『私』だった。寝ている自分を見下ろしているのである。

「ど、どうなってるの・・・！？」

『それを今から教えてやる。と、思ったが、言葉で言うのは面倒だから、とりあえず自分の力を確認がてら磨いてこい。潰されんなよ』

彼が言った瞬間、景色が突如変貌を遂げる。闇が降り、黒一色だった就寝部屋と彼が消え、変わりに板張りを敷き詰めた大きな部屋が現れた。

どこかの道場のような荘厳とした佇まいに自然と背筋が伸びる。足が地に着いた感覚に戸惑っていると、床板の一つが歪み何かが迫り出てきた。

「な・・・」

私は言葉を失う。

一言で言えばそれは影だった。何の感情も、何の生気も感じさせないただ虚無を固めて生み出したような空ろな人形。目も耳も口もない、ただ不気味な色を立体化させたような出で立ち。そのあまりの無機質さに、背中を嫌な汗が流れていった。

それに驚く間もなく、影はゆっくりとこちらに歩いてくる。顔のない相手からは表情など読み取りようもないが、明らかな敵意が伝わってくる。私は慌ててポケットに手を伸ばし、いつも傍にいるはずの頼れる相棒を探した。

だが、手に馴染む大きさのカードの感触はどこにもない。いつもは体に満ち溢れている魔力も感じない。それが不安を恐怖に変える。

「ひう……っ！」

情けない声が喉を通して空気を震わせる。私は後ろに下がろうとしたが、そこに壁が在るかの如く下がることができない。

と、何か言いようのない悪寒を感じて私は体を捻った。体裁もなにもなく、無様に床を転がる。瞬き程度の僅かな時間の後、私は倒れた体勢から自分がいた場所を見た。

そして絶句する。目にしたのは影が突き出した手から伸びる闇。まるで獲物を食らい尽くすかのように蠢くそれが壁を覆っている。そして、それは程なくして私へと向けられた。

「う……あ……」

もはや悲鳴にもならない。そこにあるのは絶望だ、このままいけば自分は死ぬという確信のみ。

殺される。直感でそう感じた。涙が出そうになるのを嫌うように思わず目を瞑る。だが、その瞬間に私の中に流れ込んでくるものがあつた。まるで濁流のような勢いで以って、私の中に入り込んでくる。

私の中に満ちていた恐怖や焦りなどを、それは一瞬にして押し流していった。混沌とした心がより強い混沌で上書きされ、それらが徐徐に形を成していく。

輪郭が宿り、線が走り、色が満ちる。それらは時に調和し、時に互いを押し潰しあいながら生き物のごとく姿を変える。そして一つの光景が映し出された。

映つたのは先ほどの青年、そして彼は右手を掲げた。そして瞬間に指先に光が集まつたかと思うと、彼は無造作にその青い半透明な光を撃ち出した。空間が僅かに震え、光はそのまま遙か上空へと消えてゆく。

光の尾をなびかせながら飛んでいくそれに私が弾丸のような印象を持ったとき、景色が戻り、止まっていた時間が動き始めた。

「・・・・」

目の前には先ほどの影がいた。だらんとした腕をゆらゆらと振りながら、こちらに向けて少しずつ近寄ってくる。私はギリッと奥歯を噛み締め、右手を前に突き出した。

「ッ……もう、こうなりや駄目元よ！」

先ほどの映像と同じように、右手の指先に気を集中させる。すると何の澱みもなく、先ほど見た時と同じようにして自分の人差し指に光が集まっていった。私が息を飲む中、ライトブルーの光は導かれるようにしてその輝きを増し、指先を覆い隠していく。

影が残り五歩前後のところまで迫る。私はそれを睨みつけ、恐怖を振り払うようにして、腕を構えた。

「……喰らいなさい、このおおおおー!!」

『彼』と同じような弾丸をイメージして、私はこの身に馴染んだ射撃魔法を使うように心へ念じた。刹那、光は私に応えるように飛ぶと、そのまま影を撃ち抜いて虚空へと消えていく。黒一色だったその身体に風穴を開けられて外郭を保てなくなったのか、程なくして影は消えた。

それと同時に私の意識も急速に遠くなっていく。まるで引き込まれるかのような、いや引き上げられるかのような力に抗うことなく私は沈んでいった。

絶望はない。何とかなったのだから、もうこれぐらいでいいだろう。そう見切りをつけて私は意識を完全に手放した。

『ま、ギリギリ合格だな。力を見つけたのは偶然だったし、ホントはついでぐらいのつもりだったんだが、気が変わったぜ。軽く鍛えてやるから感謝しろよ、ティアナ』

だから、どこか嬉しそうな声は私には届かなかった。

- Side change several days after -

「そうそう、いい調子だよティアナ」

「・・・はいッ！」

なのはの声が横から響いた。四方八方より迫り来る光の玉をクロスミラーージュで撃ち落していく。同じくして足元に葉莢が次々と転がっていった。

ティアナのポジションがやるいつもの訓練の一つだ。目的は視覚を広く取ったり、多角的な攻撃に対抗できるようにすること。あるいは戦況把握のために大きな視野による判断を素早く正確に下せるようにするためにあるセンターガードの訓練である。

「ッ・・・ヤッ！」

この訓練をティアナはかれこれ数十分は続けていたが、何週間もやってきたことだ。疲れはするが、これぐらいでまいるような柔な鍛え方はされていない。

前と真上、そして右上と左から来る光を順々に二丁銃で全て

叩き落した。光が砕けて魔素へと還り、虚空へと溶けていく。

撃ち落した光の残滓を見届けてから視線を下げる。すると、此方を見ていたなのはと目が合った。その周りにはもう浮いている光は残っていない。

彼女がティアナを見てにつこりと笑った。張り詰めていた空気が緩み、緊張を解く。そうしてティアナがほっと一息吐こうとした時、背筋に何かが走るのを感じた。

「ッ！」

考えるより速く、身体を捻って左手のクロスミラージュを背後に向ける。それは流れるような無駄のない動作、気づいたときには躊躇なくトリガーを引いていた。

「シッ！」

銃撃の鈍い音を残しながら、葉莢が地面に落ちて立てたカランという乾いた音と重なる。そしてティアナの視覚がそれを捉えた。

それは光の玉の欠片。桃色の光を放っていたそれは、ティアナの黄色がかった弾丸に撃ち抜かれ、高い音を響かせて消える。そこで漸く大きな一息を吐くことができた。ティアナは少しジト目気味で苦笑しながらなのはを見る。

「まったく酷いですよ。どんな時でも油断しないようにって言いたかったんですか？なのはさんって相変わらずスパルタですよね」

「・・・え？あ、う、うん。よくわかったね、ティアナ。これなら

何の心配もないよ」

「ありがとうございます。午前はこれで終わりでしたよね、それじゃあ私はご飯食べてきます」

ティアナはそれだけ言うと踵を返した。強くなるために、少しでも練習をするために時間が惜しい。一刻も早く食事を終わらせて、自主練に入らなくてはとティアナはスタスタと歩いていく。

その後姿をなのはじつと見つめていた。

- Side change at night -

「うん・・・」

夜の自主練習の合間の休憩タイム。伸ばした右手の指先を見つめながら、ティアナは一人考え込んでいた。彼女の視線の先にあるのは男の姿・・・などではなく何の変哲もない自分の人差し指だ。いつもと別に変わりはしない。

訓練で傷ついているが、マメにケアはしているので女の子らしい手だとは、思う。けれど今考えるべきはそこではなかった。

「はぁ・・・」

十日ほど前、衝撃的だったあの夢を見てからティアナは毎晩のよ

うにそれに準ずる夢を見るようになっていた。一晚も欠かすことなく文字通り毎晩である。

そのどれもが黒い影と戦う夢だ。始めは一体だけだったのが、二体になり三体になり、今では両手の指ほど、それもかなり強くなった影を一度に相手するにまで至っている。

見えないところから来る攻撃もあるので、次第に影から発する気配や殺気、そして何か不思議な感覚のようなもので動きを読むことが出来るようになり、それを頼りに攻撃するなんてこともしていた。あくまで夢の中でだけという話だが。

そして目が覚めれば現実の訓練が待っている。寝ても醒めてもティアナは動き続けていた。だが、不思議と疲労は少ない。

「やっぱり光らないか・・・」

あの夢の中ではティアナは不思議な力を使えた。指先に力を集中して弾丸のように放つという、魔法のようで全く違う力による攻撃だ。魔法陣も出なければデバイスも使わない。

だがその力は無尽蔵というわけではなかった。使えば使っただけ減り、なくなれば出せなくなる。たったそれだけ、普通に考えれば当たり前のことだが、夢であるその世界でそうなっていることにティアナはひどく現実感を感じていた。

しかもそれだけでは終わらない。

夢を経るごとに身体に流れる力の感覚が分かり始め、自分の拳や足に力を受けて攻撃や移動をするなんてことも出来るようになった。

理屈は分からないが、ひたすら耐久組み手のようなことをしているうちに、あの力には強化魔法のような防護や攻性作用があることも分かったのだ。

しかもこの方が力の使用量も少なく場所を選べば効果も大きいので、決め手である『アレ』を撃つことが必要な相手に温存できた。

今の自分では『アレ』を二回撃つと、ほぼ全ての力を使い果たしてしまう。結果としていつもの射撃一辺倒では通じず、それなりに身体を使った攻撃もするようになったというわけだ。それも最初は一発しか使えなかったことを鑑みれば、普通は成長していると言えるだろう。

しかしくどいようだが、全てが夢での話だ。あまりのリアルさに、これが現実だったらと考えたこともある。

だが、夢では簡単に出来た力の集中も起きてみれば何もできない。所詮は夢の中、才能を求めるあまり自分の卑しさを思い知らされたようで、少し気が沈んだ。

「頑張ってるね。暇だったから付き合いにきたよ」

そこに馴染み深い声がかかった。声の主は言わずもがなだ。五月蠅い鬱陶しいバカっぽいと三拍子そろったティアナの腐れ縁、天然突撃娘ことスバルである。訓練で疲れているというのに、彼女は満面の笑みだった。

アグスタで致命的な失敗したあの日から、ティアナは自主練習を始めた。無理は承知だったが、何もしないままではいられなかったのだ。

そして一人でいいと言っているにも関わらず、何かと理由をつけて彼女はティアナに付き合ってくれる。世話焼きなお人好しであるが、その思いがとても温かった。

「ティア、昼間もなのはさんの教導があっただんでしょ？その割にはなんか元気に見えるけど、ホントに大丈夫？」

「大丈夫よ。自分のことはそれなりにわかってるつもりだから、今のところは平気。それより、アンタもしっかりやんなさい。あたしとの特訓を怠けの言い訳に使われちゃたまないしね」

「うー！パートナーがせっかく来てあげたっていうのに、まったく酷いなーティアは。けど、成果はでてるみたいだね。なんだか前よりタフになったような感じがするし、反応の速度だってどんどん上がってるじゃん」

「え？そ、そう？」

予想外のことを言われ、ティアナはきよんとする。スバルのほうはティアナがそんな表情ををすると思わなかったのか、彼女と同じような顔をした。短期間で伸びればいいと思っていたが、目に見えて力がついているらしいことには驚くしかなかった。

「ティア、気づいてなかったの？キャロとかエリオも騒いでたし、リン曹長とか結構驚いてたよ？」

スバルの言葉がティアナへの心へと届いてくる。正直な話、まったく気が付いていなかった。自分を高めることと、夢での出来事を整理することで精一杯だったからである。事実、考える時間はほと

んどそつちに費やしていた。

もちろん、ティアナが実力が伸びているということに嬉しい気持ちになったのは本当だ。オがないと言われ、そして自分でも認識していたものが少しずつ覆ろうとしていることには素直に喜べる。

しかし、ティアナは同時に何か釈然としないものを感じていた。

どんなに努力しようと、これまでは一向に伸びる気配すらなかったのだ。秀才と言われつつも、それは人の何倍も時間をかけて自分のものにしてきた結果でしかない。ティアナにとってこのような伸びは異常だった。

理由は・・・思い当たらないわけではない。偶然だが、その時期も重なる。

だが、あれは

「・・・まさか、ね」

「ん？どうしたのティア？」

「なんでもない。さつ、休憩終わり。続き始めるわよ」

ティアナの掛け声にスバルがおーっ、と間延びした声を上げた。

馬鹿馬鹿しい。

あれは夢だ。いくら毎晩続く不思議な感じで、ちょっとリアルだからって夢は夢なのだ。

肉体が疲れていないことを踏まえて、全てが現実とは違う。ありもしない理想や叶わない夢を追いかけても、その先にあるのは失望という名の現実だ。何度も何度も経験してきた。

きつと、訓練の成果が今になって大きく出始めてきたのだろう。ティアナは勝手に理屈を固め、疑問を横に流した。

(・・・私にはやらなきゃならないことがあるんだから)

スバルを交えつつ、ティアナは訓練を再開した。

そこから飛ぶように消えた、黒い影に気づくことなく。

- Side out -

第十七話 夢での邂逅 〰 秘められし力（後書き）

卒業論文というのは存外に強敵でありました。

自分の中では夏をかければ簡単に終わるぐらいの認識だったのですが、そうではありませんでした。ここに記しておきます、前々からの準備とか絶対おろそかにしちゃダメですよ！

・・・ちなみに私の妹は大学二年なんですが、もう卒論の準備を始めているそうです。そのぐらいからやってなかったの？とちょっと不思議そうに言われました。

分かってるんなら確認ぐらいは取って欲しかった！出来のいい妹を持つと、兄は辛いです。誇らしいけど。

さて話は変わりますが、わたくし、今日久しぶりにアクセス解析を見てぶったまげました。な、なんと、この小説のPVが40万越え、ユニークは5万に達していました！

・・・びっくりです。正直、かなりビビッて椅子から滑り落ちました（マジ）。

驚いたのは事実ですが、これからもこの小説をご贔屓にしてくれると嬉しいです。

さて、とんでもない設定が出てきた今回ですが、これは作者が前々から考えていた最大のご都合主義の一つです。

彼女を部隊を纏める指揮官として育てているとなのはは言っていま

したが、彼女が最終戦で出したのはなのは育成方針と何の関係もない空間の認識力からですし、自分自身の力がなくては凌げないときもあると考えていたので、なのはの砲撃力と比べたらちよつとかわいそうだよなあ・・・という思いからこうなりました。

ランスターの弾丸は何でも撃ちぬける・・・なら遠慮なく撃ち抜いてもらおうじゃないか！といった感じです。

・・・なんだかカオスな展開になりそうな気がしますが、これからも頑張つて行くので応援よろしくお願い致します！

では、また次回でお会いできることを願つて。

ツアイツエン
再見！

第十八話 後悔×喝入れ×秘奥の解放 〵 譲れぬもの（前書き）

八月も、もう終わりですね。なんだかあっという間だった感じです。

大学生活最後の夏が終わる・・・悲しいiiiiiiiiです。

いつまでもこんな風にのんびりと小説を書いていたい・・・ダメ人間ですね。

停滞することは後退である。と昔どこかの偉い人が言っていた気がするので、ともかく悔いがないようにしたいです！

それでは、第十八話です。どうぞー！

第十八話 後悔×喝入れ×秘奥の解放 〵 譲れぬもの

飛影は機動六課の廊下を歩いていった。夜も遅いのか、自分の足音が遠くまで何度も木霊しながら去っていく。そして突き当たりの部屋の扉を潜り、少し不機嫌そうに息を吐いた。

「・・・行ってきたぜ」

「ふふ、相変わらずやね。モノを頼まれた人の態度やないなあ」

尊大な物言いに応えたのははやだった。その他にも、蔵馬と桑原の二人とフェイトになのは、それにヴィータとシャーリーなどが部屋にいる。その机の上には資料がいくつかと何故かランプが乗っていた。リインやシグナムは現在別の任務を遂行中なのだそうだ。

「コイツ・・・いい加減、本当に消してやろうか？」

「自然体で人を脅すのは止めてくれ、飛影。正当な経緯でこうなっているんだし、そもそもトランプ初心者とはいえそれを承知で挑んだゲームに負けたのは貴方だ。間違いなく自分の責任だろう？」

「そうだが、まさか飛影は言い訳なんかしねえよなあ？」

「くッ・・・当たり前だ！」

蔵馬と桑原に窘められ、というか半分挑発され、飛影は悔しそう

に息を吐いた。会話で察するとおり、実は先ほどまでみんなでトランプゲームをやっていたのだ。その罰ゲームとして、飛影は言われたことをやってきたところなのである。

「つ、次はきつと勝てるよ飛影！」

「いらん世話を焼くんじゃない！」

「あゝダメだよ、飛影くん。フェイトちゃんに当たっちゃ」

なのはは「あうう」と萎みこんだフェイトの頭に手をやり、よしと撫で付けている。涙目のフェイトに若干怯む飛影だが、キッと目を細め、剣呑な目付きでなのはを見据えた。

「当たってなどいない！それに元はといえば、貴様がオレに下らん命令したのが原因だろうが！」

「あはは、そういえばそうだっけ・・・で、どうだった？ティアナの様子、見てきてくれたんだよね？」

先ほどの明るさはなりを潜め、存外に真剣な声でなのはが言う。その顔は深い憂慮と若干の怒りで構成されていた。

トランプで一番だったなのはが飛影に下した罰ゲーム、それは最近無理を通してティアナの様子見をしてくるというものだった。フェイトやなのはがいくら休めといっても聞かず、彼女はスバルやエリオらと一緒に無茶な訓練を続けているのだ。

ヴィータ達、それに飛影らは彼女にあそこまでさせる原因が最愛の兄だったティード・ランスターの死とそれにまつわる悲劇、そし

て最近あったアグスタでの一件が絡んでいることをなのはから告げられた。そして、この状況をどうするのか彼女たちは頭を悩ませていたのである。

トランプは、はやてが飛影を挑発した末に行われたものだったが。

「ティアナちゃんの目標は兄の汚名を雪ぐこと。そしてその兄が目指していた執務官になることで、管理局に自分と亡き兄の力が本物だと示すこと、か。彼女にも背負っているものがあるようですけど、実際どう思いますか、飛影？」

「フン、別にどうも思わん。それなりの疲労はあるだろうが、際立った問題はなかった。そもそもどのように動こうか何をしようが、端から俺の知ったことじゃない。オレも一度ヤツを試したが、それでも折れるつもりはないようだから。それほどまでに突き通した事なら、奴の勝手にさせればいいだけだ」

「ッ！なのは話を聞いてなかったのか！？オメーはティアナがどうなってもいいってのかよ！？」

あまりの言い草にヴィータが声を荒げる。だがそれに対して何の感情も浮かべず、飛影は一睨みしてそれを黙らせながら口を開いた。

「言葉にせんと分かんか？例え潰れそうになろうが、死ぬ瀬戸際まで行こうが関係ない。奴が何かを目的にしてそうしている以上、それによつて降りかかる災難も責任も、全てアイツ自身の問題だ。オレ達があればこれと関与することじゃない。それ以前に、奴自身がそれを求めているんだからな」

「・・・確かにティアナは成長してきてるよ。今日も信じられない

ぐらいの動きを見せてた。でもっ！このままじゃティアナの為にならない・・・無茶は危ないって・・・分かって欲しいの！」

なのは声を大にして飛影に告げる。そこには抑えきれない憐憫が浮かんでいた。なのはの目には、ティアナがかつての自分の投影のように見えるのかもしれない。それははやてやフェイト、そして飛影も分かっているはず。

しかし、期待を寄せた言葉に対して返ってきたのは、芯まで呆れた返ったような声だった。

「やれやれ・・・高町、貴様はそれで本当に奴の教官をしているつもりか？ヤツも相当なバカだが、貴様はそれ以上だな」

放たれた言葉に、なのはは絶句して言葉を飲み込む。飛影はそれを横目で見て一度目を瞑ると、ソファから腰を上げた。

「無茶だということなど奴はとくに気づいている。自分が今いる立場も分かっているはずだ。だからこそ、あれだけ特訓に励む。まあ、オレ達に言わせればあんなのは無茶でもなんでもないし、少々『力』に固執しすぎている面もあるがな。どちらにしろ、ああなつた奴は梃子でも動かんが」

飛影はふつと息を零しながら言う。閉じられたその目蓋の裏側で、彼が見ているものを知る者は誰もいなかった。

「教導は刷り込みではない。たかだか数週間程度の面倒を見たくらいで、考えまで同調させられるなどと思うなよ。何とかしたいのなら、腹の探りあいのような上辺だけの言葉や、芝居にもならんふざけたやり取りをやめることだ。他でもない、貴様自身のな」

切れ長の瞳が、矢のような鋭さを伴ってなのはを射抜いた。心の奥底を突き刺されたように感じ、なのはは一瞬息が出来なくなつて胸を押さえつける。だが、怒りにも似た感情が湧き上がってくるというのに、何故か反論の言葉は出てこなかった。

飛影にはいまだ表情がなく、そこには侮蔑も奢りもない。彼はそのまま、ただ単調に言葉を紡いでいった。

「自分本位な考え方は止める。ランスターのこともそうだ。横から勝手に決められてしまえば反発するのは当然、言葉もただの枷にしかない。それはいずれ奴との間にひずみを生み、耐え切れなくなつて爆発する」

スタスタと黒い背中が遠ざかつていく。そして自動ドアの扉が開き半分外に出た状態で飛影はもう一度振り返った。

「自分の考えを強要するだけなら、どんなバカにでも可能だ。高町、仮にも貴様が何かを教える立場だと言うのなら、少しは考えてからものを言え。ランスターの奴は、お前と『同じく』相当な頭でっかちだからな。今の貴様のやり方では、一片の言葉も奴には届かん」

飛影は今度こそ部屋を出て行く。いたたまれなくなったのか、蔵馬と桑原もそれに続いた。部屋に沈黙が降りる。だが、それを破つたのは怨嗟のような呟きだった。

「・・・強い飛影くんには分からないよ、何にも出来ない辛さなんて。弱い人の気持ちなんて。幸せがどれだけ脆いのかなんて・・・」

「なのはちゃん・・・」

「なのは・・・」

はやてとフェイトが膝の上で拳を握り締めたなのはを慮る。その気持ちは彼女を良く知る二人には痛いほどよくわかった。

今の彼女を放っておくなど、そんなことできるわけがない。元よりのなのはに許容できるはずもなかった。うわべだけなんて言わせない、彼女は必ず救い上げてみせる。もう繰り返さないために。

「私はティアナを止めるよ・・・絶対に」

想いを胸に少女は立ち上がる。自分が受けたような傷跡がティアナに降りかかるのは、絶対に回避しなければならない。あんな辛いことが正しいことのはずがない。そう信じて。

- Side change Next day -

翌日、飛影はいつもより遅くに目を覚ました。窓から差し込む光を受けて目蓋を開く。

いつもは早朝練習や朝の日課である妖気のコントロールなどをするのだが、今日はそのどちらもせず彼の身体は布団のなかに埋もれたままだった。

何故かと問われれば理由は至極簡単だ。単に起きる気がしなかっただけ。スバルなどが起こしに来たが、悉く無視した。人の指図や

命令はよっぽどでなければ受けない、それが彼のスタンスである。

「今日は、確か模擬戦をやると言っていたな・・・」

ぼつりと言葉を零し、飛影は掛け布団を退けた。ベッドから起き上がり、何時ものノースリーブシャツとズボン、そして黒コートを身に纏う。最後に剣を腰に差すと扉を潜り、忌々しそうな顔をして通路の左側を見た。

「気配を断つて様子を窺うな。悪趣味な奴め」

その先、扉の真横の壁に背を預けていた蔵馬が苦笑して、そのまま腕組みほどくと姿勢を正す。先ほどのことにはちっとも悪びれる様子もなく、そのまま近寄ってきた。

「やれやれ、わざわざ呼びに来たというのに随分な言い様ですね。模擬戦、始まってしまえますよ？」

「すぐに勝負が決まるわけでもあるまい。それに、時間的にはちょっといいはずだろう」

「始まる前にいろいろと準備がありましたからね。それをボイコットした誰かさんは知らないことでしょうけど」

「フン」

蔵馬の厭味や小言を聞きながら、飛影は訓練場に辿り着く。そこでは既に模擬戦闘が始まっていた。あちこちから響く轟音や飛び交う魔力光がその激しさを物語っている。

その中ではスバルとティアナの二人が、なのはと戦っていた。飛び交う黄色の魔力弾を、同じく桃色の魔力弾が相殺し、あるいは牽制しながら弾いていく。絵に描いたような射撃戦と火花を散らすような格闘戦だ。

「あ、蔵馬に飛影。見きたんだね」

「遅っせえぞ、オメーら」

フェイトとその横にいた桑原が二人を見つけて近寄ってくる。後ろにはヴィータとライトニングの二人もいた。挨拶もそこそこに集まった全員が訓練場へと視線を移す。

何時もと変わらぬ風景と訓練フィールドシステム。しかし、戦うものの達の様子はいつもと少し違っていた。蔵馬が何かを考えるような仕草を続けながら、上空で繰り広げられている模擬戦に目をやる。

「ティアナちゃんの弾のキレはいつにも増して凄いな・・・けど、何か迷ってる。いや、認識に感覚が付いていけないのか・・・？」

下方ではティアナが飛行するのに向け、死角から陣形クロスシフトを取り得意の射撃で攻撃していた。一段と鋭くなったその攻撃を、なのははそれを身体を僅かに反らしながら避けるが、その回避行動によって制限された軌道上にウイングロードから疾走したスバルが突撃していく。

なのはの牽制弾をバリアで強引に受け流しつつ、スバルは力任せに拳を突き出すが、同じようにレイジングハートで構えを取ったなのはがそれを受け止め、逆に弾き飛ばした。

「あっ・・・」

「ちょっと強引なような・・・」

なんとかウイングロードに着地したスバルを見て、安心した息を吐くキャラや見上げていたエリオが眩きを零す。二人の表情が優れないところからも、なんとなしには異変に気づいているようだ。

「オイオイ・・・何を焦ってんだ？」

「話にならないな。ティアナの腑抜けも相当だが、スバルに至っては考えなしに突っ込み過ぎている。おそらく陽動か何かだろうが、あんな動きでは撃ち落してくれと言っているようなものだ」

「ん・・・まあ、そうだな」

桑原の呆れ声に飛影の言葉が連ねられる。キツイ言い方だが的を射ていたのだろう、ヴィータも同じような表情をすると市街フィールドへ視線を戻した。

すると、なのはの額にレーザーポイントが照射される。その起点、遠くに立つビルの屋上でティアナが砲撃姿勢を取っていた。スバルは同調するようにカートリッジをロードし、またなのはに突っ込んでいく。フェイトが驚いたように背を伸ばした。

「砲撃・・・ティアナが・・・？」

「バカめ、アレは罠だ」

「「「「囧?」」」」

「ええ。本人は・・・」

「あっちだぜ」

言葉と同時にティアナが幻影となって消える。蔵馬と桑原が視線と言葉を向けた方向、スバルのパンチを受け止めているなのはの後ろから、ウイングロードを駆けてティアナが走ってきていた。

そのスピードは、以前までの彼女からは考えられないほど素早いものだった。なのはが意識を向けたときには、既に射程距離に入っている。

そしてそのままなのはの上を取るようにして、ダガー状の光を出したクロスミラージュで突貫していった。ダガーでバリアを切り裂いて一撃でカタをつけるつもりらしい。

攻撃が来ることを分かっているはずだったが、なのはは動かない。そしてその刃が彼女に届こうとしたとき、飛影は吹きすさぶ風が不愉快な濁りを帯びたのを感じた。

「・・・チツ、面倒なことになったな」

「・・・ああ」

飛影の呟きに蔵馬が間を置かず応える。その瞬間、時が遅くなったように色あせていき、場が呼応するように音を無くした。

「・・・レイジングハート、モードリリース」

『All right』

なのはの言葉と爆発音がシンクロする。予想外の爆発力で突風が巻き起こり、土煙が辺りを支配する。そしてようやく光が差し込んだとき、空気を震わせるような言葉が静かに響いた。

「おかしいな・・・二人ともどうしちゃったのかな・・・頑張ってるのは分かるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？」

煙の晴れた先には二人ぶんの攻撃を受け止めるなのはの姿があった。だがレイジングハートをセットアップ前に戻っており、防いでいるのもシールドではなく、自らの手によってだ。

左手でスバルのマツハキャリバーを。右手でティアナのクロスミラージュのダガーを掴みながら、なのはは俯いていた顔を上げた。ダガーを握った右手は血を滴らせ、彼女の純白のバリアジャケットを濡らしていく。

それを見て二人から血の気が引いていった。

「練習のときだけ言うこと聞いている振りで、本番はこんな無茶するんなら・・・練習の意味、ないじゃない・・・」

「う、あ、あの・・・」

なのはの空ろな目が二人を捉える。いや、空ろなのはうわべだけだ。感情がないのではなく、感情を浮かべることすら忘れるような激情が彼女から一切の色を消し去っていた。

その身体からは少女らしからぬ殺意すら浮き出ている。

「ちゃんとさ・・・練習どおりやろうよ。ねえ、私の言ってること、私の訓練・・・そんなに間違ってる・・・？」

『Blade-release』

殺気立ったなのは言葉にティアナは怯んだ。その瞬間主の意志を汲み取ったか、クロスミラージユがダガーを形成していた魔力を破棄し、彼女の動きをアシストする。同調するようにティアナも後ろに飛び、展開されたままのウイングロードに着地した。

「あたしは！もう誰も傷つけないから！失くしたくないからっ！だから・・・強くなりたいんです！誰にも負けないぐらいの強さが・・・守られてるだけじゃない、皆を守ることができるだけの力が・・・私には必要なんですッ！！」

その頬を涙で濡らしながらティアナは叫んだ。長年抱えていたものが溢れてしまったのだろう、彼女らしからぬ感情の高ぶりだった。

なのはに向け、ガシャガシャとマガジンの切れた銃のトリガーをかまわず引き続ける。なのははそれを表情も変えずに見上げたまま、指先に魔法陣を展開した。

「少し・・・頭冷やそうか。クロスファイア・・・シュート」

「うああああっ！ファントムブレ・・・」

なのはの放った狙撃魔法がティアナに直撃する。威力は抑えられていたが訓練としては最高レベルであり、その爆発によって粉塵が

舞い上がった。

海から吹く風によって、ウイングロードを覆っていた煙が晴れていく。そのなかでティアナはかろうじて立っではいる、がその身体は所々傷つき、クロスミラージユも足元に落ちていた。

「ティア・・・ッ、バインド！？なのはさん！」

近寄ろうとしたスバルは突如かけられたバインドに動揺し、目の前のはを見た。表情を僅かも変えず、声色もそのままなのはは指を掲げた。

「じつとして。よく見てなさい・・・クロスファイア・・・」

暴れるスバルを押さえつけ、なのはは魔力弾を形成させていく。それは先ほどのような拡散弾ではなく、威力の範囲を絞った砲撃型である。狙いは寸分変わらずにティアナを捉えていた。

「おい、ありゃいくらなんでもやりすぎだ！止めんぞ蔵馬！」

「わかった！」

なのはの所業に怒りと焦りを滲ませ、各々の武器を構えた。二人はそのまま彼女達の前に飛び出そうとする。

だが、そこに思わぬ横槍が入った。

「待て」

「飛影!？」

「っ!？飛影デメエ!何を待ってってんだ、ポケットとしてたらティアナちゃんがやられっちまうだろうがよ!」

桑原が鬼の形相で飛影に詰め寄った。蔵馬の方はそこまではしないが、硬い表情を崩さず説明を求める眼差しを放ってくる。

二人とも『あの時』のことを思い出しているからだろうか、纏う空気には鬼気迫るものがあつた。

それが読み取れないほど彼は鈍くない。何より付き合いの長い間柄だ、言いたいことは全て分かっていた。

だが、それでも飛影は引こうとはしない。フェイトやキャラたちが怯えるほどの二人の気迫にも全く動じず、飛影は淡々と答えた。

「あいつからは戦う意志と力が消えていない。今お前らが手を出すのは筋違いだ。それに・・・」

視線を流して対峙する二人を眺める。そして、ティアナを見据えて意味ありげな光を宿しながら、興味深そうに口の端を吊り上げた。

「奴の纏っていた気が変わった。まだ何かするつもりらしいぞ?」

私は暗い中を漂っていた。

なのはさんに勝つため、彼女たちを見返すため、自分に力があるということを実証するため、そして大切な人たちをこれ以上傷つけさせないために頑張ってきたことが、みんな終わってしまった。

（私、間違ってたのかな・・・）

兄の名誉を取り戻すためにスバルたちと共にやってきた全てを否定されたようで、私は次第に考える気力も失っていく。体もまったく動かなかった。

放っておいて。私はもう傷つけたくない、傷つけられるのを見たくないの。だからもう、私を傷つけないでよ・・・。

もうこのままこの海に解けてしまえば、と。そんなことが頭に浮かんだ時だった。

『こんのアホが・・・いつまで腐ってるつもりだい！ぐじぐじ言うのも、ガキみたいに甘ったれるのも、どっちもくたばってからにしろ！』

沈みかけるようにしていた私の意識が、引っぱたかれる様な衝撃とともにたたき起こされた。それを為したのは突如として響き渡った、澄んだ鈴のような女性の声。驚いて身体を起こし声が聞こえたほうを振り向くと、そこには一人の少女がいた。

その背はかなり低く、私の首辺りまでしかない。着込んでいる白い胸着には赤いチャイナ服状の垂れがついている。見た目からして自分より数歳ほど年上に見えた。

だがそんな風体だというのにもかかわらず、彼女から発される気迫は尋常ではなかった。まるで何十も歳を重ねたような威圧感に気圧され、竦みそうになる体を必死に押しとどめながら、私は漸く声を発する。

「だ、誰・・・？」

『人のことを気にしてる場合か！まったく世話が焼ける、お前は自分の言いたいことを全部言っただろう！？だったらやることは一つだ。相手が聞いてくれないってんなら、その横っ面を張り飛ばして耳元で聞かせてやるんだよ！』

攻撃的、というかストレートで暴力万歳な物言いに私は絶句する。だが私自身動揺していたためか、頭に浮かんでは言い訳じみた言葉ばかりだった。

「で、でも、私の魔力じゃ、なのはさんには・・・」

『ボケ！魔法の話なぞ誰がした。何のためにアイツが夢で散々教えたと思っておるんだ！こんな状況になってまで寝言を言う気か！少しは真面目にやれ！』

彼女の声にはつとめる。その言葉にここ数日の『記憶』が脳裏をよぎった。リアルすぎるあの夢の連鎖が頭の中を駆け抜けていく。

「夢・・・？じゃあ、あの夢はやっぱり・・・」

『ボサツとしてる暇があったらさっさと意識を集中させな！お前が夢でいつも使っていた魔力とは違うエネルギー、アイツが教えた『靈波動』が感じ取れるハズだ。後は流れにお前の意志を乗せ、力を発するに相応しい形に変えるんだ！強い思いが肉体を抑し、限界を超えた力を制する鍵となる！』

消えかけていた闘志が蘇る。気づけば私は拳を握り、動かないと思っていたその足で立ち上がった。彼女の言葉を繰り返す。

「思いを、力に・・・？」

『そうだ！その身にかかっていた靈気の封印は解いてやった。あとはお前次第だ。力に踊らされず、力を過信せず、その身に流れるモノを心で念じて形にしろ！集中力だ！』

それだけ言うと、私の身体からガラスが砕けたような音が聞こえた。同時にあの懐かしく、初めての力が奥底から湧き上がった。

同時に彼女の姿が靄に包まれたように輪郭を失っていく。そして、消えて行く彼女に導かれるようにして、私は現実を取り戻した。

「シュート」

「ティアアアアア ツ！！！！」

スバルの絶叫で私の意識は現実へと完全に引き戻された。涙目で

こちらを見据える親友。いまだ体感時間はスローで流れている。

彼女には悪いことをしてしまった。今度は絶対侘びを入れなければなるまい。と、そこまで考えて私は彼女に視線を戻した。

彼女と私を結ぶ線に沿うようにして、桃色の魔力弾が自分へと迫ってくるのが見えた。その威力は先ほど拡散型を複数受けている自分が一番良く知っている。しかもアレは砲撃系だ。となれば、威力はさらに上であろう。

だが、心には不思議と恐れはなかった。寧ろ忘れていた何かを取り戻したかのように、気持ちが高揚しているようにも感じる。

力の差があるのは歴然たる事実。けれど立ち止まろうとは思わない。新しい力、いや奥底で眠っていた力が嬉々とするように躍動し、私の身体を満たしていた。後はそれを引き出すのみ。

スツと、自然に右腕が上がった。迷いは消え、身体に力が戻っていく。いや、それは前以上の力だった。

『いつも』と同じように右手を銃身のように突き出し、人差し指を伸ばす。そして心に『慣れ親しんだ』感覚が蘇り、青色の奔流が解き放たれ、指先に集まっていた。

迫り来る桃色の弾が、青い光を通して白く輝いて見える。ティアナはそれを見据えながら、トリガーを構えた。

私の思い・・・行きますよ、なのはさん！

爆発する瞬間、頭の中にイメージが滑り込んでくる。そしてそのイメージをトレースしながら、私は浮かんできたその名前と共に心にかかった引鉄を引いた。

「貫いてツ……霊丸

ッ!!」

- Side out -

「貫いてツ……霊丸

ッ!!!!」

「っ!？」

ティアナが叫びをあげると同時、その指先に青い光が一瞬にして宿り、爆発音と共に撃ち出された。デバイスも用いず、魔法陣も出ないその技になのはが初めて顔色を変え、大きく目を見開く。

そして弾丸のような軌跡を描きながら光は空を駆け、そのまま桃色の魔力弾と正面からぶつかった。

二人のちょうど中間あたりで二つの弾丸が衝突した。ぶつかり合

った弾は押し合いをするように力を進らせ、火花がそこ彼処に飛び散っていく。

「うわあっ!?!」

純粋な力の闘ぎ合いに、キャロとエリオが悲鳴を上げた。力と力、小細工も何もない真っ向からのぶつかり合いだ。

その威力は互角に見えた。だが、永劫かと思われたその均衡に唐突に終わりがくる。刹那の輝きを切り裂き、力の削りあいを押し切ったライトブルーの光が魔力の弾丸を貫いていた。

「っ!?!ハッ!?!」

今度はなのはへと、光が間近に迫る。硬直で避けられないことを悟ったなのはは防御魔法陣を瞬時に展開させ、飛んできた弾丸を間一髪で受け止めた。

蒼と薄紅色が矛と盾に立場を変え、再び相まみえる。青い光弾は尚も彼女へと迫ろうとするも、先ほどの押し合いで力を殺がれていた為か僅かに弾道を変えられ、なのはの後方へと飛んでいった。そのまま背後のビルへとぶつかり、轟音を上げる。その爆発はビルの屋上に近い角を削り、破壊していた。

なのはがその様子を見て、視線を戻した。そこには、肩で息をしながらもこちらをじっと見つめるティアナがいる。そしてその姿を認めた時、彼女の前に何者かが降り立った。

黒いコート、炎のような黒髪、そして自信に満ちたその双眸。なのはの憧れにして、最も彼女に影響力を持つ者。

「飛影、くん・・・」

炎殺の邪眼師がそこにいた。

第十八話 後悔×喝入れ×秘奥の解放 〵 譲れぬもの（後書き）

第十八話でした。

結構詰め込んだ感がある今回ですが、いかがでしたでしょうか。不自然な点などがないことを祈るばかりであります。

ついにStrikers編で鬼門といえるあのシーンが近づいてきました。最後は少し衝撃的な展開でしたが、ティアナの性格や、周りの状況を鑑みて何度も構想を練り直しながら書き上げ、このような結果となりました。

はてさて、この後どうなるのか、それはもう少しお待ちくださいませ。

いつもより短いですが、今回はこの辺りで。またご拝読いただければ幸いです。

それでは、次回 『激突 〵 進む心と臆する心』 をどうぞよろしくお願い致します！

ツアイツエン
再見！

第十九話 激突 ー 進む心と臆する心（前書き）

ようやく完成いたしました、第十九話！

いや、ホント間に合ってよかった！なかなか展開とか台詞とか、納得がいらず書き直していたら、いつの間にか更新ペースの期限に・
・時間が進むのは早いですね。

さて、前回に続いてのバトルのお話。展開は一体どうなるのか！？

それでは第十九話、どうぞご覧あれ！！

第十九話 激突 進む心と臆する心

「ティ、ティアナの奴、一体何しやがったんだ・・・!？」

ヴィータが目を大きく開きながら声を震わせた。キャロやエリオ、そして後ろに控えていたフェイトすら声も出せずになのは達を見つめている。スバルも親友を呆然と眺めていた。

スバルとティアナの無茶な戦闘行動、そしてそれに対して怒ったなのは。二人とはいえまだ未熟であるスバル達にどうにかされるはずもなく、この戦いはなのはの魔力弾で決着がつくはずだった。

だが、ティアナが予期せぬ力を見せたのだ。彼女が指を向けて構えをとった瞬間、見たこともない光がその指先より撃ち出され、訓練用とはいえ、なのはの魔力弾を真正面から撃ち抜いたのである。

だが、混乱を導く一番の要因はそれではない。

「ま、魔法じゃ、ない・・・？」

エリオが食い入るように目を凝らした。視線の先には肩で息をすするティアナの姿がある。

彼女の足元には、煤汚れたクロスミラージュがいまだ転がっていた。そのことがヴィータ達をさらに混乱させる。

魔法とは科学と理論に基づくものだ。いくら根幹は術者本人のものとはいえ、半分はデバイスが支えている。確かになのはやフェイトのような卓越した魔導師であれば、デバイスが手元になかったり、リリース状態であっても中程度までの魔法なら使うことができる。

だが、ティアナはまだ駆け出しのBランク魔導師。しかも魔導師の命ともいえるデバイスから身を離していたとあっては、大方をデバイスに頼っている彼女では弾丸系の魔法の使用はおろか、発動すら満足にできないはずだ。ベルカ式、ミッド式問わず出現するはずの魔法陣が現れなかったこともそれを裏付けている。

そして、驚愕は別陣営の人間にも飛び火していた。彼女たちが受けた衝撃とは全く違った形で。

「あ、ありや浦飯の霊丸じゃねえか！何で、ティアナちゃんがあの技を使えんだよ！？」

「クツクツク・・・面白いことになってきたな。まさかランスターのやつがアレを撃つとは。だが、霊気を知らないはずの奴が霊丸を撃てるわけがない。となれば、可能性は一つだけだ。幽助め・・・奴にしては随分とおとなしいと思っていたが、既にこっちに入り込んでいたか」

桑原がティアナの放った光を見て驚きの声を上げた。それは蔵馬も同じように遠くに立つ彼女をじっと見つめている。飛影が意外だというふうに肩を竦め、その瞳に高揚を宿らせていた。

「・・・れいがん？」「」

「それに幽助って、一体誰なの？」

飛影の呟きに反応したキャロ達二人とヴィータが尋ね返す。フェイトも、いつか聞いたような名前を飛影に問いかけていた。

尋ねられた飛影はフツと笑いを堪えるような表情をする。そして僅かに口元を動かすと、ティアナ目掛けて跳んでいった。蔵馬と桑原もそれに続く。

ティアナの正面を塞ぐようにウイングロードに着地した彼らを、二人が呆然として見つめた。予期せぬ割り込みに動揺しているようだ。そしてフェイト達は、飛影の口から虚空へと投げ出された、先の言葉を反芻していた。

その横顔が嬉しそうだったのは気のせいではないだろう。なにせ彼の声は、

『世界一の単細胞、そして宇宙一の戦闘狂だ』
バトルマニア

それだけの強い感情を内包したものだっただけだから。

- Side change -

人が着地したにしては軽すぎる音と共に、ティアナの目の前に黒いコートがはためいた。コート裏の深紅が外の黒とコントラストを描き、霞みそうだった視界を塞ぐ。

「下がれ、ランスター」

「飛影、さん・・・？」

目の前に現れた黒い背中に、ティアナは呆然とその名を呼んだ。硬い表情のなのはと彼女の間を遮り、強い闘争心がまだ疼く訓練場に飛影が音もなく降り立つ。

だが、今回はそれだけでは終わらなかった。

「和真くん・・・それに蔵馬さんも・・・」

飛影より一步下がり、ティアナの脇を固めるようにして桑原と蔵馬が佇んでいた。その顔色にいつものようなおちゃらけた雰囲気はなく、真剣そのものといった出で立ちだ。

その筆頭に立っていた飛影が、流れるような動作で振り向く。相変わらずの鋭い視線、しかしその目には抜き身の刀のごとく、背筋が凍るようなモノが見え隠れしていた。

彼はそのまま、なのはとティアナを交互に見る。そしてフンと鼻を鳴らしてティアナを見下ろすと、一つ溜息を吐いてから口を開いた。

「貴様にはすぐにでも聞きたいことが山ほどある。だが、のんびり聞いてなどはいられんようだ。なによりこの戦いはあまりにも見る

に耐えん。貸しを一つやる、代わりにこの場はオレが引き継いでやる。こんな見え透いた茶番は、さっさと終わせるに限るからな」

「で、でも・・・っ・・・！」

思わず反論しようとしたティアナは、喉元まで出かけた言葉を飲み込んだ。飛影の目が一段と鋭利な光を帯びたからである。

「足腰も立たんようなザマで強がるのは止める。土壇場でアレを發動できたのは大したものだが、今の貴様にはもう靈丸を撃つだけの気力は残っていない。仮にそうでなかったとしても、その靈気も完全には馴染んでいないようだからな。そのまま無理を通せば、腕が使い物にならなくなるぞ」

「っ・・・わかり、ました・・・」

そこで初めて、ティアナは自分がへたり込んでいたことに気づいた。また、自分の中にある力に身体追いついていないことも薄々分かっていたため、彼女は無言で引いた。

やるせない感情を一瞬だけ表に出すが、彼女は何かを決意したような表情をしたあと、いつものクール然とした顔立ちの中に感情を鎮める。そして、「掴まれ」と手を出してきた桑原に肩を借り、ゆっくりと立ち上がった。

「蔵馬、桑原。ついでにスバルも運んでおけ」

「ああ・・・飛影、君は？」

「フン、わかりきったことを聞くな。頭でっかちな木偶の坊に、少

々灸を据えてやるだけだ」

飛影が視線を流す。その先にはいつもの温和さからは想像も出来ないほど・・・相手を底から凍えさせるような目をしたなのは姿があつた。蔵馬たちが下がるのを感じ取ると、飛影は見下ろす位置にいる彼女へ目を向ける。

瞳から溢れるものは暗く重く、そして鋭い光。なのはの表情には、いまだかつてないほどの強い怒りが浮かんできた。

「何で邪魔するの、飛影くん・・・？」

「愚問だな、単に貴様のやっていることが気に食わんだだけだ。貴様は奴と本当の意味で分かり合うつもりなどないのだろう？ 奴の事を思つての行動などと言いながら、踏み入られたくないがために自分の保身に走っている。そのまま奴が腐っていく可能性を捨て置いてな・・・フン、貴様も力だけを求める者だったか・・・」

飛影の目が細くなる。そこには、珍しく純粋な怒りが浮かんできた。力を売って歩けるほど持っている彼が、まるでそれを否定しているようで、なのははわずかに気圧される。

「・・・これは私の教導だよ・・・飛影くんは手を出さないでくれるかな？」

「教導・・・こんなものが教導だと？ 聞いて呆れるな。ただ倒すだけなど、どんな下等な生き物にでもできる。それともお前は、こいつらを突撃するだけの捨て石にするつもりか？」

飛影がFW陣一人一人に目をやりながら、なのはの疑問を切つて

捨てた。彼女の雰囲気により剣呑さを増す。それは既に威圧感を超え、敵意にすら変わりつつあった。

「分からない奴には腕づくで分からせる力の論理、大いに結構だ。だが、貴様は分かかって欲しいなどとほざいておきながら、奴の言葉を聞こうとしなかった。言葉を求めた奴の土俵を無視して、自分の意思とプライドを優先した。他人が傷つくのは嫌う反面、自分に背く者は言葉すら交えずに淘汰するか。どこまでも身勝手だな。教えられた通りに動く『駒』が欲しいなら、早々に転職を勧めるぞ？」

「違うっ！皆は駒なんかじゃ・・・！」

『駒』という単語に反応したのか、なのはは声を荒げる。離れたところで二人を見守っていたフェイトがビクツと肩を震わせ、その瞳が悲しみと動揺で揺れ動いた。

「何も変わらない。今の貴様の行動は、うまくいかないからと喚き散らす、癪癪持ちなガキの八つ当たりだ。傍から見ても、見苦しいことこの上ない。ストレス発散なら他所でやれ。当たられた方はたまったものではないからな」

視線を流す。その先にいたティアナが微かに震えた。

「確かにランスターはとんだ間抜けだろう。そもそも戦いを甘く見すぎている。そのことに関してはオレも同様の認識だ。だが、バカさ加減では貴様も同じこと、いや自覚しているものから目を逸らしている時点で、奴よりも性質が悪いな。師弟がそろって道化とは、ある意味貴様らしいが」

飛影は続ける。その声色には、どうしようもない呆れと落胆が入

り混じりはじめていた。

「はつきり言ってやろうか。貴様はただ押し付けているだけだ。他人の心情を無視して貴様が信じる正しさ、貴様に都合がいい仲間、貴様が思う理想をな。勝手に干渉してくるだけでは飽き足らず、自らの方針を言うだけ言って、善人面で仲間気取り。そのくせ自分のことは棚に上げて、他人には上から目線でスカした態度ばかり見せやがる。いい加減反吐が出るぜ」

「っ・飛影くんに、何が分かるの？」

「フン、その頭の中のほうがよっぽど不可解だが。貴様のことだ、自分で気づかねば意味がないとも思っているんだろが、オレにはランスターから逃げているようにしか見えんぞ。信じるなどと聞こえのいいことばかり抜かして丸投げするのは勝手だが、誰しもが『貴様のよう』に『悪運が強い』とは限らん。奴が理解するまで、状況が待つ保証などどこにもない」

「　　ッ！　！」

なのはを取り巻く空気が変わった。自分の深くに切り込まれたように胸を押さえ、睨み据えるその瞳に危険な光が宿る。飛影はそれを見て取ると、彼女に向けて挑発するような笑みを浮かべた。

「どんな言葉で飾ろうが戦場にあるのは命のやり取りだ。『知らない』ということは、それだけで死に繋がる可能性を持っている。そして、死に逝くものに『次』は無い。気づいたときには既に手遅れ、などということになっていなければ良いがな。ククク・・・」

「・・・って・・・」

低く、それでいて重い声が響いた。その声は届かなかったはずだが、キャラが自らの肩を抱くようにして知らないうちに後ずさる。フリードも変化した空気を敏感に感じ取ったのか、エリオの肩に乗ったまま低い唸り声を上げていた。

「フ・・・そら、凶星を突かれて本音が出てきたな。フン、そういえばこれは侮辱に当たるのか？よかったな、これで思う存分オレを叩きのめす口実が出来たようだ」

「黙ってッ！・・・飛影くんにも、ちょっと頭冷やしてもらっ！」

叫びと共に彼女の手が光り輝いた。レイジングハートが再セットアップされ、凄まじい魔力の風が辺りに吹き付ける。

「やれやれ・・・」

飛影はあからさまに肩を竦め、呆れたように目を閉じる。そしてもう一度開かれたとき、その目からは肉食獣を思わせる鋭い光が放たれていた。

「湯が沸いたような脳みそで何を言うかと思えば・・・笑わせてくれる。だが、最近の貴様は目に余るものがあつた。完膚なきまでに叩き潰すには絶好の機会だ」

飛影が溜めをつくるように腰を落とし、右手を剣の柄に添える。同じく、なのは手に強く握られた杖が天に掲げられた。

「レイジングハート、アクセルシューター・・・」

『All Right Accel shooter』

構えを取った飛影を迎え撃つように、俯いたなのは足元に魔法陣が展開された。レイジングハートが主の言葉を受け取り、周囲に桃色の光が出現した。

浮遊するその光は徐々に数を増し、彼女の周りを守護するようにして取り囲む。そしてその数が十の二倍ほどに達したとき、なのは杖を振り下ろした。

「シュート」

彼女の声で、数多の光のうちの一つが意志を持ったかのように飛影に飛来する。それを跳んで避けた飛影だが、光は柔軟に軌道を変え、さらになのはの周りに浮遊していた魔力弾までが一斉に踊りかかってきた。

宙に身体を躍らせたまま、軸を捻った飛影の横を光が通り過ぎた。空中を蹴り、反動を利用し、身を翻しながら次々と迫り来る弾丸をかわしていく。なのはの魔力弾は紙一重というところで飛影を捉えられず、すべてが建物や大地にぶつかった。

そして最後の一発がかわした軌道上にあったビルに衝突し、破砕音とともに消える。それを確認した飛影はビルの上に着地し、なのはを真正面から見据えた。

顔には相変わらず自信に満ちた笑みが浮かんでいる。彼女との戦いを楽しんでいるようだった。

「なるほどな・・・駆け出しと比較するのは間違いか。あれだけの

数と威力の弾を同時に軌道制御するなど、並の人間では早々には出来まい。流石は魔法の戦技教導官・・・と、言いたいところだが」

賞賛の言葉を切り、飛影がニヤリと笑みを浮かべる。そして重心をずらし、真横に身体を流した。

「不意打ちとは・・・随分と必死だな？」

刹那、彼が四半秒前までいた場所の足元から、桃色の弾丸が飛び出した。それに続くようにして出てきた光に、彼はビルの屋上から床を蹴って離脱する。

一瞬前まで彼がいた場所が崩壊し、光がいくつもその姿を現した。建物にぶつけて破壊したと見せかけ、そのうちのいくつかを滞空させたまま密かに忍ばせていたのである。

「アクセルシューター・・・シュート！」

なのはが再び呪文を詠唱する。その周囲に先ほどより多い魔力弾が浮かび上がり、その掛け声に従った凄まじい速度で飛影に迫ってきた。後ろからも、先ほど残っていた弾が逃げ道を塞ぐように追いついてくる。

「チッ」

空中に躍り出た飛影を囲むように、光はすべて彼を目標にして一直線に迫り来る。物理的に回避不可能なことを悟った飛影が腰元の刀に手をかけた時、集束していった魔力弾が一点に集まり大爆発を起こした。

ビルの鉄柵が衝撃で吹き飛ばされる。衝撃波はそのまま周囲に伝わり、爆炎を伴った土煙を上げた。それを確認したなのは、カートリッジを二発ロードする。

濛々と立ち上る煙を見下ろし、眼下の様子を探る。しかし、上空から覗き込もうとした身体を寸前で引き、レイジングハートを正面に構えた。

次の瞬間、そのまま体ごと持っていかれそうな強い衝撃が彼女を襲う。腕が電撃を受けたように痺れた。

「フツ・・・」

至近から視線が邂逅する。爆炎を隠れ蓑にした飛影が真正面から斬り込んで来たのだ。あまりの速度と突撃の衝撃に踏ん張りが利かず、なのはは後方に吹き飛ばされる。

しかし、彼女を引き離すように飛影が剣を振りぬいた瞬間、その周囲から光の筋が迸った。鎖のような強靱さを持つ何かが、身体中に巻きつく感触が走る。

「ッ！？これは・・・！」

「フープバインド。高い拘束力と隠密姓を持つバインド系魔法だよ」

抑揚を感じさせない声で告げ、なのははレイジングハートの先を飛影に向ける。表情は変わらないが、雰囲気には愉悦が満ちていた。

飛影は短い息を吐く。彼女はこれまでの経験と観察から行動を推測し、飛影が隙に乗じて攻撃してくるであろうことを読んでいたのだ。

手加減しているとはいえ、戦いというものを知っている彼がこの程度で終わるべくもなく、煙を囿にしつつ接近戦を仕掛けてくることまで計算して。

だからこそ、彼女は得意とするフィールド魔法の一つも張らず、カートリッジまで使用してこの魔法に全力を費やしていた。

硬直時を完全に取りられた上、ブーストされた魔力によって強化された、破格の拘束力と力の放出を阻害するバインドの十以上の重ねかけ。流石の飛影といえど、妖力を抑えている身では簡単には破れなかった。

抑えを解くか今の全力で力任せに破れば、彼なら容易に脱出できるだろう。だが、これだけの拘束を上回る力を出せば、外れた瞬間に噴出する妖気まで完全に制御するのは不可能だ。下手をすれば地形が変わるところか、ここら一帯が吹き飛んでしまう。

飛影は眉間に皺を寄せ、唇を噛んだ。

「油断したね飛影くん。それはカートリッジで魔力を限界までつぎ込んだから、そう簡単には外れない。これで終わりだよ」

マガジンから装填された三つの薬莢を吐き出すと、変形機構が作動してその形が変わった。

『Load Cartridge Divine Buste
r』

レイジングハートが自動詠唱を起動し、魔力充填を開始する。なのはが最も力を発揮する、敵を寄せ付けないアウトレンジからの攻

撃手段。魔力の風が彼女を中心にして渦巻き、エネルギーの高まりを辺りに顕示した。

「デイベイン ……」

魔法陣から溢れる光が輝きを増し、杖の先に魔力が集まっていくな。光は周りから音を奪い、一点に向けて収束する。その先には幾重にも重なったバインドにより、四肢の動きを完全に封じられたままの飛影がいた。

「ぐっ……こんなも ……」

拳に妖気を滾らせ、炎を出そうと彼が呻いた瞬間、

「バスター」

感情の宿らない声を引き鉄にして、神の名を持つ破壊光が放出され、その炎ごと無防備な飛影を飲み込んだ。直撃した魔法は爆発へと変わり、辺りへと散乱する。

「……うわああっ!?!」「……」

先ほどとは比べ物にならないほどの魔力行使に、爆風が熱を以って辺りを吹き荒れた。エリオたちがいる所にまでそれは届き、突風が砂埃を巻き上げる。

そして風が収まり、フェイト達が顔を上げたとき、煙と若干の赤を纏った飛影が空中に存在していた。魔力砲撃をもろに受けた飛影は、いまだ煙に包まれたままゆっくりと下降し、そのままビルの屋上へと打ち付けられる。そして、燻った煙が立ち上る中に消えた。

「嘘……」

「お兄ちゃんが……負けた……？」

「そんな……」

フェイトとキャロ、それにエリオは目の前のことが信じられないかのように、彼が消えた方向を見つめた。ヴィータも、なのはと上がつた煙を交互に見比べている。その横にいるスバル、ティアナも同様に目を見開いていた。

なのはは後ろのビルを一瞥すると、背を向ける。

「少しキツイかもだけど、非殺傷だから大丈夫だよ。そこで反省しててね、飛影くん」

なのはが飛影に一言残し、その視線がずっと先へ移る。その目は膝をつくスバルとティアナを寸分変わらずに射抜いていた。その横にいる蔵馬たちにも目をやるが、飛影がやられたというのに表情一つ変えない。彼らから視線を戻し、再び二人を捉えた。

そして、なのはは固まったままのスバル達へと一步を踏み出そうとして、

いい腕だ・・・

「『『『『『！？』『』『』『』」

反響するような低く通った声に、心臓を鷲？みされたように動きを止められた。悲壮感すら漂わせていたエリオ達も、突如響いた声に息を呑んでいる。硬直した彼女の背後、煙で満ちていたビルの屋上から巨大な火柱が上がった。

潰すには惜しいぐらいだ・・・

火炎の中から影が浮かび上がってくる。それは炎のような髪を揺らめかせ、口元を愉悦に吊り上げた、

「飛影っ！」

フェイトが安堵と不安とを複合させたような、どうしていいかわからない表情をしながら声を上げる。その先にいたのは、炎に包まれながらもいまだ健在の飛影だった。

スカーフは既になく、彼のトレードマークとも言える黒いコートも大部分が炎の苗床となっており、その原型を留めてはいない。

だが、遠巻きに見ていたヴィータ達はその表情を驚愕に染め、視線を動かすことができずにいた。スバルが呆然と言葉を零す。

「む、無傷・・・！？」

「う、嘘だろ・・・なのはマジ砲撃を、フィールドもバリアジャケツトもない生身で・・・それもまともに喰らったんだぞ！？」

震えるヴィータの声が、目の前に映る全てを意味していた。あれほどの威力を持った魔力砲撃を、しかもまったく防御が取れないまま直撃させられたのにも関わらず、彼の身体には掠り傷一つ付いていなかったのである。

なのはがゆっくりと振り向き、その顔を強張らせた。

「あれに耐えたっていうの・・・飛影くん・・・！」

「ああ。だが正直驚いたぜ。まさかオレが攻撃してくるタイミングを読み、罠を張っていたとはな。どうやらオレも、お前への認識を改めなければならんらしい。先ほどのは全力の五分といったところだろう。威力から換算して、本気で攻撃すればB級クラスに達するかもしれない。今のですら、下級の妖怪なら一撃で終わっていた。だが・・・」

オレを相手にしたのが運の尽きだったな

言葉が波となり、なのはの冷静さを攫った。恐怖が理性を侵食し、嫌な汗を噴出させる。それに同調するようにして、彼の額を覆っていた布が炎の中へと消えていく。

様々な想いが交錯する中、真なる意味での戦いが今、はじまろうとしていた。

第十九話 激突 ～ 進む心と臆する心（後書き）

さて、十九話。魔王編の中盤でのお話でした。

いいところで終わってしまったア！と思う方が多いかもしれませんが、そこはご了承頂きたいです。

本音を言うと、作者はこういう次回が楽しみ！という終わり方を一度作ってみたかったんですよ。

なんていうんですか・・・こう、ドラゴンボールの次回予告で悟空が超サイヤ人になることを知ったときみたいな・・・まあ、そこまでのゾクゾク感は到底出せませんが、そんな『焦らし』的な展開にしてみました。

幽白を少しでも知っている方なら、この展開と飛影の台詞にビビッと来たかもしれません。しかし、幽白をそれほど知らない方でも分かるようにしたつもりでしたが、いかがでしたか？

飛影の台詞が上手くできたか心配ですが、少しでもカッコよく映るように努力しました。若干喋りすぎな気がしないでもないですが、そこは作者の技量の甘さです。これから精進していくつもりなので、どうかお目こぼしを。

次回、なのはとのバトルはどうなるのか・・・飛影が彼女に伝えたかったこととは一体何なのか、乞うご期待！・・・しても大丈夫だと思えます、はい。

それでは長々と失礼致しました。また次回にてお会いしましょう！

ツ
ア
イ
ツ
エ
ン
再
見
！

第二十話 炎獄の極地 〰 奥義顕現（前書き）

やってまいりました。なのはVS飛影、ガチバトルの後編です！

おー、ついに話数が二十代に突入しましたよ！六月からはじめて・・結構早かったなあ・・・

これも読者様の応援ありきです、本当にありがとうございます、これからよろしく願いますね！

さて、今回のお話で魔王降臨バトル編は決着となります。一体どんな展開が待っているのか・・・

予想できる人もそうでない人も、張り切っていてみましょう！

それでは第二十話、スタートですっ！

第二十話 炎獄の極地 〰 奥義顯現

「飛影、くん……」

なのはが戸惑いを押し殺したような声色で彼の名を呼んだ。その声に飛影は口角を吊り上げる。

あたりには静寂が満ちていた。耳鳴りがするような無音の空間で、風が頬を撫でる感触だけが今ここにいることを証明している。

飛影の周りで満ちるが如く揺らめいていた炎が、感情を持つかのように猛りを増した。放たれる熱が周囲を劣化させ、床がぼろぼろと崩れ落ち、等間隔に打たれた鉄柵の杭をバターのように溶かしていく。炎が額を覆っていた布を焼き切り、熱は残滓を塵へと変えた。

現れたのは、この世界では彼だけが持つ第三の眼。無機質な色を帯びた邪眼に射抜かれ、なのはは金縛りを受けたようにすら感じる。飛影は僅かに視線を細め、動けない彼女に向けて戦闘開始を告げた。

「喜べなのは。人間相手にこれを使うのは二人目……そして、貴様がこの世界での、記念すべき第一号だ！」

言葉と共に、額の邪眼が凄まじい光を放った。どこまでも届くかのような力の波動が、ビリビリとなのはの頬を突き刺す。そして、飛影は自信に満ちた笑みのまま右腕に巻かれた布の上部に手を伸ばし、その上に添えられていた札を無造作に引きちぎった。

ドクン

・・・。

空間そのものが鼓動しているような音が、重い響きを以って周囲に伝わる。体を芯から揺さぶるような寒気が全員の中で木霊した瞬間、飛影の右腕を覆っていた包帯が焼け落ちて空に舞った。

今まで隠されていたその包帯の下より現れたもの、それはひじ先から手首まで伸びた黒い紋様。まるで悪魔が宿ったかのように黒く、そして蛇が巻き付いたように長いという、どこまでも歪な痣だった。

「忌呪帯法を・・・それにこの妖気は！」

「オイオイオイオイ！まさか飛影の奴、なのはちゃん相手に『アレ』を使う気じゃねえだろうな！？ありゃ流石に洒落こうべ和牛じゃ済まねえぞ！？」

それまで場を静観していた蔵馬と桑原が、いつになく焦りを交えた声を上げた。その視線の先には露になった右手を晒す飛影がいる。

「アレ？アレって一体・・・」

鬼気迫った二人の表情にエリオが事を尋ねようとしたとき、おぞましい気配を感じ、首を捻った。飛影から、正確にはその右手より溢れる力が邪悪さを増して周囲を侵食していく。

瞬間、右腕を中心として彼の周囲から上がった『炎』に全員が目を見張った。

「な．．．く、黒い、炎．．．!？」

「それだけじゃない．．．あの炎全部、とんでもない力が込められてる．．．!」

「キュ．．．クルウウ．．．クア．．．」

「フリードが．．．怯えてる．．．」

「兄さん．．．!」

ヴィータとフェイトが後ろに下がりがながら言葉を零す。キャロとエリオは唸りを上げるフリードと飛影を交互に見つめていた。

飛影から溢れ出す膨大な力に呼応するように、訓練場を中心とした天空と海中から巨大な黒い光が貫くよう迸った。空は赤色に焼かれ、稲妻を受けた建物が一瞬にして崩壊する。見渡す限りを覆う黒い光にフェイト達が驚く間もなく、ロングアーチに控えていたシャリーから緊急通信が入った。

『く、空間シミュレーターの周囲十キロ四方に次元干渉ですっ!さらに巨大なエネルギー反応を確認!エネルギー指数を魔力ランクに換算します!ランクAA、AAA、S、S．．．ま、まだ上昇していく!?!』

「間違いない．．．あれこそ、魔界の獄炎!」

よくない確信を得たように蔵馬が唇を噛む。その表情を横目で捉えつつ、飛影はビル三つ分ほど離れたなのはをその目に納めた。波紋のように満ちた力の脈動が、瓦礫となった岩を宙空へと誘^{いざな}っている。

「ただ力を見せればいいだけのルールだったな。遠慮は要らん。精々全力で、本当にオレを殺す気で来い。

手加減など考えるなよ？半端なものなら一瞬で炭屑にされるぞ」

「ッ！？」

飛影の言葉がなのはの背を強張らせた。黒と紫の中間のような陽光が、彼を守るようにその存在を主張する。まるで生きているかのようなそれらは、その手を中心として不気味に揺らめいていた。

「この程度で十分だな・・・見えるか？貴様らの魔法^{マジック}ことは一味違う、『魔力』を秘めた本当の炎の術が。

邪眼の力をナメるなよ！！！」

「っ！？レイジングハート、カートリッジロード！」

『All right・Load Cartridge!』

迸る炎と邪眼に射竦められそうになったのはが、恐怖を押し殺しながら迎撃の態勢を取る。蔵馬たちはそれを確認すると、すぐに行動を開始した。

「ここでは巻き添えを食らう、桑原くん！」

「おう！二人とも、ちょっと悪い！」

「蔵馬さ・・・うわわっ！？」

「ひゃあっ！」

「きゃ・・・」

「おい！何すん・・・」

言うが早い蔵馬がエリオとキャロを、桑原がフェイトとヴィー
タを抱えて一気に圏外まで飛びさす。するとそれを待っていたか
のように、場は流動を始めた。

「喰らええッ！炎殺 ・・・」

「デイベイン ・・・」

二つの流れがそれぞれに向かって収束していく。対称的な二つの
力場同士が真っ向からぶつかり合い、訓練場に不規則な風を生んで
いた。

そして飛影の邪眼が一際強い光を放った瞬間、暴力的な風と共に
渦巻いていた妖気が枷を失ったように弾けた。

「 黒龍波ッ！！」

刹那、飛影の右腕から黒き炎が顕現した。それは曲線的な軌跡を

描きながら徐々にその体格を為し、巨大な龍へと変貌を遂げる。爆発的に高まった妖気で空気が燃焼され、稲妻が轟いた。

その先には白の姫君、不屈の名を持つ管理局のエース。対するなのは、全てを飲み込むような炎の龍に向けて、リミッター限界値のギリギリまでつぎ込んだ魔力をぶちかました。

「バスターツ!!」

絶大なる威力を誇る神光が撃ち出される。なのはの最大武器である砲撃魔法は、局地的な攻撃力だけならはやてすら凌ぐほどだ。それこそ六課どころか、管理局を見渡してみたところでその右に出るものはいない。

だが、その魔力光は黒い揺らめきを帯びた炎によって受け止められていた。いや、受け止めているのではない。彼女の切り札はすでに侵食されていたのだ。

「っ!?!」

自らが放った桃色の光が暗黒の口中へと飲み込まれていく光景に、なのはは目を見開いて絶句する。炎が彼女の魔力を喰らい、より勢いと猛りを増していった。

他者の攻撃魔法を、それも抑えているとはいえずランククラスの砲撃を呑み込むなど、普通では到底考えられない。一個人からのエネルギーとはいえ、魔法を極めた魔導師の力は絶大だ。それはもはや兵器の領域、魔法を持たない者たちがその危険性を疎むのも道理といえる。

だが、もしそれが『普通』ではなかったら？ 相対する力が彼女たちのちっぽけな常識で測れるようなものでなく、兵器などという言葉すら及びもつかないレベルだったとしたら・・・答えは一つだ。

ちっぽけな力はより強大な力に呑み込まれ
その前に屈するのみ。

その答えを体現した光景が目の前で展開されていた。闇色の炎に侵食され、桃色の光は次第にその勢いを弱められていく。

力とて、被捕食者となってしまうたが最後、抗うことなどもはや出来はしない。そしてほどなく、なのはから放たれた魔法を喰らい尽くした黒き龍が、大口を開けて襲い掛かってきた。

『 Load Cartridge , Oval Protection ! 』

レイジングハートから四つのカートリッジが吐き出され、自律発動によって編まれた防護膜がなのはの身体を一瞬にして包み込む。インテリジェンスデバイスの意志が、主の危機を察知し自ら防御行動に出たのだ。

そして桃色の光がなのはを包み丸い球体と化した瞬間、その全てを覆うように黒き龍が喰らい付いた。

「ぐうつ!？」

防御を全力展開しているにも関わらず、トラックに最高速で撥ねられたような、凄まじい衝撃がなのはを襲った。そのままなす術なく押しやられ、周囲を確認するような余裕もない。

彼女の目に写るのは自分を守る桃色の光と相棒の杖、そして奈落へと続くような黒一色の穴だけだ。おぞましい流れに抗おうと、なのは必死に杖に力を込める。

「くううううっ!!」

しかしその進撃は止まらない。なのはがそれを確認すると同時、空中にいた彼女の身体が叩きつけられ、バリアごと地面へと縫い付けられていた。

「ぐ……重い……っ!」

押しのけようとする力は簡単に押さえつけられてしまう。その動きは獲物を押さえつけ、根こそぎ貪ろうとする獣の本能そのものだ。砕き、侵食し、焼き付けて、黒龍は先にすすもうとその勢いを強める。

意志を持つかのような黒龍の衝動に歯を食いしばりながら、なのは杖を盾にしてひたすら耐えていた。

「オオオオオオオオオオ

ッ!!!!!」

雄叫びを上げる黒龍の牙が膜を隔て、なのはから寸でのところで止まっている。だがその強靱な顎は止まることを知らず、目の前の障害を砕こうと唸りを上げていた。その度に訓練場のビル群が薙ぎ

払われ、焼かれた破片が一瞬にして塵へと変わる。

思っように獲物に到達できない黒龍の憤りが、凄まじい衝撃を伴いながら大地を震わせた。それはなのにも伝わり、同時に大量の汗が流れ落ち、そして滴になる前に蒸発していく。

なのは身体が芯から揺さぶられるような痛みを必死に耐えながら、レイジングハートにありったけの魔力を注ぎ込み続ける。そして、そのまま黒龍の力をやり過ぎそうとした時だった。

「 ビキッ」

「っ!？」

僅か、物が引きちぎられるような嫌な響きが耳を突く。見ると、何かが迫ってくる気配と共に、ピシッと音を立てたレイジングハートの球面にヒビが入っていた。

同時に桃色の膜にも揺らぎが生じる。断絶が走り、色が薄れ、歪みは崩壊へと変わっていく。先ほど響いた音の正体は、無敵とまで呼ばれた彼女の防護魔法に限界が近づいてきたことを意味していたのだ。

「くっ・・・!」

そのことを理解し、なのはの顔に焦りが浮かぶ。しかし、一度入

り始めた亀裂は止まるはずもなかった。かろうじて拮抗していた状況が加速度的に傾き始める。

亀裂が傷跡を沿うようにして、ピシピシと断続的に、そして放射状に線を描きつつ走っていく。軽かった音は次第にくぐもった音に変わり、時間と共に小さなヒビも深く大きくなりながら、膜全体へと広がっていった。

「ぐ……う、あああああ！！？」

そして一際大きな亀裂が走った直後、レイジングハートを強く握り締めたなのはが、背中を仰け反らせながら叫びを上げた。ついにダメージがバリアと補助フィールドを貫き、内部へと抜け始めたのである。

身体を襲う凄まじい痛み、なのはは悲鳴を上げることすらやつとの有様だった。バリアジャケットに切り傷が出来、胸元のリボンが破れて燃え、レイジングハートから断続的な破碎音が木霊する。

「な、なのはさんのプロテクションが！？」

「まずい！いくら彼女でも、黒龍波をまともに受けたらひとたまりもないぞ！」

蔵馬が焦りを混じえた声で叫ぶ。加速度的に広がった亀裂はその深さを増し、既に球体の表面全てに及んでいた。もはやその守りに当初の頑強さは残されていない。不屈のエースの防御魔法は、いつ崩壊してもおかしくなかった。

龍は獲物へと執着しつづける。そして、限界を感じ取ったなのは

が静かに目を閉じた。

刹那、

「ふッ！！」

あと少しでヒビが球を横断するとき、飛影が右腕を大きく振り上げた。それに引かれるようにして黒龍がなのはから逸れ、彼女の脇を沿いながら龍はそのまま空へと駆け上がったいく。

「ギユアアアアアアアアッ！！！！」

訓練場の上空に破壊の雄叫びが木霊する。飛影は依然として暴れている黒龍を一瞥し、解放された右腕を空へと掲げると、少しの苦い笑いを零した。

「悪いがお前はここまでだ。呼び出しておいてなんだが、さっさと魔界に帰れ・・・ハアアアアッ！！」

飛影が右腕に力を込めて、空へ向け一喝する。すると、暴れ狂っていた龍が断末魔の叫びを上げながら一瞬にして崩壊し、そのまま虚空へと消えていった。

空が狂気さすら窺わせる様な赤色から、穏やかな水の色へと戻っていく。黒龍が消滅したことを確認すると、飛影は視線を水平に落とした。

同じくして桃色の球体が、甲高い音を立てて砕け散った。砕かれた球体の中から出たなのは、瓦礫が散乱する大地に倒れこんでいく。

だが、その身体は地面に衝突する寸前で力強い腕に受け止められていた。視線だけ動かしてその主を見る。

「ひ・・・えい、くん・・・」

「やれやれ。貴様が売った喧嘩だというのに、いちいち世話の焼ける奴だ」

身体全体に響く頼もしい感触に、彼女は覚えずしてその名を呼んでいた。耳元からいつもの皮肉が聞こえる。飛影の表情は見えないが、苦笑しているように感じた。心配されていると思うのは、都合が良すぎるだろうか。

「・・・あ・・・ひ、飛え・・・うくっ！」

体中が痛い。指先さえ満足には動かないし、自分の声も何だか遠い。意識も正常だとはいえないだろう。だがそんな中でも、彼の言葉はなのはの耳にはつきりと届いていた。

「力で分からせることはあらゆるものの原初にある。オレもその方法しか知らんし、他に取りうるすべもない。だが、『言葉でなければ伝わらんこともある』・・・貴様が以前オレに言ったことだ」

「え・・・あっ・・・」

飛影の言葉がかつての出会いをリフレインさせる。あの時自分は言ったではないか、言葉を交わすことで分かり合えることもある、言葉でしか伝わらないものもあると。

なのはは顔を飛影の肩にもたれかけたまま、力なく笑った。

「にゃ、はは・・・私、忘れてたんだね。一番大事な、こと・・・」

「フン、自分の言ったことぐらい責任を持て。でなければ、貴様は一生道化だ」

「うん・・・ごめんね、飛影、くん・・・また、助けら、れ・・・
ちゃ・・・」

ふつとなのはが首をもたげてくる。そのことに一瞬焦る飛影だが、首元にあたる寝息を感じ、一息ののち表情を仏頂面へと戻した。

そして両手を彼女の背中と膝の後ろに回した形、俗に言うお姫様だつこというヤツでなのはを抱え、飛影はシミュレーターの外側へと歩いていく。その正面からヴィータやフェイト、それにスバル達が一斉に近寄ってきた。

「なのはあつ！」

「なのはさんっ！」

フェイトたちが飛影から少し離れたところで停止する。彼の腕の中では傷つきボロボロになったなのはが、同じくヒビだらけになったレイジングハートを握り締めながら完全に気を失っていた。

しかし傷だらけではあったが、死んではないようだ。顔を煤だらけにしたなのは飛影の胸に顔を付けて寄りかかり、安らかな寝息を立てている。胸もきちんと上下していた。

飛影は上空を見やる。少し遠くに、リインフォースとはやてが浮かんでいた。その表情は警戒するような、穏やかとはいえないものだ。

ヴィータも同様に睨んでくるが、同時に泣きそうな顔になっている。飛影はフンと息を吐くと、俯いていたフェイトになのはを押し付けた。

「さつさと手当てをしてやれ。今はオレの妖気に当てられたのと魔力の使いすぎで気絶しているだろうが、寝かせておけばじきに気づく。心配なら蔵馬に頼るといい」

「飛影・・・」

戸惑うような彼女を置き去りにして、黒い背中が離れていく。その何かを背負うような後姿に声をかけたい衝動を必死に押し込め、フェイトはヴィータらと共に医務室へと走るのだった。

第二十話 炎獄の極地 ～ 奥義顕現（後書き）

第二十話、なのはと飛影のバトル編をお送りいたしました。

バトル・オールオーバー、オールオーバー！ Weiner、飛影！

まあ、当たり前・・・順当過ぎるところに収まりましたね。大方予想出来ていたかもしれませんが、いかがでしたでしょうか？

飛影がなのはに言ったこと・・・それは成長する上で忘れかけていた、彼女本来の輝きだったんですね。この言葉でフェイトも救われたんでしょう。

とまあ、飛影の行動に一応考えがあつてのものだったということを書いてみました。他人に入れ込むことの少なかった彼も、不器用ながらも他人を思いやれるようになっていたんですね。

少し強引だったでしょうか？でも、これ以外にいい考えが思いつかなかったんです・・・頭の固い作者ですみません。

今回はバトル編から続く、その後のお話になります。さて、どうなるのでしょうか。これ以上のグダグダにだけは避けなければ・・・

さて、ここで少し予告を。

来る9月11日にとあることを予定しています。なので更新は少し遅れるかもしれませんが。

その日・・・パリの上空で何かが起こる！（あ、これは某猫型ロボ

ットの映画のくだりでした)

ここまでのご愛読、真にありがとうございます。

では、また次回にて。

ツアイツエン
再見！

第二十一話 真実と憑依と初対面 〰 親友（前書き）

第二十一話であります。

文章を何度も練り直していたのと、少しリアルの方でトラブルがありました、更新が遅れてしまいました。申し訳ありません。

また、明後日より大学の方も始まってしまつので、度々更新が遅れてしまうことが多くなるかもしれません。ご了承のほどをお願い致します。

重ねて、謝罪いたします。

それでは、第二十一話スタートです！

第二十一話 真実と憑依と初対面 〳 親友

「・・・あ、れ・・・？」

うつすらとした白。なのはは見知らぬ天井、ではないがあまり馴染みのないアングルから部屋を見上げていた。ぼんやりと、自分が今寝かされていることを頭のどこかで悟る。

「おい、気づいたぜ！」

脇から声が聞こえたので視線を向けると、赤い髪を三つ編みで縛ったスターズ隊副隊長の顔が見えた。声を聞きとめたのか、そのまわりにフェイトを筆頭にして人が集まってくる。

「なのはっ、よかった目が覚めたんだね！」

「まったく、心配をかけさせおって・・・」

「よ、よかったです・・・」

「フェイトちゃんにシグナムさん、リインまで・・・」

涙目で覗き込む親友や優しいユニゾンデバイス、安堵の溜息を吐く烈火の将が目に映る。その横で計器に目を落としていたシャマルの顔が綻んだ。

「心肺、脳波正常・・・うん、リンカーコアも安定してるわね。怪我以外は何も異常はないわ。蔵馬さんが薬草とかいろいろ出してくれたお陰よ」

「いえ、俺が手伝えるのはこれぐらいですから」

病室の隅にある椅子に座りながら苦笑する蔵馬。その横には安堵の顔をした桑原の姿もある。エリオがほっとした表情で、ベッドの横に立った。

「よかったです・・・結構怪我してたから・・・」

「大丈夫だよ。大袈裟だなあみんな・・・」

なのはは自然に笑う。そのとき、慌たしい足音が響くと部屋の入り口が音を立てて開いた。

「シャル先生！なのはさんが目覚めたって本当ですかっ!？」

「ちょ、バカスバル！いきなり失礼で・・・あっ・・・」

「あ・・・」

走りこんできたスバルとティアナがなのはを見て固まる。勢いで飛び込んできたはいいが、そのあとのことを考えていなかったらしい。だが、自分を心配してくれているだろうことは、二人の表情からすぐに分かった。

なのはは若干目を見開いたあと、ぎこちなさを残した微笑みで彼女らを迎える。

「あはは・・・無事だったんだね、二人とも」

「そ、その・・・」

スバルとティアナは申し訳なさそうに俯く。そして少しの逡巡のあと顔を見合わせ、

「すみませんでしたっ！」

二人同時に頭を下げた。ヴィータ達や、謝られた当のなのはも面食らったようにきょとんとしている。

「シャーリーさんから聞きました・・・なのはさんの過去」

「ごめんなさい・・・なのはさんの気持ちも知らないで、私・・・」

スバルとティアナが涙を流しながらぽつぽつと語る。しばらく重い雰囲気が漂ったが、なのはは俯いたままの教え子に穏やかな声をかけた。

「ううん、謝るのは私の方。自分のことを見ないようにして、ティアナ達のことを考えもせず押し付けちゃった。私も前に言葉で伝えることの大切さを知ったつもりだったのに、いつのまにか忘れて・・・ううん、考えないようにしてたんだ。いつか分かってくれるだろう、って勝手に思い込んで・・・昔はちゃんと分かってたのに、ダメだね。飛影くんにも言われたよ、『自分の言ったことぐらい責任を持って』って」

なのはは胸に手を当てながら微笑んだ。そこには負の感情は一切

見受けられない。大切なものを取り戻した、本来の彼女がそこにいた。スバルとティアナはもう一度なのはに向かって頭を下げ、瞳を濡らしながら笑いあう。

「飛影がそんなことを・・・忌呪帯法を解いたときはどうしようかと思っただけで、俺達と過ごした時間やここでの日々で、やはり彼は変わったみたいだな」

彼女の雰囲気を感じ、蔵馬がここにいない仲間を思いながら安堵した。なのはの横で涙を流していたスバルが、はっとしたように顔を向ける。

「そういえば、さっきもそんなこと言っていましたよね。ええっと、なんでしたっけ？飛影さんの右腕に巻かれてる・・・」

「二世帯住宅だろ？」

「そう、そうです！」

「アホですね・・・」

桑原とスバルのあり得ない聞き間違いに、流石のリンも呆れ顔でツッコミを入れる。蔵馬は苦笑いを零して口を開いた。

「忌呪帯法だよ。名称には聞き覚えがないかもしれないが、こちらで言うリミッターと同じことさ。特殊な包帯と呪符で封印の呪縛を施して、自分の力を抑え込んでいるんだ。出してしまったら自分でも止められないほどの、凄まじい力をね」

力を抑えていたという蔵馬の発言に全員が驚く。その中で、シグ

ナムが蔵馬に確認の視線を送った。

「それがあの黒い炎、ということか・・・まだ目に焼きついて離れん・・・私の扱う炎よりずっと強化された・・・いや、もはやそんな次元ではないな・・・上手く言えないが、あの炎は普通ではない・・・我々が知る『炎』などとは存在からして違うような、異質な何かを感じた・・・」

自らも卓越した炎の使い手だと自負するシグナムが、あの時の光景を噛み締めるように言った。その表情には、いつもの厳格さもバトルマニアとしての好奇心もない。

彼女自身も心に浮かんだ事が信じられなく、そして信じたくなかった。烈火の将とまで称えられた自分が、『炎』に対してに恐怖心を抱いているなどということには。

「お願いや蔵馬さん。知つとるのなら答えて・・・『アレ』は、一体なんだったんや・・・？」

はやても蔵馬に詰め寄った。その表情は、飛影が来た時にさえ見せなかった真剣さを含んでいる。そして、これが彼女にとってのギリギリの妥協線だろうことは、誰もが理解していた。

部長は課におけるまとめ役である。そして、そこで起きたことに関して全責任を負う立場にある。本来なら、彼女は先ほどのことを有無を言わず問い詰め、早急に視野に入れなくてはならないはずだ。

おそらく、地上や海の管理局のほうからも、飛影が呼び出したあの黒い光に関する問い合わせが殺到しているだろう。もちろんあれ

は魔法でも質量兵器でもないし、自分達も与り知らぬモノなので、知らぬ存ぜぬで通すことはできる。

だが、それにしたって何も分からないままというわけにはいかない。自分達にとって一番の使命はミッドチルダの安全管理だ。あれが六課やミッドにとって危険と見受けられる以上、いくら仲間の力でも知っておく必要があった。その結果、飛影や蔵馬たちとの関係を壊すことになってもだ。

蔵馬は様々な感情を宿らせる彼女達の瞳を見返した。その中には恐怖心が渦巻いているが、それ以上に強く輝く光が見える。全員の目に浮かぶそれは信頼の色だ。彼女たちも自分達と同じ気持ちなのだということに行き着き、蔵馬はふつと笑った。

そして、一つ息を吐いてから静かに頷く。元より隠しておけるはずも、そのつもりもない。それに、この場の全員があのかの力を肌で感じ取っているのだ。どちらにしても説明は必要である。

それになにより、蔵馬は大切な戦友が危険人物にされることだけは許せなかった。極大な力を持っているというだけで、彼をまた一人にしてしまうなど出来るはずがない。

蔵馬は桑原と一度目をあわせると、もう一度彼女らを見返す。そして再度息を吐くと、ぽつぽつと言葉を紡ぎはじめた。

「あれは黒龍・・・本来は瘴気の中でしか存在できない、邪王炎とも呼ばれる魔界の獄炎だ。そして、邪王炎殺拳において本当の『炎』とされるものもある・・・それが、飛影の持つ『力』の正体・・・相当な手加減をしたようだから、なのはちゃんを殺すつもりはなかったみたいだね」

「はええっ!？」

「あ、あれで力をセーブしてたんですか!？」

「ア、アホも大概にしろ!黒龍だかコツクリさんだか知らねえけど、あんなもん出しといて殺す気がなかったっていうのかよ!？」

蔵馬の言葉にリンやシャーリー、ヴィータが椅子を蹴立てるように立ち上がった。特にリンとシャーリー、それに後ろのはやては管制室でその力の大きさを数値で知っているから、受けた衝撃も相当なものだ。シグナムやフェイトなども黙ってはいるが、驚きに顔が強張っている。

だが、蔵馬は表情を変えずに頷いた。

「ああ、それは断言できる。もし彼が本当になのはちゃんを殺す気だったのなら、技を発動したあの一瞬で勝負は決まってたよ。炎殺黒龍波の力の源は魔界という世界の化身。魔法を使えるとはいえ、それ以外は普通の人間と変わらない彼女では、それこそ跡形も残らなかったはずだ」

「まあ、ありや邪王炎殺拳の奥義だからな。その気になつて撃ちやあ、この訓練所どころか見渡す限りを軽く焼きせんべいにできるぐれえの威力だ。あれじゃ全力の一割にも全然届いてねえ」

蔵馬に続けるように桑原が補足を口にする。二人から紡がれる信じられないような言葉に、話を聞いていた全員がフリーズした。

垣間見えた飛影の秘密と、出現だけで次元干渉を起こすほどの凄

まじさを持つ黒龍の超パワー。それだけでも度肝を抜かれるのは十分だというのに、飛影が見せた力は一割にすら遥かに及ばない程度のももの。もはや笑い飛ばすこともできない。

蔵馬が灰になりかけているメンバーに苦笑し、ベッドに座る彼女の方を見やる。瞳に宿った優しくも強い光に、なのはは目をそらすことができなかった。

「強大な黒龍の力を制御しつつ、相手を殺さないように手加減するなんて芸当は、本気で放つより遥かに難しい。飛影は初めから、君を殺すつもりなんてなかったのさ。ただ彼は彼なりに考えて、それなりの本気を見せなければ、君には伝わらないということに至った末の行動だったんだと思う。人を思いやる心は持っているけど、飛影はあの通り、とても不器用な男だからね」

蔵馬は苦笑しながらも、その言葉に優しさを滲ませる。おずおずといった感じでキャラ口が頷いた。

「わかります・・・お兄ちゃん、普段はすごく厳しくてぶっきらぼうですけど、見えないところで私達のこと気遣ったりしてくれますから・・・」

仲間の言葉にエリオが静かに頷いた。何かにつけて文句を言う飛影だが、決して仲間を見放すことなくいつも影から見守り、いざという時には必ず助けにきてくれる。

そのことを誇る様子もなく見返りを求めることもない、ただ強く、気高く、そして遠い背中。そんな彼だからこそ信じられる、尊敬しているといった態度であった。

はやては黙ったまま仲間達の表情を見る。彼女はそのまましばらく考え込んだが、何かを得心したかのように一つ頷いた。

「・・・うん。そうやな・・・わかった！後のことは私らが絶対何とかする！蔵馬さん達は心配せんといて！」

ドンと胸を叩いてはやてが宣言する。いきなりの行動に全員、特に蔵馬と桑原が驚いたように彼女を見据えた。当の本人は少し頬を染めながら、こほんと咳払いをしてから口を開く。

「確かに飛影くん力は脅威や。たぶん蔵馬さんとか和真くん力もそうやろうし・・・万が一あれが向けられたら、今の私らには正直打つ手があらへん。けど、それは飛影くんを嫌悪したり、追い出す理由にはならへんやろ。飛影くんの人となりは、私も少しは分かるつもりやからな」

部隊長の顔に、本当の彼女の優しさが見え隠れしている。それは、彼女なりに掲げた覚悟の証だった。

物事を一側面だけで決めず、危険が内包されていようとその内面を信じる覚悟。巨大すぎる彼の力よりも、それに覆い隠されそうな彼自身のことを見て、信じると決める。

変わったのは、なのはだけではなかった。そして、続きを促すような面々の様子に、はやては苦笑しながらもはっきりとした口調で言う。

「何よりあそこまでして・・・自分の立場を危ういもんにしてまで、飛影くんはなのはちゃんを救おうとしてくれた。その気持ちは、私の勝手に台無しにできるもんやあらへん。それにいくらすごい力を

持つつつても、振るうのは飛影くん達やろ？ だったら大丈夫や。何があつても、私はずっと信じていける」

「はやてちゃん・・・うん、ありがとう・・・」

「ありがてえぜ・・・ホントによ」

蔵馬と桑原が、彼女に向かって素直な感謝を紡いだ。部隊長というその肩書きからして、彼女には大変な仕事が待っている。しかもこれからの行動如何では、今ですら折り合いの悪い地上本部との仲がさらなる険悪状態になってしまう可能性だってある。

だが、彼女はそれでも飛影や自分達を信じると言ってくれたのだ。二人は無言で頭を下げた。

「この件に関してはもう何も言わへん。みんなもいいな？」

『はい！ 了解しました！！』

応答する声には、その一つとして淀みはない。心が伝われば思いも伝わる。それを聞いたはやては「よし！」というふうに頷き、漸くの笑顔を見せた。

その場にいる全員に笑みが戻ってくる。と、そこでエリオがあれ、といった感じで首をかしげた。

「うん・・・問題が解決したのはいいんですけど、そこまでして兄さんが言いたかったことって一体なんだったんでしょうか？」

「そういえば・・・そうだね」

解決した問題と引き換えるように、新たな疑問が提起する。確かにそれはもつともだった。なのはに教訓を与えたことで一応の説明はできるが、それだけでは理由として少し弱い気がする。

加えて、飛影はティアナも気にかけていたのだ。それに関する回答がまだ無いことも気になる。

先ほどのシリアスムードほどではないが、ふむ、と考え込む一同。あの飛影の心理だ、興味があるのは当然といえた。

しばらく顔を突き合わせ、意見を交換し合う。だがどうやら答えは出せないらしく、彼女たちはそろって唸り声を上げていた。

そんななか、見かねた蔵馬が声を掛けようとしたとき、

『そこからは俺が説明するぜ』

不意に、女の子とは程遠い口調の女声が響いた。全員がぎょつとしたように其方へと視線をやる。その発声源は部屋の中央、オレンジ髪の少女からだった。

「ティ、ティア・・・？」

「え、え？今の声なに！？」

ティアナ自身、自分の中から聞こえた声に戸惑う。だが次の瞬間、彼女の雰囲気がからつと変わり、視線も鋭いものへと変化した。髪を掻き揚げ、強い光をその目に宿している。

フェイト達は教え子の豹変ぶりに瞬時に距離を取ろうとしたが、彼女自身が軽い口調でそれを押し留めた。

『あーあー、慌てんな。ただ、こいつの体を借りて喋ってるだけだからよ。蔵馬、ちよつと飛影の部屋に行ってコエンマが渡した『アレ』、とつて来てくれ』

「そ、その喋り方は・・・まさか浦飯！？」

桑原がティアナに対し驚きの声を上げる。浦飯と呼ばれたティアナがニイつと自信に満ちたように口の端を曲げるのを見て、蔵馬が確信と驚愕、それに懐かしさがない交ぜにした表情で頷いた。

「・・・わかった、行ってくる。だが、やはりこっちに來ていたんだな、幽助」

『まあな、つと、自己紹介しとくぜ。俺は浦飯幽助、飛影や蔵馬とは長い付き合いで、魔界に君臨する最強の大魔王様だ。今はこいつの体を介して話してる。よろしくな、お前ら』

ポケットに手をつ突っ込みながら、幽助はティアナの声で告げる。なのはが若干戸惑いつつも口を開いた。

「浦飯さん・・・確か、いつか飛影くんが言ってた人ですよね」

「な、なんでティアの中に？」

『いやな、俺も飛影のこと聞いてそっちに行こうとは思ってたんだよ。けど俺、今は魔界の奥がどこまで続いてんのか修行の旅がてら黄泉とか？ってやつと調査してる最中だし、結構な人数で来てっから途中で放り出すってわけにもいかなえ。んで意識だけをこっちに飛ばしたらこの嬢ちゃんがいたから、それを通して度々状況を窺ってたってわけだ。ついでに夢のなかで修行をつけながらな。さっきはちよっと手が放せなかったから、頼んどいた助っ人に面倒見てもらっただけだよ』

「　　やつぱりあの夢は貴方が・・・けど、どうして私なんですか？」

ティアナが途切れた言葉にこれ幸いと、意識を顕現させて問いを返す。一人二役をしているようだが、表情や口調が勇ましいものから女の子のものに、加えて取り巻く雰囲気も変わっているので不思議と違和感はない。表情が再び幽助のものに戻った。

『ま、それはあとでな。取り合えず話さなきゃなんねえことがあるし・・・蔵馬、持ってきてくれたか？』

「ああ」

蔵馬の声が部屋の中にごく自然に響いた。が、気配を感じ取れなかったのか、六課の誰もがびくうっと身を竦める。そんな彼の手に携えられていたのは、コエンマが飛影に渡した頭陀袋だった。

幽助はその中へと無造作に手を突っ込む。そして探るようにこそ
ごそやっていたが、しばらくおいてから直径十センチぐらいの水晶
と白い付箋の束を取り出した。水晶は透明なはずだがその向こう側
の景色は見えず、付箋からも何か普通ではない力を感じる。

『こいつは『波璃虚玉』と『念出ラベル』。霊界探偵七ツ道具って
やつの一つでよ、まあ早い話が記憶を立体化して追体験することが
できるだ』

「き、記憶を!？」

「程度は低いけど、ロストログア級のアイテムやな・・・」

はやて達の言葉を適当に流しつつ、ティアナ（の姿をした幽助）
は付箋の束から一枚を引き抜き、おでこに当てた。その色が白から
赤へと変わるのを見計らい、ラベルを離し水晶へとかざす。と、赤
色のラベルはまるで解け落ちるかのように水晶に吸い込まれていっ
た。驚く一同に幽助が向き直る。

『お前らには昔の俺の闘いを見てもらうことになる。俺の勝手な推
測だが、おそらく十中八九合ってる。それで飛影がその二人だけ
じゃなく、お前ら全員に何を言いたかったのか、それが理解できる
はずだぜ。けど、くれぐれも心しろよ？ 正直、あんま気持ちのい
いもんじゃねえからな』

その言葉と共に、波璃虚玉より光が伸びる。それは一定の枠を囲
み、部屋全体を覆っていく。そして強烈な光を伴い、周りから一切
の音が消え失せた。

おまけ・没ネタ　　憑依するということは・・・ルート1（
注意　グダグダです）

幽助「それにしてもティアナ、お前相当無茶したなあ。傷だらけだし、体洗うときとかすげえ痛がつてたじゃねえか」

ティアナ「ど、どうしてそれをつ!？」

幽助「お前は俺の精神下にいたからな、感覚とかはオレにリンクしてんだ。まあ、早い話が意識を共有してたってわけ。視覚はなかったから感触とかだけだけだな。記憶もいくつか見えたから、今お前のことを聞かれれば結構答えられんぞ」

ティアナ「な、何てことしたんですか!か、感触とか、し、信じられない!それに、勝手に人の記憶を覗かないで下さい!!この鬼畜!ド変態!人でなし!最低ですつ、デリカシーなさすぎですよ!」

幽助「むっ・・・ほー、そんなこと言っちゃっていいのかなー?俺はせっかく黙つところと思ったのになー?んじゃ、ご希望のようだし、ちよつくら話すとしますかあ。そーだな、例えば・・・こいつが七歳の時のある日の夜中、目がさめてトイレに行こうとしたんだ。けど、その日テレビでやってたお化け特集にビビッて布団から出られなくて、我慢できずにそのまま致し　「きゃああああああつ!?!やめてやめて　ッ!」なっはっはっは、それじゃこんなのはどうか?九歳の夕暮れ時、公園のベンチであるうことが実の兄にお嫁さん宣げ　「いやああああッ!」」

蔵馬「幽助・・・まったく君は・・・」

リイン「ま、魔王さま、結構愉快なお人ですね・・・」

シグナム「ただの子供のようにも感じるが・・・」

フェイト「あ、あはは・・・（よかった、憑かれなくて・・・）」

なのは「へえー、そんなことがあつたんだあ」

はやて「なあなあ、他になんかいないんかー？」

スバル「知りたい知りたいー！」

キャラ「ティアナさん、可愛かったんですね」

シャマル「はやてちゃん・・・スバルにキャラまで・・・」

ヴィータ「何やってんだか・・・」

桑原「・・・お前ら、緊張感ねえな」

エリオ「か、和真さん、お煎餅を食べながらそのセリフはちょっと・・・」

く憑依するということとは・・・ルート2」

蔵馬「幽助。君はここ数日はずっとティアナちゃんの影から見てたんだろう？」

幽助「ん？ああ、そうだけ。ティアナがトイレとかそういうときは流石に潜ってたけど、それ以外はだいたいな」

蔵馬「そうか、幽助がティアナちゃんを鍛えたんだって言ってたな」

幽助「おうよ！」

蔵馬「彼女に発破を掛けたのもそうだろう？内情を知らなければできることじゃない」

幽助「へへ、まあな！」

蔵馬「なるほど。ということは彼女たちのプライベートも全て見ていたってことかな？お風呂なんて絶好の機会だったんじゃないか？」

幽助「もちろ・・・ソナコトナイゼ？」

蔵馬「・・・やれやれ、覗いてたんですね、幽助。皆のシャワーシーンなどを」

六課女子全員「「「「「えええっ！？」「」「」「」

桑原「な、何イツ！？」

ティアナ「な、何てことしてんですかつ！？」

ザフィーラ「なんという（恐ろしい）ことを・・・」

幽助「バーカ、事故だよ事故。ちよつと五月蠅いと思って目エ開けたら、偶然その場面だったんだ。まったく、紳士にあるまじき失態をしちまつたぜ」

蔵馬「・・・本音は？」

幽助「狙ってはなかったけど超絶ラッキーだったな。黄泉も手伝わってくれてたから、偶然見てすげえ顔赤くしてた。コエンマも意識共有で何回か見てたぞ、あつちは自分からな」

蔵馬「協力してくれた彼に何をさせてるんですか・・・」

なのは「や、やっぱり覗いてたんだ・・・これは、お話が必要な・・・!!」

シグナム「お、落ち着くんだ高町。ここは隊舎だぞ、あまり物騒なことは「おー、お前はあんときのおっぱい魔人じゃねえか」そこになおれ魔王、今すぐレヴァンティンの鎧にしてくれる・・・!!」

幽助「殴れるものなら殴ってみなさいー。俺はぜーんぜん痛くないもんねー」

ティアナ「私の体で好き勝手言わないで下さい!」

シャル「みんな、怒りを治めて!この体はティアナちゃんのもあるのよ!?!」

フエイト「そ、そういえばそうだった・・・！」

はやて「なら私らは見られ損かいな！」

ヴィータ「むづづづつ・・・けど、これじゃ腹の虫がおさまんねー！！！」

蔵馬「仕方ありませんね・・・桑原くん」

桑原「おう！浦飯イ、んなことしていいのかア？・・・螢子ちゃんに言いつつけるぞー？」

幽助「つぐ！？んだよ、テメー関係ねーだろ！？」

桑原「どうなんのかなー。そーいや最近見てねえもんな爆裂ビンタ、いやいや、いい見ものになるぜー」

幽助「アホオ！！オレを殺す気か！アイツは手加減知らねえんだぞー！」

エリオ「あ、あの・・・？」

キヤロ「螢子さんって・・・？」

蔵馬「幽助の奥さんです。普通の人間ですけど、幽助の暴走を唯一止めれる女性ですよ。魔界最強の名をほしいままにする彼も、彼女にはまったく歯が立ちません」

スバル「ま、魔王様が敵わない・・・」

リン「普通の女の人・・・」

全員「……………（じゅっ）」

なのは「な、何で私を見てるのかな・・・!」

全員「……………!……………（ブンブンブンブン）」

幽助「そりゃ魔王だからだろ」

なのは「……………ひぐっ……………気にしてるのにいつ!…!ディバイン……………!…!」

フェイト「や、やめてなのは!わたし達を巻き込……………」

なのは「バスタアアアアアア!…!」

全員「うわああああああ!…!」

シャーリー「あ、あの……………私の出番は……………?」

ちゃんちゃん!

第二十一話 真実と憑依と初対面 〰 親友（後書き）

さて、怒涛の展開となった二十一話でした。

今回は飛影が出なかつたので、少しバランスをとらせるのに苦労しました。なんだかかなり駆け足な上、グダグダになってしまった気もしますが、上手にまとめ切れませんでした・・・小説構成の勉強もしたいんですが、なかなか手に取る機会が在りません。

上のルート1とルート2は書いたものの没になったネタです。少しは面白みがあるといいのですが。

と、この辺りで今回初登場のオリジナルアイテムを紹介します。

はりこだま
波璃虚玉

霊界にあるエンマ帳を書き出す元、人の過去や未来を全て見通すことも可能な最上の宝具、『浄波璃鏡』の簡易携帯版。ラベルで抽出した人物の記憶を映像化し、空間に投影することができる。投影される場面は使用者が強く念じた記憶の一部であることが多いが、強いトラウマなどが抽出されたりすることもある。死人の場合は死後三日以内であれば可能だが、その場合も死者が最も強く抱いていた記憶が取り出される。名称は不完全なもの、見てくれだけの意の『張子』ともかけてある。

念出ラベル

『波璃虚玉』とセットとなっている付箋型ラベル。これをおでこに

あて、映像化させたい場面を強く思い描くと、その場面を第三者にもわかるものとして取り出せる。

霊界探偵七ツ道具と言いつつも、あと一つが空いていたので、最後の枠をこのアイテムにして登場させました。次回もこれに沿って話が進んでいきます。

さて、ここで前回発表した9月11日のことについて改めて述べておきます。

この小説を手がける片手間としてもう一つのなのはクロスを執筆することに決め、この『にじファン』にて発表致しました。

題名は『魔法少女リリカルなのはACE』です。

気づいていたよ？という方も多く、サプライズになってないだろ、とお思いになるかとは思いますが、詳しく知りたい方は、作者の活動報告の方をご覧ください。

ただ、発表しておいていきなりなんですけど、しばらくはこちらの『炎殺の邪眼師』の方をメインとしていきたいと思っております。なので、更新は不定期です。

この作品が節目を迎えるまでは、あくまでもオマケ程度だと考えて下さい。愛着はあるのですが、まずはこちらの方をしっかり済ませませんと。

それでは、長々と失礼致しました。こんな身勝手に駄文ばかりの作

者ですが、これからも気にかけていただけると幸いです。

次回タイトル、『喪失の重み・渴望の果て』 戦士達の過去』を
よろしくお願い致します。

それではまたお会いできることを願って。

ツァイツェン
再見！

第二十二話 喪失の重み ・ 渴望の果て ・ 戦士達の過去（前書き）

ようやく完成いたしました第二十二話。

いや、学校が始まったので忙しさが倍増したのもそうなんです、
とっていた授業の開始直後にレポート課題を出され、それに追われ
る羽目になってしまいました。

しかも今回はいつもより長いということもあり、うまくまとめるの
にも時間を要してしまい、結果一週間という間が空くことになって
しまったこと、ここにお詫びいたします。

今でも上手くまとめられているか自信はないのですが、なんとか形
にすることができましたので投稿いたします。

それでは第二十二話、スタート！

第二十二話 喪失の重み ・ 渴望の果て 〵 戦士達の過去

なのは達は一瞬の光に目を覆う。そして間をおいてから窺うように徐徐に開いていくと、そこには、既に六課の部屋はなかった。

はじめに見えたのは多くの観客席とそれに座る異形の者達、石で出来た巨大なリングだ。歓声が響くその中央、二人の男が数歩の距離をおいて対峙していた。背丈も年代も違いそうな二人であったが、その周囲は事情を知らないなのは達にもわかるほどの緊張感に包まれている。

一人はスバルやティアナと同年代ぐらいの少年。黒髪を見事なりーゼントで決め、目の前の男を睨みつけていた。

「あれは・・・」

「アレがホントの俺。この映像は今からだいたい十年ぐれえ前の、俺が十四だった時のもんだ。何の力もねえ一般人だった俺が、この世界に足を踏み入れたのは全くの偶然でな。そこから霊界にいろんな指令を受けるようになって半年、俺は裏の世界のバトルーナメント、この暗黒武術会に招待された」

「・・・は、半年っ!？」

「偶然・・・私と同じ・・・」

幽助の成長速度にスバル達が声を上げる。なのはは少し複雑そうな表情をしながら幽助を見つめた。

「飛影や和真たちもいる・・・知らない人もいるけど」

フェイトも傍らに立つ三人と、青い衣を纏った一人に気づいて声を上げる。シグナムが視線の先、真正面を見つめていた目を細めた。

「あの大男は・・・？」

その先にはサングラスを掛け、上半身を露出した長身の男がいた。その鍛え抜かれた肉体を惜しげもなく晒し、幽助と相対している。

「奴は戸愚呂。当時、暗黒武術会において最強の名をほしいままにした元人間の妖怪だ。この時点での彼の力は凄まじくてね、当時の俺や桑原くん、それに飛影すら凌いでいた」

「ええっ！？ひ、飛影さんより強かったのですか！？」

「お兄ちゃん以上なんて・・・」

蔵馬の台詞に全員が度肝を抜かれる。十年以上前とはいえ、あの飛影よりも強いという事実は、六課の全員にとって衝撃的なことだったらしい。

『元人間』という言葉にフェイトやエリオが不可解そうに眉を寄せたが、始まった戦いに正面を見る。フェイト達は尚も何かを言おうとしたが、両者の戦いはその目を釘付けにし、彼女達に尋ね返す機会を与えなかった。

戸愚呂が体に入れると、その筋肉がみるみる発達していったのである。そして、その体がおよそ人間の限界を超えたような筋骨隆々の姿へと変わった。放出される戸愚呂の妖気、その凄まじさを

感じ取った全員が言葉を失う。

「か、体の筋肉が……！」

「戸愚呂は自分の筋肉の量を操作することができんだよ。それを割合で高めて妖力と戦闘力を調整する。ありや80%だな」

「あ、あれで八割やて!？」

「発する気だけでこれとは……何という禍々しい力だ……」

桑原の言葉と戸愚呂の様子に、スバルやはやてが目を剥いた。ザフィーラは、戸愚呂の妖気に当てられて消滅していく妖怪を見ながら低く唸る。そして碌に言葉も発せないまま、戦いの火蓋は切って落とされた。

二人の一足一動に風を切って空気が震える。振り抜かれた、あるいは突き出された拳の風圧が、頑丈な石版や石のフェンスをたやすく粉碎し、時に観客すら巻き込む。幽助はそれを紙一重で避け、隙を見て攻撃を加えていた。

「な、なんて戦いな……！」

シャマルが二人を凝視して身を震わせる。戦い方は肉弾戦というミッドとは一線を画すほど原始的なものだが、そのレベルは桁で違った。非殺傷などという都合のよいものなどない、食らえば一撃で死に至るであろう攻撃が飛び交う、本当の意味での『戦い』。しかし、幽助によればこれでもまだ様子見に過ぎないと言う。

そんななか、痺れを切らした戸愚呂が石のリングに拳を突き落と

した。凄まじいエネルギーと衝撃に石版が残骸となって吹き飛び、数メートル四方の岩がさながら紙吹雪のごとく宙を舞う。

だがそれを隠れ蓑にした幽助は、天地が逆転したような体勢のまま戸愚呂に向けて空中で構えを取った。

「あ、あれは！さっきティアがやった・・・！」

スバルが滞空する幽助を見て叫ぶ。そして、指先に集まった青い光が戸愚呂に向けて撃ち放たれた。

『
霊丸ッ！』

声と爆発音が等しく反響した。ティアナが放ったものと名は同じだが、その威力は恐ろしいほど高く、見た目は巨大な砲弾のようである。そして膨れ上がった光はそのまま飛翔し、轟音を轟かせながら無防備の戸愚呂に直撃した。

爆風が散乱し、砂塵が舞う。戸愚呂の巨体は勢いに為す術なく押しやられ、青い霊光に包まれた。霊丸はそれで減速せず、何層にも渡って組まれた闘技場の壁をも突破する。そのまま周囲に繁茂する木々をなぎ倒し、戸愚呂の身体は遙か彼方へと吹き飛ばされていた。

「こ、これが、浦飯さんの霊丸・・・！」

「なんちゅう威力なんや・・・軽くティアナの十倍以上はあったで・
」

「溜め無し・・・けど、カートリッジを使ったなのはさんのSラン
ノータイム

クオーバーの砲撃魔法と、同等クラスのパワーです……！」

ティアナのものとは比べ物にならないほどの霊丸に、全員が口々に言葉を零した。広範囲攻撃を得意とするなのははやて、それにリンに至っても、その威力と発動速度に目を剥いている。また霊丸だけでなく、ただの一撃でリングを跡形もなく吹き飛ばした戸愚呂の攻撃力にも恐れを抱いていた。

『幽助の霊丸は、戸愚呂を完全に捉えた』

『ああ。戸愚呂はガードも間に合わなかったはずだ』

記録の中の飛影と蔵馬が、霊丸によって空いた大穴を見つめながら呟いた。彼からから見ても、どうやら同じ認識だったようだ。それならばもはや心配はない。

全員がほつと息を吐いた。少しヒヤツとした所もあったが、とにかくこれで決着だろう。あんなすごい霊丸を受けたのだ、勝負は決まったも同然である。六課の全員がそう思っただけを抜いた。

だが、なのは達の常識と安堵は容易く打ち碎かれることとなる。緩んだ彼女らの心中を凍らせるような言葉が、記録の中の飛影から紡がれたのだ。

『もしこれで……戸愚呂が無傷だったら……』

「……え？」「……」

蔵馬と桑原、それにティアナに乗り移った幽助を除く全員が、一様にぎよつとして一斉に彼の方を向いた。その台詞を何度も頭で繰

り返し、言葉の意味を理解するのに数秒をかける。そうして咀嚼した彼女達が辿り着いた答えは、唯一つの疑問だった。

無傷？ 一体何を言っているのだ、彼は。

「ちょ、ちよつとちよつと、冗談キツイで昔の飛影くん。なのはちやんが全力で守っても大怪我確定なのを、完璧に生身で受けたんやで？ 無傷やなんて、いくらなんでもそれはないわ。ひとたまりもあらへんに決まっとるやろ、なあ？」

「そ、そうですよ！ あんなの受けて無事なはずが………」

同意を求めてくるはやてに、ほぼ全員が頷く。あまりにもバカなことを提言されたかのように、半分笑っている。だがその顔は、一目見てわかるほど強張っていた。

そして現実はまだもなくして、彼女らに真の恐怖というものを植え付ける結果となる。すなわち、本当の驚愕はここからであったということを。

靈丸により数キロに渡って火の海となった中、その遙か向こうに何かの影が現れる。炎によって揺らめく視界の彼方から、相対的に黒い何かが近づいてくる。近づくごとに影はその輪郭を成していく。ジャリ、ジャリ、という碎かれた地面を歩く音が妙に大きく響いているような気さえた。

「な ……！？」

はやての口から呻き声が洩れた。それと同時に影が光を浴び、闘技場に空けられた風穴に手をかける。目に映ったその姿になのはや

フエイト、新人達が声も出せぬ中、闇より這い出た影は埃を払うような仕草に失望の声色を重ねて言った。

『　　こんなものかね・・・？　お前の力は』

それは紛れも無く、先ほど吹き飛んだはずの戸愚呂だった。所々ズボンは破れ、トレードマークのサングラスを失っているが、まったく健在なまま彼はそこに立っている。後ろに下がったフエイトがソファに躓き、キャロの横にすんと腰を落とした。

「か、掠り傷一つ付いてない・・・！」

「そんな・・・間違いなく直撃だったはずよ・・・！？」

シャマルが呆然として呟く。彼女は幾度となく傷を負ったのは達を診てきたから、魔法の威力と傷の深浅には詳しい。その関係は比例するのがセオリーだ。

そのことをふまえ破壊規模から想定してみる。どう考えても、あの霊丸は相当な威力だったはずだ。生半可なバリア魔法などでは、防壁ごと消し飛ばされてしまっただろうし、ましてや直撃では即死、あるいは消滅しても何ら不思議ではないほどの。

だから、あれだけの攻撃をまとも受けて全くの無傷など、普通の人間では絶対に不可能だ。もしも可能とするのなら、それは頑丈を通り越してもはや異常。実際に見ても信じられないが、戸愚呂の力のはなのは達の想像を遥かに超えていたのである。

『お前も100%で戦うには、値しない。このまま決着をつけてやる。80%のままでな』

幽助が張った霊気ガードを、気の放出だけで突き破りながら戸愚呂が言う。はやて達は震えた。

強すぎる。誰が見ても、絶望的な状況なのが明らかだった。ティアナに乗り移った幽助が「まいったぜ」という風に肩を竦める。

「ま、こん時はまだ俺も本気じゃなかったんだけどな。けど、ここまで圧倒的だったのはちつと予想外だった」

「あ、あれで本気じゃなかったんですか!？」

なのはが驚いて尋ね返す。そして全員が成り行きを見守る中、幽助の操作で場面は次々に入れ替わっていった。

そして言葉の通り、枷を解いた幽助が戸愚呂に飛び掛っていく。消えたように見えるほどの速度で戸愚呂に肉薄し、素手で戸愚呂を吹き飛ばした。

「は、速いつ!？」

「う、動きが全然見えませんでした・・・」

スピードに自信のあるフェイトやエリオが目を見開く。全力の幽助はその全てが先ほどの比ではなく、徒手空拳で80%の戸愚呂を圧倒するほどのもの。だが、それで勝負は終わらなかった。

幽助の猛攻を受け倒れていた戸愚呂が立ち上がる。体の筋肉が縮んだ戸愚呂は力を失ったかのようにも見えるが、それ以上に見て者に不気味さを感じさせる。そして彼は殺気とも怒気とも違う、しか

し目が合っただけで殺されそうな視線を愉悦で満たし、一人呟いた。

『初めて・・・敵に会えた・・・』

声と同時に、戸愚呂の体に筋が走り始める。それは瞬く間に彼を覆いつくし、不気味な妖気が辺りを包む。そして寒気をさらに加速させる瞳で彼は幽助に笑いかけた。

『いい試合をしよう。100、パーセント・・・!』

言葉と共に地鳴りが起きる。そして、目も眩むような光が戸愚呂を包み込んだ。凄まじい妖気が周囲に迸り、触れた妖怪たちはそれだけで蒸発していく。地獄を体現した世界がそこにあった。

そのあまりのおぞましさに言葉を失いながら、なのは達は元凶である戸愚呂へと視線を戻す。その先には、目を疑うような光景が展開されていた。それこそ、地獄すらも凌駕するような。

「な・・・何、あれ・・・」

なのはの口から、声と共にカチカチと歯がかち合う音が響き渡る。その先には、筋肉が怒涛の勢いで膨れ上がらせる戸愚呂の姿があった。破壊と再生が同調して行われ、まるでぶくぶくと大きくなる泡のように、その身体は変形を続けていく。

拳が巨大化し、背中が山のように盛り上がり、戸愚呂の体は脈動と収縮を繰り返しながら、先の二倍ほどの巨軀にまで膨れ上がっていった。筋肉は硬質化して鎧のようにせり上がり、もはや人界に留まっていない。

そんな常識外れの工程を経て、ついに戸愚呂は自らの全力、100%へと変革を遂げた。

「あ、あれが、元は人間だったというのか・・・!？」

シグナムが呆然として声を震わせる。だが、なのは達が恐怖を感じる暇もなく、戸愚呂が手を動かした瞬間に幽助が突然吹き飛んだ。驚く一同に、桑原が口を開く。

「今のは指弾だ。浦飯に向けて空気圧を飛ばしたんだよ」

「ゆ、指を弾いただけで!?あの一瞬であんだけの威力を持たせるやなんて・・・まるで弾丸やないか・・・!」

はやての言葉を遮るように、マシンガンのごとく繰り出される指弾を幽助が叩き落す音が響く。それを捌ききった幽助は戸愚呂へと突撃し、渾身の力を込めたパンチを見舞う。

だが、凄まじい威力を持つはずのその拳が届くことはなかった。なんと鉄をも軽々と砕く一撃は、戸愚呂の親指一本で受け止められてしまっていたのだ。本当に無造作すぎるほどに。

自失しかかった幽助の隙を戸愚呂が見逃すはずもなく、代わりに一撃で腕がイカれるようなカウンターを左腕に喰らう。硬直によってモロに受けた幽助は、悲鳴すら上げられぬほどの痛みにもんどりうった。

「う・・・そ・・・」

なのは達は、あまりの光景に言葉を失った。その様相は子供と大

人どころではない。先ほどまでの優勢が再び逆転し、パワーでもスピードでも圧倒されている。完全に追い詰められた幽助は、戸愚呂に向けて霊丸の構えを取った。

『全力で撃ってみろ。ラストチャンスかもしれんぞ』

『ッ！・・・舐めんなアッ！！』

挑発するように見下ろす戸愚呂に向けて、幽助はフルパワーで霊丸を放った。枷をした状態の倍以上はあるだろう凄まじい霊丸。先ほどまでなら、これで勝負はついていた。だが、

『喝 ツ！！』

幽助が渾身の力を込めて撃った霊丸は戸愚呂に到達することなく、寸前で露と消されてしまった。それを為したのは、戸愚呂が放った『ただの怒号』である。あまりにも非常識な光景を理解できなかったキャラが、呆然としたまま呟いた。

「な、何が、起こったんですか・・・！？」

「ば、馬鹿な・・・気合を放っただけであれほどのエネルギーを・・・あの巨大な霊丸を消し飛ばしたとも言うのか・・・！？」

「ふざけるよ・・・こ、こんな奴、デタラメじゃねえかつ・・・！」

シグナムとヴィータが強張った表情のまま声を震わせて言う。

戸愚呂が行ったのは、技も論理も何も無いただ力を真っ直ぐにぶっつけただけだ。それも、彼にすれば兎戯に等しいレベルで。ミッド

砕かれた壁を背にして、ズルズルと身体が滑り落ちた。倒れた身体を必死に起こそうとした幽助だったが、内臓へのダメージからか、口元に押し寄せた血を吐き出す。

ボタボタと、雫というにはあまりに大きなそれらが地面に次々と赤い花を作っていた。その光景に、スバル達が顔を真っ青にして言葉を失う。

「勘違いしてないかね、浦飯。お前はまだ、100%の俺と戦う資格を持ったにすぎない。今のお前を殺すには、片手で十分だ。だがそれでは俺が100%になった意味が・・・ない」

戸愚呂は地上から幽助を見上げる。圧倒的な力を誇示しながらも、その目的は幽助を殺すことではない。彼は無感情で告げた。

「お前の最大の力を見るために、俺は100%になった。だからお前には義務がある。今持てる力を最大限に使い尽くし、俺と戦う義務が！」
正に鉄のロジック！

戸愚呂が佇む幽助に向かって己の理論を展開する。彼がわざわざ全力を出したのは、ただ戦いに勝つためではなく、退く事が許されない極限の状況下での幽助との真剣勝負、つまりは命の奪い合いをするためだったのである。

そして、それが自分の意志だと戸愚呂は告げた。闘争本能などではなく、死を賭して戦うということこそが自分の生きる目的だと。

「狂ってる・・・！」

常軌を逸した彼の信念に、フェイトが声を震わせる。そして、そ

これから正に一方的な戦い、いや戦いとも呼べないものが始まった。

死んだ者たちの魂が戸愚呂の身体に引き寄せられ、吸い込まれていくのだ。不吉な風が辺りを覆い、妖怪たちが次々と蒸発する。

「こ、これは・・・!？」

「あたしらがやった蒐集みたいにエネルギーを取り込んで・・・いや違う・・・喰ってやがるんだ・・・ヤベエぞあれは！」

それは一方的な捕食だった。恨みと悲鳴が全て戸愚呂に吸い込まれ、その身体の一部となっていく。戸愚呂は不気味に笑った。

『100%の俺はひどく腹が減る。弱いものからどんどん喰うぞ。この会場の餌を食い尽くすのに、二十分とかかるまい・・・ぼんやりしていいのかね？お友達も応援に来てるんだろう？クククク・・・』

スバルやキャロをはじめ、戦い慣れしているのは達までが吐き気を堪えるように身体を丸める。シグナムやヴィータはそこまで行きはしないものの、久しく見なかったおぞましい光景に顔を芯まで青くした。

だが映像は続く。幽助は果敢に挑みかかるものの、全て軽くあしらわれてしまっていた。カウンターで攻撃を受けるたびに傷つき、普通の人間なら余波だけで消し飛んでしまうような拳が、何十発もその体に浴びせられる。

吹き飛んでフェンスに激突した幽助に、戸愚呂は溜息を吐いた。

を引き出すことで、戸愚呂を倒す可能性を見出す方が筋だろう、と。

その言葉にスバル達は声すら出せなかった。つまり、みんなのために仲間のうち一人を見殺しにしろと言っているのだ。

幽助は怒りに任せ、プウを怒鳴りつけた。だが切った啖呵も応じられず、逆に殴りつけられて幽助は激昂しかける。

しかし、ただ真っ直ぐに自分を見つめてくる瞳に射抜かれ、彼は気を取り戻した。プウに乗り移った声は静かに、言い聞かせるように彼に言い放つ。

『幽助・・・これが、お前の首を突っ込んだ世界なんだよ。力の無い者は何されても仕方がないのさ』

言葉の終わりに結ぶように戸愚呂から指弾が飛び、幽助とプウを吹き飛ばす。彼はそのままニヤリと笑った。

『それは・・・俺も考えていた、最後の手段としてな。お前が自身之力すらコントロール出来ぬほど未熟なら、それしか・・・あるまいな・・・』

倒れた幽助を見下ろし、戸愚呂は背後にいる四人に目をやった。ひとしきりそれぞれを眺めた後、その指先を桑原へと向ける。桑原は顔を引きつらせ、幽助が半ば放心したように見つめる中、戸愚呂は無感情に告げた。

『お前がいいな・・・浦飯の力を引き出すために・・・つまりは、オレのために、死んでもらう』

感情など微塵も浮かべず、戸愚呂は歩き出す。そこにはもはや慈悲はなく、幽助を自分と対等に戦わせることしか頭にない。

『や、やめろ、戸愚呂オオッ!』

焦燥を滲ませた表情と声で、幽助はがむしゃらに戸愚呂へと特攻する。だが何度立ち向かって、拳やキックを何発打ち込んでも、戸愚呂を怯ませることにすら至っていない。

何度も戸愚呂の拳を受け、逆流してきた血反吐を吐き出す幽助に向けて、彼は優越感すら滲ませた声色で告げた。

『惨めだなア・・・浦飯。お前は・・・無力だ』

言葉とともに、戸愚呂は幽助の身体を押さえつけて地面へと埋め込んだ。動かなくなった幽助を見て、戸愚呂はさらに桑原たちの方へと歩いてくる。

蔵馬と飛影が迎え撃つことを告げ、構えを取った。だが、桑原はそれを遮るように三人の前に出て、助太刀を拒否した。

「俺一人でいい」と言葉を残した桑原に、彼の意図が掴めない蔵馬と飛影が詰め寄る。だがその目を見た瞬間、二人とその後ろにいた青年が息を呑んだ。

桑原は静かに三人を見返す。穏やか過ぎる彼の瞳になのは達が言えようの無い寒気を感じた時、不意にはやてが声を震わせた。

「あの目・・・同じや・・・あの時のリインフォースと・・・」

「「「「「！」「」「」」

はやての言葉に、隊長二人とヴォルケンリッターがびくつと反応し、その目を見開く。雪の降る丘に消えていった銀髪の少女の目が彼と重なったとき、桑原が飛影の後ろにいる青年に声をかけた。

『・・・アンタ、浦飯に命を賭けてくれたよな・・・俺もかけるぜ！湿気た命だなア・・・』

『！？　よせつ、桑原あッ！』

幽助の声を振り切り、桑原は特攻する。そして叫びも空しく、急接近した戸愚呂によって桑原は胸元を貫かれた。

映像とはいえあまりにも残酷な光景に、少女たちは口を、そして目を覆う。夥しい量の血を吐き、胸元から流れ出ていくのもかわわず、桑原は必死に告げた。

『う、浦飯・・・ゴフツ・・・テメエは・・・こんなもんじゃねえ、ハズだろオ・・・俺をがっかり、させるな、よ・・・』

桑原はそこまで言って地に倒れ付す。蔵馬が駆け寄って抱き起こすが、その顔をやるせなさで一杯にし、強く唇を噛み締めた。なのは達の顔が青を通り越し、白く色を失う。

『どうだね、少しはやる気になったかね？一人じゃ足りないか。なんなら、もう一人ぐらい死んでもらうかね？』

戸愚呂が震える幽助に向けて言葉を吐く。だが、そこで幽助に変化が起こった。立ち上がった彼が、戸愚呂さえ知覚できないほどの

速度でその背後に回ったのだ。そしてその身体から、先ほどとは比べ物にならないほどの靈気の風が噴出した。

『情けねえ・・・仲間一人、助けられねえよ・・・』

解放された靈気の大きさに、はやて達は息を呑む。そして戸愚呂は待ちに待った死闘に喜びを滲ませていた。こうなったのはお前も望んでいたことだと、自分に近づきつつある幽助に向かって言う。

だが、幽助はそれを否定した。

『アンタとは違う』

不動の幽助を戸愚呂が殴り飛ばした。幽助は錐揉み状に吹き飛び、フェンスに激突する。だが、壁を抉るような衝撃もそれほど効いていないことを悟っているのか、彼は戦うように促した。

『俺の殴る力は同じ。だがお前の受けたダメージは小さくなっていくはずだ。それが強さでなくてなにかね！？』

戸愚呂は声高にして叫ぶ。だが、そう問われても幽助は否定を続けた。一人でここまで来れたわけではない、今の強さは仲間たちの存在ありきだと。

それを聞いた戸愚呂は声を高くして笑った。心底下らないという風に口角を吊り上げる。まだ足りないようだ、と。

邪悪な笑みを浮かべ、彼は歩き出そうとする。しかし、一瞬で近寄った幽助がその腕を掴んで止めていた。気を放出しながら、独白するように彼は告げる。

『俺は・・・どこかでアンタに憧れてた。小便ちびりそうにビビリながらも、その強さに憧れてたんだ』

何度幻海に言われても、心のどこかで全てを投げ打っても戸愚呂のような強さを得たいとだけ思っていた、と。だが薄く笑う戸愚呂に向かって、今はもうそうはならないと断言する。

「人はみな、時間と戦わなきゃならない。だが、奴はその戦いから逃げたのさ・・・誇りも、魂も、仲間も全て捨てて・・・お前は間違えるな、幽助。お前は一人じゃない・・・誰のために強くなるのか・・・それを、忘れるな・・・」

意識の中だからか、幻海の言葉がなのは達にも届く。心のなかで彼女の言葉が強く反響した。迷いが晴れた彼は高らかに叫ぶ。

『俺は捨てねえ！しがみ付いてでも守るっ！』

言葉とともに幽助は戸愚呂を吹き飛ばし、同時に霊丸を放った。今までのパワーを大きく超えたその威力に、全員が目を開く。そして、もう一度指先を構えながら彼は戸愚呂を見据えた。

『次が最後の一発だ。俺の全ての力を、この一発に込める。テメエが魂を捨てた代わりに得た力を全部、全部使って掛かって来い！テメエの全てを壊して、俺が勝つ！』

幽助が戸愚呂に向けて最後の勝負を告げる。戸愚呂はそれに呼応するようにして、自身のフルパワーである100%中の100%へと変身を遂げた。

戸愚呂は全てを否定して得た力を肯定し、全てを肯定する幽助を否定する。だが幽助は、全てを捨てたと言う戸愚呂に向け蔑みを込めて言い放った。

『そいつは違うな。逃げたんだよ・・・テメエは逃げたんだ!』

指先に全ての力を集めていく。絶対に逃げないと、何があっても捨てないと、その強い思いだけが戸愚呂を貫くために咆哮した。

『喰らいやがれ、霊丸』

ツ!!!』

お互いが全ての力と信念を一撃に込め、二人は真つ向からぶつかった。幽助が自らの力を限界以上にまで振り絞った霊丸を放ち、戸愚呂がそれを受け止める。霊丸は戸愚呂に握りつぶされてしまったが、力の限界を超えた歪みにより戸愚呂は力尽き、幽助はこれを打ち破った。

そこで幽助が映像を止め、全員に向き直る。世界が元に戻っても誰も口を利けない。その中、横にいた蔵馬が静かに言葉を発した。

「こうして幽助は戸愚呂を倒し、他の者たちを救うことができた。幸いなことに、戸愚呂も元々殺すつもりがなかったのか、桑原くんも死んでいなかった。けれど、目の前にいた大切な仲間を救えなかった絶望は、あのとき確かにあったんだ」

蔵馬はわずかに沈んだ声色で告げ、話を続ける。

「これは後でコエンマから聞いた話だけれど、実はこの戸愚呂も大切な存在を失った者だった。奴が人間から妖怪へと転生する前、戸愚呂は自分の弟子や格闘仲間すべてを、妖怪に殺されているんだ。

彼の・・・目の前で」

「そ、そんな・・・」

「酷い・・・！」

キャロとエリオが涙を流しながら、唇を噛み締める。暗い雰囲気
が漂う部屋に、蔵馬と幽助の声が響いた。

「仕方のないことだったとはいえ、自分の力を過信し、弟子達を守
れなかった罪の意識は、相手を倒して仇を討つても消えなかった。
そして苦難の道ばかりを進んだ拷問のような人生の末、後悔を背負
いすぎた彼は、力だけを求める存在と自分を偽ってしまった・・・」

「これで分かったか？飛影はどっちかじゃなくて、お前ら二人に対
して怒ってたんだよ。目的は違うが、どちらも同じく『力』に固執
してること。高町は言ってることやってることが違ってて、ティ
アナのことを理解しようとしなかったこと。ティアナは力を求める
姿勢が戸愚呂と同じになりそうだったことだ。悲しいことを背負い
ながら歩いてくお前らがあんまりにもダブってに見えたから、譲ら
なかったものをお互いに曝け出して理解して欲しかったんだろ。戸
愚呂みてえに、二人が道を違える前にな」

幽助はなのはを意味深な視線で眺めながら言う。目尻に涙をたた
えた彼女を見て、蔵馬が意を決したように近づいた。腰を落として
視線をあわせ、正面から見つめあう。

「なのはちゃん・・・飛影は君を渡した後、俺に『自分がした後始
末』を任せると言っていた。そして、『これ以降の君のフォロー』
も頼む、ってね。この意味が分かるかい？」

「!? まさか・・・ッ!!」

「えっ、なのはっ!？」

蔵馬の言葉に、なのはが血相を変えて飛び出していく。自動扉にぶつかりながら、彼女の姿は廊下へと消えた。蔵馬はそれを呆然としながら見つめるはやて達を一瞥し、ティアナに向き直った。

「ありがとう幽助。君のお陰で、なんとかかなりそうだ」

「へっ、いいってことよ。俺も飛影には返しきれねえ借りがあるからな・・・っと、そろそろヤベエか。今回はここまでだ。じゃあなお前ら、飛影にはよろしく言っといってくれ!」

その言葉とともにティアナを覆っていた薄い光の膜が消え、彼女は一瞬ふらつく。スバル達が慌てて駆け寄ると、いつもの彼女の笑みがあった。

「稀有な体験ね、取り憑かれるなんて・・・」

「ティアナちゃん、平気？」

シャマルの心配そうな声に、「ええ」と笑うティアナ。軽口が叩けるところを見ると、問題はないようだ。全員がほっと息を吐く。

「あとは、あの二人だな」

桑原がなのはが去っていった方向を見つめる。思うのは、一途な彼女と素直になれない大切な仲間のことだった。

いつもは容易く上れる階段に息を切らしながら、なのはは屋上の扉を押し開いた。水面に反射した陽光が視線を遮り、一瞬視界がぼやけるが、すぐに慣れていく。

「飛影くんっ!!」

「!」

目一杯の声で正面に向かって叫ぶ。彼女の視線の先には、初めて会った時のように黒コートを風になびかせる飛影がいた。驚いているのだろう、振り向いた顔は僅かに強張っていて、目も少し開き気味だ。だがそれは一瞬にして表情から消え、彼はいつもと変わらぬ口調で問いただしてきた。

「何故……貴様がここにいる」

「蔵馬さんから聞いたの! 酷いよ! 飛影くん、ここから出て行くとしたでしょう!？」

「チツ……あのお喋り狐め」

なのはの言葉が的を射ていたためか、慥然として顔を背ける。それに胸を掻き毟られるようなざわつきと、鋭い痛みを感じた。震え

る身体に鞭を打って飛影に近づく。

「やっと、やっと会えたのに……どうしてなの!？」

「答える必要もないと思うが？オレは貴様を完膚なきまでに痛めつけ、そして撃墜した。それも、お前を殺し尽くして釣りがくるほどの力だな。現に貴様はそうして怪我を負っていて、八神を始めとするこのやつらもオレを危険視し始めているだろう。今更、オレをここに引き止める理由などないはずだ」

「っ!」

淡々と、感情も交えない声色で飛影は述べる。だがその一言で、なのはの心を保っていた何かが焼き切れた。心が一気に膨張し、弾けるようにして流れ出す。

我慢などできない。感情が怒涛の流れを以って口元に押し寄せ、気づけば大声で叫んでいた。

「理由なんていくらでもあるよっ!私に大切なことを思い出させてくれたのも!私とティアナが仲直りできるように動いてくれたのも!ティアナの気持ちをちゃんと分けることができるように……分かり合えるようにしてくれたのも全部……全部飛影くんがやってくれたことばかりじゃない!」

止まらない。止めるつもりもない。

強い思いはそれゆえに巨大な怒りとなり、声帯を支配する。そして口を突くのは、また同じくらいに悲しさを帯びた叫びだった。

「ティアナが気負わないように、私の過去のことを黙っていてくれたのもそう。飛影くんの言葉を聞かないで意固地になってた時も、ずっと見放さないでいてくれた！それなのに……それなのに、どうして何も言わずに行こうとするの！？」

感情が言葉だけでは表しきれず、目尻から溢れたしずくが次々とアスファルトへと落ちた。無機質な屋上に斑点を作るたび聞こえないはずの音が響き、日の光がそれを消し去っていく。

ぼたぼたと零れながらその頬を伝う涙に、飛影は少し驚いたような視線を向けていた。

「あの時みたいに、助けてくれたのがただの気紛れならそれでもいい。でも、こんな……こんなこと私は望んでない！私はもう飛影くんのことを忘れるなんてできない！それなのに、いなくなっただけがいいなんて勝手に決めないで！私の気持ちを一人だけで決めて自分勝手にいなくなるうとしないでッ！」

叫びを捨て置き、なのはは飛影に駆け寄ろうとする。痛みによるショックと疲労で、身体がふらつかせながらも懸命に。

だが身体が心に付いていけない。涙で景色がぼやけていたせいか、床に足を取られる。支えを失ったなのはは、抗うことも出来ずにアスファルトへとその身を投げ出され、

「　　　　　フン。まだ満足に動けん体で、随分と無茶をする」

一瞬で近寄った飛影に、再び抱きとめられていた。数時間前にもされたばかりだというのに、彼の身体の感触がとても懐かしく感じる。伝わってくる鼓動がとても温かい。

「無理をするな。防御越しで加減したとはいえ、オレの黒龍波を受けたんだ。ただの人間の貴様ではこれ以上の無理は利くまい。体がどうにかなる前に、さっさと戻ってしばらく寝ている」

ぶつきらばうな気遣いが体を包む。だが、なのはは応じなかった。その手により強く力を込め、涙と共に共に言葉が流れ出ていく。

「嫌・・・今放したら、飛影くん絶対どこかに行っちゃうもん・・・いなくなっちゃ、やだよ・・・もう、どこにも行かないで・・・」

言いながらさらにコートを握り締める。いやいやといった風に顔を押し付けたなのはは、すすり泣くようにして飛影に縋り付いていた。

腕を振っただけで軽く払えるような、弱弱い力。だが、向けられた精一杯の気持ちは、万力のように飛影の心を捉えていた。

一度たがが外れ、隠していたものが完全に出てしまったからである。感情が抑えられなくなってしまった彼女は、幼子のように泣き続ける。飛影は大仰に肩を竦め、鼻を鳴らした。

「フン。ガキが・・・甚だ不本意だが安心しろ。一度はオレ自身で決めたことだ。それに貴様の母親との約束もあるからな、今しばらくはその面倒を見ておいてやる。だが、オレを失望させるなよ？次に間違えば今度は火傷では済まん。精々肝に銘じておけ」

「うん・・・うん・・・っ・・・ひつく・・・ふええ・・・」

涙はいまだ止まらず、頬を流れ、しずくがコートへと染みていく。

いつもなら怒鳴り声をあげるところだが、今回ばかりは勘弁してやるつもりらしい。ポケットに手を突っ込みながら、呆れたような、しかしどこか優しい顔をしていた。

「泣き虫め。八年経っても、脆いのは変わらんらしい」

「・・・泣き虫で、ヒック・・・いいよ・・・それでも、いい・・・だから・・・だからもう、絶対・・・ヒック・・・いなく、なった、りしない、で・・・」

「やれやれ・・・子守が必要なのは、スバルやキャロなどよりお前かもしれんな、なのは」

嗚咽を零し、子供のように泣き続けるなのは。慟哭を零す少女に目をやり、飛影は上へと視線を流した。

晴れ渡る空と穏やかな陽の光が二人を包み込む。強い潮風がなのはの髪を攫い、さながら絹糸のように空へ躍らせた。

涙は日の光で消え、声は風に紛れていく。

ここに、一つの戦いと過去が終わりを告げた。

第二十二話 喪失の重み ・ 渴望の果て 〵 戦士達の過去（後書き）

過去編、幽助と彼の死闘のお話でした。

戦いというものはどの世界にもあります。特に戦争などはマンガでも多く取り上げられるテーマの一つですね。

以前私が受けていた授業の講師はこんなことを言っていました。

「戦争を終わらせる方法は簡単だよ。争ってる国の両方のトップ陣を最前線に並べればいい。そうすればどんな戦争だって一発で終わる」

もつともです。死んでいくのはいつも立場的に弱い者たちが圧倒的に多いんですから、それを盾にして命令しかしない者たちほど嫌な存在はいません。管理局の最高評議会と似たような感じですね。

と、少し重い話になってしまいました。以前こんなテーマでレポートを書かされたことが多かったものですから。

さて、そんなこんなで今回のお話でしたが、いかがでしたでしょうか。

まだまだ文章的に粗も多く駄文なのは目を瞑って頂き、皆様にとつて少しでも面白いお話が書けていれば幸いです。

これからもう少し授業とか、ゼミの集中講座なんかもあったりするの
で、更新が遅れ気味になることがあるやもしれませんが、どうかご
了承のほどをお願い致します。

それでは、また次回でお会いできることを願って。

ツアイッエン
再見！

・外伝・ 狐と六課とファンクラブ騒動 〵 INミッドチルダ（前書き）

このお話初となる外伝です！

まずはこの場を借りて謝罪をば。更新が遅れてしまい申し訳在りませんでした！

この所家族がらみのことや、家業の手伝い、その他諸々とリアルのほうでの兼ね合いが大変厳しいものとなっているのであります。

さらにオリジナルのお話を考える辺り、アイデアが思いつかずかなり苦勞することとなり、結果、一週間以上も間を空けてしまいました。本当にすみません。

今回は飛影は登場せず、サブキャラクターのお話となります。初めての試みなのでごく不安が残るんですが・・・まあなるようにしかならんばい！

という感じで、外伝の第一作スタートです！

・外伝・

狐と六課とファンクラブ騒動　　INミッドチルダ

「ふう……」

穏やかな陽光が差し込むカフェテラスに、静かに息を吐く響きが漂った。このカフェは機動六課の誇る立派な施設の一つである。高級レストランとはいかないまでも、かなりレベルの高い料理を安く食べられると評判の食堂だ。

機動六課に派遣されてくる誰もが口をそろえて言うほどのクオリティと、毎日に楽しみが増えるという嬉しい要素。まあ男にはそれ以外の要素の方が大きいのだが、とりあえずこの評判は上々といったところであった。

だが、話の焦点はそこではない。昼時ほどではないが、にぎやかな喧騒に満ちたその空間の一角、白い丸テーブルに一人の男の姿があった。そして、彼こそが今この場を支配している人物だ。

赤い長髪に整った相貌、そして女性に美しいと呼ばせるほど澄んだ深緑の瞳。一目でも見た女性ならば、そのほとんどが目を奪われるであろう男性。ひとたび話せば、彼の雰囲気によられるであろうこと多数。しかも仕事もでき、おまけに優しいとくれば、イケメン指数も鰻上りになるというものだ。

これほどハイレベルな要素を持った者は他にはいない。彼こそが六課が誇る民間協力者の一人、南野秀一こと蔵馬であった。

現在、蔵馬は午前を担当していた仕事を完了させ、遅い昼食とティータイムと洒落こんでいる所だった。いつもなら飛影や桑原と一緒になのだが、少し仕事が多く、今日は一人での昼食だ。ティータイムをする男など、普通は気取っているとも思えるかもしれないが、蔵馬がやると違和感がないどころか一枚の絵になる。

その中で蔵馬は置かれたティーカップを手に取り、優雅ささえ漂うような動きで口に運んだ。ブレンドでなくストレート、少し柑橘の香りが強めのアールグレイを、存分に楽しんでいる。

そしてその香りを鼻腔で、渋めの味を舌で味わいながらも、目はテーブルに置いた本に向けられていた。内容は、この世界での知識やその他諸々についてのことのようなのだ。勤勉な彼らしいチョイスである。

片手でゆつくりとページを捲り、時折思い出したようにお茶請けのクッキーに手を伸ばす。組んだ足も見事に雰囲気とマッチしており、これ以上ないほど紳士のくつろぎシーンである。

と、そんな一時を中断させる声が唐突に響いた。

「く、くく蔵馬さん！」

「ん？」

クッキーに伸ばしかけていた手を戻して、本から顔を上げる。すると蔵馬のテーブルの前に数人の女性の女性、いや彼からすれば少女の一人が立っていた。

見覚えはないが、時空管理局の制服を着ているから管理局関係なのは間違いない。その誰もが世間一般で言うところの『可愛い』部類に入るような子達だった。

さらにその表情は一樣に赤く染まっているほか、目が泳いでいたり、そわそわと落ち着かない様子だったりする。周りからの視線も妙に気になった。

「俺に何か用かな？」

相手を驚かせないよう、蔵馬は自然体で問いかけた。穏やかな笑みを浮かべることも忘れていない。これはもう本能的にだ。同時に、カフェの各所で黄色い声が上がったのはスルーする。

そんな状況のなか少女達は顔をさらに赤くさせ、わたわたと慌て出す。そして怪訝そうな顔をする蔵馬に、彼女達は息を合わせ一斉に口を開いた。

「あ のっ！これ受け取ってくださいっ！」

「どうかお願いしますっ！」

「前からファンでした！」

それ以降も口々に言葉を吐き、蔵馬に向かって何かを差し出してくる。反射的に一人目のを受け取ると、それに便乗するように様々なものを次々と蔵馬に手渡してきた。

「あ、えっと、ありがとう。でも俺は……」

少女たちのパワフルな態度に少し面食らいながらも、断りの台詞を口にしようとする。だが蔵馬が口を開きかけると、少女たちはどもりながらも失礼しますとだけ言い、黄色い声を弾けさせながら走っていつてしまった。

蔵馬は渡されたものに目を落とすと、他人に見えないようにしながら溜息を吐く。手に持っているのは数通の手紙だった。それだけでなく、キーホルダーのようなものやクッキーなどまである。

この手の贈り物は蔵馬にとって別段珍しいことではない。中学生の頃から女子に言い寄られることが多かった彼にしてみれば、これでもかなり大人しいほうだ。

「まったく、騒がしいことだ」

「苦労しているな、蔵馬」

「ああ、シグナムさんにザフィーラ。休憩ですか？」

蔵馬の言葉にそのようなものだ、と軽く返すシグナム。ザフィーラが同情するような、その苦労を労うような眼差しで此方を見上げてくる。蔵馬は数少ない自分の理解者の態度に、軽く肩を竦めた。

「局員が失礼をしたな。先ほどの、他の課から研修のような目的で来た者達だ。それも先ほど終わって解散したのだが・・・どうしても会いたい人がいると、主に頼み込んできたのだ。別段不都合もないとのことで許可は下りたが・・・まあ、大方こんなことだろうとは思っていたがな」

周りをさりげなく見渡しながら、呆れた様な、そして少しだけ申

し訳なさそうな表情で、シグナムが謝罪を口にする。人当たりがよく、真面目で優しい蔵馬が人気者なのは、常識的に言っても当然だった。その容姿もさることながら、人として生きる彼の魅力がそうさせるのだろう。

だが、自分の本質を、妖怪だということを知ってなお付き合ってくれる人間は本当に限られてくる。なので、蔵馬は邪険にこそしないが、事情を知らない者とは距離を置く傾向にあった。

だからこそというか、当然といえば当然だが、この六課の隊長陣や新人たちの存在は蔵馬や飛影には有難い限りなのだ。妖怪と分かっても、普通でないと知っても、普通と変わりなく仲間として接してくれる。それが自分たちにとって最も得難いものであることを蔵馬は知っており、心から感謝していた。飛影は思っているのも絶対に口にしないだろうが。

蔵馬は僅かに笑みを浮かべ、アールグレイのポットへと手を伸ばす。だが、シグナムらと一緒にどうかと誘おうとしたところで、紅茶を傾けた体勢のまま蔵馬の動きが止まった。そして、ティーカップから口を離しながら、恐る恐る二人に尋ねる。

「ええと、シグナムさん？後ろにいる、そのお二方は一体どうしたんですか？」

「何？後ろとは・・・って、うおわ！？」

「あ、主はやて、それにシャーリー！？ふ、二人とも、いつからそこに！？」

シグナムとザフィーラが怪訝そうにしたのは一瞬。振り返った二

人は、いつの間にかそこに佇んでいたはやてとシャーリーにびくう
つと身体を飛び跳ねさせた。本当に気づいていなかったらしい。

その声に反応したのか、二人が顔を上げた。何だか纏う雰囲気
尋常ではない。口元には薄笑いも浮かんでいた。

「いつから・・・？シグナムの『大方こんなことだろう』あたりか
らやで・・・」

「・・・乙女の力を甘くみないで下さいね、シグナム副隊長・・・」

ふふふ、と抑揚の無い声で笑う二人。何だか場が視覚的に暗くな
ったかのように感じ、その背後からは一万トンよりも重い空気が漂
ってきていた。

怖い。怖すぎる。そして不気味すぎる。髪に隠れて視線が見えな
いところなんか特に。自称であるのは何とも言えないが、乙女の力
は歴戦の戦士に気配一つ悟らせず近づけるのか。もはや理屈とかそ
ういうのを軽く超えている。

「・・・さっきのは蔵馬さんのファンやったんかそうなんか許可出
したのは間違いやったなこれは問題や私に対する挑戦やそうやきつ
とこれは自分で道を切り開けつちゅうことのあらわれやなん間違
いないこれからはこんなことが起こらんようにしないといかん今
こそ覚悟が試されるその時や場合によつてはフレスベルグやラグナ
ロクもありの方向で・・・」

「・・・うう、どうせ私は後ろに立つても声を掛けられるまで気づ
かれないような、地味でデバイスマニアな女ですよ・・・だから蔵
馬さんだって・・・」

「あ、あの・・・主はやて？フィニーノ？」

ぶつぶつと、呪詛とも付かない言葉を吐き続ける夜天の主と、部屋の隅っこでタイルの数を数えているメカニック担当に、シグナムが若干引きながらも近づこうとしたが、それを後ろにいた男二人がおしとどめる。ザフィーラは、動物形態にあるまじき哀愁を漂わせながら、静かに首を振った。

「聞かなかったことしろシグナム。主や仲間の気持ちを察するのも守護者の役目だ・・・」

「ええと、俺もその方がいいと思うな」

人を超える聴覚で聞こえた台詞を、二人は気のせいだと必死で聞き流していた。流石、民間協力者とヴォルケンリッター中で最も空気が読める男の組み合わせである。紳士オブ紳士と盾の守護獣の名は伊達ではない。どこかの提督にも見習わせたいものだ。

「シグナム、シャーリ！」

そこへ、リインがふよふよと飛んできた。後ろからはなのはも歩いてきている。どうやらこちらにも休憩らしい。

「何の話をしてたの？」

「え、ああいや・・・主はやてとフィニーノが少しストレスが溜まっているようなのでな、どうしたものかと考えていたところだ」

「はやてちゃんがですか？」

「うん。あっち」

蔵馬が指を差した方向、なのはとリインの視線が今だに鬱々としているはやて達とらえる。ブツブツと言葉を零していたり、いじいじとの字を書いたりしている二人に若干引くが、少し考えるような仕草をしてからパチンと手を合わせた。

「なら、ちょうどいいかな。ここのところ根詰めてるし、二人とも今日は午後はお休みにして気分転換でもしてきたら？」

「……へ？」

スターズ隊隊長の進言に、はやてとシャーリーは揃ってポカンと口を開けた。何故だかその様子は少し可愛く、さらに幼く見える。なのはは二人に向け、満面の笑みを見せつつ二人を見た。

横に浮かんでいたリインも蔵馬の方を向く。浮かんでいたのは邪気のない、煌くような笑顔であった。そして、祝福の風の名を持つ少女は頬に人差し指を当てながら、

「蔵馬さんも一緒に、ですね」

ウインクをオマケした魅力的な提案を口にした。

天気は快晴。陽の光が少し眩しさを含んで目を刺激する。まだ五月の終わりだというのに、既に汗が浮き出そうな陽気である。夏の気配がもうすぐそこまで来ているようだ。

ミッドチルダの首都クラナガンは、いくつもの高層ビルが並び立つこの世界でも最大の規模を持つ大都市である。高度に発達した魔法という名の科学の恩恵により、ミッドの環境は温暖化などで悪化することはなく、しかし街には活気が溢れている。魔法の恩恵というものは個人だけではないのだ。

そしてその人口も、地球とは比べ物にすらならないほどの規模であることは言うまでもない。快適な環境となり、医療も同等にまで発達した世界では、人間の生の数や長さも必然的に増加するというものだ。存在する人間を支えるためには、これだけのものが物理的にも必要なのである。

「へえ、すごい賑わいだ。仕事でここへ来ることは何度かあったけれど、プライベートでは初めてだな」

そんな賑やかな街の一角。ミッドチルダのメインストリートを歩く三人分の靴音が響いている。だがそれもすぐに雑踏に混じり、余韻を残すことなく音は消えていく。石敷きのタイルを先頭で踏み鳴らすのは、黒のローファーを履いた蔵馬であった。

無地のホワイートシャツに白を基調とした薄い青色のオープンシヤツは彼の爽やかさを一層引き立て、上物だろうと思われるグレーのストラックスが長い足に映える。右肩には二つのポケットをつけた皮製の分厚いサスペンダーが真っ直ぐにかけられ、蔵馬の右前と右後ろでそれぞれストラックスの腰部に固定されていた。彼らしいラフ

なスタイルである。

蔵馬がさりげなく後ろを振り返り、自分の人一人分ほど後ろから歩いてくる女性二人に目をやった。だが視線が合った瞬間に、その二人はわたたと慌てたような態度へと変わる。その様子に若干申し訳なさそうな顔をした蔵馬が、氣遣わしげに口を開いた。

「二人とも大丈夫かい？それともつまらなかったかな？なのはちゃんに言われたからと言っても、無理して俺に付いて来る必要はないんだよ？疲れているんなら、六課で休んでいた方が・・・」

「い、いや！そんなことあらへん！私は楽しんでるで！ホ、ホラ、気分転換は大切やしな！なっ？シャーリー！」

「は、はい！はやてさんの言うとおりです！！蔵馬さんの行きたい場所に連れて行ってください！」

蔵馬の提案を半ば鬼気迫る勢いで却下するのは、機動六課部隊長の八神はやてと同じくメカニック担当のシャリオ・フィニーノである。二人はいつもの六課制服ではなく私服、それも今時の若者といった服装であった。

はやては蔵馬と同じ淡い青色に英語のロゴが入ったシャツと、前を開いたグレーのパーカー。紺色の短いデニムスカートから覗く足には黒のニーソックスを履き、絶対領域が眩しい。なのはから借りた底が厚めのロングブーツは、少し大きいのか歩き方がぎこちなかった。

一方のシャーリーは白にペイントで落書きしたようなシャツに青い緑のジャケット。茶色のミニスカートを履き、ショートブーツを

カツカツ鳴らしながらはやてに横を並んで歩いていった。その顔に眼鏡はなく、コンタクトで決めた相貌が新しい彼女らしさを醸し出している。

午前中になのはとリンフォースから提案されたりフレッシュラン、又の名を蔵馬との初デート案に二人はのっかっていった。正確には男性一人に対して女性二人なのでデートとは言えないかもしれないが、蔵馬と一緒に出かけられるということで二人は一も二もなく賛成したのだ。

二人つきりでないことは少し不満だが、本当は諸手を挙げて喜ぶたい。だが、いざお出かけとなったら気持ちだけが先行してしまい、緊張でガチガチになっている二人であった。

「行きたい場所か・・・初めてだから行き当たりばったりになっちゃうけど、たまにはそういうのもいいかもしれない。三人でいろいろ見ていくとしようか」

「は、はいっ！」

二人の声が弾けてシンクロする。そして、先に行く蔵馬の隣に並ぶと、精一杯の笑顔を浮かべて歩き始めた。

そこから三人はいろいろな場所を巡った。女性に人気のあるコーデイナイトショップに、蔵馬が行きたいと言った本屋。時間的に映画は見れないため、はやての要望でゲームセンターに行きプリクラを取ったり、シャーリーお勧めのスイーツがある甘味処にも足を伸ばした。

色々な店や遊び場など時間が経つにつれ、はやて達の硬さも消え

ていく。三軒目の店を出たときには、なのは達へのお土産を考える余裕もあるほどに普段の彼女達に戻っていた。歳相応と言うヤツだろう。

午後からという短い時間ではあれど、三人は楽しい時間を思い切り満喫する。そして日が傾いてきた頃、その姿は公園にあった。

噴水がオレンジ色に染まっている中、遊び疲れたはやてとシャーリーが同じく夕陽に染まった白いベンチに並んで背を預けている。蔵馬は二人から少し間を空けて、同じベンチに座っていた。

「遊んだなあ。こんな思い切り遊んだの、いつぶりやるか」

「そうなんだ。ちゃんと休みはとってるのかい？有給休暇はとれるんだろう？」

「はやてさんは六課を設立するまでも大変で、設立したらそれ以上に忙しい日々でしたから、ほとんど休みを取ってないんですよ。私にとっても充実した日々ですけど、やっぱりこういうのは大事ですよね」

最初の頃のぎこちなさがすっかり抜け落ちたシャーリーが、蔵馬へ同意を求めるようににこっと笑う。蔵馬は苦笑しながらもそれに頷き、ベンチから腰を上げた。

「さっきあった売店で何か買ってくるよ。二人は何がいい？」

いつもなら慌てて自分が行くという二人だが、今はそこまでの元気がない。気遣いをありがたく受けることにして、二人は蔵馬にお任せした。歩いていく彼の背中が見えなくなると、二人そろって溜

息を洩らす。

「もう今日も終わりやなあ・・・」

「そうですね・・・」

はやての言葉に、隣のシャーリーがゆっくりと答えた。蔵馬がいなくなったベンチに沈黙が下りる。今すぐこれを破らなくてはならないような、ずっとそのままにしておきたいような、そんな奇妙な葛藤が二人を伝わって一帯に満ちていた。

しかし、そのとき二人の前に影が落ちる。蔵馬が帰ってきたのだろうか、と二人は顔を上げたが、そこにいたのは三人の女性だった。しかも、こちらに向かって穏やかとは言いがたい視線をぶつけてきている。そんな目を向けられる覚えはないが、どうやら自分たちに用があるらしい。

と、はやてが漠然とそこまで考えた時、リーダー格らしき女性が二人の前にずいと進み出た。

「あなた達、蔵馬様といった方々ですわよね？」

「そ、そうですね、何か？」

女性の態度にシャーリーは少し不安げに隣を見た。何故その名前が今出てくるのかとか、なんで様づけなんだという疑問を押し込め、はやては彼女の視線を真っ向から受け止める。隣の彼女と相手の雰囲気を感じ、『部隊長』の顔を浮かべてながら。

「初対面の人相手に自己紹介もなしに詰問するなんて、失礼と違い

ますか？こちらとしては、名前くらい名乗ってからにして欲しいですね」

後ろの二人がはやての眼力に僅かに気圧される。さすがは仮にも機動六課をまとめる立場の人間だ。だが、先ほど口火を切った女性は、彼女の態度に眉を吊り上げた。

「まあ、蔵馬様とご一緒だというのに品がないですこと。何故蔵馬様がこのような女性と一緒にいらっしゃるのかわかりませんわ。そもそも、どのような目的である方といるのですか？」

「目的なんてありません。今日はお互いに都合がついていたので、三人で少し羽を伸ばしに來ただけです。部外者のあなた方にとやかく言われる筋合いはないと思いますが」

「部外者ですって？私たちはこういう者ですわっ！」

はやての言葉に、彼女たち三人が一斉に上着を脱ぎ去る。はやてとシャーリーは目の前の光景に硬直した。その意味不明な行動原理もさることながら、二人が目を奪われたのは彼女達が纏っていた服である。そこには、大きな文字ででかでかところ書かれていた。

「蔵馬様 LOVE！」

「蔵馬様は至高なり！」

「蔵馬様の敵は我らの敵！」

かなりどうかと思うデザインのＴシャツで胸を張る三人娘。その根拠もなく偉そうな態度に合点がいった。同時にこう思う。

馬鹿だ。こいつらとんでもない馬鹿だ。一瞬前まで問答に付き合っていた自分たちがバカらしく思えてきた。

どうやら、彼女達はファンクラブ（おそらく非公式）の会員か何からしい。街で珍しく蔵馬を見かけたと思ったら、傍にはやて達のような女性がいたのでわざわざしゃしゃり出てきたということころだろう。いい歳して暇にもほどがある。

「分かりましたか？我々は蔵馬様を守る立場にあるのです。分かっただのなら今ここで誓ってくださいるかしら。今後一切、あの方に付きまとわないと」

付きまとっているのはアンタらだろう、というツツコミをどうにか飲み込む。そして横にいるシャーリーに目をやったはやては、とても珍しいものを見た。

普段は温厚であり、こういう状況では比較的気の弱い彼女が、むすつとした顔で相手を睨んでいたのだ。譲る気はないといった雰囲気がありありと出ている。そして、彼女と目があつたはやては一瞬笑い、そして強い意思をその目に宿してはつきりと告げた。

「お断りします。私たちと蔵馬さんは仕事場の同僚ですから、どちらにしても顔を合わせて仕事する仲ですしね。そもそも、あなた達の言葉を聞く理由がありませんから」

「それに、そんなことを蔵馬さんが頼むなんて絶対にありえません。あなた達こそ、ありがた迷惑という言葉覚えて方がいいです。ストーカーになつてしまふ前に、自分のしてることをよく考えたらどうですか？」

「っ！言わせておけばっ！」

二人の言葉に気分を害されたのか、女性が手を振り上げる。その目標はシャーリーだった。はやてが声を上げる暇もなく、向けられたシャーリーは目を見開くしかできない。

そして、風を切る音と共に撓った平手が思い切り振り下ろされ、

「やれやれ。女性であつても、無抵抗の相手に暴力を振るうのは関心しないな」

風よりも早くその間に割り込んだ影によつて掴まれ、寸でのところで止められていた。赤く長い髪がさらりと揺れる。

「「蔵馬さん！」」

「く、蔵馬様・・・！？」

腕を掴まれた女性は、目を見開いて目の前の青年を見つめる。自分が追い求めた姿を見たことに一瞬嬉しそうな表情をするが、すぐにそれは成りを潜めた。いつも優しい蔵馬の表情が、見たこともないほど険しいものだったからである。

「く、蔵馬様・・・あのええと、これは、その・・・蔵馬様を想つての・・・」

たどたどしく言葉を零す彼女に、先ほどの氣勢はない。ばつが悪いような、何かに怯えるようなそんな様子だ。蔵馬は表情を変えないまま一瞬目を閉じて、再び彼女を強い瞳で見据えた。

「俺なんかのことを考えてくれるのは素直に嬉しい。それは本当だ。だけど、もし俺の大切な仲間を傷つけたら・・・俺は、君達を許さない」

「く、蔵馬さん・・・」

はやてとシャーリーの頬が夕焼けより真っ赤に染まる。だが、それは同時にその他の者たちへの拒絶の意思であった。

「う・・・うわあああん!!」

有無を言わせぬその声色。それも他ならぬ蔵馬からの言葉が利いたのか、リーダー格の女性は涙を浮かべながら走り去ってしまった。後ろの二人も半泣きになってそのあとへと続いていく。

彼女達が見えなくなると、蔵馬は一つ溜息を吐いた後ではやて達に振り向く。表情はいつもの彼が見せる苦笑に戻っていた。

「俺が少し遅くなったせいでこんなことになってるなんて・・・ごめんね。お詫びにはならないけど、二人とも手を出して」

蔵馬がポケットから何かを取り出す。二人は反射的に手を出し、そしてその上に乗せられたものに目を丸くした。

「蔵馬さん、これ・・・」

はやてが手の上に光る『それ』を見ながら呆然と呟く。蔵馬から渡されたのは、銀色の光を放つブレスレットであった。シャーリーはシンプルなストレーティングに数個の小さなリングが通ったデザイン。はやてのは少し幅広いリング面に十字架の彫が入っていた。どちらにも二人のイニシャルが刻まれている。

「近くに露店が出てるのを見つけて、そこで買ってきたんだ。安物だけだね」

「安物って・・・」

シャーリーはブレスを見つめながら言葉を零した。アクセサリーにそれほど詳しいわけではないが、その輝きと手に伝わる重量感を見ればすぐにわかる。これは道端の露天商から買えるような代物ではない。明らかに、その手の方面からでなければ手に入らないはずだ。

だが、蔵馬はそんなことを億尾も出さず、微笑みながら言う。

「我ながら安直で申し訳ないんだけど、今日一日付き合ってくれたお礼、俺からのせめてもの感謝の気持ちとして、ね。要らなければ諦めるけれど、よかつたら受け取ってくれないかな？」

「も、もちろんや！こんな立派なもの貰って不満なわけあらへん！ホンマにありがとう・・・！」

「す、すごく嬉しいです！大事に、しますね・・・」

二人の返答に満足げな顔をした蔵馬が、そろそろ帰りましようか

と促してくる。それにすぐさま頷いて、はやて達は蔵馬の左右隣へと並んだ。

少しだけ冷たくなった風が二人の頬を撫でる。昼はかなりの暑さだったが、夜はまだ冷える日が続くようだ。暗くなり始めた空に一番星が輝き出していた。

（シャーリー、蔵馬さんのこと好きやろ）

「へえっ!？」

「?どうしたんですか、シャーリーさん？」

いきなり、本当に唐突に念話で紡がれた言葉に、シャーリーは飛び上がりんばかりに驚いた。手をわたわたと規則性なく振り、視線や顔は宙を泳いでかなり挙動不審っぽい。

「（い、いきなり何を言うんですか!そ、そんなこと私は・・・）」

不思議そうに見つめてくる蔵馬に、動揺しながらも愛想笑いでごまかしながらはやてに詰問する。そんな初々しい反応の彼女に、はやては蔵馬に隠れてニヤリと笑いながら続けた。

（ごまかしても無駄や。今日一日、デバイス関連のことをやつとる時よりも、ずっと嬉しそうやった。その舞い上がり方を見とればすぐわかる。さっき助けられたときなんか、もうすごかったで?『私とおんなじ』なら尚更にな・・・）

「あ・・・」

そうだ。はやてが蔵馬に惹かれていることは、もつと前から分かってた。彼女ほどの敏い人物なら、同じ気持ちを蔵馬に向ける者のことが分からないはずがない。

シャーリーは見破られていたことに顔を赤く染めながら、黙って彼女の言葉を待った。

（ファンクラブのことは、前からフェイトちゃん達を通して何回か聞いた。けど、蔵馬さんの人気がここまで広がってるってことはさすがに予想外やったな。そういえば、飛影くんの周りもおんなじようなことになったとるらしいで。性格はアレやけど、姿形はイケメンそのものやからなあ）

はやてが悪戯をした子供のような笑みを浮かべる。事実、飛影の秘密は全て伏されているが、その存在は局員の情報網を通して世に流れ出ていた。

ただし蔵馬とは事情が違い、彼の場合はその見た目のみで釣られる傾向が多いらしい。一度会ったり人づてで聞いたりして、彼の実態を知れば引いていく者がほとんどなのが救いだ、中にはあんな感じで冷たくされるのが好き、という物好きな女性もあり、ヴィータやフェイトが頭を悩ませているのだとか。閑話休題。

（ファンが付くのは止められへんけど、あんまり過激になっても困るから少し抑えなあかな。私たちのことを抜きにしてもや）

はやてが意味深な笑みを浮かべて此方を見ってくる。シャーリーはその視線を受け止めながら、同じく強気な瞳で対峙した。

こんな気持ちになったのは彼女も初めてだ。けれど、それはウソ

にできるほど小さくはない。念話ができないので、シャーリーはその表情に全てを乗せた。

『負けませんから』

宣戦布告と同時に決意ともなる、ただ一つの感情を。

・外伝・ 狐と六課とファンクラブ騒動 〰 INミッドチルダ（後書き）

記念すべき初外伝なのに、なんだろうこのグダグダぶりは。

と、はやくも脱力感に襲われているコエンマです。改めて書いてみると、蔵馬って扱いが難しいのなんの！台詞は幽助とか飛影みたいにガツンとやれないし、あまり敬語にしすぎると不自然だし・・・

このにじファンを利用しているとある作者様のご好意で、別サイトにある蔵馬主人公のクロス作品を読ませていただきましたが、改めてすごいと思いました。自分は蔵馬を上手く操縦できないので・・・もっと精進せねば。

さて、次回以降の予定についてですが、なんともう一つの外伝を計画しています。こっちは飛影メインの外伝で、飛影がとんでもない目に遭う予定ですので、もうしばらくお待ちくださいませ。

今回ほどお待たせすることはないと・・・思います。たぶん。色気もそれなりにつけるつもりですよ。あくまで当社比ですが。

ではでは、また次回にてお会いできることを願っております。

ツアイツエン
再見！

- 外伝 - 邪眼師はお熱！？ 良薬は身体に酷し（前編）（前書き）

外伝其の二が完成いたしましたー！

今回のお話はかなりハツチャけた内容となっております。っていうか、今までになく遊んでる内容です。

そして、文字数が少し多くなってしまったため前編後編構成となりました。外伝なのにお話が大きくなりすぎている気もしますが、そこはスルーで。

ではでは、外伝第二弾のはじまりはじまりー！！

- 外伝 -

邪眼師はお熱！？ ～ 良薬は身体に酷し（前編）

「シャマルさん。これが、例のモノです」

「え、蔵馬さん。もう出来たんですか？」

六課を裏から支える大黒柱、シャマルの城ことメディカルルームに二人分の声が響いた。声の主はいわずと知れたこの城の管理者シヤマルと、六課の緩衝剤兼癒し存在、蔵馬である。彼が癒し的な存在になっているなどと知れば、黄泉辺りが腹を抱えて笑いそうなお話だった。

と、それはさておき、蔵馬がごそごそとした動きを見せた後、持っていた紙袋の中から二つの円柱型の透明なケースを取り出した。その中にはパチンコ球大の球が赤と青で分けられ、それぞれのケースに無数に入っている。おそらく薬品関連の何かだろう。

「はい。難しいものはいくらでもありますが、これは製造自体がそんなに難しいものではないので。とはいえ、初めての試みですからね、参考になるでしょうか？」

「十分すぎるぐらいですよ。私だけじゃちょっと難しいけど、意見を出し合って改良していけば、きつといいものに仕上がるわ。あの子たちのバックアップが私の務めですもの、使えるものは何でも使わないとね」

シャルはケースをバックに仕舞い、嬉しそうな笑みを見せる。
蔵馬もそれに同調するように微笑んだが、少し真面目な顔つきになると一言付け足した。

「あ、でも扱いには気をつけてください。死ぬなどということはないですが、一応魔界のもので服用すると・・・という副作用が出ますから。っと、そろそろいい時間ですね。さつき飛影たちも休むって言うてましたし、一緒にカフェへ行きませんか？」

蔵馬が紳士オブ紳士な態度でシャルを誘う。彼の言葉に含まれていた名前に反応したのか、シャルは大仰に頷いた。

「ひ、飛影さんも！？そ、それなら是非、もちろん！あ、私は隣の部屋の最後の荷物を片付けてなくてはならないので、蔵馬さんは先に行って、その・・・」

「ふふ、大丈夫ですよ。飛影はちゃんと引き止めておきますから」

「あ、ありがとうございますっ。早く済ませてきますね！」

言うのが早いか、ぴゅーっと駆け出していくシャル。蔵馬はそれに苦笑しつつ、席と飛影を確保するために部屋を後にした。

だが蔵馬が部屋を出て数秒後、それを見計らっていたかのように、蔵馬が出て行ったドアがキィツと開いた。

「フフ・・・」

突如現れた不気味な声に気づく者はいない。誰もいない部屋で、その視線はシャルのバックへと注がれていた。

カフェは昼時も近いということもあり、テーブル席はほぼ埋まっていた。その中の一角、やや入り口よりの丸テーブルで談笑する四人の姿があった。

メンバーは、なのは、シャマル、ヴィータ、リインフォース？、そして言わずもがなの飛影である。蔵馬は氣を利かせてお茶菓子を取りに行っており、現在はこの五人で卓を囲んでいた。

先ほどまではお茶を持ってきたはやてもいたのだが、来てすぐに仕事があるといって退席してしまった。部隊長は忙しいんやと連呼していたことからして、ほんの数分の休憩だったのかもしれない。

「ふー・・・午前はこれで終了かぁ。みんなも第二段階へ進んでも問題なさそうだね」

「ああ。アイツらも少しは形になってきたみてーだしな」

なのはの独り言にヴィータが笑みを見せながら返答する。なのはと飛影の一件以来、新人達は目を見張る速度で成長していた。まだ信念というには程遠いが、心に何かしらの決意を持つことが出来たからである。

「そのぶん怪我也増えてきそうだけど」

シャルは少し心配そうに言うものの、その顔は笑っていた。仲間の成長ぶりが嬉しいのは彼女も同じらしく、これからの方針を二人と言い合っている。

飛影は淹れられた紅茶をゆっくり飲みながら、その会話に呆れたように割り込んだ。

「フン・・・偉そうな台詞はアイツらの甘さを全て抜けてさせてから言え・・・ああ、だがそれは教導官譲りだったか。これでは奴らも苦労するはずだな」

「あー、またそういう事言うー。飛影くんたら、戦いに関してのことはホントに鬼なんだから・・・いつも睨んでばかりだし、そんなじゃ女の子に嫌われちゃうよ?」

飛影の分析に、なのはが頬を膨らませて軽口を返した。そこに先日までのギスギスした雰囲気はもう無い。素の笑顔を見せながら接してくるのは、飛影は口の端を吊り上げた。

「一向に構わん上に余計な世話だ。それに、陰で魔王などと呼ばれている女に言われたくはない」

「ああ、それはあたしも同感」

「ちょ!? ヴィータちゃん、少し酷くない!?」

「あはは、でも明るくてたのしーですっ!」

リンの声でテーブルに笑いがはじける。シャルはそれにくすりと微笑み、相も変わらざるの仏頂面で紅茶を飲む飛影に声をかけた。

「飛影さんはどうするんですか。午後の訓練、参加します？」

「フン、悪い冗談だな。午後は蔵馬だ、わざわざ面倒を抱え込むほど物好きじゃない。オレは好きにさせてもら　　・・・」

と、出掛けていた言葉を吞み込み、飛影が止まった。いつもの如くクールにかわされると思っていたシャルは、不思議そうに首を傾げる。そして、怪訝な表情をする彼女の目の前で、

「ぐ・・・ア・・・ツ!？」

飛影は突如、テーブルに倒れこんだ。バターツという音を盛大に響かせた、それはもう遠慮の無い見事な倒れっぷりだ。驚いたのは周りにいたなのは達である。

「え?え!?ど、どうしたの飛影くん!？」

「お、おい!フザけてんのか!?か、顔を上げろよ!?なあ、おい!」

「ひ、飛影さんっ!しっかりしてくださいですう!」

いきなりの事態に、少女たちは混乱しながら口々に喚きたてた。動揺がカフェ全体に伝わり、どよめきが各所から上がる。それを聞きつけた蔵馬がトレイをそっちのけで飛んできた。

「なのはちゃん!一体これは・・・っ、飛影!？」

「く、蔵馬さんっ！飛影くんが、飛影くんがあっ！」

「落ち着いてなのはちゃん！飛影がどうしたのか、さっきまでのことを説明してくれ！」

なのは達は自分達が見たこと、その会話や状況、後は思いつく限りのことを蔵馬に伝える。蔵馬は赤い顔で唸りを上げる戦友に近寄り、その身体を慎重に調べる。

そして、触診と考察を段階を経て済ませると、ハツとしたように飛影を見据えた。その表情が徐々に確信的なものへと変わっていく。なにかに思い当たる節があるような顔だ。

「これは・・・まさか『邪快丸』の症状！？だが、あれはさっきメデイカルルームでシャマルさんに預けたはず・・・シャマルさん！」

「え、ええ、確かよ！蔵馬さんから受け取って、このバックの中に・・・えっ、ふ、蓋が開いてる！？」

見ると、密閉されていたはずの容器の蓋が僅かに緩んでいる。グイータは自分達そっちのけで話を進める二人に向かって怒鳴った。

「お前らだけで話を進めんな！何なんだよ、その邪快丸って・・・」

他の者も、言葉にはしないが説明を求める視線を送ってくる。蔵馬がシャマルの持つ容器を見ながら、少し早口で話し始めた。

「邪快丸は魔界にある薬草を用いて生成された、特殊な療養効果を持つ丸薬なんだ。ひとたび飲めば、傷や疲労、枯渴した妖気や霊気、

おそらくは魔力なんかも完全に回復するような脅威の代物さ」

「す、すごい薬なのです!」

「けど、それなら何で飛影くんが苦しんでるの・・・?」

なのはが机にしがみ付く飛影と寄り添うようにしているヴィータを見ながら、心配そうに蔵馬に尋ねる。すると、その横にいたシャマルが代わりに口を開いた。

「邪快丸の効力は確かに強力よ。けれど、それだけのメリットを持つが故に、邪快丸には相応の副作用が存在するの」

シャマルの言葉に「副作用?」と首を傾げる一同。蔵馬は全員からの問いを受け取ると、シャマルの説明の続きを口にした。

「ああ。邪快丸の本効力が現れるまでは個人差があるけれど、だいたい約一日かかる。それまでの間、飲んだ者には頭痛や発熱、間接や筋肉の激痛、吐き気に眩暈などの副作用が常時発生するのさ。しかも、潜伏期には妖気や霊気といった力は一切使用できないんだ。簡単に言うなら、相当ひどい風邪にかかっているようなものだと思うってくれればいい。けど、心配ないよ。これには解除薬があるからすぐに治る」

全員がほっと息を吐く。病気などではなく、すぐに回復するのならとりあえずは安心だ。

「はあ、驚かせんじゃねー、悪い病気かと思っただじゃねえか・・・ん?でもよ、なんでそんなもんがこんなところにあるん」「あああああっ!?!」だああ!うつせーぞシャマル!今度は何だよ!」

ヴィータの言葉を遮るようにして、シャルルから悲鳴が上がった。バックをひっくり返しながらか、しきりに何かを探している。そして、目当てのものが見つからないことを悟ると、蔵馬の方に泣きそうな顔を向けた。

「な、無いのよ！一緒に入れておいたもう一つのケース・・・解除薬の容器が無くなってるの！」

「・・・ええっ！？」

全員が驚いて彼女のバックを見やる。その中には、確かに赤い色の球が入ったケースが一つしか見当たらなかった。纏まりかけていた話が再び拗れ始める。

「あれは魔界産の代物・・・軽くセキユリティは掛けておきましたから、この建物からは持ち出されていないはずだ。俺が探してきました、みなさんは飛影を休ませていてください！」

しばらく考えに耽っていた蔵馬が、カフェから飛び出していった。とりあえずは彼に任せれば大丈夫だろう。

だが、

「くっ・・・ナメや、がつて・・・！」

希望的観測とは常に裏切られるものだ。少し安堵する四人を尻目に、いきなり飛影が立ち上がった。そして、あるうことが蔵馬の後へ続いて出ようとしたのである。

なのは達は彼の行動にぎょつとして、その体を慌てて押し留めた。

「飛影くん！？ダ、ダメっ、蔵馬さんも言ってたでしょ！？動いちゃダメだよ！」

「なのはの言う通りだぜ！どっちにしたって、一日経てば治るんだろ！？なら、今無理して探してもしょうがねえじゃねえか！ほら寝てろって！」

「ヴィータちゃんの言う通りなのです！薬は私達が責任持つて探しますからっ！」

「そ、そうです！病人は安静が第一と言いますし！」

なのはを初めとし、四人は飛影に駆け寄ってその行動を止めようとする。傍から見れば、温かく優しさを滲ませる光景だ。もちろん、なのはたちの本心の『半分』がそこにあるし、実際ヴィータとリンフォースは純粹に心配していた。

だが、もう半分はというとそれとは真逆のところにある。なのはとシャルは心配しつつ、大丈夫だと分かった瞬間に並列思考で違うことも考えていた。

彼女たち二人の心中を示すところだ。

「棚からぼたもち、またと無い看病イベント！お世話も存分に出来るし、これを機に彼との距離を一気に縮められるかもしれない！」

ビッグチャンス

・・・つまりはこの偶発的に出来た事態に何かと理由をつけて、飛影と一緒にいたかったのであった。あわよくば・・・などと策謀らしいものを巡らせているところは、決して悟られてはならない。乙女の心中は存外に黒いのである。

だが、そんな乙女の内心を知らずとも、飛影の考えは変わらない。元々が施しや逃げ道を嫌う性格の彼だ。そんな方針に対して素直に納得するわけが無い。

そして何より、自分にこんな罫を仕掛けた相手を、彼がみすみす逃すはずも無かった。

「邪魔を、するな・・・っ・・・指図、は受けん・・・!」

押さえようとしたなのは達を振り払って、飛影は駆け出していく。ひどい風邪を召しているとはいえ流石は魔界の猛者、並び立つテール群の間をあっという間に駆け抜け、その姿を廊下の端へと眩ませた。

遅れる事しばし、なのは達もカフェの入り口から飛び出す。

「私達も追わなきゃ! 急いで三人とも! 飛影くんより先に解除薬を見つけるんだよっ(私が看病するんだからっ)!!」

「お、おお!? わかった! (な、なんかえらく気合入ってんな・・・)」

「私はもう一度メディカルルームを探してみます！（何としても確保しなきゃ・・・!）」

「私ははやくちゃんとかに聞いてみるですっ！（待っていてくださいね、飛影さんっ・・・）」

言葉を置いて、各々の目的を為すべく走り出す面々。

こうして、様々な思惑が交差する中、休日の午後は幕を開けた。

- Side out -

（解除薬は・・・どこだ・・・早く、見つけなければ・・・）

荒い息を吐きながら、飛影は廊下を疾駆していた。会った人全員を引きとめて聞くが、いまだ芳しい返答は得られていない。いつものように千里眼透視ができればいいのだが、現在では妖気を封じられているため、それすらもままならないのだ。

イラつきを隠そうともせず、飛影は次の部屋を目指す。そして、ちょうど右に位置していた扉の一つを押し開けた。

「あれ、飛影？」

自分の名前を呼ぶ声が聞こえる。響いた声に顔を上げると、そこにいたのは制服姿のフェイトだった。

調べ物でもしていたのだろう。棚から取り出した分厚い資料本を片手で開きながら、こちらを見ている。表情は予想外の来客に驚いたかの如く、どこまでもきよとしたものだった。

「フェイト、か・・・ちょうどいい、貴様、このくらいのケースに入った・・・ハア・・・青い丸薬を、見なかったか・・・？」

藁にも縋る思いで飛影は問いを口にする。半ば諦めの質問だったが、返ってきたのは初めての色よい答えだった。

「青い丸薬って・・・ええつと・・・それならどこかで見た気が・・・」

「な、何っ！？何処だ！」

「え？ひえ・・・きゃあっ！？」

息を荒げながら飛影が詰め寄った。体当たりを受けたように体勢を崩し、フェイトの背中は鈍い音を立てて壁と接する。その拍子に、持っていた書類がバサバサと音を立てて床に散らばった。

飛影に押さえつけられたフェイトが、何が起きているのかわからないといった様子で目を白黒させている。だが、押さえつけた当の本人はそのまま力を緩めることなく、彼女へと身体を寄せた。

「解除薬を・・・何処で見た・・・！ハア・・・ハア、言え！」

「ちょ、ひ、飛影！？い、一体どうし・・・え・・・ええっ！？」

フェイトは動揺の声を上げるも、風邪に似た症状のせいで意識が覚束ない飛影には届かない。加えて力の加減が上手くできず、かなりの強さでフェイトを壁に押し付けてしまった。

密着した身体の間、彼女の前面にあるふくよかな何かもにゆもにゆつと潰れる。フェイトは考えもしなかった事態に、顔をこれ以上ないほど真っ赤っかにしていたが、飛影は目的を遂げることしか頭にないため、完全に意識の外であった。

というか万に一つに考えていたとしても、意識とともに感覚もかなり薄れてきているため、それを気にするどころか認識する余裕もないだろうが。

飛影がさらに顔を寄せる。フェイトは「く、はっ・・・」と熱い息を吐いて目を閉じ、近づいてきた飛影から顔を逸らした。

「あう・・・そ、そんな飛影・・・いきなり乱暴すぎ、だよ・・・あんっ、だ、駄目・・・そ、そこは・・・ふああッ・・・」

「妙な声を出すんじゃ、ないっ・・・赤くなっていないで、さっさとオレの質問に答え・・・ぐうっ!？」

度重なる頭痛が飛影を襲う。生まれてこのかた風邪になったことなど皆無であったがゆえに、そのダメージは大きい。邪眼の手術や戦闘によるものなど、外部からの痛みなら売って歩けるほど受けてきた彼だが、内部から生じる苦痛には慣れていないのだ。

だが、弱り目に祟り目とは言ったもの。痛みで顔を顰めた飛影の隙を突くようにして、資料室の扉が開け放たれた。

「フェイトちゃん、ここにいるの？ちよつと聞きたいこと・・・が・・・」

入ってきたのは同じく飛影の事情を知る少女、高町なのはである。フェイトに薬のことを聞こうとしてここに来たのだろうが、彼女は扉を開いた体勢のまま、瞬間冷凍を受けたように硬直していた。

その視線は彼女の目の前、寸分違い無くある一点に注がれている。すなわち、壁を背にしたフェイトと飛影が正面から至近で対峙しているという、ちよつと理解し難い状況にだ。

さて、今の二人を客観的に見てみよう。

飛影の左手は身体を支えるように正面の壁に置かれ、もう片方はフェイトのか細い両手首を掴んで、その頭上の壁に押し付けている。また、彼の片膝は動きを封じるためフェイトの両太股の間に差し込まれ、触れ合わされたその距離はゼロというか既にマイナスの域だった。具体的に何が、とは言わないが。

さらに彼女の持つ最大武器の一つ、もはや敵なしとまで言われた二つの核弾頭も、飛影におもいきり押し付けるような形となっていた。女性的火力が他と比べて高い機動六課だが、その中でも群を抜いて最強とされるフェイトのリーサルウェポン。

そんな乙女の最終兵器が飛影の胸板によってむにゅりとその形を艶やかに崩し、視覚的な方面から存分に猛威を奮っている。純情を地で行くエリオなどなら、鼻血を吹いて卒倒しそうな光景だ。

「ふ・・・あん・・・う・・・」

そして、視線を横に逸らすフェイトと飛影の視線的距離感も加味せねばなるまい。僅かに視線を逸らす彼女に対し、（熱で）赤くなつた飛影の顔は息も容易くかかるほどの距離にあつた。邪推すれば、キスをする寸前ともとれる。

無論彼からすれば、逃亡を防ぐためと相手を問い詰めるためにとつた無意識の行動であつた。まかり間違つてもその心に他意はなからう。なんたつて飛影であるがゆえ。

しかし、第三者はそうは思わないのが世の常だ。言葉が交わされない今、自分の見たことから判断するしかないからである。そして、その視覚情報が告げるフェイトの態度もかなりまずかつた。

まず飛影と壁とで物理的に封じられている身体は、身動きが取れそうにない。だがこれほどの至近、普通の男女の距離感ではありえないほどにまで接近を許しているというのに、彼女が抵抗らしい抵抗を見せているのは視線を外していることだけ。

自らのパーソナルスペースをほぼ掌握されているにも関わらず、距離を詰められることを拒んでいる様子は見られない。寧ろ、身じろぎをする度に制服が着崩れていく様子が何だか誘っているようにも見え、妙な艶かしさを帯びていた。

加えて、まとう雰囲気も等しくヤバかつたのがよくない。いつものクールフェイスはそこになく、浮かぶ色は子猫のように弱いものだった。だがそれ以上に甘く澱み、切なさを感じさせる色は、平時であれば誰もが思わず息を呑むほどだっただろう。

吐く息は荒く、熱に浮かされたように上気する表情は、彼女を実年齢より幼く見せる。トドメに深紅の瞳は水気を帯びてしとどに潤

み、何かを期待するが如くとりんとしていた。男でなくとも思わず見惚れてしまうほど際どい、神がかった悩殺フォームである。

ここまでの要素が揃えば、恋人的ワンシーンが二秒で出来上がるのは、誰が相手でも確実であった。それこそ小学生にだって分かる。

再三にわたり飛影の名誉のために言っておくが、フェイトはともかくとして、彼にはまったくそのつもりも気もなかった。余裕がなかったためか見た目はすごいが、彼の性格をよく知る蔵馬などなら、まずそちらの方面から考えたであろう。

次の瞬間には分かりながらも要らぬ気を利かせただろうが。

だが傍目からすれば、無抵抗な女性と気の逸った男性の構図にしか見えないのもまた事実だった。重要なのは周りがどう思うか、これに尽きる。

しかも、それを見たのが同じく飛影に想いを寄せる者であれば、この後の展開は考えるまでもない。俯いたまま視線を上げず、感情がすべて欠落したような声色でなのは問いかけた。

「何を……してるのかな？……飛影くん……」

「ハアハア……何を、だと……？そんなもの、見ればすぐに……」

「そうだよ。私でもそれぐらいは分かるよ？でも……」

何だか会話が噛み合っていないような気がした。場の空気に変化したことに、怪訝そうな顔をしてフェイトから視線を外す。そのま

ま文句でも言ってやろうかと思い、なのはへと視線を延ばした飛影は・・・息を呑んだ。

何にとは言わない。目の前の少女にである。

「でもね・・・人が見てるっていうのに・・・私が目の前にいるっていうのに・・・かまわずに続けるなんて・・・随分といい度胸だね・・・!？」

飛影が目を向けた先には、全身を波打つように戦慄かせた魔王が降臨していた。背後から黒々としたオーラを迸らせ、相棒のレイジングハートを起動状態にして佇んでいる。そのデバイスからも怯えた様子が伝わってくるのは、きつと気のせいではないだろう。

あまりにもぶっ飛んだその気迫は、飛影は一步下がらせるほどのものであった。熱が引いていないはずの背中に走るのは寒気だ。S級の上位妖怪と対峙したときにすら、ここまでの恐ろしさは感じたことがない。

(い、一体ヤツは何者なんだ・・・!?)

知らず冷や汗が流れ、飛影はそのことを真剣に考え始める。だが、どれほど考察を重ねようと明確な答えはでなかった。

朴念仁もここまで来ると、もはや鈍感では済まされない。そんな乙女の嫉妬がかくも恐ろしいものだということを飛影が知るのは、まだまだ随分と先の話である。

「ひ、飛影・・・」

そんななか、今まで黙っていたフェイトが飛影の名前を呼んだ。
緩んだ拘束から手を抜け出させ、彼のコートをはっしと掴む。

飛影は彼女に打開の光を見出そうとするが、その様子は少しおかしい。何だか雲行きも怪しい動きを見せていた。そして、背筋に言いたいような不安を感じると、彼女が薄く口を開いたのはほぼ同時。

フェイトは潤んだ目で飛影を見上げ、

「お、お願い、い……. 少しでも……. 最初だけで…….
いい、から……. や、優しく、して……. ?」

この場で最大級の爆弾を投下した。

プチッ!!!

何かが盛大にキレた音が聞こえた。全身に戦慄が走る中、なのはは無言でレイジングハートを掲げる。建物全体が揺れるほどの魔力が彼女の周りを荒れ狂っていた。

そして、初めてその顔を上げる。

「飛影くんの……」

彼女は幼子のようにふにやつと表情を崩す。そして唇を硬く引き結び、鼻はすんすんさせ、目には涙を一杯溜めて、

「浮気者おおおッ！！うわああああん！！」

収束した魔力を思い切りぶちかました。盛大に溢れる彼女の涙と共に桃色の奔流が二人を飲み込み、視界が真っ白に染まる。爆発音がありとあらゆるものを引き連れて轟き、部屋そのものを盛大に吹き飛ばしていった。

病人は労わりましょう。あと、理不尽すぎる言いがかりと八つ当たりはやめましょうね、なのはさん。

そんなこんなでも、飛影の受難はまだ続きます。お話は後編へ！

・次回予告・

作者「台本は渡ったか、では、はじめとする。3、2、1・・・スタート！！」

なのは「フェイトちゃんと共に吹き飛ばされた飛影くんは、痛む体に鞭打って再び行動を開始します」

スバル「戦場で培った気力だけを頼りに進む飛影さん・・・というか、吹き飛ばしたのはなのはさんじゃ・・・「ジャキンッ」な、なんでもないですっ！」

フェイト「しかし・・・あれ・・・」フェイトさん、ここです、ここ「あ、ありがとうティアナ。えっと・・・彼を待ち受けるのは女難という名の試練だった・・・って、ええっ！？まだあるの！？」

リン？「鬱々銃娘に能天気突撃娘、そして妄想逞しい伏兵まで現れて、六課はもう大混乱！」

ヴィータ「さらには飛影に襲い掛かる貞操の危機・・・って、なんだよこれ！？」

キャロ「そして、体がだんだん動かなくなるお兄ちゃん・・・」

エリオ「一体兄さんはどうなってしまうのか・・・兄さんの救世主はどこにいるのか！？」

ティアナ「そして事件の黒幕とは！？」

飛影「・・・次回、『外伝 邪眼師はお熱！？』 良薬は体に酷し（後編）』を・・・！」

全員『乞うご期待！！』

なのは「飛影くんは・・・飛影くんは私が看病するのぉ！」

飛影「戯言の前に薬を探せ！！」

シグナム「おい、私達の出番はないのか？」

桑原「出張中だろ。次の機会じゃね？」

シグナム「ううっ・・・く、悔しくなんか無い！無いったら無いんだあっ！」

蔵馬「・・・という感じでお願いしますね」

はやて「お楽しみやで！クシシのシ」

- 外伝 - 邪眼師はお熱！？ 良薬は身体に酷し（前編）（後書き）

外伝前編でした。

いやー、自分でもやりすぎな感じはしたんですが、改めてみても今回はとことんカオスですねえ。というか、早くもフェイトがすごいことに……………（汗）、これホントに大丈夫なんでしょうか？

飛影にとって今だ嘗てないほどの災難が降り注ぐお話となってしまうましたが、偶にはこんなのもいいのかな？ なんだか、負けず嫌いの子供を見ている感じがすね。なのは達にとってはまたとないチャンスなんでしょうが（笑）。

ではここで今回初出となるオリジナルアイテムの説明をば。

- 邪快丸 -

正式名称を『療紅玉』とする、魔界に存在する薬草から蔵馬が製造した丸薬の一つ。飲むと風邪に似た症状を引き起こし、一日二日ほど寝込むほどの高熱が出るが、それを過ぎると身体の傷から体力まですべてが完全回復する。一応解毒薬はあるものの、使えば効果はなくなる。とはいえ、現段階では負担が大きすぎで人間のけが人などには耐えられないため、正式に処方するためには改良が必要不可欠。

さて、一体これからどうなるのか……………この続きは書き途中でまだ二割ほどなので、すぐに掲載は出来ないと思います。お待たせして申し訳ありませんが、気長にお待ちいただければと思います。

それではまた次回でお会いできることを願って。

ツアイッエン
再見！

- 外伝 - 邪眼師はお熱！？ 良薬は身体に酷し（後編）（前書き）

やっと完成いたしました、外伝シリーズ第二段の後編です！

本当にお待たせです。それほど時間はかからないとか書いといて、ホントにすみません！ 小説を書く時間があまりとれず、また急遽入ってきたメッセージの要望に答えるために頑張っていたらいつの間にかこんな時間に……重ね重ね申し訳ありませんでした。

飛影がとんでもない目に遭った前回ですが、今回も波乱の予感ですよー！

それでは、張り切って行ってみましょう！！

・外伝・

邪眼師はお熱！？　　良薬は身体に酷し（後編）

「ぐっ……なののはヤツめ……治ったら覚えていろ……」

なのにはによる恐ろしい砲撃から数分後の廊下。怨嗟の言葉を口に出して支えにしながら、飛影は壁伝いに練り歩いていた。

風邪の症状は酷くなる一方であるが、それを気合で押さえつけ、引き続き隊舎の中で解毒剤を探して回る。先ほどの一撃で気絶したフェイトは、中庭の辺りのベンチに捨て置いてきていた。

入る部屋を全てチェックしているのだが、目標はまだ見つからない。さらに、動きすぎたせいか熱が上がってきていた。もうあまり時間は掛けられない。

「……っ……あれは……」

と、二階のロビーでティアナとスバルが寛いでいるのが見えた。おそらく休憩中なのだろう、笑顔を浮かべながら談笑に花を咲かせている。飛影が近寄っていくと二人とも此方に気づいたようだ。

「あー、飛影さんだ！こんにちはー！」

「えっ……あ……ひ、飛影さん！？」

スバルは手をブンブン振り、ティアナがぎくりとして此方に向くが、しばらくしてその様子が少しおかしいことに気がついたのか、二人は首を傾げながら駆け寄ってきた。

だが、それを悠長に待つ余裕などない。もはや一刻の猶予も無いのだ。前置きを全てすつ飛ばし、飛影は単刀直入に切り出した。

「スバル・・・ランスター・・・この辺りで・・・青い丸薬が入った・・・ケースを、見なかったか・・・!?」

「青い丸薬入りのケース、ですか・・・？」

「うーん・・・私は見てませんけど」

首を捻る二人に疲労が加速する。飛影は「・・・そうか」と言つて重い息を吐いた。イラつきは着実に積み上げられていくが、ここで彼女達に当たつても仕方ない。

「・・・手間を・・・取らせた、な・・・もし・・・見かけた、ら、オレに・・・ぐ・・・うあつ!？」

時間もないので、飛影は踵を返そうとする。しかし、ここまでの無理と先ほどのダメージが祟つたのだらう。足がもつれ、前のめりに倒れこんでしまった。が、ぼにゅんという感触と共に、倒れかけていた体が止まる。

「は、はひゃいつ!? ひ、ひひひ飛影さん!？」

そこまではよかったのだが、立ち位置が悪かった。飛影の顔面が着地したのは、なんとティアナの胸元であったのである。フェイト

やシグナムほどではないが彼女もかなり大きく、倒れこんだ飛影の頭をその衝撃吸収力でもって見事に受け止めていた。無論のこと何がとは言わないが。

自分に向かって唐突に飛び込まれた彼女は、顔をボツと朱色に染めつつも、倒れかけた飛影をあわあわと抱え上げる。いきなりのことにテンパッて呂律が回っていないのか、その声は何だか妙な感じに聞こえた。

「は、はふっ・・・飛影さ・・・ひんっ!?　む、胸に息が、かかってえ・・・んう・・・!」

歳の割に弾力豊かな感触に受け止められ、飛影は熱を吐き出すように呼吸を繰り返す。至近から感じる、弱ついても力強い身体の感触に、ティアナはぶるっと身を震わせた。同時に吹き付けられた息によつて、背中から何かが這い上がってくるような感覚を覚えさせられる。

「く、そ・・・もう、体が・・・思、うように・・・」

熱がかなり進行してきているのか、飛影の意識は朦朧としはじめていた。平衡感覚が薄れ、グラグラと地面が脈動しているようにすら感じる。と、そこで今まで機能停止していたスバルが、親友に抱きつく飛影の姿を見て、ようやくの再起動を果たした。

「テ、ティ、ティ、ティアッ!　飛影さんにいきなり何してんのっ!」

「わ、私じゃないわよ!　で、でも、どうしたんですか・・・なんか顔も赤いみたいですけど・・・」

ティアナの胸元に顔を半分ほど埋めたままの飛影に、二人は心配そうに声を掛けた。今だ体勢が体勢、相手が相手なだけに、周りにいる男達の妬みと羨ましが殺気を帯びた視線に乗って漂ってくる。

しかし、そんな中でもティアナやスバルに怒りの色はなく、ただただ胸元が接していることの恥ずかしさと、飛影の様子に戸惑うばかりだった。スバルなど、「替わってよ、ティアあゝ！」と横で喚んでいるくらいである。

普段の態度がいかに重要かということが、実によくわかるシーンであった。もしこれがヴァイスとかだったら、問答無用で吹き飛ばされていたこと請け合いだ。

だが、心配されながらも飛影はよろよろと起き上がって、重くなった自分の体を離そうとしていた。普通なら意識を失うほどの症状だというのに、凄まじい気力の為せる業である。荒い息は隠せないが、彼自身もこれ以上の醜態は御免であった。

「・・・よろけた、ただだ・・・し、心配など・・・要ら、ん・・・」

「よろけただけって・・・とてもそんな風には　　って、えっ！　す、すごい熱っ！？」

「それに、よく見たら服もボロボロじゃないですか！　一体何がどうしたって言うんです！？」

飛影の体に帯びた熱と、その傷ついた出で立ちにスバル達は目を剥いた。だが、飛影にはもはや詳細を答えている余裕などない。力を振り絞り、彼女らから体を振り切った。

「何でも・・・な、いつ・・・オレ、は・・・もう、行く・・・から、
な・・・！」

言葉と共に飛影は駆け出す。あらゆる痛みが体を苛み、足はもつれて倒れこみそうになりながらも、それを気力で押さえつけて飛影はひた走った。後ろから声や足音が響くが、今は構っている時間がない。

丁字路となった廊下の突き当たり、少し大きめの扉が付けられた部屋へ飛び込む。そして、その中にいた白い後姿に向かって飛影は駆けた。同時にその人物が振り向く。

「あ、飛影さん。ここには薬はなかったんですが、そちらはどう・・・
ふむぐっ!？」

声を発そうとした白衣の人物の背後を取り、一瞬にして口を塞ぐ。またもや見た目的にヤバイが、四の五の言っていられる状況ではなかった。

「むーっ!？　むーっ!!　むっ!？　んう・・・」

上がった抗議の声を、鬼気迫った一睨みで黙らせる。そのまま静かにしていると二人分の足音が近づいてきたが、しばらくして今度は逆に遠ざかっていくのが聞こえ、やがて消える。飛影はそのことを確認すると、安堵の息を吐きながらその手を離した。

「ぷはっ・・・ひ、飛影さん・・・大胆です・・・」

そこに至って、『彼女』はようやく解放されたようだ。顔を赤く

しながら息を吐くのは、六課の健康管理責任者、シャルルであった。

「ぐ……この……寝言、は……寝て、から……言え……ハア……ハア……」

医務室の白い壁に背を預けながら、途切れ途切れに悪態を突く飛影。だがその様子にいつもの自信は欠片もなく、とにかく苦しそうだ。浅い呼吸を繰り返す飛影に、シャルルはおずおずと進言した。

「あの……少しお休みになつたらいかがですか？ お疲れのようですし……ここは私が見ていますから」

「なん……だと……？ こん、な……ときに……ふざけ……てる……場合、か……！」

「こんなときだからです。それに、そんな状態じゃ見つかるものも見つかりませんよ？ 大丈夫です、Closeにしましたから誰も入ってはこないでしょうし、体を休めて次に備えるのも立派な方策です」

飛影の凄まじい形相にも動じず、安心させるような笑みを浮かべたシャルルが優しく言った。助けたいという純な心が向けられているのがわかる。さすがは医療官と言ったところだ。

尚も何か言いたそうにしていた飛影だったが、彼女の言うことが正論だということにも薄々気づいていたのだらう。苦い顔をしながら言った。

「く……仕方……ある、まい……悪いが……そうさせて貰うと、しよう……ただし……何かあれば、すぐに……知らせ、ろ。」

いい、な・・・ハア・・・」

いかな彼とて、背に腹は変えられない。言うが早いか、飛影はベッドの上にごろんと寝転がった。既にとうかとうに限界だったのであるう、息を落ち着かせようと深い呼吸を繰り返している。

シャマルは冷水に浸したタオルを、その額へと乗せた。表情はまだまだ辛そうだが、幾分楽になったようにも見える。

それを確認して僅かに微笑む。病人には安静が一番だ。安堵の息を吐き、カルテでも書き込もうと背を向けようとして、シャマルははたと思い当たった。

今この部屋には彼と自分しかない。辛そうな彼を世話することと医務官としての職務モードですっかり忘れていたが、これは凄まじくおいしい状況ではないか？

（わ、私つたら、何を考えてるのかしら！？）

シャマルは一人ぼつと顔を赤くした。だが掻き消そうと思っても一度思い浮かべてしまった邪念は簡単には消えない。むしろ時間と共に肥大化し、エスカレートしていく。

二人きり・・・しかも自らの思い人と同じ部屋でという、夢で見るような絶好のシチュエーション。誰でなくとも、気が昂ぶるのは当然である。

しかも、その標的は虫の息（？）だ。熱が苦しいのか、額を腕で覆うようにしながら息を荒くしている。それを見て、シャマルはごくりと喉を鳴らした。

完全なるまな板の上の鯉。今の彼の関する与奪権は、すべて自分の手の中にあると言って良い。しかも先ほどからの飛影の様子に、シャルは持ち前の母性本能をひどくすぐられていた。

「ウフフ・・・いいチャンスじゃない。モノにするなら今ね」

脳内に悪魔シャルが現れた！

怪しい笑みを浮かべながら、試すように此方を見ている（脳内ビジョンです）。いきなり来た平常心を揺さぶるような発言に、シャル（本体）は動揺してしまった。

（モ、モモモ、モノにするって・・・私に何をさせる気！？）

「クスッ、分かってるくせに。ホントは恥ずかしがりなのに、自分に態々言わせるなんて、我ながらかなりマニアックな趣味してるわね。まあいいわ、まさか今の状況を理解できないほどお子ちゃまじゃないんでしょ？　なら、手っ取り早くここで作っておけば、後々なにかと有利だと思わない？」

（っ、作るって、何を・・・？）

脳内に悪魔の声が反響する。そして大いになにか企んでます、というような意地の悪い笑みをを見せて誘うように告げた。

「フフ・・・き・せ・い・じ・じ・つ」

「はへう！？」

自分の（脳内）発言に、シャマルは顔を真っ赤にして鼻を押さえた。頭の中とはいえ自分で言っておいて照れるとは実に世話ない、というか傍から見ていてもかなりどうかと思う光景である。

しかし、即座に天使シャマル（脳内理性）が登場。鉄の意志力と貞操観念を誇示しながら、甘美な誘いへの対抗呪文を連ねはじめた。

「ダ、ダメよつ、そんなの絶対ダメ！ シャマル、よく考えなさい。貴方は管理局の医務官よ？ この六課の皆を守るべき存在なのよ？ そんな人を労わるべき立場の人間が、無抵抗の人を相手に、一体ナニをしようとしているの！ そ、そういうのはもつとこ、お互いに尊重し合って、ゆっくり進めるべきでしょう！？」

「フフフ・・・そんなこと、後からいくらかでも出来るわ。それより、このまたとないチャンスに、覆せない切り札を^{ジョーカー}しっかりと作っておくべきじゃなくて？」

顔を真っ赤にする天使シャマル対し、妖艶な笑みを浮かべた悪魔シャマルが、先ほどと似たような甘ったるい口調で告げる。シャマルは脳内で争う二人におずおずと声を掛けた。

（で、でも、私も自分からは・・・んと、け、経験ないし・・・）

「そうね。たしかに、歴代の書のマスターのなかには無理矢理迫ってきたのもいたけど、自分からは一度としてなかった。けどだからこそ、この事態は貴女にとって喜ばしいことだわ。それに、今はプログラム^{の再編で『傷モノ』}じゃなくなっているから、なにも問題はないじゃない」

我ながら明け透けすぎる物言いに、天使シャマルとシャマル（本

体）は顔から湯気を噴いた。脳内ビジョンでは、それを見て愉快そうに笑っているシャマル（闇仕様）がいる。

シャマル・・・君は二重、いや三重人格か？

というか、女の子の裏の顔はこういう黒くてSっ気が強いのがデフォルトなのだろうか。世に蔓延る永遠の神秘である。

「気持ち分かるわ。でも、このまま手を拱いていいのかしら。おでこだったけれど、キスはすずかちゃんに先を越されてしまっているのよ？ それに彼の性格からしても、この先こんな機会なんてもう二度と無いでしょうね」

悪魔の囁きがシャマルの心を揺さぶる。うつ、と気圧された彼女に対して、顔を赤くした天使がわたたと手を振りながら言った。

「け、けどっ、常識的に考えてもこれは反則よ！ それに、皆に対してもフェアじゃないわ！」

「まったく、我ながら理性が強いわねえ。年長者なのに、肝心な時になると急に乙女になっちゃって・・・尻込みするのも悪い癖よ、だからフツた男に行き遅れとか陰口叩かれるんじゃない」

「余計なお世話よ！ 気にしてるんだから言わないで！ そ、それにもし貴女が言うようなことをしたら・・・ふあ、ふへへ・・・はっ！？ ダメよ、ダメダメッ！ そんなふしだらなこといけないわ！」

押し切られそうになる理性を抱えた天使シャマルが、焦りを混ざった声色で叫ぶように諭しにかかる。だが、悪魔は余裕の表情を崩

さなかった。

口元に手をやる仕草を見せながら、（脳内で）艶やかな表情のまま笑いかける。そして、真っ赤になってあわあわするシャマル（本体）に、悪魔はさらに畳み掛けるように言葉を紡いでいった。

「誰かを好きになってしまった時点で、女は覚悟を決めるべきではないの？ 男女の関係は結局そこに行き着くんだし、特に競争率が高い相手は実際早い者勝ちじゃない。端から若い子にはアドバンテージ持っていていかれてるんだから、お姉さんキャラとして通せばこれぐらい規定内でしょ？」

甘美な眼差しと声を称えて、悪魔シャマルが抜け道を提示しながら危機感を煽るように続ける。天使がぐつと息を飲み込んだ。

「ま、負けないで！ 負けちゃダメよシャマル！ あなたはそんな弱い子じゃないでしょう！？」

（うつ・・・そ、そうね・・・そうだね、負けちゃいけない！ ここは心を鬼にしなくちゃ！）

天使の必死の叫びに、流されそうになっていたシャマルは拳を握りこんだ。まだ迷いを帯びながらも、キツと視線を強くして奮起する。しかしそんな健気な反応に対し、悪魔シャマルは撫で上げるようにくすつと笑い、切り札を切った。

「まったく私も頑固ねえ・・・こういうことに負けも何もないわ。むしろ他の女性に奪ひわれるって事のほうの問題よ？ それに・・・あなたも本当は欲しいんでしょう、シャマル。気持ちが決まっているのなら、年上としてしっかりリードしてあげなきゃ。彼の『は・

じ・め・て』をね」

鋭角から乙女心へと切り込む刃ッ！　ダメージ甚大！！

（むっはあああああ

っ！？）

鬼は死んだ。

ここに理性軍は完全崩壊を喫する。消えた天使の後には、フフと笑いながら飛影を指差す悪魔のみ（脳内ビジョンです）だった。

「さあ・・・決めたのなら、行動あるのみよ？」

「ええ・・・」

流れは怒涛の勢いをもって、彼女の全身と理性を支配していく。悪魔の声になされるがままにふらふらとベッドへと近づき、朦朧とする視界で意識半分に分を見える飛影に覆いかぶさる。金属骨格のベッドが波打ち、ギシッと軋みを上げた。

「安心して下さいね、飛影さん。私が責任をもって鎮めて・・・冷ましてあげますから・・・」

シャマルの只ならぬ気配を感じ取ったのか、飛影が何かを言おうとしている。だが、喉が掠れて声になっていない。シャマルはそんな彼に更なる愛しさを募らせながら、熱い息を吐いた。

「こんな形でごめんなさい、飛影さん・・・でも、無理なんです。私・・・私は、もうっ！」

謝罪の言葉と共に、シャルはそのまま飛影にぐっと近づいていく。そして、そのまま彼の体へとダイブしようと息を吸い込んで、

「もう・・・何なの、シャル？」

絶対零度よりも冷え切った声に、出掛かった動きを強制的に止められた。背中から一瞬にして汗が吹き出る。それは運動後の気持ちのいいものでなく、緊張感に晒されたときのそれだ。

「へえ~~~~~・・・シャルさんたら、人畜無害な顔してるのに意外だね~~~~・・・こういうことする人だったんだあ~~~~・・・」

「シャ、シャル、お前・・・！」

声が聞こえたほうに恐る恐る振り向く。そこにはフェイトを筆頭にして各々、様々な様相を呈した少女達が勢ぞろいしていた。しかしその表情に差異はあれど、目は一人たりとも笑っていない。

「ひっ!? フェ、フェイトちゃんになのはちゃん!? それにヴイータちゃんまで!」

「わ、私達もいます!」

「ここで伏兵なんて・・・くっ、見通しが甘かった!」

隊長陣に続き、いつの間にやらスターズ隊の二人も参戦している。

しかも、それだけでは終わらない。扉の外からも声が聞こえてきていた。

「お兄ちゃん！ 風邪って聞いたけど、大丈夫「はい、キャロちゃん
はこっちですよ。飛影のことは心配しないでいいですからね」え？

あ、あの、蔵馬さん？」

「兄さんっ、熱が出たって本当で「子供にはまだ早い！」わあっ、
ザフィーラっ、何するんですか！？」

ここに至って人口密度が急激に増してきた。怒りのオーラを解き
放つ三人の後ろから、出るわ出るわ。隊長から機動六課の新人まで
より取り見取りの大集合、集合写真を取れそうな勢いである。

シグナムと桑原が出張中なのは不幸中の幸いだったと言えよう。
いたらさらに手が付けられない。

「シャ、シャマルツ！ 随分と大人しくしてると思ったら、オメー
これを狙ってやがったな！？ ドサクサに紛れて何抜け駆けしよう
としてんだコノヤロー！！」

赤毛の少女がグラーファイゼンをぶんぶん振り回しながら、沸騰
した表情で怒髪天を突く。浮かべた涙と朱色に染まった頬がなんと
も可愛らしい。

というかヴィータちゃん。興奮していてほとんど分かってないと
はありますが、アナタのもかなりの大胆発言デスよ？

とはいえ、状況は結構切迫していた。明らかにヤバイ空気に恐れ
をなし、シャマルが青い顔で言い訳を開始する。

「ご、誤解よヴィータちゃんっ！　なのはちゃん達も落ち着いて！　これは・・・そう、医療的！　あくまで医療的な処置なの！　それが偶然こんな格好になってるだけで、他意は何も「ディバインバスター／サンダースマッシャー！！」きゃああああっ！？」

ワンアクションで結果は決まった。警告も威嚇もない、情け無用の殲滅射撃。白衣（悪意）の天使は一瞬にして外へと吹き飛び、部屋から姿を消した。アーメン。

「あっはっは、シャマルもご愁傷様やな」

「「「「「はやて（ちゃん）（さん）？」「」「」」」」」

と、其処に新たな人員が出現する。全員が首を傾げる中、はやては含み笑顔をしながら視線を動かす。そして、それがベッドの上に仰向けになる飛影に向けられた。

「いやー、蔵馬さんが喋ったのを偶然聞いてちよっと試してみたんやけど・・・飛影くんを動けなくさせるって、ごつつうえらい効き目やなあ。流石蔵馬さん謹製のアイテムや」

その台詞に何人かがハツとする。その表情は、何かを企んだ者のそれだ。裏を取るため、なのはは恐る恐る彼女に尋ねた。

「も、もしかして、紅茶に丸薬を入れたのは・・・」

「うん。私や」

それはもう楽しそうに言っただけ。あっけらかんと言いつつ部隊

長に、全員開いた口が塞がらない。はやてはカラカラと笑いながら、種明かしをするように告げた。

「ホントはな、みんなの為を思ってたんやで？　なのはちゃんもフェイトちゃんも、有給溜めるばっかで全然休まへんからな。実験がてら、一日ぐらい休んで欲しいと思っただけやったんや」

この上なく優しい表情で、集まった全員を見据えるはやて。台詞だけ聞けば、なんて部下を思いやる上司なのだろうかと感動しそうな内容であった。実験という言葉が酷く気になるが。

「けど、まさかなのはちゃん達やのうて、飛影くんにあたってまうなんて思わなかったなあ・・・そのことは悪いと思っとるけど・・・でも、いい機会ができたやんか。今日はこのまま療養してもいいんじゃない？」

「き、貴様・・・」

顔を真っ赤にしながら、飛影が唸る。まだ熱が抜けきっていないためいつもの彼のような迫力はないが、後々を考えると随分といい度胸であった。しかし、そんな時でも彼を放っておかないのが、彼女たちである。

「は、はやて・・・それはいくらなんでも・・・」

「うん。飛影くんが可哀相だよ・・・」

「はやての言うことも分かるし、私たちを思つての行動だっていうのは分かるけど、飛影がこうなっちゃったのは事故みたいなものなんだよ？　一日経てば治るって言っても、これじゃ辛いよ・・・お

願い、解除薬を使ってあげて」

熱で自由の利かない飛影を不憫に思ったのか、次々と援軍が現れる。非難するような目付きはないが、さすがにやりすぎだと思っ
ているようだ。

「ふうん・・・みんな優しいなあ・・・」

僅かに眉を寄せつつはやては唸る。だが、その顔からは余裕が消えていない。これ以上何をするつもりなのだろうか。

いつになく自信満々なはやての態度に訝しむ一同。全員分の視線を全身で受けつつ、はやてはもったいぶるような口調で告げた。

「けど良いんかなあ・・・これはチャンスやで？ それも今後は絶対ありえへんような、これ以上ないぐらいとびっきりのヤツや」

『チャンス？』

意味深な笑みと台詞を吐く部隊長に、なのは達は思わず聞き返した。ニヤニヤ笑顔を隠そうともしていない。そのまま、はやてはゆつくりと言葉を紡いでいく。

「考えてもみい。飛影くんは今自力で動くことも出来へんのだ？
せやから、何をするにも助けが必要になる。もちろん食事、睡眠、
その他諸々多岐に渡っての付きっ切りでや。なのはちゃんとかシャ
マルは、一度ぐらいいはコレ考えたやろ？」

はやての視線の先で、なのはといつの間にか戻ってきていたシャ
マルがギクツと身体を震わせた。フェイト達は虚を突かれたように

ハツとし、抜け駆けをしようとしていた二人を睨む。はやては「ん」と考え込むような姿勢をとった後、全員に視線を流した。

「それに病気の時って妙に優しくして欲しいもんやからな……人肌も恋しくなるし、普通にはありえないことも起きるかもしれない？　なにより、今の状況は特別イベントや。なら、普段よりも得られる好感ポイント高いんと違うか？」

空気が変わった。ざわりとした一瞬の気配の後、静寂が訪れる。そして、勢いよく名乗りを上げる者が一人。

「な、なら私が看病するっ！」

「あつ、ずりいぞなのは！　飛影の世話はあたしがやるんだっ！」

しゅたつと手を挙げたなのはに、ヴィータの鋭いツツコミ兼願望が飛ぶ。それを皮切りに、いたるところから声が上がった。

「だ、駄目ですっ、私にやらせて下さい！　こう見えても、お父さんのお世話とか得意でしたから！」

「いつも世話されてる側が何言ってるのよ！　あ、いや……べ、別に私が看病したいとかそういうんじゃないわよ！？　そ、その……アンタに任せといたらおに　飛影さんが可哀相だから……」

「わ、私は飛影のお世話なら何でもするよ！？　食事であーんとか、汗を拭くとかもちゃんと出来るから！　さ、寂しいなら、添い寝だつて抱き枕役だつてするしっ！」

「や、やるわねフェイトちゃん……でも私も負けられないわ！」

アマチュアには届かない医務官の底力、見せてあげますっ！」

解除薬発言は一体何処にいつてしまったのか、当事者の飛影そっちのけで言い合いを開始する少女達。狭い上に大穴が空いた医務室で、実に言いたい放題である。收拾がつかないとはこのことだった。

「あーあー、ほらほら喧嘩せんと。こういうことはもっと楽しくやらなあかんよ。仲良きことは美しきかな、しっかりと話し合いで決めるんや。形式は自由！ 一人に決めても、全員で世話すんのもより取り見取りやで！ ただし平和が第一やけどなあ。・フツッシ！」

「そうだな。平穩にはそれなりの犠牲が付き物だ。・・・」

「そうそう。もつと落ち着いて、平和的に決めるんが民主主義の・・
・って・・・へ？」

狸モードを全開にしていたはやてが、場の空気がいつの間にか変わっていることに首をかしげた。それまでのほんととしていた部屋の雰囲気、一気に張り詰めているような気がする。こめかみから一筋の汗を流しながら、ブリキ人形もかくやという動きではやては後ろを振り向いた。

「だ、大丈夫ですか、飛影さん？」

「ああ・・・生き返った気分だぜ・・・」

そこには心配そうな顔でふよふよ浮かぶリンフォース？と、上半身を起き上げて、顔は俯かせたまま噛み締めるように息を吐いている飛影がいた。その声には安堵の他に、言葉にできないほどの感

情が入り混じっている。一方のはやては、予想だになかった事態と、それによる恐怖と混乱でかなりテンパリ気味になっていた。

「な、なんでや！？ 解除薬は、私の机の上に・・・はっ！？」

その視線が浮かんだリインへ、正確にはその手元と延びる。彼女の右手には、小さめで透明なビニール袋が携えられていた。そしてその中には、どこかで見たような色と対になる青色の珠が数個入っていたのである。

「今回ばかりは礼を言っておく。一つ借りだ、白チビ助」

「リ、リインはチビじゃっ・・・ありますけど・・・でも、もつと感謝してくださいっ！そもそも、飛影さんはもう少し労わりの気持ちというものをですね」

悪態をつきながらも礼を口にする飛影に、リインは膨れっ面でお説教をしている。だがその表情には、飛影が元の戻ったことへの安堵感が多分に含まれていた。はやては身体を戦慄かせながら、自らのユニゾンデバイスを呆然と見つめる。

「ま、まさかリイン・・・私を裏切ったんか！？ 生みの親でもあり、まいすたでもあるこの私を！？」

「ご、ごめんなさいです、はやてちゃん。けど、大丈夫だと分かってても私、見ていられなかったのです・・・苦しんでる飛影さんを、リインは放ってなんておけなかったのです！」

目をウルウルさせながら一生懸命に叫ぶリイン？。一点の曇りもない純粹な優しさが全員の良心を酷く苛み、なのは達は気圧された

ように一歩後ずさった。

この場にいる誰もが、小さいながらも至高の輝きを放つ彼女に眩しさを感じる。その優しさに救われた飛影と、逆に追い詰められてしまったはやての表情の対照さが印象的であった。

「な、なんてことや・・・祝福の風が逆に吹いてしもうた！　こうなったら、三十六計逃げるに如かずや！！」

言うが早いか、脱兎の如くスタートダッシュを決めるはやて。いつもの彼女からは考えられないような素早い動きだ。フェイトですらも止める間もない、見事な逃亡アクションで一目散になのは達の間を駆け抜けていく。

まるで風になったかのような動きで彼女は出口にひた走った。そして、空け通しとなっていた医務室のドアをくぐろうとして、

「まあ待て」

視認できぬほどの速度で近寄って待ち構えていた飛影に、制服の襟首をむんずと掴まれていた。全速力の勢いを無理矢理殺され、はやては足を軽く宙に投げ出したままだずんと尻餅を付かされる。

「まさか・・・ここまでやっておいて逃げ出せるなどと・・・そんな愚かしいを考えていたわけではあるまいな？」

背後から想像を絶するほどの怒気が迸った。地獄の底から響いてくるような声に、身体が知らず震えだす。何が何でも逃げたいが、捕まってしまった以上、もはや彼女には逃げ場などなかった。下手をすればチビリそうになるほどの悪寒に耐えながら、はやては恐る

恐る顔を上げる。と、そこには、

「覚悟はできているのだろうか？・・・まあそれ以前に、まさか部隊長ともあろう人間が、ここまで来て無様な醜態を晒すはずがないか・・・殊勝な心がけた。見直したぞ、八神・・・」

怒りを通り越したように感情の見えない瞳と、こめかみにいくつもの青筋を浮き上がらせた処刑人が口元を吊り上げて笑っていた。

「祈りは済んだか・・・そろそろ懺悔の時間だ」

飛影の声が部屋の中に響き渡る。今いる場所ははやてがいつも勤務している執務室だ。無情にも下された処刑宣告に、はやては引き攣った顔で叫びを上げた。

「ま、待ってーな！ 私だって悪う思つとるんやから、流石にこれはやりすぎちゃう！？」

えらく愉悦に満ちた顔で刑の執行を告げる飛影に、はやては慌てながら待ったを掛ける。流石に顔は青くなり、まずいと思っているように半泣きあった。思っていなかったらよほどのKYが大物だが。

被告人、八神はやて他一名。その風体は先ほどと同じ通常の制服姿だ。だがそれ以外と、取っている体勢は明らかに異常であった。

体は拘束具で雁字搦めにされ、両足首に括り付けられた縄で天井から逆さ吊りされている。具体的なこととは割愛するが、きつく巻かれた縄はヴァイス秘蔵の本に載っていた縛り方をなのが実践した。

結果、ここにはちょっと文章的に載せられない様相を呈している。

申し訳程度にプランプランと揺れる姿は、部下には絶対に見せられない。これぞ『吊るされた女』であつた。『憐れ狸の末路』と言ひ換えてもよし。

「酷いわ飛影くん！ 女の子を無理矢理ロープで縛つて苛めるなんて、男としてサイテーやで！ 確かに逆さ吊りなんて古典的なトコとか、ちよつとマニアックな嗜好は飛影くんらし・・・あ、嘘や嘘！ だから、はよ下ろしてつて、なんで笑つてるん！？ あ、マズつ、頭がぼうつと・・・って、キヤアア！ スカート、スカートが捲れる！ 中が見えてまううつうつ！・・・」

宙吊りにされたまま、騒ぐ騒ぐ。きゃーきゃーわーわーと、部屋の総デシベル上昇に一役も二役もかつていた。あまりの騒がしいさに飛影のこめかみにビシツと青筋が走つたが、ここは我慢だ。これからもつと騒がしくなるのだから。

飛影が煩わしさを押さえ込みながら後ろを振り向くと、そこには二人の隊長と小さな副隊長、新人の少女二人が横一列に佇んでいた。

一人残らずきちつと整列する様はまるで軍隊であるが、軍隊のよくな正義じみた思想は皆無だ。彼女らを動かすのは怨念である。しかも、その全員が直立不動、視線は一点へ固定した状態だった。

客観的に見てもかなり怖い。飛影は口角を吊り上げると、彼女たちに向けて心底楽しげな口調で言い放つた。

「こいつらが今回の黒幕だ。如何様に痛めつけても一向にかまわん。サンドバックのように殴りつけるなり、紙切れのように引き裂くな

り、魔法の的にするなり好きにするがいい。何をしようともオレが許可する。クッククク……」

「不許可や っ！」

「な、なんで私まで〜!？」

はやての横から非難が上がる。そこには主人と同じような格好をしたシャマルが、半泣きで体をブンブン振っていた。私は悪くないのにつ、という風に無罪を全身でアピールしている。

が、世界というのは時に恐ろしいほど非情なのだ。

「元はといえば、シャマルさんが蔵馬さんから預かった薬の管理義務を怠ったせいだしね」

「うん。それに犯罪の未遂もあつたのは、さすがに見逃せないよ」

なのはとフェイトの親友コンビが、何だか感情の灯らない声で告げた。いや、感情がないというより、暴発しないように抑え付けているように見える。飛影が二人と意見を同じくするように言った。

「そういうことだ。分かったのなら、元凶の片棒を担いだ分際で喚くんじゃない。どう足掻こうが、貴様も同罪だ」

「で、でも……あふんっ!？ な、何かしらこの甘い痺れは……」

飛影が縄を引っ張った拍子に、シャマルがぴくんと体を揺らす。頬が少し赤いのは何故であろうか。飛影は不穏なものを感じ、少し引き気味になって後ずさった。

「何を喜んでいるんだコイツは……………」

「変態だな」

ヴォルケンリッターの母親的存在が晒す醜態に、付き合いの長いヴィータも引き気味だ。そして、若干シャマルから距離をとりながら、飛影が無言で突き出した親指を真下に向けた。

それが開始の合図だったのだろう、GOサインを出されたのは達は、幽鬼のような足取りで吊るされた生贄へと近づいていく。尋常じゃなくヤバイ雰囲気放つ彼女達に、はやてとシャマルが一際強く身体を揺らして叫んだ。

「イヤや ツ！ 私はリアクション芸人やないんや、まだ死にとおない！ なのはちゃんにフェイトちゃん、お願いや！同郷のよしみで助けてえな！ な？ な！？ ヴィータもスバル達も、ここは部隊長のお茶目ってことで一つお願いできへんか！？」

「私達も反省してるの！ ほら、このとおり！ だ、だから……笑って許してほし……って、何でデバイスを起動させてるの！？ ひっ！？ う、薄く笑うのはダメ！？ ああ、お願いよ！ 後生だから、謝るから許して、ねっ！？ 今回は、今回だけは見逃し……」

「「い、いやああああああ……………（あふううつ）」」

鶏の首を絞めたような、切なげな悲鳴が隊舎に響き渡る。悪は滅びた・・・何かに目覚めるような声も響いたが、気のせいだということにしておこう。それが、円滑な人間関係を作るうえでは重要なポイントである。

飛影はフンと鼻を鳴らすと部屋を後にした。彼女たちの悪戯のせいでとんだ一日になってしまったが、これで少しは懲りるだろう。反省するかどうかは別として、だが。

「あ、飛影さん！」

部屋を出てしばらく歩いていると、廊下の突き当たりからリインが空を飛んで近づいてきた。宙に漂いながら、立ち止まった飛影の前で停止する。

「あの、はやてちゃんとシヤマルは・・・」

「ああ。あのバカ共なら、今なのはやフェイトの『説教』を受けている頃だ。何、しばらくすれば少しはマシになって出てくるだろう」

「お説教、ですか・・・？ 私には何だかドカッっていう殴打音とか、バキッという感じの破碎音が聞こえてくるのですが・・・それに、少し建物が揺れているような気も・・・」

「錯覚だ。深く考えるな」

一切の迷いなく断言を口にする飛影に、リインは屈託のない表情で「そうですか」と納得した。こちらに向けられるのは、人を疑うことを知らないような笑顔だ。たまに悪ノリすることはあれど、基

本的に純粹だからであらう。

（八神の相方としては適任かもしれんな）

と、そんなふうを考えていた飛影は、目の前のリインが少しおかしいことに気づいた。何だかモジモジと落ちつかない様子である。訝し気に目を向けると、慌てたように視線を泳がせるがそれも一瞬であつた。彼女は大きく息を吸い、意を決したように口を開く。

「あ、あの飛影さん、お願いがあるのですが・・・」

その目は真剣だ。いつもほわほわとしている表情も、若干緊張で強張っている。飛影は、向けられた眼差しを皮肉ることもなくそのまま受け止めた。

「言ってみる」

「そ、そんなこと言わずに、聞くだけ聞いてほし・・・ほへ？」

「聞こえなかったのか？ 言えと言ったんだ」

あまりにも予想外の返答に、リインは言葉を失ってしまう。人が想像もしていなかった事態に遭遇したときの反応は間々あるが、大抵は目の前の現実を疑うものだ。

そして、素直なリインもその例に洩れなかったようである。心の底から驚いたというような顔で、彼女は探るような目を此方に向け、何故かファイティングポーズを決めた。

「ど、どうしたのですか飛影さん・・・いつもなら、言い終わる前

に『断る』ってバツサリ言うのに・・・はっ、も、もしやニセモノさんですか!？」

「・・・主と同じ運命を辿りたいか？」

凄みが増した飛影に、彼女は瞬時に首を左右に振る。言っていた意味はあまり理解できなかったが、よくないことだと己の直感が告げていた。というか、理解したときは最期のような気がする。

そんな、混乱しながらも一生懸命頭を捻るリインを見ていた飛影だったが、あまりにも進展しない状況に痺れを切らしたと見える。不機嫌そうに眉を寄せながらその『理由』を口にした。

「・・・八神の暴走だとはいえ、助けられたのは事実だ。今の貴様には借りがあるからな、不本意だが、一つだけなら言い分を聞いてやる・・・さっさと言え」

それだけ告げると、飛影は顔を背ける。つまりは、借りを作りっぱなしにしたくないということだ。聞かされたときには驚いたが、よくよく考えれば実に彼らしい考えである。

もつとも、リインにとって好都合には違いない。そのことに少し戸惑いながらも、彼女は先ほど口にかけていた言葉を漸く吐き出した。

「それなら・・・それなら私のことを、これから『リイン』って呼んでくださいませんか？ 皆さんそう呼んで下さりますし、私も飛影さんにはその名前で呼んでほしいです。それに飛影さんは機動六課の一員で、私にとっても大切な・・・な、仲間なんですから・・・」

恥ずかしげに頬を染めながらも、自らの内を真っ直ぐに口にするライン。飛影は彼女の台詞に僅かに目を見開いたが、すぐさま皮肉げな表情をその顔に貼り付かせる。そしてそのまま息を吐くと、飛影は意地が悪そうな笑みを見せた。

「フツ、その程度の事か・・・もっと有意義な命令にすればよかったと、すぐに後悔するだろうが・・・まあいいだろう。これより先、八神が何か不穏な動きをしたときは、すぐさまオレに言うことだ。分かったな、ライン」

「は、はいっ、了解ですっ！でも、きっと後悔はしないと思いますですよ？だって、これが私にとって一番有意義なことですから！」

「・・・フン」

本心からそう告げる彼女に、飛影は鼻を鳴らして背を向けた。ふよふよと周りを飛び回るラインは、念願が叶ったかのように嬉しそうな顔をしている。それは、飛影が先ほどの彼女の言葉を否定しなかったからかもしれない。

どちらにしても、今の彼女は今日一番の笑顔であった。

「えへへ・・・名前を呼ばれちゃいました・・・あと、いつか私とユニゾンもして下さいね」

「調子に乗るな」

「はひゃうっ！？い、痛いですよ飛影さん！！」

小生意気な妖精に一撃くれ、飛影はさっさと歩き出した。その後ろを殴られたリンが涙目で追いかけて来て、身体にまとわりつきながら回りくくると飛び回っている。延々と説教を垂れてくる彼女の言葉を聞き流しながら、飛影は足を速めた。

今日もまた騒がしい一日が終わる。東より日が昇り、西へと日が沈む。日々とはこれの繰り返しだ。

いつもと変わらない日常。いつもと変わらない機動六課。

だが、変わるものも有る。それは不機嫌そうにしながらも口元に僅かな笑顔を浮かべた飛影と、その後ろを笑顔で飛ぶ小さな少女が物語っていた。

・おまけ　　帰ってきた二人

「桑原・・・これは一体何がどうしたんだろうか？」

「さあなア・・・」

少し前に六課へと帰還した桑原とシグナムは、人気のまばらな廊下を歩いていた。いい時間なのにもかかわらず時折響き渡る轟音と

揺れる隊舎に、不思議そうに首を傾げている。

今日の報告をしようとはやての部隊長室へ行った時も、『取り込み中、開けるべからず』とか『Sound only』とか『ただいま猛省しています。エサをあげないで下さい』なんてわけの分からない張り紙がしてあったので、とりあえずは引き返してきたというわけだ。

「ん？ ああ、桑原くんにシグナムさん。今お帰りですか？」

と、横の廊下から優しくな声と共に蔵馬が現れた。労うような雰囲気を見せる彼に、桑原が手を挙げて応じる。すると、また隊舎がビリビリと揺れたような気がした。シグナムが人差し指を天井に向けながら、蔵馬に尋ねる。

「おい蔵馬。今日の夜は随分と騒がしいようだが、何かあったのか？」

「ああ、これですか？ 昼間にちょっとした騒動あって、その続きみたいなものだよ。心配はしないほうがいい」

蔵馬が僅かに苦笑を零し、肩を竦めながら告げる。シグナムは少し怪訝そうな顔をするものの、別段大したことはないということを態度から感じ取り口を噤んだ。桑原も旧来の友の言葉を疑う様子はない。見上げるようにしていた視線を水平に戻した。

「ふーん、でもま、別に騒がしいのはいつものことか。それにみんな楽しそうだ、とりあえず俺達は早くメシ食って来ようぜ。蔵馬もどうだ？」

「いいね。俺もまだだったし、せっかくだからご相伴にあずかろうかな。いいかい、シグナムさん？」

「ああ、かまわん。食事は大勢で食べた方が美味しいからな。それにしても今日は本当に忙しかったぞ。結局昼も食べ損ねているし、挨拶回りやらなんやらで休憩も碌にとっていない。随分と遅くなってしまったが、正直私も空腹だった」

ふつと息を吐いてシグナムは肩の力を抜く。タフさがうりの彼女も、正式な場で様々な人と会うのはさすがに疲れるようだ。それを今まで億尾に出さないあたりは流石と言えるが。

一方の桑原は、やれやれといった風に両手を挙げていた。大方予想出来ていたことだったのだろう、シグナムの言葉に褒めているような呆れているような笑みを見せる。

何気に気遣い上手な彼らしい微笑だ。兄貴スマイルと命名しておこう。

「何だよ、やつぱり腹減ってたんじゃないか。痩せ我慢しねえで、お偉いさんにそう言やあよかったのによ。シグナムの腹が鳴った時、奴さん笑ってたぞ？」

「へえ。そんなことが・・・」

ニヤニヤ笑う桑原に便乗し、蔵馬からも笑みが零れる。シグナムはそんな二人の反応にさっと頬を染めると、少し慌て気味に怒鳴った。

「う、うるさい！ 生きているんだから当たり前だろう！ それに、騎士には意地を張らねばならないときもあるのだ！ ほ、ほらっ、ぶつくさ言っていないでさっさと行くぞ！」

「そうだな。あー腹減った！」

二人は談笑しながら食堂の方へと歩き出した。書類仕事が苦手なシグナムは蔵馬や桑原に頼ることが多く、こうやってペアで仕事することが多い。デスクワーク関連などでは二人から教えられることも多く、報告書の内容も格段によくなった。逆に彼女の達筆な字には、蔵馬でさえも驚かされている。

尤も、パソコン関係の技能は全く進展していない。相変わらず我らが騎士シグナムはかな打ちしか出来ず、機械系との相性は最悪でいつもフリーズさせてしまふ。その度に桑原に爆笑され、真っ赤な顔で怒鳴っていたりすることが多いが。閑話休題。

蔵馬は歩き出した二つの背中に声をかけた。

「俺はもう少ししたら行くよ。それまでは二人で食べていてくれ」

「そうか、では先に行っているぞ」

「席取つとくからな、早く来いよー！」

振り返った二人は軽い調子で蔵馬に応じる。その姿が廊下の端に消えると、蔵馬は反対側に歩き出した。

「ああ、わかったよ。・・・さて、そろそろ夜も遅くなってきたし、はやてちゃんとシャルさんを助けてあげに行かないとな」

さすがにフォローを入れてあげないと、明日の業務に差し障りが出る。二人をどうやってサルベージするか考えながら、蔵馬は上階への階段を上り始めた。

外伝を書いていて、思ったことがあります。それはオチをつけるのがとても難しいということです。

今回は綺麗にスッパリとまとめようと思っていたのですが、書いているとなかなか終わらせられず、何とこの小説はじまって以来の記録、約一万八千字という大作となつてしまいました。内容もかなり力オスな感じになつてしまい、作者は頭を抱えるばかりです。

ここで一つお知らせなのですが、このたび小説の文章における間を一行から二行へと変更し、その作業を最近やつておりました。理由は携帯からだると二行空きは非常に見にくく、改善してくれないだろうかという要望があつたためです。

そこまで気が回らなかったこと、そして作業によって更新が遅れ致しましたことをこの場で謝罪いたします。本当にすみませんでした。

と、後書きらしきものを書き綴つたわけですが、いかがでしたか？

まだまだ文章や構成も甘いかと思いますが、よろしければこれより先もお付き合い頂きたく思います。

それでは再見！
ツアイツエン

第二十三話 嫉妬とデート 嵐の前の静けさ（前書き）

よ、ようやく第二十三話の完成です・・・

お待たせしてしまつて申し訳ありません・・・今回は少しオリジナルが混じった展開となります。

一週間以上空いてしまいましたが、どうぞご覧あれ！！

第二十三話 嫉妬とデート 嵐の前の静けさ

〳 拝啓 飛影様 〳

この手紙を目にしてくれていることを本当に嬉しく思います。お久しぶりです、地球でお会いした月村すずかです。

一ヶ月ほど前に会ったつきりですが、少し思い立ってこの手紙を書かせていただくことにしました。

最近はだんだんと暑さが増してきて、汗も滲むようになってきました。この時期、飛影さんはいかがお過ごしでしょうか？

私はアリサちゃんと一緒に大学生活を楽しんでいますよ。アリサちゃんたら、今度会ったときは飛影さんをぎやふんと言わせてやるなんて言いながら、なんだか身体を鍛えたり勉強したりしてます。また来たときはお相手してあげてくださいね。

それはそれとして、今回このお手紙を書かせていただいた理由がもう一つあります。それは私が飛影さんへ贈ったスカーフの件で、少し手違いをしてしまったからなんです。

私ったらうつかりしていて、この前は冬用のを渡してしまっていたので、この手紙を書くのにちょうどいいと思い、これからの季節で蒸れて熱くならないよう、同じ規格で夏用の涼しいタイプのを贈らせていただきました。

あ、もちろん飛影さんがお気に召さなければ如何様にしてください。でも構いません。けど、もし少しでも気に入ったのなら着けてくれると嬉しいです。感想とか要望があつたら、いつでもご連絡下さい。その通りにしますから。

長々と失礼いたしました。最後まで読んでくださって本当にありがとうございます。機会があればまた遊びに来て下さい。いつでも歓迎いたします。

そのときは月村家とアリサちゃんどで盛大に御もてなしさせていただきますから、覚悟しておいてくださいね？

それでは、またお会いできることを願っています。

すずかより

「アイツは仕立て屋か？ オレにこんなものを渡しても何の得にもならんだろうに、一体どういうつもりだ・・・」

ファンシーな模様柄の手紙をデスクに置くと、飛影はシステムチェアに浅く腰掛けて机に足を放り出す。身体に押されてギシギシと鳴る背もたれを感じながら、飛影は紫がかった髪を持つ彼女を思い浮かべていた。

横にある窓へと目をやり、さらに下へと視線を落とす。その先、机の隅におかれている上品な手触りのシルクの布が視界に舞い込ん

できた。どことなく自分の『いと』に似た雰囲気を持つあの少女、すずかの幻影が頭によぎる。

同時にあの時のことも思い出される。別れ際、不意打ち気味におでこへと押し付けられた、彼女の

「ッ！ イライラする・・・」

飛影は額へと伸ばしかけた手を引っ込めて頭を掻き毟る。あんなことをされたのは初めてだった。予想外すぎて、気が付いたときはなのは達に詰め寄られ、その後ゆっくりと考える時間もなかった。

とはいえ、いくら考えても人間の感情の機微など分かりようもない。そこで答えに窮した飛影が後に蔵馬に聞いたところ、

『さあ・・・正直わかりませんね。親愛の印ともとれますし、地域によつては普通に挨拶表現の一種、他にもいくつか意味はあります。ですがどれにおいても、親しくするつもりのない相手には行わないとは思いますよ？』

などと意味深な笑みを浮かべながら曖昧な答えを返してきたので、飛影は舌打ちしてその場を去ってしまった。あまりにも回りくどい言い方に嫌気が差したためだ。絶対に分かっているだろうに、悪趣味にも程がある。

となれば自分で考えるしかない。飛影は考察の末、家族以外で自分と同じような『存在』に近さを感じているのかもしれないと、当りを付けていた。妖怪の混血ゆえに人間として生きる傍ら、妖怪の仲間も欲しいのだろう、と。

（いい迷惑だ……）

飛影はすずかの幻影を頭の隅へと追いやりながら内心毒づく。初めて会ったとはいえ近い存在に親しくしたいという気持ちは分らないでもないが、動機が不純だろうと彼は勝手に結論を出していた。

しかし、さすがは乙女心を解さない飛影である。着眼点は『近さ』という点では悪くないが、捉えている本質が全く違うところが彼の性質を存分に物語っていた。そのために、すずかが何故蔵馬でなく自分へと近づこうとしているのか、という疑問には到達していない。

一世一代のアクションを起こした乙女にとっては、かなり可哀相な事態だった。

自分が盛大な勘違いをしているとも知らず、飛影は溜息を吐く。一段と重い雰囲気を自ら放出し始め、ストレスだけが募っていくばかりである。だがそのとき、シュツという機械的な音と共に部屋の自動ドアが開いた。

「飛影、ここにい」「部屋に入るなどは言わんが、ノックはしろと言ったはずだ！」「ひゃっ！？」「ご、ごめん飛影……」

飛影の怒声に女性はびくつとしながら数歩下がった。部屋に入ってきたのは、流れるような金の長髪に美しい相貌と深紅の瞳、そして最高レベルのブラストバディの持ち主。六課が誇る三大美少女の一角、フェイト・Ｔ・ハラオウンである。

思い切り怒鳴られたフェイトは、すごすごと扉の向こうへと消えた。ご丁寧にも一度部屋を出てちゃんとノックしてから、改めて飛影の部屋へと足を踏み入れる。そのままススッとそばに寄ると、

彼のベッドに腰掛けた。近頃容認されつつあるフェイトの定置である。

飛影は改めて彼女の方を見やった。なにやら雰囲気が違うと思ったら、彼女は珍しく私服だ。薄く化粧もしているようで、少し大人びた表情となっている。だが、その辺りに疎い飛影はまったく気づかず、その容姿に対して何の言及もしない。

はやて辺りが見たら、「ちったあ空気読まんかい！」とツツコミを入れそうな反応だった。

「え、えっと・・・」

フェイトはベッドに座ったまま、もじもじと身体を揺らした。しばらくそんなふうに着かない様子であったが、何かを決めたように頷くと飛影を正面に見据える。そのまま、僅かな真剣さを含んだ表情で口を開いた。

「あ、あのね飛影。「断る」今日は私もオフだから、もし用事があったら一緒に・・・って、まだ何も言っていないよ!？」

用件も言い終わらぬうちにぱつぱりと切られたフェイトは、出鼻を挫かれ思わずノリツツコミを入れた。ボケが主流の彼女には随分と珍しいシーンだ。ついでに、先ほどまで漂っていた微シリアスな空気が二秒でぶち壊しである。

しかし、フェイトはめげなかった。十秒ほどで気持ちを立て直すと、もう一度飛影を捉え、今度はかなりの距離まで接近する。意外と強情であるようだ。

「飛影、この世界に来てから一度も街に出てないでしょ？ それに、今日は教導もティアナの霊気、だっけ？・・・その訓練もお休みなんだし、一度自分の目で見てみる方がいろいろ発見が「邪眼で視えている。必要ない」あうう・・・」

再び撃沈した。取り付く島もない。

確かにフェイトが言うとおり飛影は暇だった。何かにつけて一緒にいたがる六課のメンバーも今日は仕事や遊びで席を外しており、飛影はどうやって時間を潰そうか考えていたぐらいだ。しかし、それは自分の時間を割いていいという理由にはならない。詰まるところ、天邪鬼なのであるからして。

蛇足だが、先のフェイトの言葉にあった通り、ティアナはあの日から霊気の修行を始めていた。第二段階へと進んだ魔法の訓練もあるので進みは芳しくないが、それでも暇を見つけては新しい力を伸ばすために努力している。いつもは蔵馬や桑原、たまに自分などが見ているのだが、今日の午後はそれもお休みだった。閑話休題。

話を戻すことにしよう。飛影はフェイトの誘いも一顧だにせず、フーンとした態度を張り続けている。だが、ツンデレの面目躍如のごとく顔を背ける飛影にフェイトが挫折かけた時、彼女の目に机に置かれた白いスカーフが飛び込んできた。

僅かだが、いつもの飛影のものとは違うように感じる。その横には可愛らしい便箋も見えた。

「ねえ飛影・・・そのスカーフって・・・」

「ん？ ああ、いつか地球で会った月村とかいう女が、手紙付きで

送ってきた。夏用などと言って、この前に加えてわざわざ新しいものをな。おまけにまた会いたいなどと……わけがわからん、一体なんのつもり」

言いながらフェイトを見た飛影の声が、言葉の途中で止まった。いや、止められたと言っべきか。

「飛影……すずかから貰ったんだ……プレゼント……」

いつの間にか至近に来ていたフェイトが、俯き加減で言葉を紡いでいた。まるで地獄の底からやってきたような負のオーラを放出する彼女に、飛影は言いようのない何かを感じてたじろいだ。何故かは知らないが、唐突に幽助の女のことを思い出す。

だが、そうこうしているうちにフェイトはさらに接近してきていた。そして座っていた飛影に無言で近づき、女性的な魅力豊かな自分の胸に彼の右腕をぐわしと抱え込む。

いつもの彼女からは考えられない力強さだった。振りほどこうとした飛影だが、それだと何か良くない結末が待っている予感がして、らしくもないたたらを踏む。長い前髪により表情は計り知れないが、何だか見てはいけないような気がした。

「私達も行くよ、飛影……」

「何？ 一体どこへ行くつもりで行くの！ 早く！」お、おいフェイト、貴様何を勝手に……！」

見たこともないほどの気迫を滲ませる金髪少女に、飛影は腕をがっつちりとホールドされたままドナドナよろしく連行されていく。そ

の後六課を出るまで数人に見られ、飛影は答えを求めるよう目をや
ったが、二人（鬼気迫った顔のフェイト）に声を掛ける勇者はいな
い。

こうして、飛影は凄まじい何かを宿したフェイトに引き摺られ、
半強制的に街まで連れ出されてしまうのだった。

- Side change -

ビルが各所に聳え立つクラナガンの街は、この世界でもかなりの
規模を誇る大都市である。都市の供給を支えるために様々な人々が
行き交い、物が集まってくる。

そしてそれらの一つ、揃わないものはないというキャッチコピー
を掲げたショッピングストリートの一角。洒落たカフェテラスにそ
の姿はあった。

「さて、言い分があるなら聞かせてもらおう」

「え、えっと、その・・・ごめんなさい・・・」

パラソルで覆われた丸テーブルで、互いに向かい合うようにして
二人の男女が座っている。一人はいつもの黒いコートではなく、白
いTシャツに黒い短めのベストと同色のジーンズを着こなし、つい
でに服に付いてきた銀色のブレスレットをつけた六課における民間
協力者、飛影。服は近くの洋服店でフェイトが見立てて調達し、元

の服は足元の袋に入れてある。

そしてもう一人は、白いブラウスに袖が二の腕ぐらいまでの黒ジヤケット、さらに装飾用のチェーンのついた黒ミニのプリーツスカートとそれに合わせたローヒールを履いた、若き時空管理局執務官、フェイト・Ｔ・ハラオウン。お互い黒を基調とした服を着た二人が、テーブルを挟んで向き合っていた。

その上には二人分のフレッシュジュースとアイスコーヒーが乗っかっている。それぞれフェイトと飛影が頼んだものだが、お互いにまだ一口もつけていない。五分ほど前にこれを持ってきたウェイトレスも、その雰囲気を感じ取ったのか早々に引っ込んでいた。

「お、怒ってる・・・よね・・・？」

「そうでないように見えるのか？」

剣呑さしかない言葉に、さらに小さくなるフェイト。その様子を見た周囲の男性陣から、凄まじい殺気が飛影に向けられた。

だが、その悉くを一睨みで薙ぎ払う。一気に氷点下まで冷え込んだ空気に恐れをなし、店から飛び出ていく者も何人かいた。そのことに、フェイトは遠目にする店員にペコペコ頭を下げる。

彼女は这个世界を牛耳る管理局においても、トップクラスの美貌を持つ少女だ。ファンが巨大な派閥を作る三大美少女（非公式）の一角に数えられ、フリーではあるが、周囲から高嶺の花として認識されている。ちなみにその構成員は彼女となのは、はやての三人だ。規模は小さいが、他にはヴォルケンリッターの女性陣もある。

ファンクラブの人数は他の二人とほぼ同数だ。そしてフェイトに
関して言えば、その信奉者の大半が掲げる彼女のチャームポイント
は、ずばりギャップであった。

世間的な方面から見ても、フェイトは隙のない美人とされている。
少なくともテレビや雑誌など、およそ一般的な情報媒体で紹介され
る限りではそうだ。

さらには、常軌を逸した彼女のダイナマイトバディも理由の一つ
であった。爆発したことはないが、爆発すれば大惨事だ。エリオが
心配になる。主に嗅覚部の出血的な意味で。

以上の理由から、民衆が想像する方向が偏っているという事実が
存在する。つまりは、超完璧なキャリアウーマンを地で見ている
ような見方をされることが多いのだ。

だが、実際は全くといっていいほど違う。何もないとところで唐突
にコケたり、ナチュラルに局内で迷子になってオロオロしていたり、
クールビューティーだと思っていたら書類の受け渡しなどで真っ直
ぐに微笑まれたりと、その差異は大きい。いや、大きすぎる。

とまあ挙げていけばキリが無いが、要は元々の彼女の外面から発
生するイメージと本質との間にある、計り知れない溝が原因である。
そしてその反転作用が、そのケのある男性陣の精神的急所にクリテ
ィカルヒットするというわけだ。

即ち『雲の上にいるような絶世の美女』から、『守ってあげたい
女の子』へとクラスチェンジを遂げるわけである。あとは彼女の天
然な性格も拍車を掛けているが、今は置いておこう。

そして、その立ち位置もまた極端と言えた。フェイト自身は他の二名より無自覚で、男に対して無防備もいいところであるが、周囲のガードが別格なのだ。

お近づきになりたいと思いつつも、彼女の身内兼提督で彼女を何かと気にかけているクロノ・ハラウンや管理局の総務統括官で義母のリンディ・ハラウンなどを恐れて、ほとんどが人知れず涙を呑むしかない。

だが、彼女自らのお誘いとくれば、これ以上ないほどの大義名分が出来上がるのだ。そんなものを目の前にぶら下げられれば、九割九分の男は一も二もなく首を縦に振ること間違いなしといえよう。ただ残念なことに、彼女が誘いたいと思っている相手は残りの一分にあたるのであるが。

足と腕を組んだ状態で、飛影はフェイトを睨んだ。フェイトはその視線にさらに体を縮ませる。男女が一組、だが明らかにデート特有の甘い雰囲気とは懸け離れていた。

例えるなら、取り調べ室で向かい合う刑事と被疑者のような空気に近い。置かれているのがカツ井かドリンクかの違いだ。

「オレは必要ないと言ったはずだ。何故連れてきた」

飛影は不機嫌を隠すこともせず、ストレートに言った。返答に困ってしまい、フェイトは今朝のことを思い出す。

朝、フェイトは完成させた書類を手に出勤した。この仕事の期限はまだ先だったが、早く済ませたほうがいいと思い、オフの日に前倒しして終わらせたのである。

フェイト自身はよかれと思ってやったことだった。だが、それを聞いたはやては肩を震わせ、

『フェイトちゃん。私な、一つ言いたいことがあんなん・・・いい加減、働きすぎやあ！休みを何だと思ってるんかあ　　！』

狸が吠えた。彼女の反応に戸惑うフェイトを無視し、はやては部隊長権限で強制的に休みを取らせたのである。

無論フェイトは納得しなかった。真面目な性格だ、はやての態度が取り付く島もなかったとはいえ、自分だけ休むなんて気が引けたからだろう。少し魅力的に感じながらも、簡単には引かなかった。

だがはじめは渋い顔をしていたフェイトも、しばらくしてこれがチャンスだとはやてに言い含められ、気づけばその提案を呑んでいた。「楽な誘導尋問やった」とははやての弁である。なのはとの協定はこの時点で頭からトんでいるが、今は横へ置いておくとしよう。

そして飛影を街に誘うため、彼の部屋に行ったのである。気合を入れ、それなりのおめかしもして。

ここで一つ知っておいてもらいたいのだが、彼女とて最初からそのつもりだったわけではない。フェイトとしては、飛影の参加は『できれば』であり、断られればもちろん引き下がるつもりだった。彼女の性格的にも妥当な線だ。

だが、飛影のテーブルに乗っていたスカーフを見てすずかの話聞いた途端、頭がカツと熱くなり、気づけば彼を乗せた車をぶつとばして街に来ていたのである。

そして服屋巡りに始まり、ウィンドウショッピングからボウリング、装飾品観賞までフェイトはそれこそ引つ張り回すがごとく、そこから中に飛影を連れまわしていた。

だが、休憩がてら入ったカフェでようやく頭が冷えたのか、突如としてオロオロし出した拳句にこの始末、というわけである。

穴があつたら是が非でも入りたいだろう。というか、今にも自分で掘りはじめそうだ。

そんなどんよりオーラを放出していたフェイトだったが、流石にこのままではいけないと思つたらしい。窺うような視線を向けた後、俯き気味のまま口を開いた。

「ごめん・・・自分でもよく分からないんだ。はじめは誘えたらいいなつて思つてただけだったのに、飛影の話を聞いてたらなんだか絶対に連れて行くんだつて考えちゃつて・・・それで飛影の都合も考えないで好き勝手やつて・・・本当にごめんなさい。でも、どうしても飛影と一緒に来たかつたから・・・」

必死に伝えようとする声がだんだんと小さくなる。フェイト自身も自分の行動に戸惑っているのか、その口調や言い分は曖昧だ。

飛影はしばらくそんな彼女を眺めていたが、何かを諦めたかのように短く息を吐いた。半眼になりながらフェイトを見据える。

「身勝手この上ないな」

「うっ！」

「強制連行とは、執務官とやらは随分と強引な手を使つらしい」

「はうつ！？」

「おまけにガキの理屈か。キャロやエリオの方がよっぽど利口だ」

「うぐうつ！？・・・ひ、ひどいよ飛影・・・」

飛影の嫌味がトストスとフェイトの胸に刺さる。自分で思っていたとはいえストレート言われるのは堪えたのか、フェイトはテーブルにぐてーっと突っ伏した。飛影はそれを見ると、少し気が晴れたように息を吐き、口を開く。

「だが、退屈はせんで済んだ。人間の街とやらは邪眼で見えて知っていたが、やはりオレ達の世界とは違うようだからな。それに、お前の慌てる様はいい暇つぶしだったぜ」

クツクツと飛影が笑う。フェイトは顔を起こし、恨みがましい表情で拗ねたように呟いた。

「・・・うつ。今日の飛影意地悪だ。満足してるんなら、私に当たらなくてもよかったはずだよ・・・」

「フン、オレは別に容認したわけじゃない。不満を持っていたのは事実なんだ、勝手に連れてきたお前の責任を押し付けるな。これでもかなり譲歩している。オレを振り回した割には幸運だと思え」

そう言い、飛影はようやくコーヒーに口をつけた。フェイトも少し慌てながらそれにならう。ジュースは氷が半分ほど溶けて味が薄

まっていた。何の変哲もない、どこにでもありそうな味。だが、フェイトには今までで一番おいしく感じた。

対面の彼は優雅にコーヒーを啜っている。この周囲にいる人たちも、誰も彼が妖怪だなんて思わないだろう。だから、

「ねえ、飛影……人って何なのかな？」

その問いを。自分にとっての根幹を成す重要な問いを彼にかけていた。飛影は飲んでいたコーヒーから口を離し、切れ長の瞳でフェイトを見つめる。

「問答に興味はない。今度は何だ」

いきなり何を言い出すかと思えば、とても言いたそうな眼差しを飛影はフェイトに向けて放る。フェイトは少し寂しげな笑顔を見せた後、一呼吸を置きながら言った。

「……例えばだよ？人によって作られた人間は人間じゃないのかな。他人の複製で、他人の記憶を持つ人は一体誰なのかな……」

コピーとかでしかないその人の替わり……基として作られたのにその本人じゃない人間は……本当に必要なのかな……？」

搾り出すように告げるフェイトを、飛影は黙って見据える。フェイトの声はだんだんと小さくなり、最後は呟くようなものに変わっていた。

言葉を紡ぎ終わると、フェイトは何かを堪えるように俯いて黙ってしまふ。飛影の反応に意識を集中し、一見すれば怖がっている感じにも見える。そんな彼女に向け、飛影はあからさまな呆れ声で息

を吐いた。

「人間の定義などオレは知らん。知っていたところで何の興味もない。お前の言いたい事はオレには分かりかねるが、白黒はつきりつけたいなら、そんなものは自分で勝手に決める」

「自分、で・・・？」

思いもよらぬ飛影の言葉に、フェイトは思わず鸚鵡返しに聞き返した。ポケットに手をつ突っ込んだまま、淡々とした声で彼は述べる。

「見ず知らずの奴から好き勝手に言われる筋合いはない。どうあるうが、人として生きるならそいつは人間だ。そもそも、人間を複製すれば人間になるのは当たり前だろうが。少しばかり特殊だろうと、魂を売らん限りは人は人であり続ける。それとも生きるのかどうか、必要かどうかなどを決めるのに、一々他人の指図を受けるのかお前は」

フェイトはそれに対して首を振った。確かにかつては記憶媒体でしかなかったこの身体も、今は自分の意志で全てを決めている。その意を伝えると、飛影は一度フェイトを見据え、何かを考えるように腕を組んで再び目を閉じた。

「ならそんな些事など放っておけ。さっきお前は作られた人間がどうとか言ったが、人だろうがそうでなかるうが、コピーだろうがなんだろうが、オレにとってはどれも同じだ。そいつを認めるか、気に入らんかの違いでしかない。分かったらこれ以上くだらんことに頭を使わせるな。時間の無駄だ」

言葉終わりに、飛影はコーヒーで舌を濡らす。彼は気にも留めて

いないようだが、フェイトは胸に抱えていた重石がずっと消えていくのを感じていた。

（・・・やっぱり飛影はすごいよ・・・こんなに簡単に、私を救ってくれるんだから・・・）

高鳴るように鼓動する胸にそっと手を置く。トクントクンという音が、フェイトの頬を朱色に染めた。

飛影はいつでも厳しい。自分にも、そして他人にも、一切の妥協や甘えを許さない。故にだろうが、岐路に立たされたとき、彼は常に厳しさに満ちた道ばかりを選ぶのだ。まるで自分を痛めつけるが如きその人生は、常人などからすれば悲鳴を上げそうな生き方である。

だから、飛影は優しい言葉など決して掛けたりはしない。紡がれる声色は冷たく、何も飾ることのない辛辣な台詞ばかりだ。初見でいい印象を持つ者のほうが少ないといえる。

だが彼のことを考え続け、そして見つめ続けてきたフェイトには、ぶっきらぼうながらも相手を気遣う慈愛に溢れているのがわかった。飛影が本当にどうでもいいと思っているのなら、こうやって自分の意見を言ったりなどしない。気の置けない相手であるならば、何も言わず無視するのが彼であるからだ。

すごいと思う。フェイトをはじめ、仲間みんなのことを真剣に考えているからこそ、彼は怒ったりするし、厳しいこともはっきりと言ってくれる。単に優しいのではなく、苛烈極まる厳しさを以って全員が道を誤らぬように諭してくれる。

それが、彼の『優しさ』なのだ。好かれるために優しくするのはなく、嫌われてもいいから相手のことを思い、言葉と行動を以ってその先を示す。思っただけでもなかなか出来ることではない。

だからだろうか。心が芯から温かくなるような、本物の気持ちを彼の言葉から感じるのだ。突き放すような、しかしどこか遠くから見守っていてくれるような、不思議な安らぎを私にくれる。この八年の間も、そんな彼のことをいつも心のどこかで気にしている私がいた。

出会った時の印象がすごく強くて。

言葉と声と、何よりもその瞳が忘れられなくて。

傍にはいなかったのに、いつの間にかだんだん惹かれて行って・・。

（好きに・・なっちゃったんだろうな）

と、今は絶対に言えない言葉を浮かべ、フェイトは苦笑した。この気持ちを伝えるだけの勇氣はまだ自分にはない。ならせめて、今はまだ口にできない言葉の代わりに、自らの精一杯を言葉に託そう。何も飾り気が無くても。捻くれた彼の言葉の中にあるものと同じ、どこまでも真っ直ぐな気持ちを。

「
ありがとう、飛影」

「感謝されるようなことを言った覚えはない」

「ふふ、そうだね。でもこれは言うべき……うつん、私が言いたかったことなの。だから言わせて……飛影、本当にありがとう」

「……フン。可笑しなヤツだ」

鼻を鳴らすと、再び飛影はそっぽを向いてしまった。だが、フェイトは幸せそうな表情を零す。

彼の声をもっと聞きたい。彼の横顔をもっと眺めていたい。もっと彼の近くにいきたい。フェイトはこのまま時間が止まればいいと思っただ。

だが、そんな淡い思いを砕くように唐突な電子音が鳴り響いた。慌てて回線を開くと、全体通信がバルディッシュを介して伝えられる。そしてその通信はキャロの声で、

『こちらライトニング4、緊急事態につき現場状況を報告します！』

穏やかな時間が終わったことを告げた。

第二十三話 嫉妬とデート 〵 嵐の前の静けさ（後書き）

しよ、小説を書く時間が取れない・・・

いつもの日課である皆さんの小説を拝見するまでにはいいんですよ。問題はその後なんです。さあ書こうって思うと、その時に限って母や父からちよつと手伝ってーって呼ばれてー（強制連行されて）しまうんですもの！

しかもそのまま二丁三時間近く拘束されたりするので明らかにちよつとじゃないし！ 終わったときには文章書く気力が削がれてるし！ 嗚呼、なんだこの悪循環の無限ループは！

さて、今回は題名通り、飛影が初デート（半分拉致）を致しました。しかし、嫉妬とか思いつめた女の子って怖いですよね・・・ヤンデレとかひぐ○しとか然り。鉈持ってたらりと腕下げられた日にや、間違いなく絶叫もんですよ・・・

ああ、なのはさんが心配だ！ 砲撃魔法はパンチングゲームじゃないんですから、嫉妬とかストレス解消目的で撃っちゃいけませんよね。

なのは「撃たせてるのは・・・誰なのかな・・・？」

うわああああ！？ なのはさん！ しかもデスナノハー形態！？ い、いや、沸いて出たのならすみません！ ホントのことでも言うていいことと悪いことがありました！ ホントにすいません！

なのは「謝る内容まですごく腹立たしいけど・・・許してあげな

くもないの。その代わり一つお願いなの……」

何なりと！

なのは「もっと出番と、飛影くんと絡みが欲しいの。物理的なのも含めて」

あ、それはムリですね。極めて繊細かつ、大人の事情なので。キャラには超えられない壁があるのです。

なのは「フッフ……なら滅殺、なの……！」

うおおお、仕方ないことなのにい！　そもそも管理局がそんなこととしていいと思って……ぎいやあああああ！！

リン」と、いうわけで作者さんが気絶してしまったので、今回はこれで終わりということらしいです。それではまた読んでください、^{つあいっせん}再見です！「

第二十四話 二つの出会い 旧き光と慈しみの雪（前書き）

遅くなりました。二十四話です。

今回はなんと新キャラが登場です！ なんとなくタイトルからわかるやも知れませんが、ご確認はどうぞ以下の文章で！

それとあとがきで重要なお知らせがありますので、ご覧頂きたく思います。あまりいいお知らせではないのですが・・・

では、スタートです！

第二十四話 二つの出会い 旧き光と慈しみの雪

- Side Teiana & Subaru -

「うーん、やっぱりこのアイスはおいしいなー！」

「ほらほらこぼれてるわよ、ったく・・・」

目をハートにしながら、よだれを垂らすスバルに呆れた声が響いた。声の主は言うまでもなく、ティアナ。今日は教導がお休みなため、二人してクラナガンに来ている。

五段重ねにしたアイスを大口を開けて頬張るスバルの横で、ティアナがハンカチを取り出してその口元を拭いていた。アイスを目にするるとこの娘は目の色を変える。それはもう壮絶にだ。

自分がついていなければ、久しぶりのアイ스에今頃服をベタベタにしているだろう。食べ方が女の子していない、というか軽く幼児化しているところも頭が痛い。

「はふはふ・・・むぐつ・・・ねえティア、蔵馬さんとかカズ兄との訓練の成果出てる？」

スバルがアイスを口一杯で頬張りながら尋ねてくる。ちなみに力

ズ兄とは桑原のことで、スバルは彼と馬が合い、いつしかそう呼ぶようになった。本物の兄妹のような二人だが、六課の全員が似たもの同士だと思っている。

どこが似ているかは敢えて言わない。スバルの名誉に関わるので。

「ふ？　む・・・ごつくん、まあぼちぼちね。浦飯さんの夢が終わってから、蔵馬さんとかにも協力してもらっているいろいろやってるけど、時間もあまりとれてないし、とれたとしても魔法とおんなじでそうすぐに結果は出ないわよ。和真さんはこれでも相当筋がいいって言ってたけど、お世辞かも」

そう言っていると、ティアナは右手をアイスから離して広げた。人差し指と中指の先に青い光が灯る。スバルはおぼろげに光るティアナの指先を興味深そうな表情で見つめた。

「靈気の弾丸、『靈丸』だっけ？　記憶だっけってんだけど、浦飯さんの靈丸はすごかったなー。ティアもあれができれば、SSランクオーバーの砲撃魔導師だって夢じゃないよ？」

「簡単に言ってくれるわね・・・でも靈丸には弱点があるわ。浦飯さんも一日四発しか撃てなかったらしいし、私はまだ二発しか撃てない。連射は止めるって言われてる上に、射撃魔法みたく数頼みにできないのも痛いところね」

ティアナはそう言って苦笑いを見せた。

そう。センターガードの仕事は状況を的確に分析、かつリアルタイムで判断を下しながら、射撃系なら弾幕や迎撃を、砲撃系ならでかいのを一発撃って周りを支援するポジション。つまりは火力が全

てなのである。

確かにデバイスがなくとも使用でき、瞬時に十全の力を発揮できる霊丸は奇襲や不意打ちには最適であるが、弾数が著しく限られ、連射もきかないというデメリットはあまりにも大きい。

それにティアナのそれは、決定打にするにはまだまだ威力不足もいいところなのだ。だが、その表情に卑屈な色はもはやない。ふつと息を吐きながら手を振って光を消すと、アイスがつつく相方に向かって笑みを浮かべた。

「ま、でも自分のペースでやるわよ。飛影さんとなのはさんに教えられたこともあるし、やっと見つけた『自分の力』だから」

「ティア……うん。私も応援するよ！一緒に頑張ろ！」

スバルがガッツポーズを決めながら人懐っこい笑みを見せた。お互いに先を見据え、二人は頷いて微笑み合う。だが、そんな二人に水を差すように影が落ちた。

「ねえねえ君ら、ちょっといい？」

見上げると三人組の男がいた。ラフな格好をして、なんだか軽そうな印象を受ける。

「ん？ 私達？」

きょとんとした表情で自分を指差すスバルに男達が頷いた。ティアナは嫌な予感がしたが、まだ兆候なのでそのまま静観する

「そ。君ら二人だけでしょ？　よかつたら俺たちと遊ばない？　結構いいとこ知ってたんだ」

「そうそう。二人とも可愛いからさ、女の子だけで遊ぶなんて勿体ないよ」

「なんならメシも奢るし。ね、ちょっとだけ！」

必要もないほど明らかなナンパだった。絶滅したと思っていたが、こういった者達が消えることはないようだ。スバルもようやく自分の立場が分かったのが、なんだか苦笑に変わっている。

「あの、私達そうだったことは・・・」

「ええ。興味ないわね」

「え、そんなこと言わないでさあ。ホント、ちょっとだけでいいんだよ」

明らかな拒絶にも関わらずしつこく食い下がる三人。この手の男はどう振り払おうとも引き下がるということを知らない。

スバルも「どうしよう？」といった感じで、横にいるティアナを見つめている。そんななかどう断りを入れようかと、ティアナが思案していたその時だった。

「やれやれ。今時、身の程知らずって言葉をわざわざ実践してるヤツがいるとはねえ・・・」

「「「ああ？」「」」

響いてきたしわがれ声に、男達だけでなくティアナ達もその方を見る。

そこにいたのは一人の老婆だった。色あせた桃色の髪に作務衣のようなカーキ色の上下服。背丈は低く、背筋は伸びているのにティアナ達の首ほどまでしかない。手を後ろで組むようにして、三人の背後からこちらと相對していた。

その視線がティアナを捉え、老婆はふつと笑う。彼女とは初対面であるはずだ。だが、ティアナの脳裏に何かがよぎった。

「んだよ、婆さんか。何か用かよ？ 俺たち忙しいんだけど？」

「忙しいのはその頭の中だけさ。この二人がお前らなんぞ眼中にないと言ってるのが分からないのかい？ 悪いのは見てくれだけじゃないようだね」

「な、何だと！？」

喧嘩腰の彼女に、男の一人がさっそく声を荒げる。だが、それを制してリーダー格の男が前に出た。顔立ちはそれなりだが、目の中に見える濁りは隠し切れない。

「婆さんよ、俺はAランク魔導師だぜ？ 機嫌を損ねない内に侘び入れてさっさと消えな。じゃねえと少し痛い目見ても

らうことになる」

「ははは！ 今なら財布だけで勘弁してやるからよ」

下卑た笑い声を上げながらもう一人の男が同調して笑う。管理局員だという男にスバル達は嫌悪を感じた。ホントかどうかは分からないが、力を盾にするなんて人の風上にも置けない。

流石に見ていらなくなった二人が割って入ろうとする。だが、彼女は男達を素通りしてスバル達の前まで歩いてきた。

「アンタ達、少し案内と人探しを頼むよ。ここらはまだ不慣れで、連れと別れて困ってたところだったのさ」

「む、無視すんじゃないよ！」

完全にスルーされた男が激昂して声を上げる。彼女は心底煩わしそうに耳をかつぽじっていた。

「耳元でピーチク喧しいねえ、小便垂れどもが。体裁よく帰ってもらおうってという人の厚意を無にするのかい？」

「なっ、このババア・・・！」

溜息を吐くのもバカらしいといった感じで、彼女は男達を下から見据える。怒気を露にする男たちを目にしても、彼女は一片のたじろぎすら見せない。

呆れたような表情をして彼女が肩を竦める。口を突いたその言葉には、もはや侮蔑しか含まれていなかった。

「A級魔導師だって？ オバQの親戚みたいなチンピラ芸人が笑わせるんじゃないよ。さっさと帰ってクソして寝な！」

「て、テメエ・・・！」

「ぶ、ぶっ殺してやる！」

「このクソババアがあ ツ！」

低すぎる沸点を超えた男達が一斉に飛び掛ってきた。彼女の挑発も要因の一つだが、それに慌てたのはベンチに座った二人である。

（ま、まずいよティア！）

（わかってるわよ！ 構えて、スバル！）

スバル達が待機状態にある各々のデバイスをひそかに構える。そして、男達に牽制魔法を使おうと口を開きかけ、

「喝 ツ！！」

「」「ぎゃあああっ！？」」「」

「うわわっ！？」

「きゃあつ!？」

彼女の凄まじい声と気迫が、駆逐目標をすっ飛ばしていた。一人は公園脇にあったダンボール山に突っ込み、残る二人は十メートル以上離れた海の中へとぶちこまれる。あまりの気迫に、スバル達は浮き上げた腰をベンチへと落としていた。

「やれやれ。大勢で囲まなけりゃなーんにも出来ないガキ共が、見え透いたハツタリをかますんじゃないよ。けど、あたしの靈波動も鈍ったもんだ、気合入れなきゃあんなボンクラさえ追い払えなくなつたか。ふう、歳は取りたかないねえ」

彼女は呆れたあと、自嘲するように溜息を吐く。

スバルとティアナはデバイスを待機状態で構えたまま、その光景に啞然としてしまった。だが、唐突に両方デバイスから流れてきた通信の効果音に、二人は我に返る。慌てて確認すると、相手は先ほど会話をかわしたキャロによる全体通信だった。

「こちらライトニング4、緊急事態につき現場状況を報告します！レリックと思しきケースと、それを持っていた女の子を二人の民間人と共に発見。指示をお願いします！」

- Side out -

- Side change Erio & amp; Kyar

クラナガン市街の昼下がりに。強くなり始めた日差しの中、二人組の少年少女がストリートを歩いていった。手こそ繋いでいないものの、ただそこにただで仲のよさが伝わってくる二人である。

「えーと、次はウィンドウショッピングの予定だよ」

「わかった。行く、エリオくん！」

ストラダに表示されたスケジュールを見ながら、エリオは隣を歩くキャラに今後を説明する。キャラは本日フェイトよりエスコートを仰せつかったエリオに笑いかけて歩き出した。

今日は一日フリー。そのため、シャーリーが気を利かせて（お節介ともいう）デートコースと計画をセッティングしたのであるが、幼い二人はそれをノルマのようにこなしていた。先ほどのことについてスバル達と話したとき、彼女らが苦い笑いを零していたことにもきょとんとする始末である。

と、そんなことをしているうちに服や雑貨などのエリアに入ったようだ。そこかしこにウィンドウや物が並び、客寄せの声が聞こえてくる。

「わあ 見て見てエリオ君っ、あれフリードにそっくり！」

キャラが店の上部に吊るさがっていた龍のぬいぐるみを見つけ、そばに駆け寄っていく。流石は女の子だ、可愛いものには目がない

らしい。エリオは微笑ましい様子に顔を綻ばせた。

「キャラ、あんまり走ると危な　　・・・？」

「　　？　　どうしたのエリオくん？」

はしゃぐ彼女に注意しようとしたとき、エリオの耳の中で何か重いモノが反響した。それが音だと認識するまで、数秒を有するほどに小さなもの。

気になってキャラに尋ねてみだが、彼女は首を振る。どうやら気づいてはいなかったようだ。

だが音は断続的に耳に響いてくる。もはや気のせいではない。エリオは先を行くキャラに追いつくため足を速めた。

「たぶんその路地からだと思う」

「こつち？　こつちは・・・痛っ!？」

「えっ？」

エリオの言葉に耳を傾けていたせいだろう。余所見をしていたキャラが路地に入った途端、何かにぶつかって尻餅をついた。エリオが慌てて駆け寄るが、どうやら怪我はないようである。

「あつ、ごめんなさい。私ったら気付かなくて・・・お怪我はないですか？」

キャラを慮る声が、尻餅をついた彼女の上からかかった。二人は

反射的にそちらへと視線を向ける。

そこにいたのは穏やかな雰囲気をまとう女性だった。キャラがぶつかったのは、どうやらこの人であるらしい。エリオに引っ張られて立ち上がったキャラは、まじまじと彼女を見つめた。

腰元がキュツとくびれた水色のワンピースに手に持った可愛らしいポシェット、そして白色で低めのハイヒールを控えめがちに履いている。身長は低いものの体つきはそれほど貧相ではなく、寧ろ美しいラインを描く整ったボディが服ごしでもはつきりと分かるほどだ。

顔立ちは端正であるがクールというより温かい雰囲気を放ち、とても優しい笑みが浮かんでいた。背の中ほどから腰ぐらゐまで伸びる長く青みがかったライトグリーンの髪が、首の後ろ辺りで赤い絹紐に纏められている。瞳には深紅の光。どこかで見たような眼差しが、二人を見下ろしていた。

「は、はい、私は何とも。ありがとうございます」

キャラがしどろもどろに言うと、女性は「そうですか、よかった」と暖かな表情を浮かべた。何の装飾もない、しかしたただだ安らげるような温かさを感じる。

「ほわぁ・・・」

鈴を転がしたような声と春の日差しのような彼女の笑みに、キャラが感銘を受けたように息を吐いた。エリオも穏やかな顔をしていることからして、同じ気持ちでいるらしい。

するとその時、もう一つの声が上がった。

「どうしたのお母さ・・・お姉ちゃん達、誰？」

その時、彼女の後ろから一人の女の子が姿を現した。ひょいっという擬音でも聞こえそうな出方をした彼女は頭だけを此方に出し、女性のワンピースをはっしと掴んでいる。

見た目からして、年齢が五、六歳ぐらいの可愛らしい少女だった。女性と同じ深紅の瞳とポニーテールで纏めた薄緑髪が、親譲りの端正な顔立ちをさらに引き立てている。

その胸元には、青い光の中に不思議な虹色の輝きを放つ宝石が、紐で結ばれて光っていた。大きさは待機状態のレイジングハートを一回り小さくしたぐらいだろうか。何か見覚えがあるように感じるものの、思い出すことができない。

しかし口にしたセリフから、この女性の子供であろうことは容易に想像できた。母親より少し強気な雰囲気だが。

「あ、私はキャラ。キャラ・ル・ルシエって言うの」

「エリオ・モンディアルです。えつと・・・」

「私は真雪^{まゆき}。こっちは私のお母さん。よろしくね、エリオお兄ちゃんにキャラお姉ちゃん！」

真雪は自己紹介をすると、その顔一杯に子供らしい笑みを浮かべた。笑った顔はやはり母親に似ている。母親の方は見た目からしてフェイトなどと同じぐらいに見えたが、これほどの子供がいるとな

ると年上かもしれない。

エリオ達は姉と兄と呼ばれたことに少し照れつつも、同じように笑い返した。

しかし、真雪に続いてその母親が名前を告げようとしたとき、横にあったマンホールの蓋がゴトンという音を立てて持ち上がる。ぎよっとする一同を尻目に、その中から出てきたのは真雪と同じぐらいの金髪の少女だった。身体にいくつか傷も見える。

彼女は穴から這い出たと同時に倒れこんで気を失った。慌てて駆け寄った四人が少女を介抱していると、腕に鎖で繋がれたケースを見止め、エリオ達が目を見開いた。

「これレリックケースじゃ・・・！？ キャロ、連絡お願い！」

「う、うん。全体通信にして、フェイトさん達にも伝えるね！」

ケリユケイオンを起動させ、キャロは全体回線を開く。と、真雪の母親である女性が少女の脇に屈み、手を翳した。すると淡い光が少女を覆い、その傷が塞がっていくではないか。驚きに包まれる二人に女性は視線を向ける。

そして表情を魅力的な微笑みで染めながら、

「申し遅れましたね。私、桑原雪菜と申します」

その名を告げた。

おまけ　　前話で飛影が連れ出されてから数分後の六課

なのは「飛影くーん・・・って、あれ？いないや」

リン？「あ、なのはさん。飛影さん知りませんか？　ちょっとお聞きしたいことがあったのですが」

なのは「あ、リンも探してるの？　うーん、どこ行っただんろ・・・はやてちゃんに聞いてみれば分か「ああ、なのはさん。ここにいたんですか」ヴァイスくん？」

リン「どうしたのですか、ヴァイス陸曹？」

ヴァイス「おお、リン曹長も一緒ですかい。こっちはヘリの点検と微調整終わったんで、その報告と確認申請ツスよ。そんで、なのはさんを探してたんですが、いないと思ってたからラッキーでしたぜ」

リン「ほへ？　なのはさんが今日外に出る予定はないですよ？」

なのは「どうして私がいなくて思ったの？」

ヴァイス「え？　どうしてって・・・二人とも、フェイトさんが休みを取ったのは知ってるツスよね。それで、さっきそのフェイトさんが飛影の旦那を連れて街に出たらしいんですよ。はやてさんも快諾してたみたいですし、てっきりなのはさんも行ったもんだとばかり」
それ、本当・・・？」うおわっ！？　ど、どうしたん

スか！？ 何か尋常じゃない気配がするんですけど！？」

なのは「……フェイトちゃん、抜け駆けはダメって言ったのに……はやてちゃんも、私に内緒でフェイトちゃんを焚きつけて……二人とも、後で『おはなし』だね……」

リン？「な、なのはさんが怖いですよ……（でも、そういえば私も飛影さんと二人でお話したことありませんでした。元の世界とか飛影さん自身のお話とか、一度ゆっくりお聞きたいです……）」

第二十四話 二つの出会い 旧き光と慈しみの雪（後書き）

第二十四話の終了です。

新たに登場した二人、お気づきになられた方が大半かと思います。というか、一人は名前も出しているし、もう片方はわからないほうが不思議なほどメジャーなキャラだと思えますので。

さて、まえがきで書いていたお知らせです。

何度か書いていたのでお分かりの方もいらっしゃるかもしれませんが、11月末に迫った行事の準備などのため、小説を書く時間を取ることがかなり困難となっていました。

時間の合間を縫って書くこうにも、両親にはあまりパソコンに向かうな！と怒鳴られ、お説教される始末。私にとっても両親にとっても一生に一度の、かなり大事な部類に入る催しなので当然といえばそうなのですが。

しかもまとまった時間が取れないと、文章に日々のバラつきが出てきてしまうことや、私自身の負担も考え、まだ未練はありましたが考え抜いた末に決断をいたしました。

このたび、私の小説『炎殺の邪眼師』は、一ヶ月、あるいは＋半月ほど、更新をお休み致します。（＋半月は、行事よりも忙しい、後処理やら何やらをしなければならぬ可能性が出てきましたので）

楽しみにしてくださっている皆さんや、せっかく登場した新キャラ

に水を差す結果となってしまうことを考えると本当に心苦しいのですが、どうかご了承のほどをお願い致します。もしかしたら、どこかで一回くらいは更新するかもしれません。

その代わりですが、もう一つの方の小説のストックがいくつかあるので、それを不定期に更新していこうと思います。

独断で決めてしまったこと、改めて謝罪いたします。また戻ってくると思っているので、そのときにまだ覚えていらっしゃるのであれば、再びのお付き合いしてくださると幸いです。

それでは、また一ヶ月（あるいは一ヶ月半）後にお会いできることを願っております。

ツァイツェン
再見！

第二十五話 エンカウント 新たなる仲間（前書き）

じんぐるべゝる、じんぐるべゝる。

どうも、初めての方は初めまして。それ以外の方はお久しぶりです。かなり遅れてしまいましたが、私からのクリスマスプレゼントとして何とか書き上げたこのお話を贈りたいと思います。

プレゼントにしては全然気が利いてませんが・・・とりあえず、久々の炎殺の邪眼師をどうぞ！

第二十五話 エンカウント 新たなる仲間

「うん、バトルは安定してる。危険な反応もないし、心配ないわ」

「はいっ」

「よかったあ」

金髪の少女を見ていたシャルが笑みを見せる。六課の主治医である彼女の言葉を聞いて、キャロとスバルが安堵の息を吐いた。

現在この場には、発見者のエリオとキャロに合流した同じお出かけ組のスバルとティアナ、連絡を受けて駆けつけた隊長のなのはとフェイト、それにメディカルケア担当のシャルがいた。

桑原やフェイトと共にいた飛影も来ているのだが、現在はヘリの方で蔵馬と連絡を取り合っている。

ともかく、保護した少女の容態を聞いた全員はほっと息を吐いた。キャロなどはあからさまに安堵の息を吐いている。ティアナ達が合流したのはシャル達より先だったが、診察は専門外なのでとりあえず安静にしておくしかなかったのだ。

そんななか、偶然居合わせた『彼女たち』が少女の様子を診てくれたのである。そのお陰か、シャルが到着するまでの間に応急処置は済まされている。また、エリオとキャロしか知りえぬことだが、

少女の傷は居合わせた親子のうち、母親に当たる女性の不思議な力によってすべて治療されていた。おかげで体や顔に怪我は見当たらない。

シャルが一通りの診察を終わらせて立ち上がる。少し離れてその様子を見ていたキャロが、同じく一部始終を眺めていたティアナと顔を見合わせて笑った。

「よかったです。傷はさっきこの人に治してもらいましたから消えてますけど、それを聞いて改めてほっとしました」

「ホント、よかったわよ。そこのおばあちゃん達が診て大丈夫って言うってても、ちゃんとした確証は欲しかったからね」

「え……治したって、そこにいる人達が診察してくれたの？」

診察中、傷がないことに不思議そうにしていたシャルがスバル達の後ろに立つ三人を見据えて言った。老人、成人、子供と年代はバラバラだが、全員が女性だ。

「貴女方がこの子を診てくれたんですか？ ご協力に感謝します。本当にありがとうございます」

なのはとフェイトは、彼女たちに近寄ると頭を下げる。まっすぐな感謝の体現に老婆はふつと息を吐き、後ろの二人は笑みに顔を綻ばせた。子供は母親らしき女性の横で笑っていた。

「礼には及ばないよ。あたしゃ最低限のことをして、あとはただ横で見てただけだ。ここに来たのも連れの二人がいたからだからね」

「私も偶然居合わせただけですから。まさかはぐれた相手に合流できるなんて思ってもみませんでしたし、この世界のことはまだよく知らないので、違ったらいけないと思って少し不安だったんです。この子が無事で本当によかった」

「そうなんですか、でも問題もなくて助かりま・・・ん？ あれ、今『この世界』って・・・」

再びお礼を述べようとした矢先、女性の口にした台詞の中に違和感を感じたフェイトが首をかしげる。エリオとキヤロが「あっ」と声を発した。そして何かを言おうとして、後ろから聞こえた二つの声に遮られる。

「やれやれ、相変わらず騒々しい奴らだ」

「おー、やってんなおめえら」

声の主は飛影と桑原だった。飛影はポケットに手を入れながら、桑原は片手を上げて歩いてくる。連絡は終わったらしく、どうやらこれから参加するようだ。飛影は乗り気ではないようだが。

「けが人はもうちゃんとしたみてえだし、はやてちゃんから次の仕事が来てるぜ。そーいや民間人がいるって話だが、一体何処に「お・・・ん？」

だが、彼の報告に声が割り込んだ。全員が首を巡らすと、その発信源は先ほどの女性の横にいた。まず間違いなく女性の子供である。その子は一瞬肩を震わせ、大きめの目をゆらゆらとさせている。

対する桑原の方かというと、これまた驚きに固まっていた。口を

あんぐり開けながら、その子供と女性を凝視している。驚いたことに横にいる飛影も目を見開き、その二人を見つめていた。

全員が成り行きを見つめる中、女の子が突如として駆け出す。そしてそのままの加速で地を蹴り、

「
お父さあああん！」

桑原の胸へと力いっぱい飛び込んでいた。そのままぐるんぐるんと回転しながら彼の腕にぶら下がる。

今度は周りがあんぐりと口を開けた。まともなのは、後ろのほうで溜息を吐いている老婆に、年少組のエリオとキャロぐらいだ。そして、事態はまだ終わらない。

「ま、真雪い！？ な、なんでお前が 「和真さんッ！」 へっ？ ・
・・・うわあっ!？」

さらに重量感が募る。見ると、先ほどの女性が真正面から桑原に抱きついていていた。何の迷いもない、強い想いに満ちた抱擁である。

当の桑原はというと、動揺を隠すこともできずにいた。混乱の極みというものを体言しながら、片腕と正面にはっしとしがみつく二人へと目をやっている。普段から喜怒哀楽が激しい彼だが、ここまですで驚いた顔を見るのはおそらく初めてではないだろうか。

「ゆ、雪菜さんまで！？ ふ、二人とも、どうしてここに・・・！？」

「あたしが連れてきたんだよ。正確にはこっちに来ようとしてたあたしに付いてきた、だけどね」

「いいっ！？ ばーさんもいんのかよ！？」

桑原が二度目の驚愕の声を上げた。すると、それまで抱きついたまま黙っていた雪菜と呼ばれた女性が、押し付けていた顔をゆっくりと離す。長い睫毛はしとどに濡れ、整った唇から響く鈴のような高く清らかな声を震わせながら、彼女は桑原を見上げた。

「・・・幻海師範からお話は聞きました。和真さん、酷いじゃないですか・・・何も言わずに行ってしまったから、ずっと心配だったんですよ・・・？ また、前の戦いみたいな危険なことをしてるんじゃないかって、私・・・わたし・・・」

「もう、お父さん！ 何かするときはちゃんと話してって言ったでしょ！ お母さんを宥めるの、ホント大変だったんだからねっ！？」

雪菜は桑原にぎゅうと抱きついたまま離れない。真雪も飛びついた状態で、ぶうと頬を膨らませる。なのはやフェイト達は呆然としてその様子を見ていた。

「・・・『お父さん』・・・『お母さん』・・・？」

「えっと・・・なんとなく、あの人がこの子のお母さんだっていうのはわかってた、けど・・・？」

凍った自分を自ら吹き飛ばすように、今世紀最大のリアクションを爆発させた。

絶叫（心の叫び）が天を割らんばかりに轟く。先ほど名前を聞いたとき、もしやと思って尋ねていたエリオとキャロ以外は、デッサンが崩れた凄まじい劇画タッチになっていた。そのまま映像で残したら、きっとコアなファンが付くに違いない。

「こ、この人が・・・カ、カズ兄の奥さん!？」

「綺麗すぎですう・・・」

比較的軽症だったスバルが、目の前の雪菜に対して溜息を零しながら驚きを口にした。リインが彼女を見つめる目は、既に憧れ模様となっている。お褒めの言葉に恥ずかしそうに身をよじった雪菜に、横にいた高齢の女性が溜息を吐いた。

「やれやれ、またこれかい・・・初対面の相手に会う度に見てきたからもう飽きてるけど、ちゃんと現実だから納得しな。気持ちは大いに分かるけどね」

さりげなく失礼な言動をかまししながら、それまで後ろにいた老婆が前に出た。そして、いまだ硬直するなのは達へと向き直り、ふつと笑う。

「そっぴゃ、まだ言ってなかったね。あたしの名は幻海。聞いているとおり、この世界の人間じゃないよ。あたしはアンタ達が前会った浦飯幽助、アレに戦いを教えた師匠さ。あのバカ弟子に少し頼まれ事をしてね、ついさっきこっちの世界に来たトコだ」

「え、ええっ！？あ、あああの浦飯さんのお師匠様！？」

二週間ほど前に出会った、というかティアナに憑依して邂逅した魔界の王を思い浮かべ、硬直から戻ったスバル達は一様に驚きを露にする。幻海がそれに苦笑するように笑みを零した。

「ま、それは追って説明することにしようかね。それより、今の前さん達にはやる必要があるんじゃないのかい？」

「・・・へ？ あ、はい。皆、悪いけどお休みは一時中断。皆はこ
つちで現場調査ね」

「「「「はいっ！」「」」」

なのはからの号令の元、スバル達が走り出す。先ほどまでショックで硬直していた面々も、お仕事モードに切り替えたようだ。受けた衝撃は少なくないだろうに大したものである。

フェイトはさっそくモニターを展開して、はやてと作戦について話し合っている。なのはもFW陣に支持を出しながら、思案に耽っていた。若くして執務官やエースの名を連ねるのも決して伊達ではない、ということだろう。

真雪がくつついて離れない桑原の代わりに、飛影が女の子をへりへと運ぶ。腕に抱えた少女を、飛影は目を細めて見下ろした。

（このガキ、普通の人間ではないな・・・とてつもない力が人工的に付与されている・・・感じる力の波長は確かに魔力だが、どこか異質だ。それに・・・いや、気のせいかな）

飛影が少女を見ながら思考を続ける。実際、この少女からはえも言われぬ何かを感じるのだ。なのは達などから幾度となく感じとつた力のはずだが、どこか引つ掛かる。強大な魔力を植えつけられていることからしても、何か特別な能力を持っているのかもしれない。

飛影はヘリのストラッチャーに少女を寝かせると、そのまま外へ出た。太陽の眩しさを数秒で慣らす。タラップを踏んだ飛影と入れ替わるように、幻海と雪菜がハッチを登ってきた。

「あたしと雪菜たちはヘリに乗ってことにするよ」

「皆さん、頑張ってくださいね」

「頑張つてね、お父さんとお姉ちゃん達！」

外に待機する桑原やなのは達にお礼を言いながら、雪菜と真雪が歩いてきた。なのは達は暖かい声援に手を振って応える。その時、雪菜がハッチから出た飛影を見つけ、その顔に優しい笑みを浮かべながら近寄った。

「あ・・・飛影さん、お久しぶりです。お変わりないようで、少しほっとしました」

いつかと同じように、自然に声をかけてくる雪菜。飛影はそれを横目で一瞥し、顔を背けた。

「フン。お前も変わらないようだがな」

「はい。ふふっ・・・じゃあ、また後で。いろいろお話したいこと

もありますし・・・あの、いいですか・・・？」

「・・・・・・・・ああ、後でな」

それだけ言つて両者はすれ違った。二言三言言葉を交わし、再び離れていく。だが、そこには言葉にできない何かが内包されているような気がした。

普通ならば気づかない、ほんの僅かな優しさを含んだ空気。駆けていく風を追い風にして、飛影はタラップを下っていった。しかし、それとは逆に怪訝な表情をする者が三人。

「・・・・ねえ、何か飛影くん変じゃない？」

「あ、なのはもそう思う？」

へりの中でやり取りを見ていたなのはとフェイトが、二人を交互に見ながら眉を寄せた。一緒に乗った幻海は含み笑いを零し、雪菜の方はきょとんとしている。

「二人も感じたの？私も、何だか飛影さんの雰囲気違ってたような気がするのよね・・・」

シャマルが補足するように言う。リインはよく分かっていないようだ。が、「ふむう？」と首をかしげているところを見ると、違和感を感じているようだ。

飛影は淀みない足取りですたたと歩いていく。おそらく地下にレリックを探しに行ったスバルたちと合流するつもりなのだろう。だが、どこかその後姿が嬉しそうに見えたのは気のせいなのだろう

か。

飛影の姿が通路の先に消える。それを見て、全員の頭に浮かんだのはただ一つ。

（（（（帰ったら、絶対に問いたださなくちゃ（です・・・）（（（（

彼にとっては至極理不尽な、乙女特有の追及意識だった。

第二十五話 エンカウント 〰 新たなる仲間（後書き）

小説の休載報告をして・・・な、なんと二ヶ月近く!? 一ヶ月半だと言っていたのに、長らくお休みすることになってしまいました。というのも、このところ色々やることが出来てしまって・・・言い訳になってしまふのですが。

行事は無事に終了を迎え、後片付けの方も何とか一段落しました。それに関してはもうほとんど問題ありません。

ですが、最近祖父の親戚の方が亡くなるということがあったり、自分自身スランプに陥って書けなくなってしまうたりと散々なことが続いてしまいました。

来年の就職についての準備も慌しくなってきたており、現在進行形で続いています。

なので、前のような執筆速度は望めませんが、細々と、一応完結するまでは書いていくつもりですので、なが〜い目で見てやってくださるとありがたいです。ホント、このサイトが無くなるまでに書けるかな・・・

次回の更新は、私手がけるもう一つの小説、『魔法少女リリカルなのはACE』を挟んでからになると思います。こっちはスランプの程度も軽く、すらすら書けそうな気がしていますので、お気に召すようでしたら、どうぞご拝読いただけると嬉しいです。

それでは、皆様の素敵なクリスマスと良いお年をお祈りいたしてお

ツ
ア
イ
ッ
エ
ン
再
見
！

り
ま
す。
。

第二十六話 戦いの唄 ～ 相對する者達（前書き）

初見の方ははじめまして。お久しぶりの方は本当にお久しぶりです。

初っ端から言い訳になってしまうのですが、リアルとの兼ね合いがかなり厳しくなってきたいて小説に割く時間がとれず、かなり遅れてしまいました。

さらに最近はパソコンの調子も悪く、なんだがなあ・・・といった感じです。まあ、私自身がかなりのスランプに陥っていたということもあります・・・。

久しぶりの炎殺の邪眼師であります。文章量は少ないですが、頑張った書いたのでどうかご拝読下されると嬉しいです。

それではどうぞー！

第二十六話 戦いの唄 ～ 相對する者達

- in the under ground -

ミッドチルダの首都、クラナガンの地下には、水路という役割を持った広域の水流制御空間が存在する。街の随所から集まったり、多方面へと枝分かれしていく数多の水路。それらが都市の大きさに比例して放射状に張り巡らされているのである。

と、ここまで簡単に述べてみたが、要は地下水路は地上の都市以上に巨大かつ広大な面積を持つのだ。現在は老朽化などで廃棄された場所も多いが、仮にも裏でクラナガンを支えていた場所だっただけに、かなりの規模を誇っている。

その中に五つの影があった。狭い場所に集まり、顔を突き合わせているようだった。そのうちの四つは言うまでもなくスバル達の四人、そして最期の一人は、

「作戦は以上。いいわね、皆」

「了解です」

「分かったよ、ギン姉！」

スバルのシューティングアーツの師匠にして最愛の姉、ギンガ・ナカジマであった。別件の任務の折、この事態に遭遇して六課の捜査活動に加わったのである。

「地下水路は老朽化してるところもあるから、注意が必要ね」

「それに、レリックを狙ったガジェットが出てくることもありえます。早めに済ませてしまったほうがいいでしょう」

「フン。もう嗅ぎ付けられているだろうがな」

ティアナとエリオの言葉に、暗がりより鋭く声が走った。背筋が伸びるような感覚を受け、全員がそちらを向く。彼女たちの後ろ側、闇の中から染み出るように見慣れたコートが姿を現した。

「飛影さん!?」

「お兄ちゃん／兄さん!」

思わぬ助っ人の登場に、ティアナとスバルは目を見開く。キヤロとエリオは飛影を見て親しみを込めた声を上げた。ギンガは飛影に対して警戒するような仕草を見せていたが、スバル達の様子を見るとその空気をすぐに霧散させる。

「飛影さん、き、来てくれたんですか・・・?」

ティアナがそちらへ駆け寄りながら、おずおずと尋ね返す。飛影は彼女の視線を受け止めると、面白くなさそうにそっぽを向いた。

「勘違いするな。別に加勢しに来てやったわけじゃない。上にいると八神やリンが何かと喧しいのでな、不本意だがここにいるとい

うわけだ。貴様らは貴様らで勝手にやれ。オレも気はすすまんし、いらん世話など焼かれたくはないだろうからな」

「そ、そんなことないです！ おに　　、ひ、飛影さんがいてくれるなら、私も安心ですから・・・」

ティアナが少し声高に返す。その頬は少し赤く、なんだかそわそわした様子だ。飛影は彼女の態度に怪訝そうに眉を寄せたが、彼自身それほど興味も無かったのだらう。エリオ達に呼ばれて今ある情報について話し始めていた。

スバルが目を半眼にしながら、親友をじろりと一瞥する。

「ティア・・・やっぱり・・・」

「や、やっぱりって何よ！ 飛影さんがいてくれたほうが頼もしいのはアンタも同じでしょ！？ ホ、ホラッ、ぶつくさ言ってないでとっとと動きなさい！」

赤い顔でわたわたしながら、ティアナは必要以上に声を張る。スバルはなおもジトツとした視線を宿すが、作戦中なのでそれ以上は自重したようだ。妹とその親友のやりとりを見て呆けていた姉のギンガだったが、はっとした様子で飛影に近寄り、敬礼をとる。

「も、申し遅れました。時空管理局地上108部隊所属、ギンガ・ナカジマ陸曹です。噂はかねがね、妹がお世話になってます」

「妹・・・成る程な。その姓と内　　・・・いや、顔立ちから察するに、貴様はスバルの姉か」

「は、はい。よろしくお願いします、飛影さん」

若干緊張を含んだ声色でギンガが返答する。飛影は彼女を数秒かけて観察すると、後ろにいるスバルと見比べて息を吐いた。

「フツ、確かに面影がある・・・が、性格はまったく違うようだな。この突撃木馬とは似ても似つかん」

「ひ、ひどい！？　いくらなんでもあんまりですよ、飛影さん！　私だって、ちゃんと考えてから突撃してるんですから！」

「あ、あのスバルさん。それじゃあどっちにしろ変わらないような気が・・・」

エリオがもつともすぎるツツコミを提示した。全員からスバルへと憐れみの混じった視線が届けられる。ギンガは涙目で親友に縋りつく妹に頭痛を覚えながら、こほんと可愛らしく咳をした。

「・・・いろいろお話をお聞きたいところですが、今は任務が先決です。まずは、この地下水路のどこかにあるレリックの確保を急ぎましょう。まずは大まかな方向からサーチしたいので、誰か探査魔法を「その必要はない」　へ？」

仕切り直しを兼ねた声に待ったを掛けられ、ギンガは間の抜けた声を上げる。振り向くと、相変わらず仏頂面の飛影が周りをゆつくりと見渡していた。

言葉を遮られる結果となったため、少し不満げな表情をするギンガ。しかし誰も口を挟まない様子から、表情を僅かにむっとする程度にとどめ、その黒い背中をじっと見つめる。

時間にして数秒。様々な方角に動かしていた飛影の視線が、ある一方を向いて止まった。明らかに変わったその動きに、全員が注目する。その際、彼の額を覆った巻き布が一瞬赤く光った気がしたが、次に聞こえてきた彼の声でそんな疑問は一瞬で吹き飛ばされていた。

「……ここから六百メートルほど北西に進むと、それまでよりも大きくひらけた治水空間があるはずだ。そのやや北寄りの一角、等間隔に別れた治水路の奥から十六番目の水路にケースが引っ掛かっている。おそらくそれで間違いないだろう」

「わ、分かるんですか!？」

「まるで見えているみたい……まさかそんな力も……?」

「さっすが飛影さん!」

ギンガは当然として、ティアナやスバルまでもがすごい勢いで飛影を見た。瞬時に場所を特定したという彼の言葉と、えらく具体的な証言に相当驚いた様子である。尤も、彼の『眼』には実際に『視えている』のだから当然ではあるが。

「ふわぁ……私のケリユケイオンのサーチャーだって、そんな正確には分からないのに……」

『Yes・It's amazing(はい、驚きです)』

「兄さん、やっぱすごい……」

キヤロが自らのデバイスと会話しながら感嘆の息を漏らした。エリオは相変わらず、彼を憧れに満ちた眼差しで見上げている。飛影はそんな彼女達の反応に鼻を鳴らしていた。

「フン。邪眼の力をナメるなよ」

「じゃが・・・？」

「あ、あー！ その話はまた今度するよギン姉！」

スバルが姉の前でわたたと手を振った。そのことに怪訝そうな表情をするギンガだったが、突如キヤロのケリユケイオンから響いた警告音に一瞬で気を引き締める。空間に映し出されたマップを見ると、赤い点として表示されたガジェットが群れを成して此方に近づいてくるのが映っていた。

「レリック狙いのガジェットがさっそく来たみたいだね・・・それじゃ、いっちょ迎撃と・・・って、え？ ひ、飛影さん、何処行くんですか！？」

気合を入れるが如く腕をぐるぐる回していたスバルが、一人歩き出した飛影の背中に少し大きめに声をかけた。ティアナ達も驚いているが、ギンガ以外のメンバーはどこか予想できていたような顔つきだ。飛影は気だるそうな表情で僅かに振り向くと、淡々とした声を響かせながら言った。

「オレがこの先に行く。お前達はギンガ・ナカジマとランスターを中心に組み立てて、レリックとやらの確保に向かえ」

「え・・・そ、そんな無茶なっ・・・ガジェットの反応は少な

くとも四十、その内十数機は大型の反応が出ているんですよ！？
一人で対処するのは危険すぎます！ 全員で行くべきです！」

ギンガが飛影の提案に慌てて横槍を入れた。それは管理局員として適切な対処だ。スバルやティアナなどから様々な武勇伝を聞いているとはいえ、飛影の力を直接目にしたことがない彼女からすれば、彼の行動は自殺行為に他ならないからだ。事実、そのような単独行動や独断先行が原因で命を落とした魔導師も数多くいる。

だが、それを侮辱と取ったのだろうか、それとも他の要因か。ギンガの台詞に飛影は不機嫌そうに目を細める。ギンガに向けて視線を放ると、語気を強めて言った。

「オレに指図するんじゃない。足手纏いはいらんと言っているのが分からののか？ 二度も言わせるな」

あんまりな物言いにギンガは言葉を失った。そのなかで硬直した彼女に一睨みをくれ、飛影は通路から伸びる闇へと消えていく。その姿はすぐに闇に紛れて見えなくなった。

コートを纏った後姿が消えると同時、ギンガはハッと氣を取り戻す。そして、口元を真一文字に引き結ぶと、腕を組みながら眉を寄せた。

「むうーっ……何なのあの人、感じ悪いじゃないっ」

配慮の心遣いを思い切り突っ返され、ギンガが不満そうに唸った。怒っているというか、拗ねている様子は妹であるスバルと本当にそっくりである。その子供のような仕草については言及を避けつつ、ティアナ達は苦笑しながら彼女を見つめた。

「あはは、怒らないでギン姉。少し冷たいような感じもするけど、あれが飛影さんなりの優しさだから。私達が未熟なのは確かだし、付いていったらきつと余計な気を遣わせちゃう。飛影さんもそれがわかってたから、ギン姉も含めて危険が及ばないようにしてくれただよ」

スバルが膨れっ面の姉の肩を叩きながら言った。飛影のあの態度は今に始まったことではないし、あれが彼の持ち味だということはもはや日常となっっているの、他のメンバーも何も言わない。尤も真意はどうあれ、山ほどの大軍だろうと飛影がガジェット程度に打ち取られるとは微塵も思っていないからでもあるが。

ギンガは全員に確認の視線を向け、最後にスバルを見やる。そして、一分の不安もない表情で笑う妹を見ていたが、これ以上こうしていても仕方がないと思ったらしい。含みがあることをありありと示すような息を吐いて、自らの拳を握り締めた。

「ふーん、随分と信頼してるのね……わかったわ。スバルがそこまで言うんならそういうことにしとく。私たちは私たちが先を急ぎましょう」

そういつてギンガは先頭に立った。あからさまな否定はないが、「私、納得していないわよ？」という雰囲気と言葉の端々から醸し出しつつ、既に通路に背を向けている。ティアナ達は彼女に昔の自分達を重ねてふふつと笑いながら、再びレリック確保に向けて動き出した。

道を塞ぐガジェットを、残骸に変えながら五人と一匹は地下水路を進行する。数はそれなりにいるものの、飛影がその大部分を引き

受けてくれているためか、かなり軽快なペースで進んでいった。

そして、しばらく道なりに走り通し、目的の場所に到着する。そこは数百メートル四方にわたって柱がいくつも点在する、大きく開けた空間だった。スバル達は、飛影から教えてもらった辺りを中心にし、手分けしてレリックの探索を開始する。

そして数分後、

「ケースがありました！」

レリックケースは至極あっさりと見つかった。場所は集水路の奥。浅くなっている水路の一部に引っかけ止まっていたのだ。

「ほ、本当にあつたわね・・・それも、彼が言ったような所と寸分違う場所じゃない・・・」

ギンガの呆然とした声が水路に響く。そこは飛影が提示した条件がすべて重なっている場所だった。さらにケースの状態に至っても、言及した内容との相違は見受けられない。スバルが驚く姉に向かって、えっへんと胸を張った。

「ね？ 飛影さんってすごいでしょ、ギン姉っ」

「なんでアンタが威張るのよ・・・」

鼻高々にするスバルに、半眼のティアナがいつもの如くツツコミを入れる。エリオはみつかったケースを数秒ほど見つめ、「僕も頑張らなくちゃ！」と気合を掛けていた。そして、このケースを持って撤収作業に移ろうとした、その時だった。

「　　っ！　キャロ、伏せなさい！」

突如の叫びを上げたのはティアナだった。全員が驚いたように彼女の方を向き、キャロはきよとしたまま動かない。ギリツと歯を噛み締めた彼女は、自分の言葉も言い終わらぬ間にクロスミラージユのカートリッジをロードし、何も無い中空に向かって魔力弾を撃ち放った。

放たれた弾丸の行方を全員が追う。そして、弾は空中で不自然な形に変形し、そのまま弾けた。何も無い場所で、『何か』にぶつかったかのように。

「きゃあっ！？」

「っぐ！　キャロ、しっかり！」

爆風で飛ばされたキャロをエリオが受け止める。同時に響く足音にギンガとスバルがはっとして気配を探るが、如何せん姿が見えないため、焦ったように周りを見やる。だがそんな中でも、クロスミラージユの銃口はブレることなく一点に向けられていた。

そして、怒声と共にその引鉄トリガーは引かれる。

「それで・・・隠れたつもり！？」

キャロから十歩ほどの距離へと弾丸が吸い込まれていく。だが、真っ直ぐ飛んでいた魔法の光は突然弾かれるようにして軌道を変え、柱にぶつかって轟音を上げる。風が頬と髪を薙いだ。

「あっ！」

爆発でレリックケースが滑走した。キャラはそれを追う様に、手から投げ出されていたケースの元へと走る。だが、彼女の目の前でそれは何者かに拾われ、

「
邪魔」

「う、ぐっ・・・きゃあああ！」

「キャラっ、うわあああ!？」

正面から強烈な魔力砲撃を浴びせられた。相手はキャラやエリオと同じ年ぐらいの少女だ。咄嗟にプロテクションを張るが、耐え切れずに貫かれたキャラは吹き飛ばされ、彼女を受け止めようとしたエリオも、勢いを殺しきれず二人一緒に壁に打ち付けられる。

すると、空間の一角がぶれたように波打った。熱を浴びたかのごとく景色が揺らめいた後、見計らっていたかのように消えていた『何か』が姿を現す。

現れたのは異形の者であった。黒い鎧を全身に纏い、直立不動で此方を見る人型の何か。だが、おそらく人ではない。体の横から僅かに見えた紫色の六枚の羽がそれを物語っていた。

スバルが駆け出し、声を上げる。

「こら、その女の子！ それ危険なものなんだよ。触っちゃダメ、こっちに渡して！」

キャラからレリックケースを奪った少女は、呼びかけに僅かに振

り返るも再び歩き出した。気にも留めない様子だ。だが、そのまま行かせるわけがない。

「・・・っ!？」

「ごめんね、乱暴で。でもね、これホントに危ないものなのよ?」

幻術魔法で消えていたティアナが、ダガーモードの魔力刃を少女の喉元に突きつけた。少女は一瞬眉を顰めるが、すぐに真顔に戻って目を閉じる。スバルはほっとしたように此方を見据えていた。

ティアナはそれを見ながら、ふうと溜息を吐く。

（スバル、みんな。今から私が言うことをよく聞いて。すぐ実行に移せる準備も忘れないように）

だが、聞こえてきたのは労わりの言葉ではなく、実に厳しい声色であった。予想外な態度であったが、冗談で流せない雰囲気からスバル達一同は戸惑いながらも頷く。それを確認したティアナは彼女から銃を離し、

（目を瞑って耳塞いで!）

目を閉じたまま上に向かって引鉄を引いた。全員が言われるままにした瞬間、上の方から光が進る。そして四半秒後、走った光とティアナの魔力弾が正面から激突した。

爆風と凄まじい光の渦が空中で弾ける。衝撃に備えていなかったスバル達は蹲るが、ティアナはそれに耐えた。どこからかぽとりという何かが落ちる音が聞こえる。そして、風と光が収まるのを待つ

てゆっくりと目を開けた。

そこに至り、ティアナはようやく少し調子を軽くして肩の力を抜く。そのままよく通る声で一言付け加えた。

「さっきの続きよ。これは飛影さんや蔵馬さんが言ってたことだけど、ついでに覚えておいて。『戦場にいる限りは、一瞬たりとも気を抜くな』ってことをね」

銃で黒い影を威嚇しつつ、視線を落としていく。そこには、驚愕に目を見開いた少女の傍に悲鳴を上げながら地面をのた打ち回る小さな人影が新たに降臨していた。

第二十六話 戦いの唄 ～ 相對する者達（後書き）

第二十六話でした。

ようやく原作とのクロスらしく、ティアナが才覚を発揮し始める所を書くことが出来たのでよかったです。これから彼女はどんなっていくのか、それは神（私です、ふははー）のみぞ知るところです。

すみません、調子に乘りました・・・久しぶりの更新だというのに、文章が少なくてすみません。

さて私の近況ですが、就職の準備も慌しくなり目の回るような忙しさです。おかしい・・・行事が終わったんだからちよつとぐらい楽になったっていいはずなのに・・・！

研修会ではいろいろなことを言われ、正月に会った親戚のおじさんなんかも仕事上のアドバイスを語ってくれました。曰く、

『会社っていうのは入って二、三年は研修期間みたいなもので、そこで使えるかどうかを判断する。そこで使えるやつは出世、使えないやつは遠くに左遷あるいはクビになる』

『それから、会社は煮え切らない態度とかこの仕事をやっておきますって言うておいて出来ませんでしたっていうのが一番困るから、請けた以上は何が何でもこなすこと。自分の能力では絶対出来ないと思うなら初めから請けるな。ただし、努力次第でできるようなら積極的にやれ。あと、仕事をこなすために必要なスキルや知識の習得は仕事をしている事にはならない。常日頃から努力して自分のも

のにできるよう習慣づけておいた方がいい』

『だからっていくつもの仕事を同時に請け負ったり見栄を張って無理はしないこと。使えるものや人は何でも使って、自分で調べてもわからなかったりこまったことがあったら疑問点を残さずに上司や同僚に質問しろ。そうやって仕事を覚えていくんだ』

とのことでした。それで最近の若者は自分のことを優先したかったりちよつと大変だったりするとできませんって平気で言うからな、努力で出来る範囲なら仕事優先にしないとすぐクビにされる。会社に勤める以上趣味やよほどでなければ自分の都合など二の次、三の次だとも言っていました。

お、鬼だ・・・とも思いましたね。けど、社会人ならそれが普通なんでしょう。そして分かれ道なんだと思います。仕事っていうのは思った以上に大変なんだなあ・・・と世間の厳しさを知ったコエンマでありました。

でははこのへんで。次はエースの方の小説更新が先になると思います。

ツァイツェン
それでは再見！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0197m/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ～ 炎殺の邪眼師

2011年9月21日06時40分発行